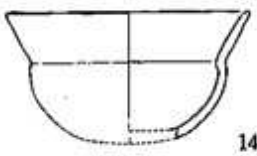
南方（国立病院）遺跡発掘調査報告

1981年3月

岡山市教育委員会
岡山市遺跡調査団

正　誤　表

頁	行	誤	訂　正
序	18	一重	偏
8	2	前Ⅲと期	前Ⅲ期と
8	9	自然提防	自然堤防
14	2	増化	増加
14	16	分銅型土製品	分銅形土製品
32	13	相佚	相侯
41	下2	長期に゛って	長期に亘って
42	15	分類すると	分類するこ
43	17	4条	3条
70	17	一体との	一体どの
72	表下欄	後期後葉	中期後葉
78-79	『　』内を南方遺跡発掘調査概報と訂正		
81	番号8	B・C間	B・C区間
82	番号11	B・C間	B・C区間
91	番号50	円形浮文を	円形浮文が
92	番号53	B・C間	B・C区間
92	番号55	頚部の途中が	頚部が
93	番号57	B・C間	B・C区間
94	番号66	裁断	截断
98	番号77	77	87

頁	行	誤	訂　正
98	番号77	備考欄に「B区北東土器溜」を追加	
99	番号90	B・C間	B・C区間
99	番号92	火熱痕	加熱痕
103	番号112	B・C間	B・C区間
110	11	短辺部	小口部
110	17	両短辺	両小口
117	4	とも考え	と考え
117	付図3	発堀調査	発掘調査
121	番号20	断定できね	断定できぬ
123	番号29	下整形	不整形
123	下2	9用語は	用語は
125	㉙	古考学研究	古代学研究
126	㊴	祖形	祖型
図版第18		砥石転用	砥石転用
図版第28		42—2	42—1
69	右下図差しかえ	 140	

発　刊　に　際　し　て

近年の著しい都市開発は、地域の近代化と都市化を促進する一方におきまして、伝統ある文化や生活様式の喪失・自然環境の破壊・公害等の社会問題をも派生させています。なかでも、開発に伴う埋蔵文化財の保護は、わが国の古代社会において中心地の一つであった吉備国の中枢地を占めている岡山市にとりましては、宿命的な大きな課題であり、文化財保護・保存行政の中心施策の一つであります。

岡山市教育委員会は、この数年来、埋蔵文化財の保護・保存と地域開発の調和を図るために、分布調査と各種の遺跡の発掘調査を実施してまいりましたが、つぎつぎに押し寄せる開発の波に、その保存施策のむつかしさとやりがいを痛感しながら、鋭意取り組んでいる次第であります。

このたび報告します南方遺跡は、岡山市域における弥生時代の代表的な遺跡として、古くから知られ、広く注目を浴びていたものであります。しかし、市街地の中心部に位置し、国立岡山病院の敷地がその一郭を占めるために、国立病院の建設工事には埋蔵文化財の保護が宿命的な課題として派生する状況にあります。国立病院の看護婦宿舎建築に伴い、南方遺跡の保存対策が緊急の行政的課題となり、国立病院の要請に基づき、その対応について岡山県教育委員会と岡山市教育委員会とが協議を重ねました。その結果、この課題の解決は、記録保存以外に取るべき道がなく、事前の発掘調査をもって対処することになりました。

発掘調査にあたりましては、諸般の情勢から岡山市教育委員会の主管する調査団を編制して、実施しました。調査の結果、多量の弥生式土器を検出し、南方遺跡の一端を明らかにすることのできましたことは、関係各位のご指導・ご助勢によるところであります。特に、調査団長としてご尽力いただいた岡山市文化財保護審議会委員の水内昌康先生をはじめ、調査担当者各位及び従事者諸氏に対し、心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめられました調査成果につきましては、ご検討・ご批判をいただき、少しでも岡山地方における弥生時代の研究に寄与できますれば幸いに存じます。

昭和56年３月31日

岡山市教育委員会
教育長　水谷　靖

序

岡山市域は、古墳時代に一つの政治勢力の核を形成していた吉備国の中枢地の一郭を占め、全国第４位の規模にある造山古墳を含めて約2000基に及ぶ古墳を始めとして、縄文時代から平安時代に至る各時期の種々の遺跡が、数多く所在しています。近年の急激な地域開発は、吉備地方の各地で遺跡の保存問題を発生させ、往々にして開発か文化財かの軋轢をおこし、その問題解決が大きな社会的課題になっています。

このたびの国立岡山病院看護宿舎建築に伴う発掘調査は、南方遺跡の一郭を病院の敷地が占めているため、建築工事の事前調査つまり記録保存の措置でありました。南方遺跡は、岡山市域における弥生時代中期の代表的で著名な遺跡ですが、市街地の中心部に位置し、国立病院の敷地をも含み込んでいるため、病院の建築工事には遺跡の保存問題が常に宿命的な課題となる状況にあります。上記の建築工事に際しても当然その課題が持ち上がり、岡山県教育委員会・岡山市教育委員会と国立岡山病院とによる遺跡の保存施策の協議が重ねられましたが、敷地の利用状態から設計変更等による保存措置を講じることが困難であり、万やむを得ず、この課題の解決方法として、記録保存の方策の取られることになったものであります。

発掘調査の実施にあたっては、諸般の都合で岡山市遺跡調査団が編制され、岡山市教育委員会の指導・監督の下にこの調査団が発掘調査と報告書作成の実務を担当することになりました。２ケ年度にわたった発掘と報告書作成の作業は、岡山市教育委員会文化課の全面的な指導と支援に基づいて実施されました。発掘の結果、調査団は、多数の弥生式土器や住居址等の遺物・遺構を検出し、南方遺跡の一端を解明する成果を挙げることができましたが、これは一重に関係各位のご指導・ご助勢の賜物と存じます。特に、調査活動の主力になられた岡山市教育委員会文化課担当職員をはじめ、調査団団員各位及び従事者諸氏に対し、心から深謝の意を表する次第であります。

この報告書にまとめた調査成果について、各方面からのご検討とご批判を賜わり、少しでも岡山地方、ひいては中部瀬戸内地方の考古学の研究に資することができますれば幸甚に存じます。

1981年３月31日

岡山市遺跡調査団
団長　水内昌康

例　　言

1．この報告書は、岡山市教育委員会文化課の指導と支援のもとに岡山市遺跡調査団が、1980年(昭和55) 10・11月に実施した、岡山市南方・国立岡山病院看護婦宿舎建築用地の発掘調査に関するものである。

2．この報告書の作成は、岡山市教育委員会文化課の指導と支援のもとに岡山市遺跡調査団が実施し、その執筆は、第1章・第2章・第3章・第5章を出宮徳尚、第4章を神谷正義・岡崎順子が担った。

3．遺構実測図の浄写は出宮が、遺物の整理・実測は神谷・岡崎が、遺物実測図の浄写は神谷岡崎・近藤真佐子がおこない、遺物の写真撮影及び編集には出宮があたった。

4．この報告書に用いている高度値は、標準海抜高度である。

5．この報告書に用いている方位は、磁北である（真北から6度30分西偏)。

6．この報告書に用いている弥生時代の時期区分は、前期・中期・後期とする一般的な3期区分法で、各期を3分する場合には前葉・中葉・後葉とし、2分する場合には前半・後半とした。

目　　次

第1章　歴史的環境 …… 1頁
第2章　調査経過 …… 18頁
第3章　遺構 …… 28頁
第4章　遺物 …… 42頁
　1．土器類……42頁　　2．石器類……110頁
第5章　結語 …… 127頁

挿図

第1図	岡山平野遺跡地図	2頁	第21図	弥生式土器拓本・実測図	44頁
第2図	旭川西岸平野弥生時代遺跡地図	4頁	第22図	弥生式土器拓本・実測図	45頁
第3図	発掘情景	21頁	第23図	弥生式土器実測図	48頁
第4図	発掘調査地点図	26頁	第24図	弥生式土器実測図	49頁
第5図	発掘区域図	27頁	第25図	弥生式土器実測図	51頁
第6図	試掘坑土壌柱状図	29頁	第26図	弥生式土器実測図	53頁
第7図	A区E1層共伴遺構平面実測図	挿頁1	第27図	弥生式土器実測図	54頁
第8図	A区E1層共伴遺構断面図	挿頁1	第28図	弥生式土器実測図	55頁
第9図	A区E2層共伴遺構平面実測図	挿頁2	第29図	弥生式土器実測図	58頁
第10図	A区E2層共伴遺構断面図	挿頁2	第30図	弥生式土器実測図	59頁
第11図	A区壁断面実測図	挿頁1	第31図	弥生式土器実測図	61頁
第12図	B区E1層共伴遺構平面実測図	挿頁3	第32図	弥生式土器実測図	63頁
第13図	B区E1層共伴遺構断面図	挿頁3	第33図	弥生式土器実測図	66頁
第14図	B区E2層共伴遺構平面実測図	挿頁4	第34図	弥生式土器実測図	67頁
第15図	B区E2層共伴遺構断面図	挿頁4	第35図	弥生式土器・土師器実測図	69頁
第16図	B区壁断面実測図	挿頁3	第36図	石器実測図	111頁
第17図	C区遺構平面実測図	挿頁5	第37図	石器実測図	113頁
第18図	C区遺構及び南壁断面図	挿頁5	第38図	石器実測図	114頁
第19図	D区平面図	40頁	第39図	石器実測図	115頁
第20図	D区壁断面図	40頁	第40図	石器実測図	116頁

付図1　弥生式土器実測図（『南方遺跡発掘調査概報』）　78頁
付図2　弥生式土器実測図（『南方遺跡発掘調査概報』）　79頁
付図3　打製石庖丁実測図（『南方遺跡発掘調査概報』）　117頁

図　版

図版第1　A区E 1層遺構
図版第2　A区E 1層遺構
図版第3　A区E 1層遺構
図版第4　A区E 2層遺構
図版第5　A区E 2層遺構
図版第6　A区E 2層遺構
図版第7　A区E 2層遺構
図版第8　B区E 1層遺構
図版第9　B区E 2層遺構
図版第10　B区E 2層遺構
図版第11　B区E 2層遺構
図版第12　B・C区間遺構
図版第13　B・C区間遺構
図版第14　B・C区間遺構
図版第15　B区E 2層遺構
図版第16　B区E 2層遺構
図版第17　B区E 2層遺構
図版第18　B区E 2層遺構・C区遺構
図版第19　C区遺構
図版第20　C区遺構
図版第21　C区遺構
図版第22　D区
図版第23　南方Ⅰ式土器
図版第24　南方Ⅱa 式土器
図版第25　南方Ⅱc 式土器
図版第26　南方Ⅱc 式土器
図版第27　南方Ⅱ・Ⅲ式土器
図版第28　南方Ⅱc 式土器
図版第29　南方Ⅱ・Ⅲ式土器
図版第30　南方Ⅱ・Ⅲ式土器
図版第31　南方Ⅲ式土器
図版第32　南方Ⅱ・Ⅲ式土器
図版第33　南方Ⅲ式土器
図版第34　南方Ⅱ・Ⅲ式土器
図版第35　弥生式土器片
図版第36　土師器片他
図版第37　石庖丁他
図版第38　石槍他
図版第39　石斧他

◎　巻末付録・南方（国立病院）遺跡出土土器編年表

第 1 章　歴 史 的 環 境

岡山市南方遺跡は、狭義の岡山平野の旭川西岸北部に所在する弥生時代中期を中心とする沖積地の遺跡である。狭義の岡山平野は、岡山県の中央を北から南に流れる旭川の沖積平野で、現在の岡山市の中心部をなしている（以下、本章中では広義と付けない限り狭義の岡山平野を指す）。①

吉備高原の山間部を北から南に流れる旭川は、高原南端の竜の口山山塊と半田山山塊の間から、両山塊山麓に迫っていた第３紀末頃の海岸に注いでおり、第４紀を通して広大な沖積平野（狭義の岡山平野）を形勢している。この沖積平野には、縄文時代晩期以降現在に至るまで、人間の生活と生産の場が不断に形成されており、歴史の展開が示されている。旭川の沖積平野の内、古墳時代以前の部分は、東部が操山山塊以北、西部が市街地の天瀬から大供（旧国道２号線から少し南寄り）にかけてより北側であったと推定されている。古代の旭川東部沖積平野は、北を竜の口山塊、東を芥子山から古都の山塊、南を操山山塊と三方を山塊に囲まれた単位的な小平野で、平野部及び周辺丘陵上には、百間川遺跡・雄町遺跡・備前車塚古墳・湊茶臼山古墳・金蔵山古墳・唐人塚古墳・操山古墳群・竜の口山古墳群・賞田廃寺・幡多廃寺・備前国庁跡等を始めとして、先土器時代の石器散布地・土器片散布地・古墳群・寺院址・条里制区画などの各時代の種々の遺跡が、遺存している。一方、古代の旭川西部沖積平野は、北を半田山山塊、西を京山・岩井山・矢坂山山塊で区切られ、南を前記の海岸で限られた単位的小平野で、平野部と周辺丘陵上には、津島遺跡・上伊福遺跡・南方遺跡・天瀬遺跡・都月坂墳墓群・神宮寺山古墳・一本松古墳等を始めにし、縄文時代の貝塚・土器片散布地・古墳群・式内社（伝承地）などの各時代の種々の遺跡が所在している。しかし、この平野に直接伴う状態での後期古墳がなく、また白鳳・天平寺院も皆無である。

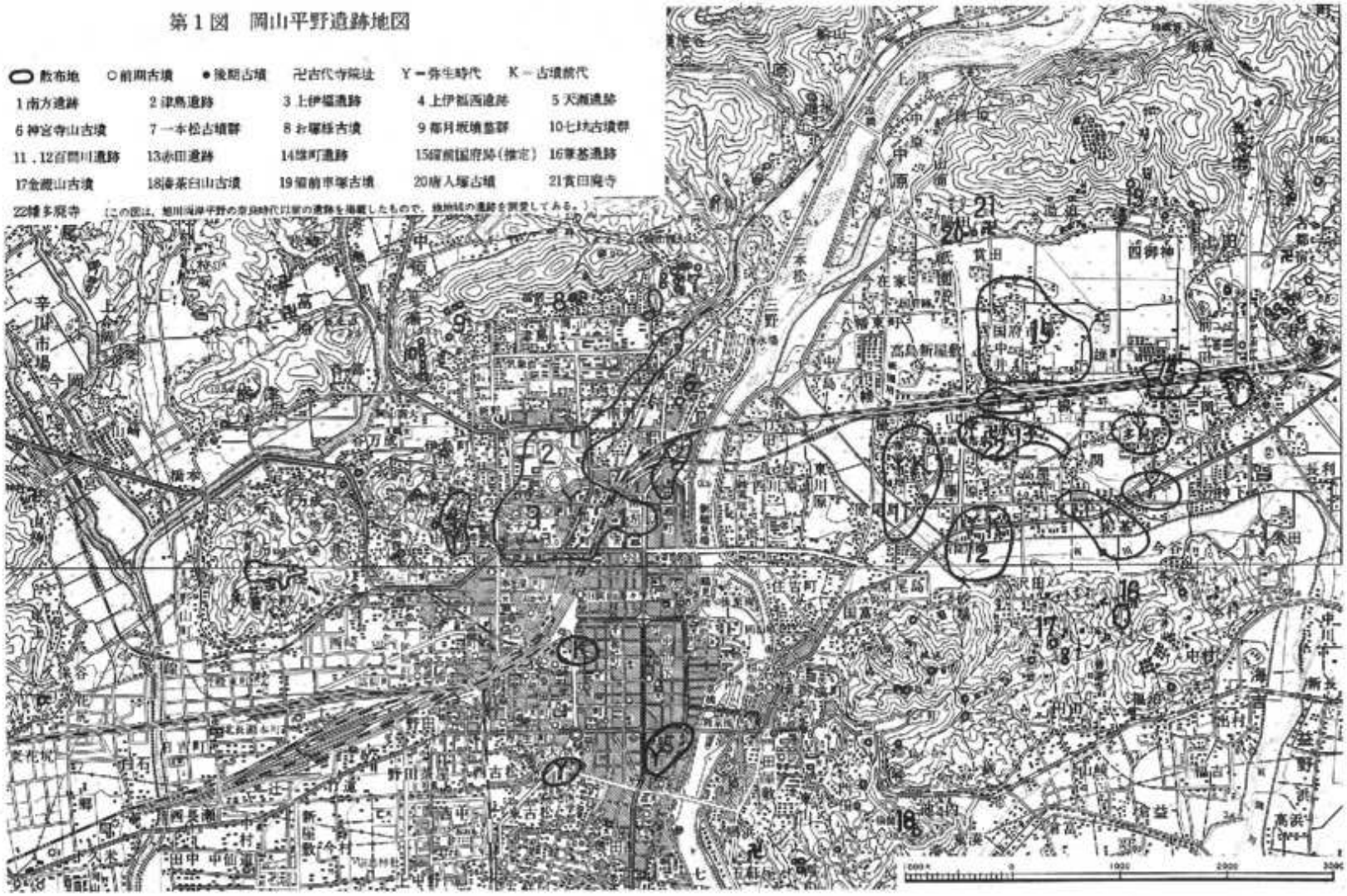
此度、発掘調査を実施した南方遺跡の歴史的性格・内容を考える前提に、狭義の岡山平野就中旭川西岸平野に焦点を置いて、弥生時代と古墳時代前期を中心時期にして、平野に伴う遺跡の形成状態を概括的に展望しておきたい。

なお、掲載する遺跡地図（第１図）は、岡山平野研究会（会長　水内昌康）の調査成果を基に、その後に岡山市教育委員会が実施した分布調査の成果を追加集成したものである。

１．弥生時代以前

岡山平野と周辺丘陵部で現在までに確認されている縄文時代の遺跡は、沖積地の弥生時代前期の遺跡に複合する晩期のものを除くと、極めて乏しく、確かなものは半田山山塊のダイミ山

第１図　岡山平野遺跡地図



南山麓に所在した（現在消滅）後期の朝寝鼻貝塚[2]ぐらいである。他に、竜の口山塊の口矢津の谷に前期の小貝塚があったと伝えられているが、出土物を含めて現在では未確証にあり、また、都月坂3号墳付近に石器の小散布地が確認されているが、遺跡としては未確定である。いずれにしても、岡山平野に伴う縄文時代の遺跡は、小規模且稀少である。

弥生時代前期になると、以後弥生時代全時期を通して地域の中核的な拠点になった遺跡が、岡山平野にも出現している。旭川西岸平野では、津島遺跡（これまで言われていた上伊福遺跡の一部を含む）がそうであり、縄文時代晩期後半の土器を共伴する弥生時代前期から後期に及ぶ一大中核遺跡として知られている。この遺跡は、1968・1969年（昭和43・44）の発掘調査を始め、これまでにたびたび発掘調査が行なわれており、これらの調査の結果、縄文時代晩期後半の土器片・弥生時代の前期から後期にかけての各種の土器類・石器類・木器類等の遺物と、高床式倉庫・竪穴式住居址・貯蔵穴・小祭祀址・水路・弥生時代前期を始めとする水田跡等の遺構が検出されている。西岸平野における弥生時代前期の本格的遺跡は、津島遺跡だけであるが、前期後半から形成[3]されだし、中期に本格的展開を示す遺跡が津島遺跡の外輪に出現しだしている。その代表例は、南方遺跡である。

一方、旭川東岸平野では、中核的な拠点遺跡として雄町遺跡と百間川遺跡が知られており、前者は山陽新幹線工事の事前調査が実施され、後者は百間川改修工事の事前調査が実施中で、ともに縄文時代晩期の土器片を伴い、弥生時代前期[4]から後期さらには古墳時代から古代に[5]及ぶ各種の遺物・遺構が検出されている。特に百間川遺跡の発掘調査は、弥生時代後期の畦畔区画を残す乾田跡や中期に遡るとされるガラス製作場跡等の学史的遺構の検出がなされている。

弥生時代中期になると、岡山平野に遺跡が拡散且つ増大して形成されている。旭川西岸平野では、津島遺跡の南東から南・南西に近接して、南方遺跡・上伊福遺跡・上伊福西遺跡（仮称）等が扇状に拡大しており、遺跡が面的に飛躍して形成されている。南方遺跡は、岡山市教育委員会が中心となって、1969-70年（昭和44・45）にその一部を山陽新幹線設置の付帯工事に伴う事前調査として発掘を実施した。その結果、弥生時代前期後半の土器片を始めとして、中期の前葉・中葉を中心期にした土壙墓・灰穴遺構・土器溜を伴う溝などの各種遺構と、各種の土器と石器・分銅形土製品・獣骨等の多種な遺物が検出されている（南方遺跡に関しては後に概要を別掲）。中期の西岸平野における遺跡の形成状態は、中心[6]地が現在の国道180号線（岩井山山塊南端から南方地区南端を結ぶ東西線）付近まで面的に展開していたと推定される。しかし、津島遺跡から南々東に約3km離れた当時の旭川河口付近で、後期の遺跡所在層の約3m下に中期前葉の単純包含層が確認されている（天瀬遺跡下層）。あるいは、後期にこの平野における南限

第2図 旭川西岸平野弥生時代遺跡地図

の中核的遺跡形成地となった河口付近に、すでに中期前葉に短期間の小規模の出村的遺跡が形成されていたのであろう。

一方、旭川東岸平野では、前記の二遺跡以外には、表面採集で遺跡の存在が確認されている程度で、内容の判明している遺跡はほとんどないが、平野南側の操山山塊の谷頭で3個の銅鐸が出土しており（兼基遺跡）、現存する1個は扁平鈕式袈裟襷文銅鐸である。兼基遺跡は、岡山平野に伴う唯一の銅鐸出土遺跡[7]であるが、いずれも開墾による不時発見で、遺跡の内容が不明である。

弥生時代後期になると遺跡は、岡山平野に前記の中核的遺跡とともに、著しく増大し、平野部の各地にブロック状に形成されている他、周辺の丘陵上にも所在し、多様的に展開している。特に、丘陵上における墓域の形成が顕著な遺跡で、汎地域性をもち、後期の後半には墳丘墓も出現している。旭川西岸平野では、遺跡が著しく南へ拡大し、津島遺跡の南方約3kmの地点に、天瀬遺跡と大供遺跡がほぼ東西一線に並ぶ状態で確認されており、これより南側では明確な後期の遺跡が確認されていないことからみて、両遺跡が後期の南限を示すと判断されている。特に天瀬遺跡[8]は、岡山市教育委員会によって1977年（昭和52）に、その一部が市民病院増設工事の事前調査として発掘を実施され、住居址・井戸・炉（製塩関係か？）・小児墓坑・土器を埋設した水路等の遺構と、各種の土器と石器・鉄器・ガラス小玉・銅鏃・獣骨・植物遺体等の遺物が検出された。遺物の内に、魚撈用具や製塩土器と、手捏土器（たくじり）や装飾高杯等の祭祀用あるいは供献用土器が多数含まれ、この遺跡は、当時の河口に位置する臨海的生産性とともに、臨海的祭祀性をも示し、極めて注目するべき内容を物語っている。しかし、後期の西岸平野は、遺跡の形成地が著しく拡張し、生産活動・日常生活の場が飛躍的に、増大したのは事実であろうが、この範囲内における試掘結果からみて、半田山南山麓から天瀬・大供の南限地までの地域が、現在の様な一面的な平野ではなく、内部に幾つもの後背湿地を抱え込み、小河川の入り組んだ河口デルタ特有の地形にあったと考えられる。

さらに、西岸平野周辺丘陵部では、墓域や岩座祭祀遺跡等の特殊な遺跡が、多数確認されている。北の半田山山塊の都月坂の鞍部には、後期後半の方形墳丘墓が築造されており、この墳墓は、大局的にみれば地域的な系統性をもって古墳への発展性を示す小古墳群の一部を占めている。また、西の京山山麓の低丘陵頂部に弥生式土器を共伴する岩座遺跡（尾針神社裏山遺跡）が所在し、この遺跡は余談ながら、式内社に比定された神社が近世以降（古代に遡るか否かは全く不明）祭られている。西端の矢坂山山塊南部尾根上には、集団墓地跡と考えられる土器散布地や弥生式土器片を伴う岩座遺跡（夫婦岩遺跡）が所在している。

一方、旭川東岸平野は、三方を山で囲まれた地理的条件もあって、遺跡の年代的拡張状況が

西岸平野ほど顕著でないが、平野部においては前記の中核的遺跡の他に赤田遺跡・乙多見遺跡・関遺跡等が、ブロック的に多極化して形成されている。赤田遺跡の一部をなす幡多廃寺下層遺跡では、岡山市教育委員会の発掘調査の結果、冲積地における中期末の、墳丘状に円礫を盛り上げた特定集団墓が2基検出されている。また、南の操山山塊北側の低丘陵頂部に、甕棺・壺棺墓群が形成されており、東の芥子山山塊⑨支尾根の一部には、高地性集落跡と考えられる土器片散布地も確認されている。東岸平野に伴う後期の遺跡は、明確な岩座遺跡こそ未確認ながら、西岸平野と同様に面的拡張と多種多様に増大して形成されている。

いずれにしても、岡山平野における後期に中心時期をもつ遺跡は、中期後葉頃から形成されだし、後期に最盛期をなす傾向にあるといえるようである。

以上、岡山平野に伴う弥生時代の遺跡の展開状態を、極めて概括的に展望したが、遺跡の形成状況は、旭川東西の単位的小平野においては等質的であるとともに、好対照的でもある。そこには、両岸平野に生成した集団間における構造的・政治的な格差を見い出すことが困難である。

2．古墳時代以降

古墳時代の岡山平野の遺跡は、前記の津島遺跡・雄町遺跡・百間川遺跡・赤田（幡多廃寺下層）遺跡及び赤田（竜操中学校）遺跡が、発掘調査されて内容の判明しているものであり、他に工事発見などで数箇所が確認されているが、弥生時代ほど顕著に所在状況が把握されていない。しかし、土器片等の散布状態からみて、現在の集落と複合しているものが多数あると推測され、未確定ながら平野部の遺跡は、弥生時代以上に所在していると考えられる。現状では、遺跡の形成・展開の状態を対比して、岡山平野における集団間の政治的・構造的状況を検討するには、資料の集積が不充分である。

一方、岡山平野の周辺丘陵部には、前記の弥生時代末期の墳丘墓を含めた前期古墳及び後期古墳が、多種・多数築造されている。岡山平野を単位的な生産活動の場にして形成されているこれらの古墳を、前期・後期の2期区分法の年代観に基づいて概括的に眺め、古墳時代の両岸平野における集団の動向を展望しておきたい。しかし、発掘調査が実施されて内容・時期などの判明している古墳は、備前車塚古墳・四御神赤坂古墳群1～3号墳・上の山1号墳・金蔵山古墳・旗振台古墳・護国神社裏山古墳・今谷1号墳・鳥打峠1号墳（以上東岸部）・都月坂2号墓・同1号墳・同4号墳（以上西岸部）など10基強である。また、一本松古墳・神宮寺山古墳・青陵古墳・七ツ社古墳・お塚様古墳等は、非発掘調査の掘削採集や土木工事などによって、内容や遺物の一端が知られている。岡山平野に伴う約200 基の古墳の内、内容の一端なりとも・

知れているものは、前記の様に20基弱の一割程度であり、大多数の古墳は、墳丘あるいは横穴式石室の形状等の現状観察に基づく年代推定と検討に拠るものである。

〔前期古墳〕

旭川西岸平野に伴う古墳は、すでに消滅しているが記録から存在の確かなものを含めると、約35基が確認されており、実数が50基弱と推定される。墳形の内訳は、前方後円墳が6基・前方後方墳が3基・方墳が3基・円墳が23基であるが、現状で円墳に識別したものにも実際は方墳であるものが幾つか含まれているであろう。古墳の立地は、沖積平野自然堤防上に築造されている大型前方後円墳の神宮寺山古墳を除けば、周辺丘陵上に汎地域的に分布している。

西岸平野の北の半田山山塊には、東部に一本松古墳群と単基の方墳、西部に都月坂墳墓群・七ツ森古墳群が存在し、中央南山麓にお塚様古墳群がかつて所在していた（現在消滅）。都月坂墳墓群は、西岸平野と北西隣りの山間盆地（津高地区）を両側に見下す鞍部に占地し、弥生時代末期[9]の方形墳丘墓（1号墳）と、特殊器台形埴輪を伴う全長33mの前方後方墳（1号墳）、径15mの円墳（4号墳）、これらと西に少し離れた全長33mの前方後円墳（3号墳）から成立っている。この墳墓群は、弥生時代末期の墳丘墓からの直接系列的な古墳の形成にはないが、大局的には一つの系列的展開による「群」と考えられる。七ツ森古墳群は、山塊西端の平野に突出した尾根を占地し、特殊器台形円筒埴輪を伴う全長45mの前方後方墳を中心にして、小型円墳（方墳も有りや？）が6基稜線に縦列状に近接して並ぶもので、比較的古式の系列的群成と考えられる。一本松古墳群は、西岸平野のみならず東岸平野も見通しのきく山塊東端山頂部一帯を占地し、出土物から前Ⅳ期に比定できる全長65mの前方後円墳の一本松古墳を中心に、小型円墳・方墳7基[10]がやや散在的に群成している。昭和10年代の記録によれば、この他に小型前方後円墳1基・小型円墳8基が存在していたとのことであるが、未確定である。古墳群は、大局的に見れば、系列的形成による群成と考えられる。お塚様古墳群は、平野の直背後の山麓部を占地し、出土物から前Ⅲ期に比定できる全長39.6mの前方後円墳のお塚様古墳と、近くの2基の小型円墳の「群」[11]で、築造位置及び年代観から一本松古墳と都月坂1号墳及び七ツ森前方後方墳の中継的な存在意義と推定される。また、半田山山塊北東部の旭川西岸山間部寄りに、全長50mの前方後円墳（片山古墳と仮称）と、3基の小型円墳が散在している。片山古墳は、旭川が平野部の直ぐ背後で竜の口山塊と半田山北山塊（笠井山）に挟まれた隘路に位置し、墳型からみて前Ⅰ～Ⅱ期と推定でき、3基の小型円墳は、箱式石棺が露出しており、一応前Ⅲ～Ⅳ期と推定できる。以上の半田山山塊に展開する前期古墳は、小型前方後円墳や小型前方後方墳を含む小型の円墳や方墳が、ブロック的に群を形成しているもので、大局的には等質規模による「群成」を示し、在地的集団性を反映していると見ることができよう。

また、西の京山・岩井山・矢坂山山塊には、前方後円墳1基・前方後方墳1基・円墳4基が

確認されている。現在墳丘が削平されてしまい、内部主体の箱式石棺だけが移転されて現存している全長48.6mの青陵古墳は、出土物から前Ⅲと期考えられ、所在地が山塊北西部にあり、西岸平野を直接見通せないが、前記の七ツ鈷[03]古墳群に対峙する位置にあり、一応西岸平野に伴う古墳とした。全長45mの前方後方墳の津倉古墳は、墳丘型状から前Ⅱ期以前と推定され、西岸平野を足下に控えた丘陵頂部を占地している。円墳は、いずれも小型で、点在している。この山塊に築造されている前期古墳は、いずれも小型墳の個別単成の築造状況にあり、非系列的であるが、津倉古墳の所在する丘陵一帯が近世以降の墓地や土取場さらに旧日本軍施設等で大幅に造成されており、確認できない現状即ちなかったとして、非系列的な古墳と即断できない。

さらに、旭川西岸平野北寄りの本流近くの自然提防上に、吉備地方第7位の大型前方後円墳の神宮寺山古墳が築造されている。この古墳は、吉備地方では数少ない沖積地を占地したものの一つで、かって周濠が巡っていたと伝えられ、全長150 m（＋X？）を計り、墳丘が三段築成になり、出土物及び墳丘型状から前Ⅲ期に比定されている。神宮寺山古墳と西岸平野周辺丘陵上の前方後円墳[04]・前方後方墳を同一系統性に見たてることは、質・量ともに格差が歴然であって不可能である。この大型前方後円墳の形成は、旭川の治水と両岸平野の政治的統合の象徴的所在状況にあり、規模・内容からみて、後述の旭川東岸の操山山塊における大型前方後円墳の系統的展開[05]に繋がると考えられる。

さて、神宮寺山古墳を除くと、以上の前方後円墳・前方後方墳は、西岸平野全体として眺めれば、現状では最古の古墳を想定しがたいが、前Ⅰ期から前Ⅳ期の一本松古墳に至る8基（もう1・2基所在していた可能性はある）の継続性を見立てることができ、一つの単位地域における汎地域的な系統的展開と掌握できる。そして、この系統性の特徴は、規模が等質的で「小型」の枠から発展せず、所在状況が他の古墳と群成する系列性を示すものが多く、見方を変えればその群が汎地域性の構成単位を示すものである。そこには、まさに西岸平野の集団の政治的構造性が示されているのであろう。

一方、旭川東岸平野に伴う古墳は、すでに消滅したものを含め、総数約50基が確認されており、実数が60基強と推定される。墳形の内訳は、前方後円墳が7基・前方後方墳が1基・方墳が8基・円墳が34基であるが、円墳と識別した内には実際は方墳のものが幾らか含まれているであろう。古墳の占地状況は、操山山塊が全域に亘って築造されていて中心地の呈をなし、東の小山塊の山王山がやや普遍的であり、竜の口山山塊が極めて散漫であり、弁子山から古都の山塊も著るしく疎である。

竜の口山塊には、全国最古の古墳の一つとされる全長約50mの前方後方墳の備前車塚古墳が所在しているが、この古墳は孤立した築造で、周辺にも系列性を示す古墳が全く確認されていない。この山塊の前期古墳は、南山麓近くや谷奥などに後期古墳の小群（支群）と共伴する状

態で小型の円墳・方墳が所在する傾向にあり、単位集団毎に形成された後期古墳のブロックの前身的な発生の古墳と推測されるものが多い。

東岸平野の中央東寄りに所在する独立小山塊の山上山には、全長65mの前方後円墳の山王山古墳を始め、小型の円墳・方墳9基が、山塊として二つのグループからなる小古墳群を形成している。山上山古墳は、墳丘型状が伝崇神陵古墳に類似し、前II期に推定される。山王山古墳群は、直接的な系列性を示す展開状況にないが、古墳群全体としてみれば、一つの単位地域の系列的展開と見立てることができる。

東岸平野の南端に臥わる操山山塊には、前方後円墳が6基、方墳が6基・円墳が11基確認されており、岡山平野の周辺丘陵で最も前方後円墳が集中している。これらの古墳の内には、前I期から前II期にかけての大型前方後円墳4基の系統的な築造があり、他に径約30mの中型円墳が2基あり、その内の1基のきよう土古墳は遺物から前II期と考えられる。大型前方後円墳の系統的展開は、墳丘型状からみて全長80mの操山109号墳が最古と推定され、これに次ぐのが109号墳の北に所在して墳型がやや発達し、特殊器台形円筒埴輪を伴う全長90mの網浜茶臼山古墳と考えられ、以上の2基は前I期と推定される。これらに次ぐのが、全長130mの湊茶臼山古墳で、この古墳は、埴輪・墳丘型状から前II期に比定される。これら3基は、操山山塊西端の当時の旭川河口部背後を占地し、まさに、臨海性の大型前方後円墳である。湊茶臼山古墳に続くと考えられるのが、操山山塊中央に位置し、北に東岸平野を、南に当時の吉備穴海（児島水道）を見下す山頂を占地する全長165mの金蔵山古墳である。この古墳は、1953年（昭28）に倉敷考古館が中心になって発掘調査を実施し、内容が判明しており、築造時期が前II期末から前III期初めと考えられている。以上4基の大型前方後円墳の築造状況は、岡山平野において確認できる唯一の系統的な展開である。以上の他に、全長約40mの小型前方後円墳が2基操山山塊西端に所在しており、東岸平野に伴う前方後円墳は、当時の河口背後に集中していることになる。操山山塊の前方後円墳以外の古墳は、前記の中型円墳を除くと径（辺）20m未満の小型墳ばかりで、前方後円墳に対比できる規模の円墳・方墳に欠ける。

さて、操山山塊の古墳は、全体として眺めると、大多数が各山頂部や尾根先端に単独で所在し、「群」的兆候を示すものでも2基が並ぶ程度で、原則的には個別単成型の形成状況にあり、系列的群成型に欠ける。しかし、古墳の展開状態は岡山平野の内では、地域的にも、種別的にも、時期的にも一番普遍性を示し、まさに唯一の「教科書」的状態にあるといえる。

いずれにせよ、東岸平野に伴う古墳は、臨海性の大型前方後円墳の単位平野における系統的で発展的な展開・操山山塊の汎山塊的分布でありながら単独的所在・備前車塚古墳の隔絶的所在等、多分に非在地的な形成状況を示し、在地性を示すのが山王山古墳群だけである。そして、それらは、前方後円墳・前方後方墳と円墳・方墳との間に峻別性を歴然と示し、東岸平野の

地域的政治集団の政治的構造性を反映しているのであろう。

さて、古墳時代前期の岡山平野における古墳の築造状況を旭川の東西平野部を対比して、総括的に展望してみると、総数には10基強の差（東岸多し）のあるものの、前方後円墳と前方後方墳の合計数は、西岸９基・東岸８基と、ほぼ等しい。規模の大小を別にすれば、前方後円墳及び前方後方墳が体現したであろう、単位平野（地域）としての各々の地域的政治集団における代表首長権の継承状態が、同等な構造性にあったと考えられる。そして、規模の大小は、単位地域を越えたより高度な「地方」としての政治集団の盟主（首長）権を体現しえたか否かの、極めて観念的政治性に基づくものではなかろうか。もし、そうであるとすれば、上記の状況からみて、東岸平野の地域的政治集団は、西岸に比べて「より政治的自覚」の基にあったことになろう。そこに、個別単成型古墳の汎単位地域的な展開と、「伝統」に規制された系列的群成型古墳の汎単位地域的な展開との要因の差があるのではなかろうか。

なお、岡山平野には前Ⅳ期の横穴式石室は、確認されておらず、また、前方後円墳や前方後方墳は、前Ⅳ期後半以降に築造されていない。

〔後期古墳〕

岡山平野の周辺丘陵部で多数の後期古墳が確認されているが、いずれも典型的な横穴式石室墳であり、発掘調査に基づく遺物から年代の判明しているものは２・３例である。従って、後期古墳としての識別は、即横穴式石室墳である。これらの内に、前Ⅳ期末から後Ⅰ期前半の古式の横穴式石室構造を示すものは皆無であり、また、後Ⅳ期の特殊な石室構造も確認されていない。

西岸平野では、平野の直接背後にあたる半田山山塊と京山・岩井山・矢坂山山塊東半（京山・岩井山）に、１基の横穴式石室も確認されておらず、過去の破壊消滅や未確認を考慮しても、ほとんど無いと見て良いであろう。旭川の山間流域に入ると、小古墳群や点在するものを含め十数基の古墳が確認されるが、これらは平野部から離れた地区にあり、直接に西岸平野の集団に伴う古墳とは考えられない。また、京山・岩井山・矢坂山山塊の西半（矢坂山）の南側の山麓から山頂一帯に、総数約50基の矢坂山古墳群が確認されているが、所在位置が西岸平野の集団の墓域としては、縁辺部に偏りすぎであり[19]、数も少ない。この古墳群は、５小群集墳と単独墳に分けられ、前者が小型の石室規模にあり、後者が１・２基の盟主的な大型石室墳と中型石室墳である。この古墳群は、形成地が奈良時代の墾田地系荘園である大安寺領長江原の直結背後を占め、岡山平野南西外れの沼沢地（笹ヶ瀬川河口付近）における古墳時代中頃以降の開拓に基づく「新興」勢力を反映していると考えられる。

西岸平野に伴う後期古墳の形成は，平野の中心部分に直結した状況になく、当時の新開地や縁辺地にしか所在せず、しかも大多数が中小規模の石室である。

一方、東岸平野に伴う古墳は、大多数が竜の口山山塊と操山山塊に集中しており、あと小数が芥子山と古都の山塊に点在している。

竜の口山山塊の竜の口山古墳群は、総数約80基の古墳が確認されており、竜の口山頂群集墳・湯迫古墳群・四御神古墳群・矢津古墳群に細分され、山麓部分での古墳の開墾破壊伝承や未確認を考慮すると、実数が100基前後と推定される。これらの古墳は、中心時期が後Ⅲ期と判断される竜の口山頂群集墳を除くと、大多数が後Ⅱ期の典型的な横穴式石室構造を示すもので、中型石室の規模が主流を占めているが、大型石室もかなり所在している。また四御神古墳群の内には、小尾根に2・3基の横穴式石室墳が、1基の前期古墳と縦列的に隣接（共存的）して築造されているものが3例もあり、両者の有機的関連性を想起させられる状況のものもある。さらに、山塊西端の山麓に所在する唐人塚古墳は、石室全長（復原推定値）15m・玄室長5.30mの巨石墳で、凝灰岩製刳抜家型石棺が遺存（蓋は江戸時代に喪失）しているが、墳丘が畑地開墾のため規模・形状とも判然としない。この古墳の石室構造は、原則的に玄室が巨石の二段積み、長い羨道が巨石の一段積みの手法を示し、後Ⅱ期の畿内巨石墳の岩屋山型古墳の部類に入る。この古墳は、岡山平野に伴う後期古墳中唯一の家形石棺保有墳で、築造時期が6世紀末から7世紀前葉に推定され、東に隣接する備前国最古の氏寺である賞田廃寺との関連性からも注目されている。

操山山塊の操山古墳群は，古墳が現在99基確認されており、実数が120基前後と推定され、数基の末期的な極小（シスト状）石室を除く大多数が、一般化した後Ⅱ期の横穴式石室墳である。これらの古墳は、山塊西部の前期前方後円墳の集中していた地区を除いて、山塊全体に平均的に散開した分布状態を示し、全体として汎地域的な一つの古墳群として掌握できるもので、その内部が幾つかの支群や小群集墳に細分できる形成状態にある。それは、竜の口山古墳群（除山頂群集墳）の様に、単位地区を反映していると推定できる小群が、古墳群の構成の主体をなすものでない。操山古墳群の築造状況は、家形石棺をもつ巨石墳にかけるが、①石室規模だけであれば巨石墳に近い亜巨石墳や大型石室墳が、前期古墳の占地状態と同様に丘陵頂部や尾根先端に個別的に所在するもの、②中型石室墳が山塊全域に個別的に点在するもの、③小振りの中型石室墳が数基の小群成をなすもの、④中型石室墳を中核に小型石室墳が小群集墳を形成しているもの、⑤箱式石棺に類似する極小石室が数基全く点在しているものと、5類型に大別できる。この古墳群は、構成の中心が②・③・④であり、巨石墳及び古式石室に欠けるものの、まさに横穴式石室墳の普遍的な形成と展開状況にある。この形成状況は、前期古墳の

それと対比すれば、質的縮小と量的増大が顕著であり、まさに「教科書的な」状況といえる。しかし、前期古墳と後期古墳とには、質と時間の断絶が厳然と臥わり、この山塊を墓域としたであろう東岸平野の地域的政治集団の構造的・政治的体質の、前期から後期への転換における矛盾と葛藤が窺える。

さて、旭川両岸平野における後期古墳の形成と展開は、厳然たる格差が所在する。東岸部の地域的政治集団は、前期から後期への転換の問題が内在するにせよ、普遍的に順調な古墳の形成と展開状況を示し、唐人塚古墳を筆頭にして巨石墳あるいは巨石墳に匹敵する石室墳を数基も析出しており、集団の支配権力の象徴性と構造性を古墳築造に投影させていると考えられる。これに対し、西岸部の地域的政治集団は、後期古墳の形成状況が前期古墳の面影さえも残さない凋落振りで、集団内部の支配権力の象徴性と構造性を全く古墳築造に反映させておらず、その自立的存在性の欠落と考えることができる。そこには、前期古墳の形成状況に示されている両岸部各々の地域的単位性をもった自己完結的な存在性＝並存性の面影もない。西岸部の地域的政治集団は、東岸部のそれか、あるいは新興勢力的な北西部（笹ケ瀬川流域）のそれに、屈服し、従属的統合下に置かれたのではなかろうか。

〔古代寺院〕

岡山平野の奈良時代以前の古代寺院は、賞田廃寺・幡多廃寺・井寺（居都）廃寺・網浜廃寺、未確定な成光廃寺を加えれば5ケ寺が知られていたが、全て旭川東岸平野に偏って所在している。この内の前3者は、吉備の古代豪族である上道氏一族による企画調整に基づいて、各寺院造営の有機的な運営が図られていたと推測されている。[20] これに反し、西岸部では1ケ寺も確認されていない。旭川の両岸平野における白鳳・奈良時代の氏寺の形成状況は、後期古墳のそれ以上に絶対性をもって不均衡である。西岸平野には古代豪族本拠地としての自立性を全く見いだすことができず、西岸平野の集団は、東岸平野を本拠地にして古代豪族に成長した上道氏に完全に従属していたと考えられる。

さて、岡山平野における前記の古代氏寺の不均衡な形成様相は、古代のもう一方の宗教関係資料である神社の動向と対応させると、注目すべき状況を呈している。地方の神社にとって現存する確実な最古の資料は、氏寺の形成・展開期まで遡るという確証に欠けるが、延喜式神名帳である。岡山平野において延喜式神名帳に記載されている官社・所謂式内社は、東岸部に1社4座、西岸部に8社8座が所在している。これらの神社の現所在の当否を別にして、その所在状況は、東岸部と西岸部で著しく不均衡にあり、氏寺の所在状況の逆転現象といえ、特に西岸部が吉備各国でも異常に集中した地域（郡）となっている。岡山平野に限ってみれば、東岸

部の氏寺・西岸部の式内社と両極性を示し、それぞれの偏向的集中状況は、両者を古代宗教関係資料として総体的に眺めれば、あるいは両岸部が一体となって均衡性を示すものかも知れない。岡山平野における氏寺と式内社の展開状況が、如何なる歴史的動向を反映し、物語かは、直ちに回答を引き出せないが、古墳時代後期から律令体制の完成期にかけての岡山平野における集団の歴史的展開の重要な一側面を投影しているのは、事実であろう。

3．南方遺跡

南方遺跡は、岡山市南方地区（旧大字南方で、現在は南方1丁目から5丁目の町名になっている）とその周辺部分で確認されている弥生時代を中心期にした遺跡の、現在の総称である。古くは、遺構・遺物の発見された地点別に小字名によって、蓮田遺跡・宝崎遺跡・関場遺跡・番町遺跡等々個々の遺跡として扱われた傾向にあり、あるいは「南方蓮田遺跡」の様に地区（旧大字）[19]名の「南方」を最初に付して呼称する場合もあった。

南方遺跡を考古学的に扱ったのは、管見の限りでは、徳富万熊が最初で、1917年『人類学雑誌第32巻第12号』に発表した「岡山県に於ける考古学上の調査（本会例会講演）」において、南方遺跡のフィールド・ワークの成果を略報している。次いで、本格的に取扱ったのは、水原岩太郎で、1933年出版の著書『岡山市考古学通論』[20]に「南方にて発見の壺」として壺形土器の略測的な見取図を掲載するとともに、弥生式土器の章で列挙した遺跡の内に「南方小字宝崎」と「南方小字蓮田」を掲げている（前記の壺形土器は宝崎の項に伴うとしている）。さらに、同年に末永雅雄氏の編集の基に発行された『本山考古室要録』[21]には、南方・南方十六坪・南方蓮田・南方関場・南方付近からの出土物として、石器62点・土器片4点を掲載している。

一方、小林行雄氏は、1934年発行の『考古学』第5巻第1号に発表した「一の伝播変移現象」[22]において、「備前岡山市南方発見土器」の実測図を掲げている。その後、森本六爾・小林行雄両氏が1938年に編集出版した『弥生式土器聚成図録・正編』[23]には、水原の「南方にて発見した壺」と備前蓮田出土の台付無頸壺の実測図が掲載してあり、この図を現在の弥生式土器集成図も踏襲している。また、翌年に小林行雄氏が編集出版した『弥生式土器聚成図録・解説』[24]には、中部瀬戸内の第一様式の壺形土器の一資料として「備前蓮田」遺跡出土の土器片拓影が、また第二様式の壺形土器の口縁部文様の資料として「備前蓮田」遺跡出土の拓影が1点、部分（破片）実測図が2点掲載してある。南方遺跡関連資料は、『弥生式土器聚成図録・正編・解説』に都合6点掲載されている。この結果、特に蓮田遺跡は、南方地区の各遺跡の内でも代表格にされる様になり、1930年代末以降中部瀬戸内の弥生時代中期の基準的遺跡に見立てられ、上記の「蓮田」の資料が編年の標準型式土器として取扱われたし、以後、度々編年に登場する様になった。

大平洋戦争の戦中、戦後の空白期を置いて、その後南方地区内の土木工事に伴って点々と土器片が採集され、南方遺跡の所在地も増化していったが、遺跡としての総合的把握には至らなかった。

1959年（昭和34）に南方宝崎遺跡及び十六坪遺跡の所在地一帯において、国立岡山病院の近代的（当時）高層建築が施工され、この工事に伴って多量の土器・石器・木片・炭化米・植物遺体（種子）等が出土し、戦後の考古学の著るしい発達と世代交代もあって、南方（宝崎）遺跡が現在の考古学界に直接繋がる状況の基に、白日の下に大々的に露呈された。しかし、この発見は、まさに再発見であって、考古学的にも行政的にも全く未対応で工事が進行し、未調査のままに遺跡が消滅した。かろうじて、工事中立会による遺跡の確認と遺物の一部の採集が、考古学関係者によってなされたにすぎず、南方（宝崎）遺跡は、大規模な遺跡の所在が確認されたものの、その内容が全く不明のままに置かれて来た。

一方，南方宝崎遺跡の南半分は、山陽新幹線が縦断したために、事前調査が実施されると見られていたが、諸般の都合で新幹線路敷が未調査のままに施工され、わずかに新幹線設置の付帯工事の市道設置道路敷だけを、1969年（昭和44）暮から翌年春にかけて、岡山県教育委員会の協力の基に岡山市教育委員会が事前の発掘調査を実施している。発掘の結果、弥生時代前期後半の遺物を始め、中期の前葉と中葉を中心期にした各種の土器や石器・分銅型土製品・管玉・細型銅剣片・獣骨・埋葬人骨等の多岐に亘る遺物と、土壙墓群・灰穴遺構・各種柱穴・舟形土壙・土器溜を伴う溝等の遺構が検出されて、南方遺跡の内容の一端がやっと判明した。出土遺物からみて、南方（宝崎）遺跡は、弥生時代前期後半から形成されだし、中期の前葉と中葉に最盛期があり、中期後葉以降に衰退化したと見られている。しかし、少量ではあるが、弥生時代後期及び古墳時代前葉の遺物やピットも検出されており、また中期中葉の包含層上端が地下げの削平をされた状態にあることからみて、この地点の微高地は中期後葉以降も安定しており、中期中葉に比べて遺跡の形成が退潮的であったにせよ継承されていた可能性が大きい。

いずれにせよ、この調査の結果、南方宝崎遺跡は、岡山平野における弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式併行）の標準遺跡とされていたものが、それまで同平野で判然としていなかった中期前葉後半（畿内第Ⅱ様式併行）にあたる土器型式の土器も多く出土し、中期前葉の標準遺跡ともなった。また、それまでにあまり検出例のなかった、前期後半から中期後葉にかけてほぼ継続的に形成されている灰穴遺構の検出は、その機能と合せて新たな問題を提起するものであった。さらに、多数の分銅形土製品・多くの石製武具・細型銅剣片等と豊富な土器量からみて、南方遺跡は、弥生時代中期の岡山平野における一つの中核的集落をなしていたと考えられるに至った。

最後に、南方遺跡の学史的意味合をも含めて、前記の『弥生式土器聚成図録・解説』の後（

結果的に戦後となっている）の考古学関係の出版物の内、この遺跡を取扱っている代表的なものを、管見の限りであるが、以下出版年次順に羅列しておきたい。

鎌木義昌氏は、1962年刊行の『岡山市史・古代編』の「第一編原始時代」において南方の前記の各地点遺跡に触れるとともに、特に国立岡山病院建設工事に伴う発見の知見をも記載し、岡山市内の弥生式土器編年表[38]で前期後葉に日本興油遺跡（蓮田遺跡の一部＝筆者註）・中期中葉の3型式に各々蓮田遺跡を比定している。

鎌木義昌氏は、1964年刊行の『弥生式土器集成・本編Ⅰ』の「山陽地方Ⅱ」[39]において弥生式土器を6様式に分類し、前記の「弥生式土器聚成図録』掲載の南方出土の壺と蓮田出土の台付無頸壺を瀬戸内第Ⅲ様式とした。

潮見浩・藤田等の両氏は、1966年刊行の『日本の考古学・弥生時代』の「弥生文化の発展と地域性・2・中国・四国」において、弥生時代を7期に編年し、岡山のⅣ期（中期中葉）の標準遺跡に南方遺跡を使用した。[40]

間壁忠彦氏は、1969年刊行の『新版考古学講座・原始文化（上）』の「弥生文化各説　山陽・四国」において、中期の代表遺跡例に岡山国立病院（南方蓮田）・旧日興工場（南方蓮田遺跡の一部＝筆者註）を掲げた。[41]また、関俊彦氏は、同書の「弥生文化特説・弥生式土器の編年」において、中期後半の櫛目文系土器の代表例として「南方式」を呼称した。[42]さらに関氏と大場磐雄氏は、同書の巻末「土器の編年表」において、山陽Ⅱの中期後半（畿内第Ⅲ様式（新）併行）の標準遺跡として「南方」を使用した。

出宮は、1971年発刊の前記新幹線付帯工事に伴う事前調査の『南方遺跡発掘調査概報』の「第4章・遺物」において新規確認の中期前葉の土器型式を「南方Ⅱ式」に、それまで知られていた中期中葉の土器型式「南方式」を「南方Ⅲ式」とした。[43]

正岡睦夫氏は、1972年に発行された、山陽新幹線建設に伴う調査の『埋蔵文化財発掘調査報告』・「雄町遺跡」の「第5章・遺物」の「備前西南部弥生・土師器編年表」において、「南方」（本文中に南方Ⅱ式との記載あり＝筆者註）を中期前葉の標準型式に位置づけた。[39]

伊藤晃氏は、1977年発行の『倉敷市（児島）城遺跡発掘調査報告』の「第4章・まとめにかえて」において、中部瀬戸内北岸の弥生時代中期の土器編年を学史的に総括し、「南方Ⅱ式」を「中期2の段階（畿内第Ⅲ様式（古）の段階平行）」に位置づけた。[44]

高橋護氏は、1980年出版の『考古学ジャーナル・No. 173・175・179・181』の「弥生土器・山陽Ⅰ」において、弥生式土器から初期土師器まで系統的に編年細分し、前掲の南方Ⅱ式を二分し、中期の最初の時期とその次の時期（氏は中期を9期に細分する－筆者註）に位置づけた。[39]

なお、上記の他に、清野謙次は、1969年に出版した『日本貝塚の研究』において、「第9編

・岡山市南方及び大供に於ける弥生式土器出土の遺跡地」　の一編を設け、南方遺跡から出土した多くの土器の実測図と石器の実測図を網羅的に掲載し、各々の解説を施している。しかし、惜むらくは、南方遺跡と大供遺跡の出土物を一括扱いにしており、各々の区分がなされていないため援用しがたい。　（出宮徳尚）

註① 岡山県南部一帯の平野を指し、現在一般的に使用されている地理学上の岡山平野
② 鎌木義昌「第一編・原始時代」『岡山市史・古代編』33頁　岡山市役所　1962年
③ 和島誠一他『津島遺跡発掘調査概報』岡山県教育委員会　1970年
④ 鷲原克人他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』』岡山県教育委員会　1972年
⑤ 旭川の放水路である百間川の改修工事の施工に伴い、岡山県教育委員会が建設省からの委託に基づいて、1976年から５ケ年計画をもって河床の低水路掘削部の発掘調査を実施中で、1981年に第Ⅰ期の発掘が完了予定
⑥ 出宮徳尚他『南方遺跡発掘調査概報』　岡山市教育委員会　1971年
⑦ 鎌木義昌「岡山県華基遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会編　1961年
⑧ 戦前の記録では、天瀬地区から大供地区のもう一まわり南側にあたる岡山市奥田地区、同上中野地区にても弥生式土器片を発見との報がある　註㉔参照
⑨ 出宮徳尚・根木修他『幡多廃寺発掘調査報告』50頁　岡山市教育委員会　1975年
⑩ 水内昌康「岡山市津島都月坂一号墳の発掘」『私たちの考古学』第５巻３分・考古学研究会・1959年
近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻３号　考古学研究会　1960年
⑪ 註②の162頁
⑫ 永山卯三郎「第一編　上古」『岡山市史・第一』197頁　岡山市役所　1936年
⑬ 註⑫の203頁
⑭ 註②の166頁
⑮ 西川宏「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』156頁　考古学研究会　1964年
⑯ 出宮徳尚・根木修『岡山市四御神　上の山１号墳発掘調査報告』60頁　岡山市教育委員会　1974年
⑰ 註②の203頁
⑱ 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』　倉敷考古館　1959年
⑲ 玉川智之・後神泉・黒崎高他『矢坂山古墳群』岡山市立石井中学校古墳クラブ　1980年
⑳ 出宮徳尚・伊藤晃他『賞田廃寺発掘調査報告』27頁　岡山市教育委員会　1971年
㉑ 註⑨の147頁
㉒ 代表例としては、永山卯三郎『岡山県農地史』80頁　岡山県　1952年
㉓ 代表例としては、註②の51頁
㉔ 水原岩太郎『岡山市考古学通論』　文献書房　1933年
㉕ 末永雅雄『本山考古学要録』岡書院　1934年
㉖ 小林行雄「一の伝播変移現象」『考古学』第５巻第１号　東京考古学会　1934年

㉗ 森本六爾・小林行雄『弥生式土器聚成図録・正編』　東京考古学会　1938年
㉘ 小林行雄『弥生式土器聚成図録・解説』　東京考古学会　1939年
㉙ 註②の57頁・79頁
㉚ 註②の72頁
㉛ 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成　本編1』東京堂出版　1964年
㉜ 潮見浩・藤山等「2　中国・四国」『日本の考古学　弥生時代』87頁　河出書房　1960年
㉝ 間壁忠彦「山陽・四国」『新版考古学講座』4巻50頁　雄山閣　1969年
㉞ 関俊彦「弥生式土器の編年」『新版考古学講座』4巻273頁　雄山閣　1969年
㉟ 註⑥の17頁
㊱ 正岡睦夫「雄町遺跡・遺物（弥生式土器、土師器）」『埋蔵文化財発掘調査報告』110頁　岡山県教育委員会　1972年
㊲ 伊藤晃・山磨康平『倉敷市（児島）城遺跡発掘調査報告』97頁　岡山県教育委員会　1977年
㊳ 高橋護「弥生土器・山陽Ⅰ」『考古学ジャーナル』No.173・24・25頁　ニューサイエンス社　1980年
㊴ 潤野謙次「第9編・岡山市南方及び大供に於ける弥生式土器出土の遺跡地」『日本貝塚の研究』　岩波書店　1969年

第２章　調　査　経　過

南方遺跡は、1959年（昭和34）に国立岡山病院が現在位置（岡山市南方２丁目13－１・現住居表示地番）に移転して来、その建設工事に伴って多量の土器や石器・炭化米等の遺物が発見されたことにより、戦後の考古学界に再確認され、遺跡として周知されるに至った。国立岡山病院の敷地は、旧小字名に比定すると「南方小字宝崎及び十六坪」に当り、戦前から南方遺跡の代表格の一つになっていた宝崎遺跡の北半の大部分を含むものである。この地は、1959年の建設時には戦前の考古学成果が、戦中・戦後の混乱と考古学人口の世代交代もあってか、必ずしも充分に継承されておらず、また、文化財行政が途についたばかりの時期ということもあってか、戦前から遺跡として認識されていたにもかかわらず、工事に伴う「再発見」となった。再発見に伴って、考古学関係者の立会観察と一部の遺物が採集されたとはいえ、何らの考古学的調査や行政的対応の図られることなく、遺跡は消滅した。

この結果、国立岡山病院の敷地が南方遺跡の主要部を占めるという認識は、「再発見」以来周知化され、以後の同病院の増築と遺跡の保存措置が行政的課題になったが、文化財行政担当側の手薄さもあってか、幾つかの建物が文化財行政の未対応のままに施工されている。1969年（昭和44）春から翌年春にかけて、同病院から数十m離れた同じ旧宝崎地区において、山陽新幹線建設の付帯工事に伴う事前の発掘調査が実施されたことにより、南方遺跡に対する文化財行政サイド・考古学研究者・市民等の関心が高まるようになった。こうした背景と文化財行政の一定の成果の蓄積とが相俟って、この数年来、南方遺跡推定域内で、大型建設事業、特に公共事業は、文化財行政の対応なくして施工しがたい文化財保護法の施行状況となっていた。

このことを、同病院の建設担当部局の会計課も、認識するところとなり、同病院敷地内の看護婦宿舎増築計画の策定に際し、同課から岡山市教育委員会文化課に、事前の相談がなされた。1978年（昭和53）６月12日の岡山市教育委員会文化課と国立岡山病院会計課との最初の協議では、文化課から当初の看護婦宿舎建築予定地が南方遺跡に含まれる可能性が極めて強いことと、周知の遺跡内における公共事業の土木工事に対する文化財保護法の規定や、行政的対応措置に関する岡山市教育委員会の一般的行政指導が提示された。この協議で、文化課は、遺跡保存の原則から、同病院周辺の土木工事等に伴う事前の埋蔵文化財確認調査の結果を勘案して、当該建築工事を遺跡所在の可能性の低い病院敷地内北西部へ変更する様に要望した。会計課は、文化課の要望を持帰り、検討したが、既存の建物・設備・地下埋設物との関連で、建築位置を敷地の南東部にしか設定しがたい敷地利用の状態にあり、要望には添いがたい旨の決定をした。最初の協議と建築位置を変更しがたい実情を踏えて、病院会計課と岡山市教委文化課の２回目の協議が、同年８月５日になされ、建築に伴う埋蔵文化財への事前の対応措置を構じる途につ

くべく、具体的な手順が図られた。その結果、まず建築位置が埋蔵文化財包蔵地であるかどうかの確認調査を実施した後、包蔵地と確定すれば、行政的措置の記録保存を図った後に施工することになり、確認調査は、これまでの経緯から病院側の負担の下に岡山市教委文化課が対応することになった。しかし、記録保存の発掘の実施となった場合は、これまで国の事業に関しては岡山県教育委員会が対応してきた原則に則り、国立岡山病院がまず岡山県教育委員会に発掘の相談・依頼を行なうことで合意し、この旨を岡山市教委文化課からも岡山県教委文化課へ連絡した。

以上の決定に基づき、国立岡山病院長から岡山市教育委員会教育長宛に昭和53年８月７日付けで、「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について（依頼）」の公文書が提出された。岡山市教育委員会文化課は、これを受けて同年８月９日付けで、確認調査の実施に関する回答を出した。国立岡山病院は、この回答に基づいて、岡山市教委文化課の立会指示によって、同年８月30日に当該用地で２ケ所の試掘掘削を行なった。この結果、市教委文化課職員及び当日立会に赴いた県教委文化課職員とによって、両試掘坑とも現地表下約２ｍに、弥生式土器片を含む黒褐色有機土層（所謂包含層）の所在が確認され、試掘坑は包含層上部で止められた。このため、岡山市教委文化課は、同年９月９日付けで、建築用地が記録保存の必要地である旨の「埋蔵文化財確認調査の結果について」を、同病院に通知するとともに、記録保存の実施についての文化財行政機関との協議を要請した。このため、同病院から盛んに記録保存の実施依頼が岡山県教委と岡山市教委になされた。

その後、岡山県教委文化課と岡山市教委文化課の連絡協議会が、同年12月５日にもたれ、国立病院の件の協議がなされ、国の事業であるので原則的には岡山県教委が対応すべきであるが、人手不足もあってか県教委の強い要望から、県教委・市教委の両者で対応することで合意をみた。その後、この事業が昭和54年度事業であるため時間的余裕もあり、さらに岡山県教委が具体的に対応しだしたこともあってか、岡山市教委と国立病院の協議が保留したまま、昭和54年度に至った。

岡山市教委は、昭和54年度の初めから発掘の実施に伴う多忙さもあって、国立病院との協議が保留のままにあったが、1979年（昭和54）６月29日の岡山県教委文化課と岡山市教委文化課の連絡協議会において、県教委は、国立岡山病院から前記の看護婦宿舎建築の他に、昭和54年度事業として循環器病センター建設構想が確定し、この記録保存の依頼もあることを、正式に市教委へ示した。 このため、 国立病院の記録保存には県教委と共に対応することにしていた市教委は、昭和54年度中の発掘予定量から看護婦宿舎以外は対応できる余力がないので、循環器病センターの設計変更（北西部への移動）か、両方とも発掘する場合は２ケ年に分けるかの

2案を要望した。この点については、後日、県教委・市教委・国立病院の3者で再協議することになったが、最悪の場合は、看護婦宿舎を市教委が、循環器病センターを県教委が分担することで両者の合意をみた。

同年7月3日に3者の協議会が行なわれ、病院は、設計変更の不可能さと、2ケ年分割案も政治情勢から両工事とも昭和54年度着工が動かしがたく不可能な旨、記録保存に関する病院側の一方的要望を示した。このため特に岡山市教委は、病院に再考を求めた。同年8月1日に再度3者の協議が行なわれたが、病院は、当初の計画通りの実施を要望し通し、諸般の事情から、病院の要望通り両方の記録保存を昭和54年度中に実施することになり、岡山市教委は、看護婦宿舎の記録保存を単独で担当することとなった。調査費用は、国立岡山病院から一括して岡山県に委託し、その内の看護婦宿舎分を、県が市教委へ再委託することに決定した。

岡山市教育委員会文化課は、昭和54年度の発掘予定から、当時実施中の発掘と、冬期に着手する発掘の間に無理に調査期間を捻出し、同年の10～11月に国立岡山病院看護婦宿舎建築用地の記録保存の発掘調査を実施することにした。この発掘調査の実施に際しては、岡山市教委文化課は、昭和54年の他の発掘調査で手一杯であるため、調査組織を別途編成して対応することにし、岡山市遺跡調査団(団長　水内昌康―岡山市文化財保護審議会委員・考古学担当)を設けた。看護婦宿舎建築用地の発掘調査は、岡山市教育委員会文化課の指導監督と支援の基に、同調査団が主たる調査担当者となって実施されることになった。このため、本件の発掘調査に関しては、岡山遺跡調査団長から文化財保護法第57条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査届け」が、岡山市教委を経由して文化庁長官宛に昭和54年8月30日付けで提出された。また、この件に関しては、国立岡山病院長から文化財保護法第57条の3の規定に基づく「埋蔵文化財発掘届」が、昭和54年9月1日付けで市教委を経由して文化庁長官宛に提出された。

経費については、国立岡山病院から予算委託された岡山県と岡山市遺跡調査団との間で、発掘調査委託契約が昭和54年10月1日付けで知事名と団長名で締結され、その委託料をもって運営された。

以上の経緯の基に、国立岡山病院看護宿舎建築用地の発掘調査は、1979年(昭和54)10月1日から同年12月15日にかけて実施された。

なお、発掘調査報告書の作成は、次年度に実施することで3者の合意がなされ、これに関して昭和55年度に別途契約を締結することとなった。

発掘調査組織

発掘調査費用負担者　国立岡山病院

発掘調査主体者　岡山市遺跡調査団団長　水内昌康

発掘調査指導監督者　岡山市教育委員会文化課文化課長　植田心壮

発掘調査顧問　西原礼之助（岡山市文化財保護審議会会長）

発掘調査担当者　水内昌康（岡山市遺跡調査団団長）

植田心壮（岡山市教育委員会文化課長）
井上甫之（岡山市教育委員会文化課長補佐）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課主事）
根木　修（岡山市教育委員会文化課主事）
熊代智恵子（岡山市教育委員会文化課主事）
神谷正義（岡山市立オリエント美術館学芸員）

岡崎　真（岡山市遺跡調査団員）
富田承弘（岡山市遺跡調査団員）
河本ひとみ（岡山市遺跡調査団員）

発掘調査作業員　中西豊光
難波俊一
西岡　馨
畑中三郎
日笠金太郎
渡辺　昇
杉本幸子
関野二三子

第3図　発掘情景

難波美子
藤原恵子
横田富美子
渡辺しげ子

発掘調査補助員　　近藤真佐子

調査にあたり、岡山県教育委員会文化課文化財二係長河本清氏を始め、同課文化財二係の諸氏等の現地視察による教示、助言をえた。また、文化庁記念物課文部技官稲田孝司氏には現地来訪のうえ諸々のご指導・ご教示を頂いた。さらに、地元考古学研究者諸氏の現地視察とご教示を頂いた。

発掘調査の実施に際しては、国立岡山病院会計課長須崎剛氏、同班長藤井賢一氏を始め同課の諸氏には、敷地内ということで諸般の便宜に預かり、ご支援を頂いた。また、造成土削除や保安・電気施設・管理施設等の設営にあたっては大成建設株式会社岡山営業所の方々の多大な助力を頂いた。特に、作業員の方々は、市街地における労働力不足の状況の下に、本調査に先だった岡山市立庄内幼稚園建設に伴う発掘調査に引続き、遠路から通勤のうえご参加下さり、多大なご支援を頂いた。

記して深謝いたす次第である。

調査経過

今回の発掘調査は、国立岡山病院看護婦宿舎建築用地の記録保存が目的であるため、発掘区域を同病院の設定した建築敷地に限って実施した。発掘予定区域すなわち建築敷地は、既存の看護婦宿舎から南に４ｍ離れ、幅6.2ｍ、長さ37.4ｍの東西に長い長方形を呈し、西端が既存宿舎西端に一致する設計であった。しかし、敷地の西端と東端に既存の埋設物等があり、発掘時には未処置であったためにその部分を除外した発掘区の設定となった。発掘は、グリッドを設定して実施し、既存宿舎南面から南３．５ ｍ・西端から東１ｍの地点をグリッドの原点に定め（Ｇｒ０・０）、原点から既存宿舎南面に平行して東西基準線を設け、東西線に直交させて、南北基準線を設けた。発掘区は、幅がグリッド東西基準線（Ｇｒ，　Ｓ０ｍライン）から南０.５ｍ（Ｇｒ，Ｓ0.5　ｍライン）～　6.7ｍの間、長さがグリット南北基準線（Ｇｒ,Ｅ０ｍライン）から東０ｍ～33ｍの間であり、長さ（東西）を０ｍ～９ｍ、９ｍ～18ｍ、18ｍ～27ｍ、27ｍ～

33mの4区に分け、原点（西）からA・B・C・Dの各区とした。従って、発掘区内に使用しているグリット線は、Gr.EラインとGr.Sラインだけである。グリッドの北方位は、磁北から6度東偏である。

1979年（昭和54）	10月6日	設営　グリッド設定
	9日	発掘開始（B区より）
	11日	B区で土器溜検出
	16日	B区下層追求
	20日	D区設定・掘り下げ
	23日	B区実測・D区写真撮影
	25日	B区写真撮影・D区実測
	26日	C区設定　掘り下げ
	11月2日	C区遺構追求
	6日	B・C区間土器溜追求
	9日	C区写真撮影
	12日	C区実測
	13日	A区設定・掘り下げ
	17日	A区上層遺構追求
	24日	A区上層遺構実測
	26日	A区下層遺構追求
	30日	岡山市文化財保護審議会来訪
	12月3日	A区下層遺構実測
	7日	発掘作業終了
	13日	稲田孝司文部技官来訪
	15日	撤去

ここに、延51日に及ぶ発掘調査の現地作業は終了した。

なお、期間中の10月18日には季節外れの台風による大雨を蒙り、11月下旬には霖雨のため現場が再々水没し、排水作業に予想外の手間をとられた。

調査成果

発掘調査の結果、弥生時代中期を中心期にした柱穴群・焼土穴・ピット・土器溜り、古墳時代初期に推定できる住居址・溝・柱穴等の遺構と、弥生時代前期の甕、中期前葉から中葉にかけての壺・甕・高坏及び各々の破片・所謂甑片・ 鉢等の破片・蓋・古墳時代の小型壺・甕・坩等の土器類、石庖丁・石斧・石鏃・石槍・刃器・砥石等の石器類が検出された。

しかし、発掘区域内だけでも、３ｍ×４ｍ～５ｍ×５ｍ程の単位で包含層（黒褐色有機質微砂・粘土層）を意図して露天掘りで採取した跡が８ケ所も確認され、発掘地点一帯の遺跡が採土掘削坑で著るしく侵蝕されていることも判明した。この採土は、包含層下数10cmにまで達し、埋立土層中から種ケ島銃弾が出土し、江戸時代から明治時代初頭に包含層土壌の特性（有機質微砂・粘土層は堅緻性及び対水性に富む）が当時の民家のタタキ土間の造成土や土手の刃鋼土に活用されたものであろう。また、層序の確認から、弥生時代中期前葉の包含層上部は、古墳時代初期以前に削平され、その後に古墳時代前期の包含層が形成され、この包含層も、この付近一帯が水田化された時期（中世末か？）に、地下げ削平されていたことが判明した。

発掘地点の遺跡は、前記の過去２回に及ぶ地下げ削平と、近世の採土侵蝕により、必ずしも良好な遺存状態になく、検出した各遺構が的確に再構成できる状態に恵まれなかった。とはいえ、Ｂ・Ｃ区間の窪地土器溜りは、埋没状態からみて、中期前葉のプライマリーな一括投棄と判断でき、この時期の編年検討に生きた資料を提示するものである。

報告書の作成

上記の経緯と、岡山県教育委員会文化課・岡山市教育委員会文化課・国立岡山病院の３者の合意に則り、昭和55年度事業として発掘調査報告書の作成がなされ、発掘調査と同様な体制と経費の措置がとられた。1980年（昭和55）12月15日付けで、岡山県と岡山市遺跡調査団との間で報告書作成に関する委託契約が締結され、そのもとに実施された。作成にあたっては、岡山市教育委員会文化課の指導・監督と全面的支援の下に遂行された。

報告書作成にあたり、上記の発掘調査組織の内で異動のあった人員についてのみ記すと下記のとおりである。

発掘調査指導監督者　岡山市教育委員会文化課
文化課長　植田心壮　転出
文化課長　熊代久治　新任

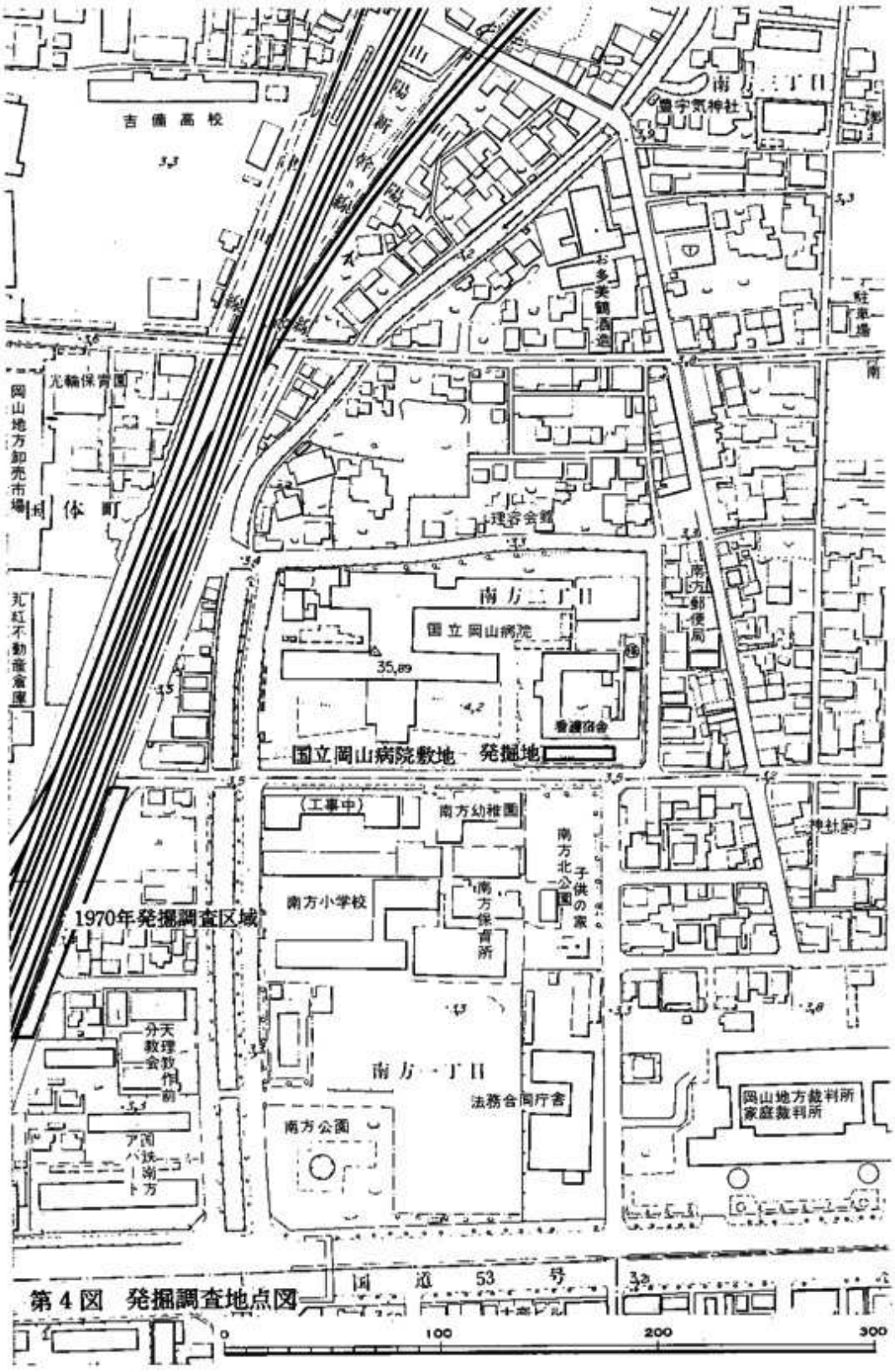
発掘調査担当者　植田心壮（岡山市教育委員会文化課長）転出
熊代久治（岡山市教育委員会文化課長）新任
神谷正義（岡山市教育委員会文化課―所属異動）
熊代智恵子（岡山市教育委員会文化課主事）退職
安部喜恵（岡山市教育委員会文化課主事）着任

岡崎順子（岡山市遺跡調査団員）新任
河本ひとみ（岡山市遺跡調査団員）転出

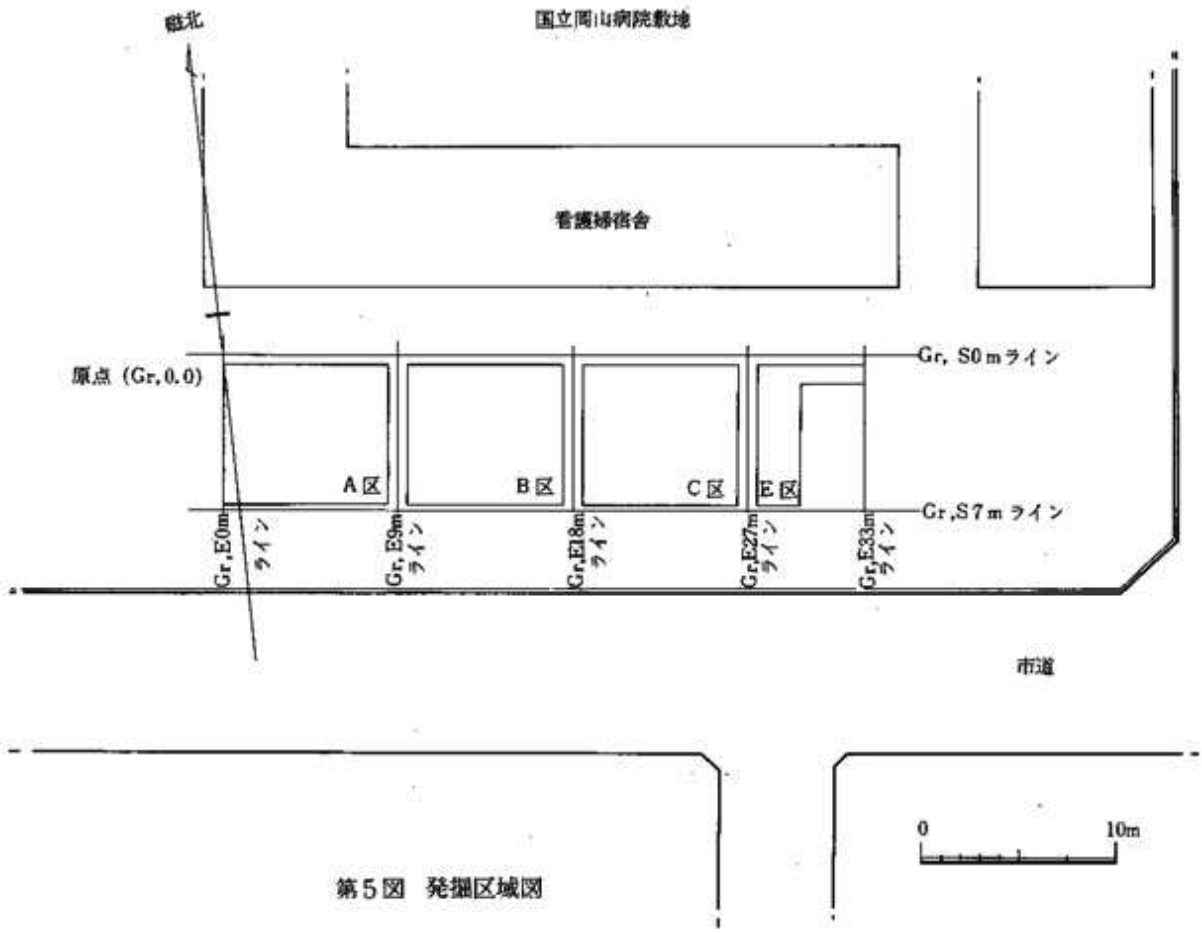
発掘調査補助員　丸尾七重

報告書の作成にあたっては、岡崎順子氏を中心に補助員２名をもって遺物の洗浄・接合がなされ、遺物の実測は岡崎順子氏を中心に進められた。遺物実測図の浄写は、一部近藤真佐子氏の助勢を得た。報告書作成に際し、ご助勢・ご支援下さった諸氏に深謝する次第である。

（出宮徳尚）


吉備高校
南方二丁目
豊宇気神社
お多美鶴酒造
駐車場
光輪保育園
岡山地方卸売市場
体育館
理容会館
南方郵便局
南方二丁目
国立岡山病院
35.89
看護宿舎
国立岡山病院敷地 発掘地
(工事中)
南方幼稚園
南方北公園
子供の家
南方小学校
南方保育所
1970年発掘調査区域
天理教分教会前
南方一丁目
法務合同庁舎
南方公園
岡山地方裁判所
家庭裁判所
国道53号
0
100
200
300

第4図 発掘調査地点図


磁北
国立岡山病院敷地
看護婦宿舎
原点（Gr.0.0）
Gr. S0mライン
A区
B区
C区
E区
Gr.S7mライン
Gr.E0mライン
Gr.E9mライン
Gr.E18mライン
Gr.E27mライン
Gr.E33mライン
市道
0
10m

第5図　発掘区域図

第 3 章　　遺　　構

国立岡山病院看護婦宿舎建築用地の記録保存のための発掘調査は、第２章の調査経過の項に詳述しているグリッドを設定し，発掘区域をＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４区に分けて実施した。発掘区域は、弥生時代中期前葉の包含層（Ｅ２層）が古墳時代初期以前に上半部を地下げ削平され、その後に形成された古墳時代前期の包含層（Ｅ１層）が、中世末頃に一帯の水田化に伴う地下げ削平をされており、都合２回の地下げ削平を蒙っていることが判明した。また、発掘区域一帯が江戸時代の採土のため不規則に掘削されており、発掘調査で検出できた各遺構は、必ずしも的確且つ容易に再構成できる遺存状態に恵まれるものではなかった。以下、設定した区ごとに遺構の検出状態と知見・さらに所見を記述しておきたい。

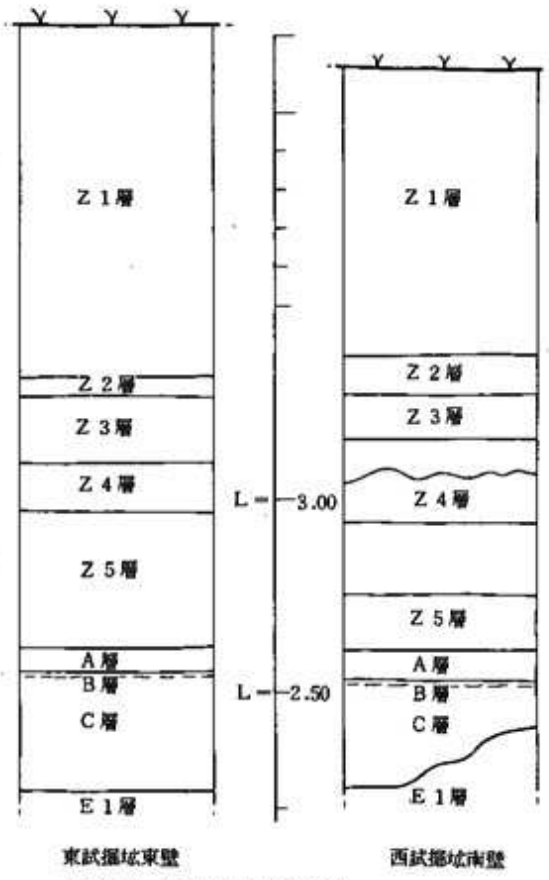
なお、第２章の調査に至る経過の項で述べている事前の「確認調査」において判明した当該地の包含層上の土壌構成と、今回の発掘調査で確認した包含層以下の土壌構成を成合すると次のとおりである。

Z_1層－造成盛土層：病院建設
Z_2層－山土による造成整地層：元岡山県立工業高校時か
Z_3層－黄灰色粘土層：掘削排土（粘土塊）による埋立造成土層－校地造成か？
Z_4層－灰黄褐色粘土層：洪水後の整地層
Z_5層－灰黄茶色微砂・細砂・粘土層：洪水氾濫堆積層
Ａ 層－灰色微砂・粘土層：旧水田耕土層（安定）
Ｂ 層－黄茶色微砂・粘土層：Ａ層の鋤床層で酸化鉄凝結
Ｃ 層－淡黄茶灰色微砂・粘土層：元水田層―洪水堆積による水田面の上昇が認められる
Ｄ 層－淡黄灰褐色微砂・粘土層（Ｃ・Ｅ１混層）
Ｅ 層－黒褐 （赤茶）色有機質微砂・粘土層：Ｅ１層中の酸化マンガン凝結層
E1層－黒褐色有機質微砂・粘土層：古墳時代前期の包含層
E2層－黒褐灰色有機質微砂・粘土質：弥生時代中期前葉の包含層
Fe層－黄茶褐色細砂・粘土層：Ｆ層にE2 層の浸透
Ｆ 層－黄茶色細砂・粘土層：基盤層

Ｚ５層は、各区壁面において、洪水奔流状態を示すブロック的な細砂・中砂の一括堆積が確認でき、1892年（明治25）の岡山大洪水時の堆積層と判断される。従って、その下のＡ層は、

それまで使用されていた水田層、明治初期以前のものであろう。C層は、採土掘削坑の掘り方肩部がいずれもB層に削平切断状態にあることやA・B層の形成状態から、A層形成時に上部を地下げ削平されていると判断される。E1層（E1aを含む）は、上面がほぼ水平に削られており、付近を水田化した時の地下げを蒙っていると判断され、削平時期は、前述の採土掘削坑がC層を切り込んでいることからみて、江戸時代以前・中世後半頃と推測される。E2層は、上面が水平に削られており、各区壁断面で、E1層からのピットや、上部のE1層に切断された柱穴のピットが随所に検出され、本来もっと厚かった上に、別の包含層も形成されていた可能性もある。E2層の削平は、E1層形成直前、つまり古墳時代初期より前と判断される。

各区での遺構検出状況は、E1a層を削除した段階で一部ピットの所在が識別できたが、明確な輪郭線や面的拡張として把握できたのが、E1層を削除してE2層上面に至って、E1層とE2層形成後のピットが一面的に識別でき、掌握された。E2層に伴う遺構は、一部がE2層中でも識別できたが、明確な識別がE2層削除後の基盤層上面においての検出であった。



第6図　試掘坑土壌柱状図

なお、基盤層は約1m掘り下げてみたが、同一の自然堆積層が続いており、生活面を形成するには良好な安定した微高地であり、この層上部窪地での弥生時代前期後半の土器の流入からみても前期以前の生きた包含層がこの層の下に、まだ所在しているとは考えられない。

1. A区（Gr. E 0～9m・S 0.5～6.7m）

(1) E1層共伴

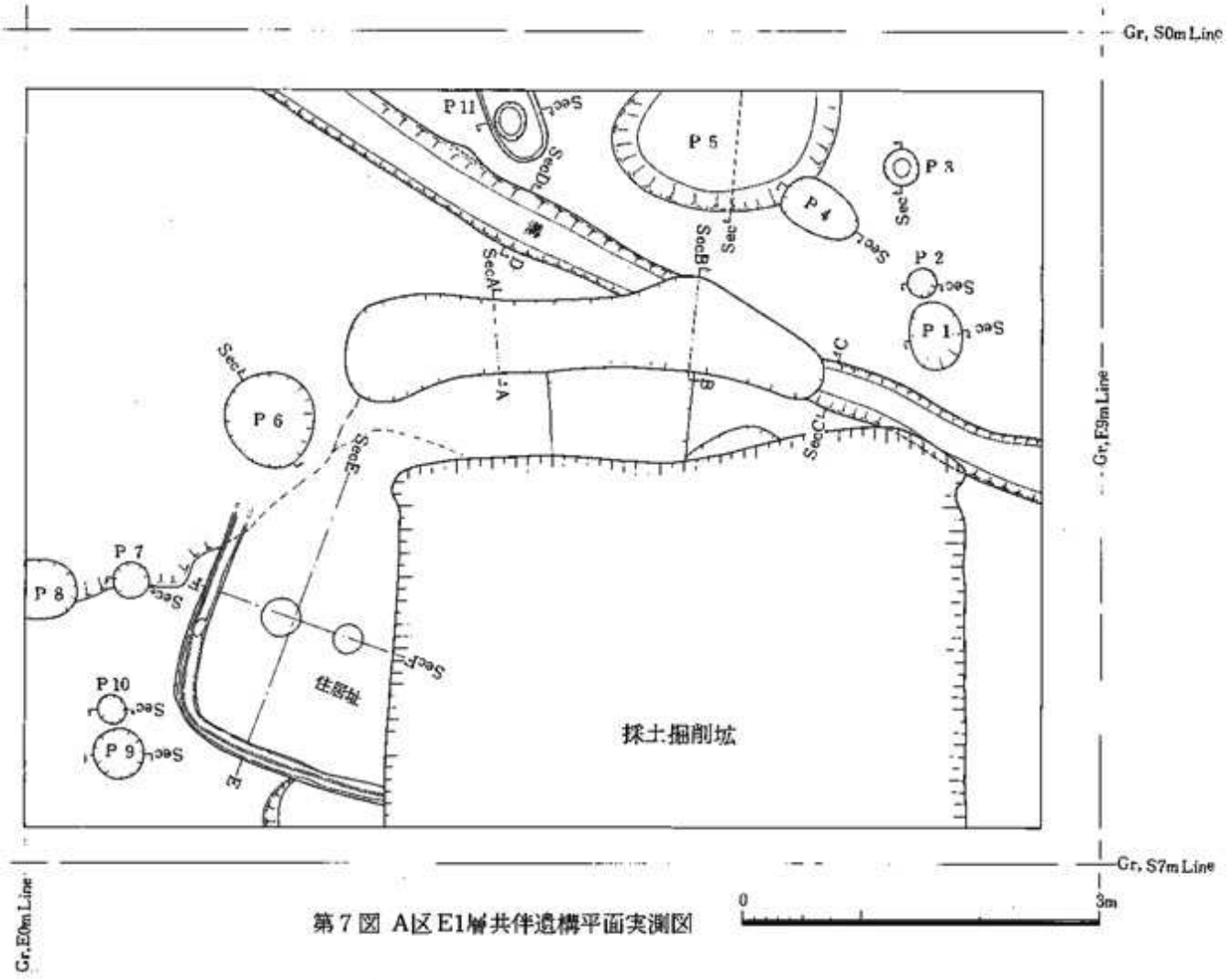
E1層を削平してE2層上面を露出させた状態で、E1層に伴う柱穴状ピット9、不明ピット2、住居址（一部分）1、溝1、不整形土坑底部1等の遺構、及びこの区の南東部で採土掘削坑跡を検出した。採土掘削坑は、グリッド方位にほぼ沿う形状の方形プランで、東西4.9m、南北（南壁以北）約3.2mを計り、この区に南北の半分がかかった状態にあり、層位的にはC層を切断しており、B層が上面に乗っている。その断面観察から、C層を掘削して施こされているが、掘り方の肩部位置（面）が、C層共々上部を地下げ削平されて不明である。この種の坑は、各々の坑において、埋土状態が一時に埋め立てられた均一性と同様な土質を示し、埋土中から染付片や種ケ島銃弾が出土し、C層上部からの掘方を勘案すると、江戸時代後半から明治時代初年に掘られたと推測される。

〔住居址〕

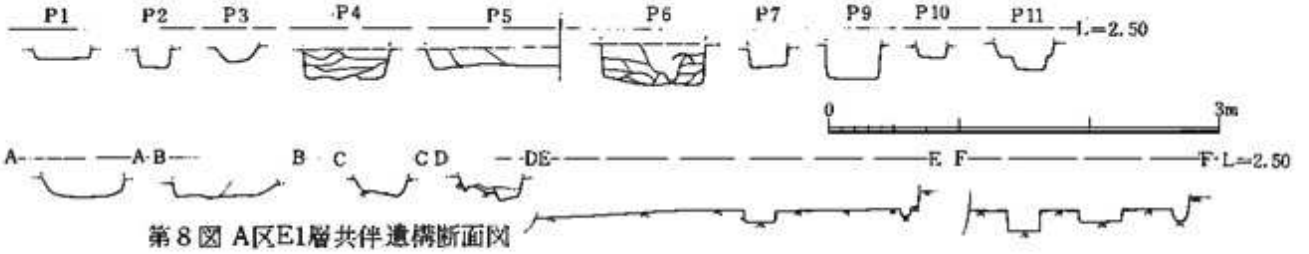
この区の南西で隅丸方形の住居址が検出されたが、この住居址は、東半を採土掘削坑で切断されており、北半がE1層形成時（古墳時代前半）中の不整形な侵蝕地状の窪地によって著しい破損を蒙っていた。遺存状態は、南西角部を中心にして南辺が約2m、西辺が約1.6m検証でき、結果として住居址全体の¼弱の南西部分が確認できたに留った。住居址は、外郭壁面直内部分に幅8～10cm、床面からの深さ7～9cmの壁帯溝が巡っており、芯が南壁から1.26m、西壁から1.27mの位置にあって径26cmを測る柱穴も確認できた。しかし、この柱穴は、位置的には住居址の柱位置に適合するが、床面からの深さが18cmと浅く、竪穴式住居址の柱穴の深さに欠ける嫌いもある。なお、柱穴の掘り方は、柱穴付近一帯の床面がピットを伴うE2層上に造成されているため、識別が困難であった。

床面の状態は、南壁近くが基盤層の高いこともあって基盤層削り出しとなっているが、内部の大半が下層のE2層堆積位置を占めているために、張床に見立てる程ではないが、一面に基盤層土壌の荒く薄い、まだら状の散布が認められた。床面の張り替えや壁部の拡張改造は認められなかった。床面の高度はL＝2.22mである。

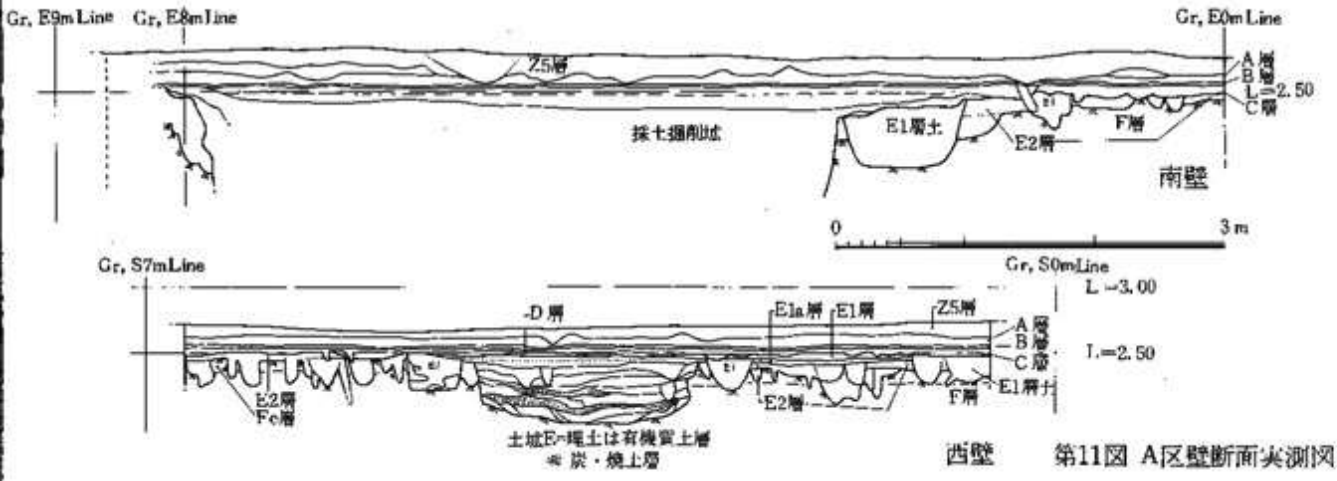
壁部は、遺存部分付近の基盤層が高く、E1層が削平によってほとんど遺存しておらず、E1層上面対応高度面として遺構の識別ができたのがL＝2.35m付近であったため、約13cm程の



第7図 A区E1層共伴遺構平面実測図



第8図 A区E1層共伴遺構断面図



第11図 A区壁断面実測図

高さが確認できたに留まり、上部がすでに削平されて不明にあった。以上の他には、住居址の遺構は検出できる状態にはなかった。

この住居址の時期は、共伴遺物がないため判然としないが、北半の侵蝕部分埋土の包含層を切って掘られているピット９の埋土中から、王泊６層式土器が検出されていることから見て、それ以前ということになる。隅丸方形の平面的形状の特徴及び、埋土包含層の形成状態と土壌構成からみて、ピット９とあまり時間を隔てない前、つまり古墳時代初頭と推定される。

溝

A区の北東寄りに、グリッド方位に対して西南西↔東南東にほぼ直線的に延びる溝の底部が検出された。この溝は、E２層上面で幅が40～50cm、深さが10～13cm（底部L＝2.27～2.24m）であり、E１層で埋まっており、この続きがほぼ同じ方向でB区南西部で検出されている。B区における底面高度値がL＝2.24mであり、A・B区間ではほぼ水平な底面高度を示し、流路の方向が定かでない。全体の状態からみて、深いU字溝の底部だけの遺存と推定できる。時期は、埋土上壌及び、溝を切断する不整形土坑に土師器片が伴っていること等からみて、古墳時代初期に推定される。

なお、溝の方向と住居址の方位性は、大局的には一致している。

不整形土坑

この区の中央北寄りで、長さ４m、幅0.5～0.7mのグリッド方位の東西に長い土坑（舟形土坑を引き伸した形状）が検出されている。この土坑はE２層上面からの深さが10～12cm（L＝2.20m）で、底部付近だけの遺存と判断され、埋土が王泊６層式土器等の土師器片を比較的多く含むE1層上壌である。

ピット５

A区北東部で検出された東西に長い楕円（卵形に近い）形の土坑で、½弱が発掘区域北側に出ている。このピットは、長径1.95m、短径（推定）1.30mの規模で、E２層上面からの深さが約18cmの底面の平らな浅い掘方でE１層土壌が埋っている。時期はE１層に伴う以外不明である。

ピット６

住居址を侵蝕している窪地の埋土に掘られた若干歪んだ円形ピットで、ほぼ垂直な壁と水平な底面の掘り方にあり、埋土中から王泊６層式の甕形土器片を検出した。このピットは、柱穴

にしては大きすぎ、用途が不明である。

その他のピット

ピットの1・2・3・4・7・8・9・10・11は、形状からみて柱穴もしくは柱穴の掘り方穴と判断されるが、E 2層上面からの深さが7～26cmであり、E 1層の厚さ12cmを加えても19～38cmと浅く、底面の高度から逆算すると、掘り方上面がE 1層上面からまだ上部にあったことを推測させる。ピット11は、柱根痕跡と掘り方穴を良好に残している。これらの柱穴を組合せて住居址の柱間組み合せを想定することは困難であった。

なお、A区の西半中央寄りに不整形な侵蝕地状窪地があり、これによってGr, S4.7m付近から北が侵蝕されており、住居址の北半も破損を蒙っていた。窪地の北側は、埋土がE 2層と漸移的であり、判然としなかった。

(2) E 2層共伴

E 2層を削除し基盤層を露出した状態で、E 2層に伴う柱穴・土坑・窪地・溝等の多数の遺構を検出したが、大半がE 2層上部の削平と相俟って底部近くを確認できる遺存状態にしかなかった。これらの遺構の年代は、E 2層形成時かそれ以後、E 1層形成前の削平時以前としか判断のしようがない。以下代表的な遺構について説明を記しておきたい。

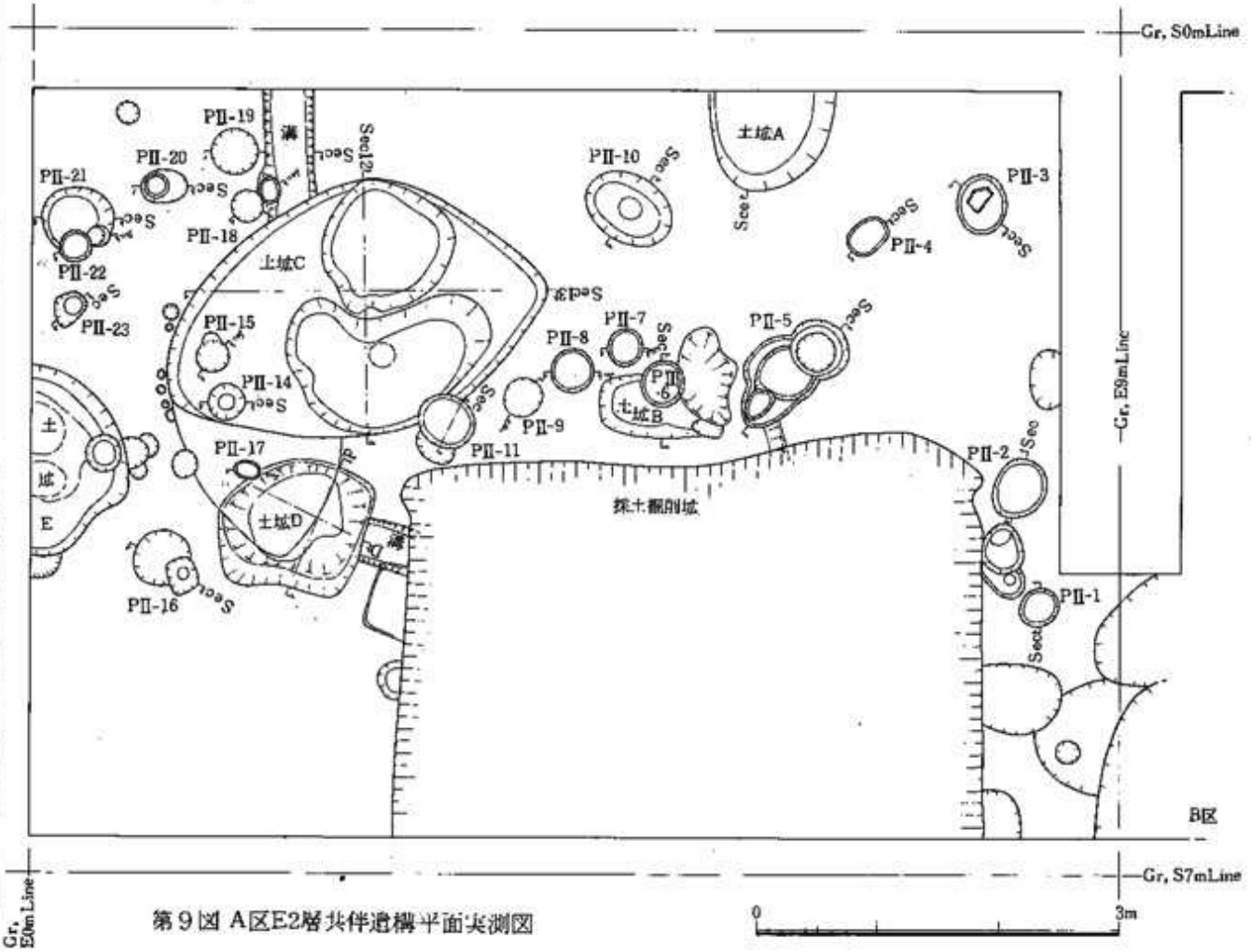
土 坑 A

Gr, E 6m ラインの北辺で検出された南北に長い楕円形を呈し、短径105cm、長径（推定）180cm、F層上面からの深さ33cm（L＝1.96m）を計るが、その南半分だけが発掘区にかかっていた。掘り方は、西が垂直に近く、東から南側が少しの斜面をもち、底面が若干の凹凸もあるが、比較的平らになっている。埋土中にブロック状の焼土・炭を含む層や、混炭土層が認められる。時期・用途は、不明である。

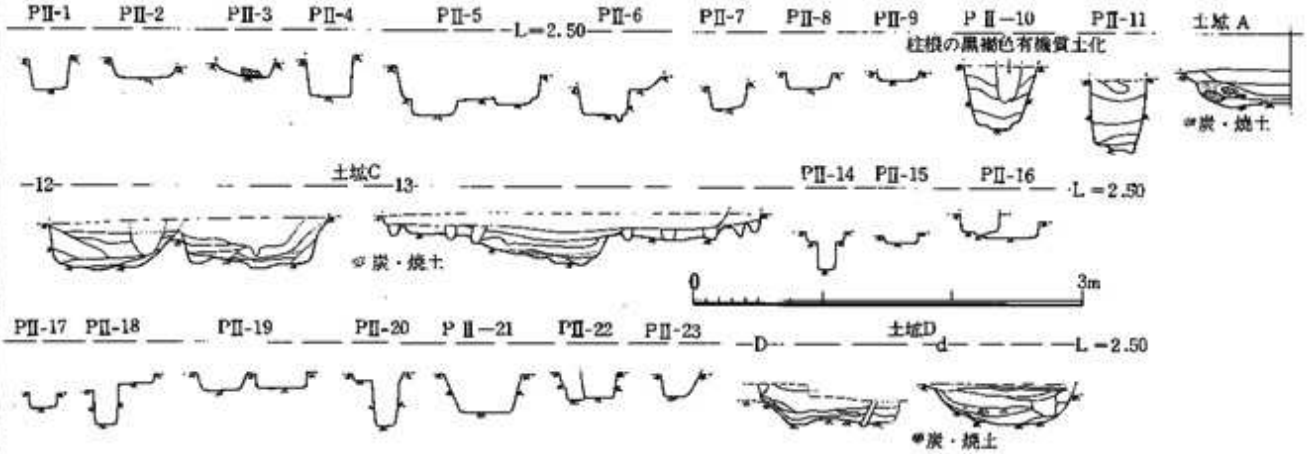
土 坑 B

Gr, E 5m・S 3m付近で検出された東西に長い隅丸長方形状の土坑で、長さ90＋Xcm・幅43cm・F層上面からの深さ10cmを計り、浅いU字状を呈すが、後世の柱穴で破損されており、全貌が不明である。時期も不明である。

土 坑 C



第9図 A区E2層共伴遺構平面実測図



第10図 A区E2層共伴遺構断面図

Gr, E 1～4m・S 1. 2～3. 4mで検出された菱形を丸くした平面を呈す土坑で、輪郭が整然とした湾曲線をなしていた。この土坑は対角線位置の径が（東北東一西南西）325cmと（北一南）212cmあり、F層上面からの深さが10～16cmの浅い外郭土坑の内に、南北対角線を中心にして北に若干歪つな円形ピット、南に細長くて屈曲した不整形ピットが並ぶ、2段掘り土坑の状態を示している。内側の歪つな円形ピットは、径110cm・F層上面からの深さ36～40cmであり、不整形ピットは、長径170cm・短径95cm、F層上面からの深さ40cmを計り、この内部2ピットは、外郭土坑内に二つのピットを無理に納め込んだ状態を呈している。内部北ピットには、埋土中に底面から少し上部に面的な炭・焼土層が含まれていたが、南ピットの埋土には焼土・炭の間層が認められなかった。この二重段掘り土坑も、土器の共伴に恵まれず、時期が不明であり、用途も判然としない。

なお、この土坑の南西部に三角状の拡張が認められたが、判然としない。

土 坑 D

Gr, E2m・S 4m付近で、五角形を隅丸にして歪ませた形状の平面形を呈す土坑が検出され、この土坑は、長径120cm・短径110cm、F層上面からの深さ30cmを計り、壁から底部が湾曲状を呈している。埋土中の底面から5cm程上部に、2～5cmの厚さの炭・灰・焼土の湾曲した落込み状を呈す間層が確認されたが、共伴土器・機能を明確に示す埋土状態の観察に恵まれず、時期・用途ともに判然としない。

土 坑 E

Gr, S2. 8～4. 4mにかけてA区西壁以西に大半が残った状態で、円形がかった不整形土坑が検出された。この土坑は、南北170cm、E2層上面からの深さ45cmを測り、壁面がシャープに掘られ、底面が若干の凹凸を残しながら緩やかな湾曲を呈し、埋土中に底面から10cm程置いて厚さ0～10cmのレンズ状の有機質土を含む焼土・炭層と、その上にも間層を隔てた焼土・炭層が認められた。共伴土器がないため時期は判然としないが、焼土・炭の間層状態からみて、何らかの「火所」か「火を扱う作業」に関与した土坑と推定できるが、明確な機能を判別できる状態にはなかった。

溝

Gr, E2mライン上で、グリッドの南北方向に沿う形状の、幅40cm・F層上面からの深さ10cmのU字溝底部が検出された。この溝は、A区北壁からGr, S1. 5mライン付近までは遺存しており、それより南が土坑C・土坑Dによって切断されて不明であるが、土坑Dと採土掘削坑の

間（約30cm）の住居址床面下に検出された幅40cm・深さ10cm弱でグリッド方位の東南東一西北西の方向を示す溝に続く可能性が大きい。しかし、極めて断片的であり、且つ上部を削平されているため用途が不明であり、時期も判然としないが、切り合関係からみて、古い遺構と判断される。

柱　穴

A区で柱穴（一部杭穴をも含む）は、プランで45、壁面で10の計55穴が検出された。これらの柱穴の内、掘り方と柱根痕跡の識別できたものは8（プラン6、壁面2）、石の礎盤を伴ったもの1、立て替えの想定できる掘り方と柱穴の切り合いの纏まった穴群3ケ所であった。

プランで検出した柱穴で、配置状態と柱穴深が一致し、四角形の柱間組合せに纏められるものはなく、ピットⅡ－10、同11、同18は、深さもほぼ一致し、芯芯間2.35mで直角の配列をなし、この3柱穴が竪穴式住居址の柱間（もう1穴は、北側発掘区域外）を構成していると判断される。また、掘り方・柱根痕跡・深さから、ピットⅡ－14と同20は、同一住居址の柱間と判断され、東側でこれに対応する柱穴が所在していないので、西の未掘部に対応する柱穴が所在していると推測できる。

なお、柱穴底面の高度値は、著しく高低差があるが、L＝2.20m前後、L＝2.10m前後、L＝2.00m前後の三段階に分類できる傾向にある。これをもって柱穴を設けた生活面が3回あったとするのは即断であるが、少なくとも削平されたE2層上部に複数期の遺跡形成の周期のああったことは窺い知ることができよう。

いづれにしても、E2層に伴う柱穴は、埋土中に時期を判定できる状態での土器片の出土が認められず、小数に埋土流入状態で細片が認められたに過ぎなかった。

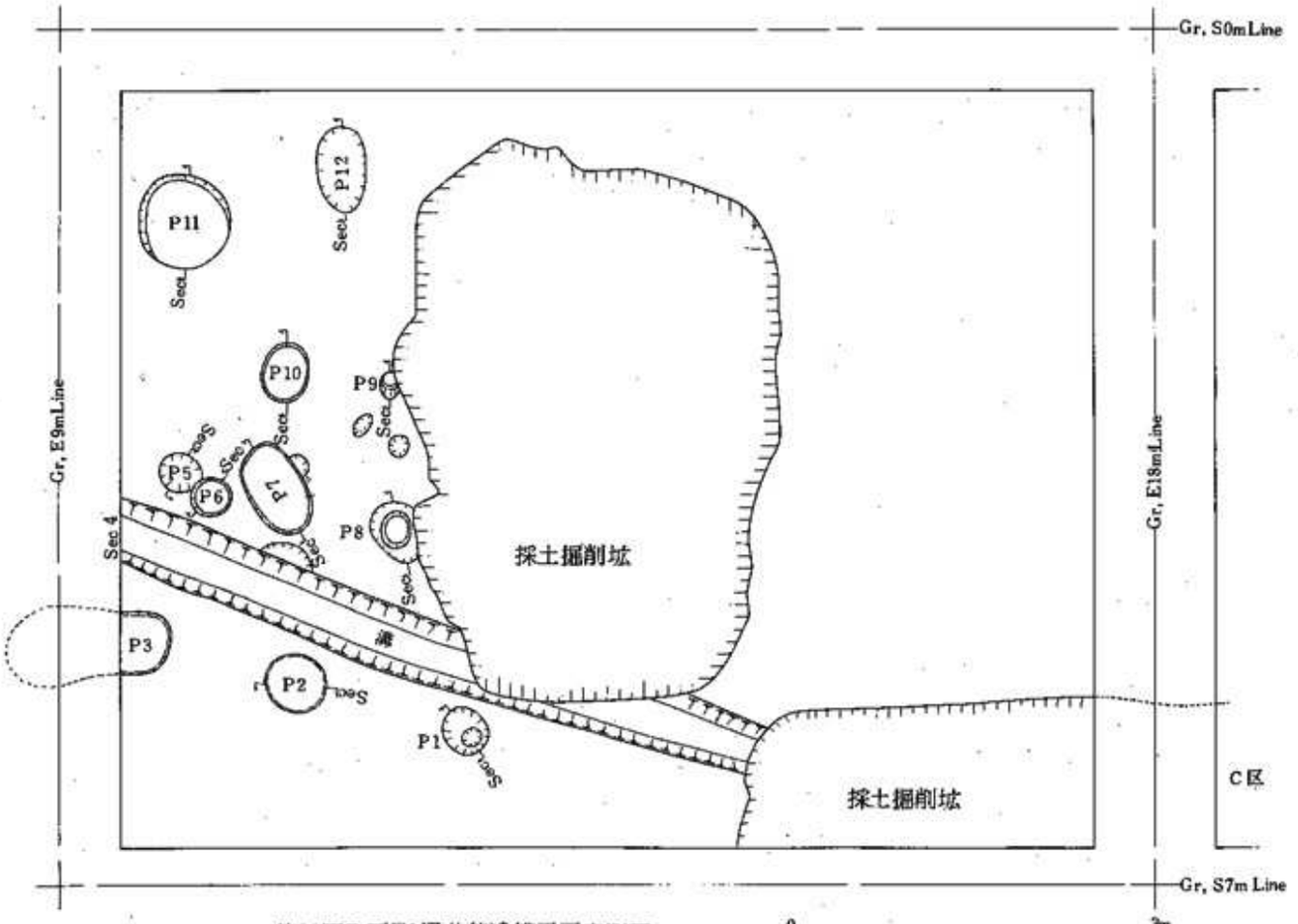
その他

以上の遺構の他に、小型不定形ピットの底部が検出されているが、判断が不可能であった。

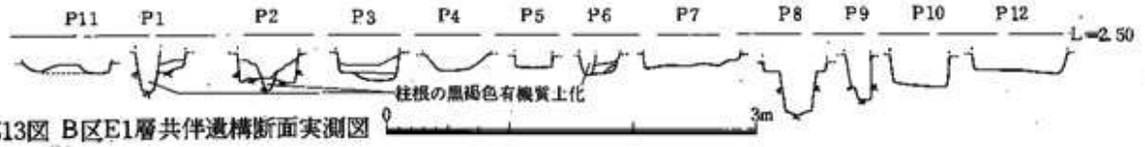
2．B区（Gr，E 9～18m・S0.5～6.7m）

(1)、E1層共伴

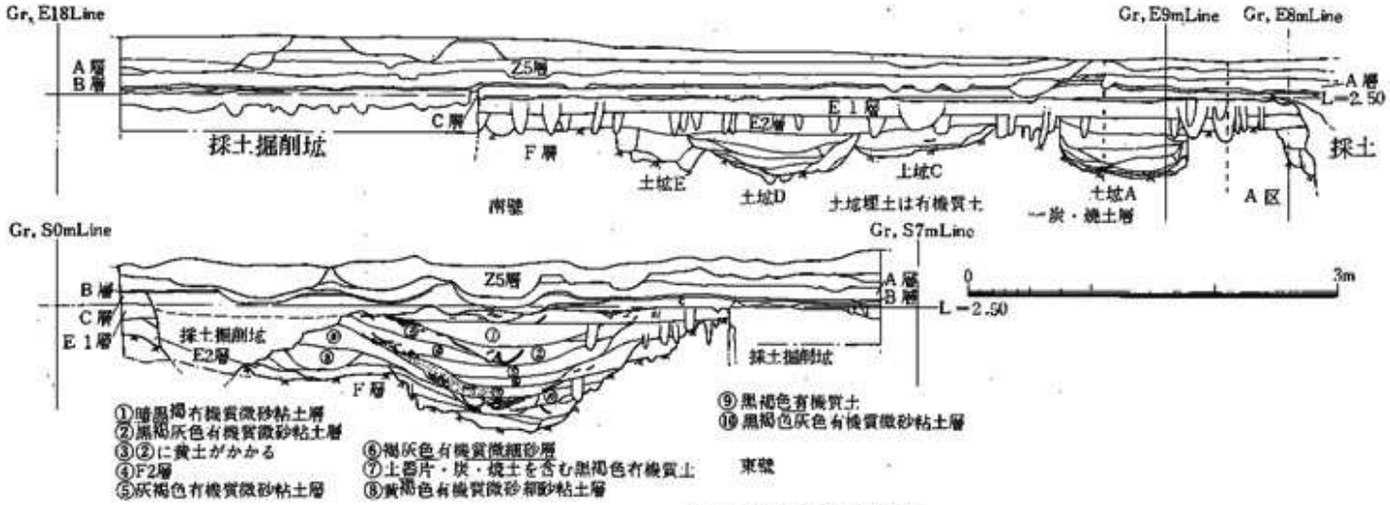
E1層を削平し、E2層上面を露出させた状態で、E1層に伴う柱穴状ピット13、溝1、及び中央と南西角で採土掘削坑跡を検出した。中央部の採土掘削坑は、グリッド方位に沿って南北に長い隅丸不整形な長方形状のプランを呈し、長辺4.5m・短辺3mを計る。南東角の採土掘削坑は、グリッド方位にほぼ沿う隅丸方形状のプランを呈し、発掘区にその北部がかかったもので、東西が4.6mで、南壁からが1.2mであった。



第12図B区E1層共伴遺構平面実測図



第13図 B区E1層共伴遺構断面実測図



第16図 B区壁面実測図

溝

B区の南部で、グリッド方位に対して西北西一東南東の方向に直線的に延びるU字溝の底部が検出された。この溝は、幅35～45cm、E2層上面からの深さ10～12cm（L＝2.22～2.24m）を計り、A区で検出された溝の延長部分であるが、南東部分が採上掘削坑によって切断されていた。

柱穴状ピット

これらのピットの内、掘り方と柱根痕跡の組合いによって柱穴とされるのが、ピット1・2・6・8・9であり、形状・深さから柱穴と判断されるのがピット3・5・10・ピット8と9の間のピット（番号なし）である。ピット7・12・14は遺存状態が浅く、柱穴掘り方なのか、他の小型土坑の底部なのか、判然としない。上記の柱穴と識別したものの内、住居址の柱間の組合せに纏めれるものはなかった。

なお、B区の東半分は、西半でE2層を露出させたレベルで、E1層土の広い陥没状態が認められ、この土層内でのピットの検出が困難であり、若干削平すると大型土器片の集中的出土が認められた。

(2)、E2層共伴

E2層を削平し基盤層上面を現わした状態で、E2層に伴う柱穴・土坑・窪地土器溜り等の多数の遺構を検出したが、いずれも下半部の確認に留まった。これらの遺構の年代は、土器溜りを除くと、A区のE2層共伴遺構で述べた通り比定しがたい状況にあった。B区の全体における遺構の形成状況は、北東部の3程度が大型土器片の多量の投棄・埋立て（所謂土器溜り）を伴う自然窪地であり、残り3程度が安定した微高地として柱穴・土坑が残されている。この窪地は、Gr, E13m・S0.5m地点と　Gr, E15m・S6m地点を結ぶ線を西の端にし、後者の地点とGr, E18.5m・S5.2m地点を結ぶ線を南の端に、この地点とGr, E16.7m・S0.5m地点付近を結ぶ線を東の端にし、輪郭線の湾曲した歪んだ長方形を呈する自然地形の凹地で、グリッド方位に対し北北西一南南東の方向を示し、北が発掘区外に延びている。

以下、南西部微高地の遺構の概要を記述しておきたい。

土坑　A

B区の南西角で南北に長い長楕円形の土坑が検出され、この土坑は、南半が発掘区域外に残り、短径100cm・E2層上面からの深さ50cmを計り、舟形土坑状の底部を呈している。埋土中の底面直上に炭の平面的広がり（間層）と、中間に炭を多く含む有機質土層（断面落込み）を

伴い、A区の土坑Eと同様な炭（又は焼土）の含有状態にあり、何らかの「火所」に関係する遺構と推定されるが、共伴土器がなく、時期の比定が困難である。

土　坑　B

B区の南西部、土坑Aの北に接する（Aが切っている）東西に長い不均整長楕円の土坑で、長径120cm・短径95cm・F層上面からの深さ30cmを計り、擂鉢状の底部をなしている。この土坑は、埋土の底面上及びその上10cm程の高位に薄い炭の平面散布が認められ（間層）、A区土坑E、B区土坑Bと同様に「火所」に伴う土坑と推定されるが、用途が判然とせず、また共伴土器に欠けていて時期比定も困難である。

土　坑　C

Gr, E11mラインの南壁付近で、南北に長い土坑が検出されたが、南半が発掘区域外に残り、北の輪郭も柱穴や土坑で切断されていて判然としない。この土坑は、F層上面からの深さ30cmを計り、底部が浅いU字状を呈し、埋土中には若干の炭・焼土の含有が認められたが、共伴土器もなく、時期・用途の識別が困難な状況にあった。

土　坑　D

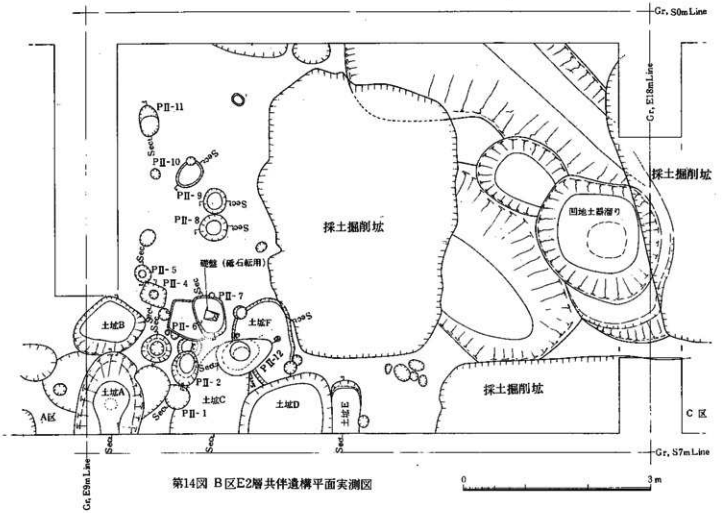
Gr, E12mライン上で南壁に南半を切断された形状の小判形を呈す土坑が検出された。この土坑は、東西140cm・F層上面からの深さ30cmを計り、底面に凹凸の残る浅い皿状の底部をなし、底面直上に薄い炭の平面的散布（間層）が認められ、何らかの「火所」に伴う土坑と推測されるが、共伴遺物に欠け、時期・用途を的確に識別しがたい。

土　坑　E

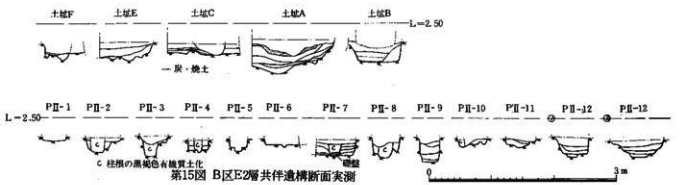
土坑Dの東（Gr, E13mライン付近）で、南部を発掘区域外に残した状態で、南北に長い土坑が検出されている。この土坑は、幅が約60cm程で、F層上面からの深さが30cm程の箱形を呈し、底部に凹凸を残し、埋土が有機質分の多い黒褐色微砂・粘土であった。埋土状態の特徴のなさや共伴遺物に欠けることから、時期・用途の識別が困難であった。

土　坑　F

Gr, E12m・S5m地点付近で、南北に長い不均整長楕円形の土坑が検出されている。この土坑は、長径（復原推定）150cm・短径100cm・F層上面からの深さ20cmを計り、底面に凹凸を残す擂鉢状の底部をなしている。埋土中の底面直上に薄い炭の間層が認められ、「火所」に伴う土



第14図 B区E2層共伴遺構平面実測図



第15図 B区E2層共伴遺構断面実測

坑と推測されるが、共伴遺物に欠け、時期・用途を的確に識別することが困難であった。

柱穴状ピット

B区全体で32の柱穴あるいは柱穴掘り方の穴・さらに杭状小穴が検出されている。この内、石片（礫石）の礎盤を伴うものが1、掘り方と柱根痕跡の組合う柱穴が7、掘り方と規模から柱穴と判断できるものが15、浅くて柱穴掘り方底部か小型土坑底部かが不明のものが、土坑A東の浅いピット、PⅡ－1、同6、同11であり、他が杭状の小穴である。以上の柱穴の内で住居址の柱間を構成する4穴組み合せに纏まるものはなく、L字状に3穴組み合せの纏まりも想定が困難であった。

柱穴底面の高度値は、L＝2.20m・L＝2.10m・L＝2.00m前後と3段階に分類でき、A区の柱穴と同じ状態を示している。

いずれにせよ、B区の柱穴も、時期を示す生きた土器片の共伴に恵まれず、大半が中期前葉から古墳時代初期の前半期の前までの各時期の柱穴が、結果として同一平面で検出されたもので、その判別が困難な検出状態にあった。

東半部窪地（土器溜りを共伴）

前述の範囲を占める窪地は、底部が著しく起伏しており、三つの楕円状凹地と細長いテラス状平坦部から成り立っており、Gr, E16.5～18m・S3～4mの最深凹地が中心的底部をなしている。この窪地は、底部の凹地や、テラス状平坦部、さらに斜面からみて、人為的に一部に手の入った自然地形の窪地と推定される。

窪地の各凹地には、比較的大型土器片が埋棄状態で伴い、窪地全体として土器溜りを形成していた。土器溜りは、前述の最深凹地に一括埋棄の状態が顕著に認められ、これを中心にして西側にやや散漫且ブロック的な拡張を示し、埋棄の過程で順序はあっても、時間的間隔があまりない形成状況にあったと判断される。この土器溜りのGr, E17.5mラインでの断面（最深凹地）観察の結果、土器溜りの形成は、凹地に焼土・灰・炭とともに多量の大型土器片が一括投棄され、凹地の底部から壁部に沿って擂鉢状に埋められた後に、時間的間隔を置かずに中央部の凹地が埋れるに伴って、肩部近くの土器片が中央凹地に転落して二次的な土器堆積を多く含む底に凹んだ間層を形成したものと考えられる。二次的な土器間層には、ほとんど炭・灰の混入が認められていない。特に最深凹地の東側壁面における土器溜りの状態は、底面から上層まで大型土器片が累積状に重なっており、間層を認めて、土器溜りの形成過程を時期的に分離するのが困難であった。従って、この窪地に伴う土器溜りの土器を層位的に分離することは、窪地の埋設過程における順序を埋土堆積状態から判断できても、時間的間隔として分けえる状態にはな

いと判断される。この土器溜りの一括性が、即土器型式の一期性に結びつくものではなく、強いて一期性をいえば、投棄埋立時の一期性だけであり、投棄埋立時に、その時点での破棄する土器とともに、それ以前の散乱していた土器片も纏めて一括投棄された可能性が残り、土器溜り内土器の明らかな型式差は、これに由来すると考えられる。いずれにしても、この土器溜りは、窪地の不用品での埋立てに伴って形成されたものと判断できる堆積層序と土壌構成にあったといえる。

3. C区 (Gr, E 18～27m, S 0.5～6.7m)

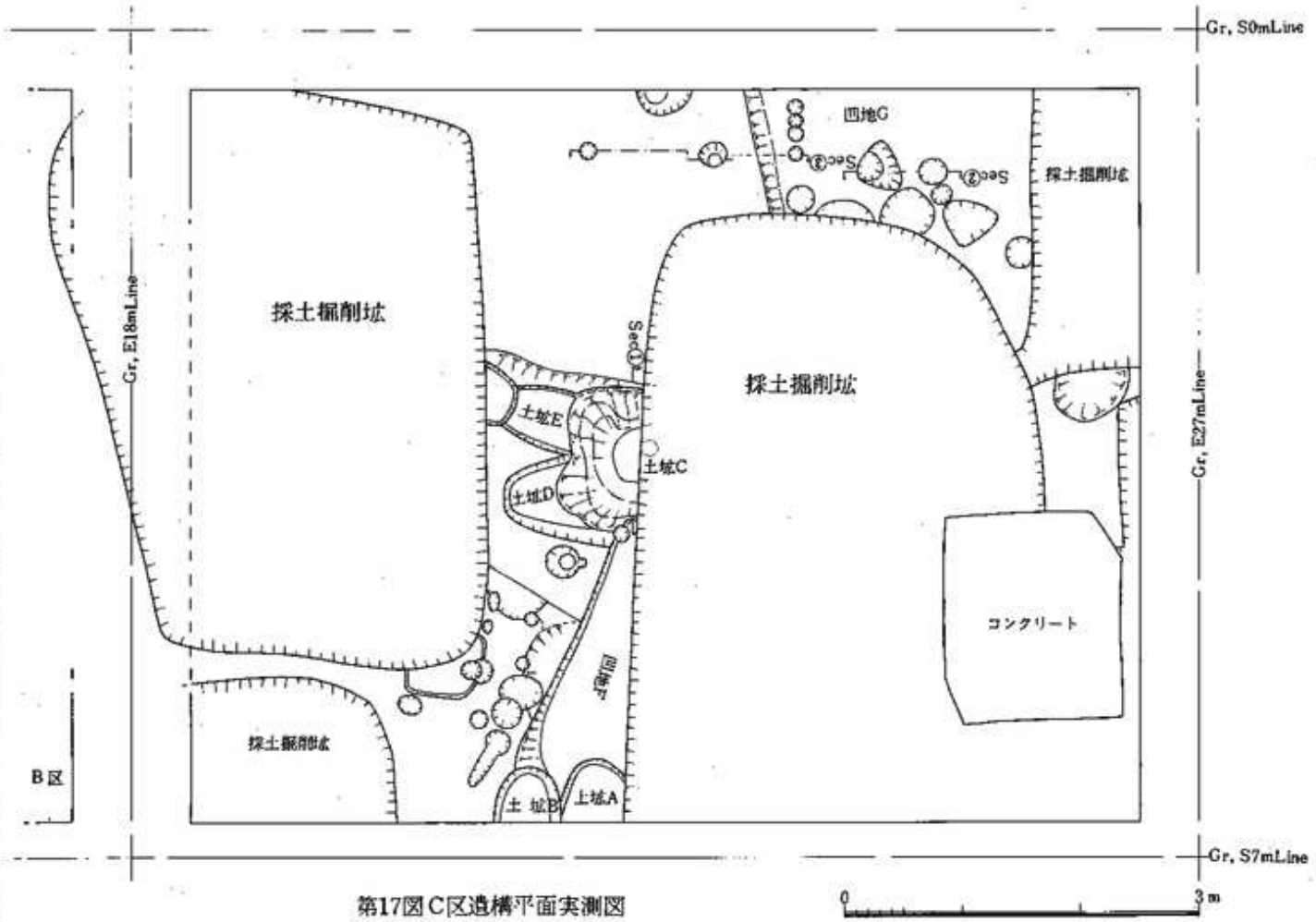
C区は、C層を削平した状態で、採土掘削坑跡によって著しく侵蝕されていることが判明した。西半が、前記のB区南東角の掘削坑とGr, E21mラインを東辺・Gr, S5.3mラインを南辺にしてほぼこの区の北西区域に重なる隅丸長方形状の掘削坑で破損を蒙り、東半がGr, E22.2mラインを西辺に、Gr, S1.6mラインを北辺・Gr, E25.7mラインを東辺とし、南の発掘区域外へ延びている隅丸長方形状の掘削坑と、Gr, E25.6mラインを西辺とし、この区の北東から東へ延びる掘削坑及び前者と切り合ってこの区の南東から東に延びる掘削坑で破損されている。C区全体を見れば、包含層は中央から北東辺部にかけて幅1.3m程の逆「L」字状と東部中央に1m程の小島状に遺存していたに過ぎず、80%強が破損を蒙っていた。このため、この区では、北部の基盤層の高いこともあってE1層削平時での遺構検出が良好でなく、E2層を削平して基盤層を露出させた状態で、一括して遺構の検出にあたった。その結果、土坑6、人為的凹地2、柱穴掘り方を含む柱穴状ピット及び杭跡状ピット28が検出された。以下これらの概要を記述しておきたい。

土坑 A・B・D・E等

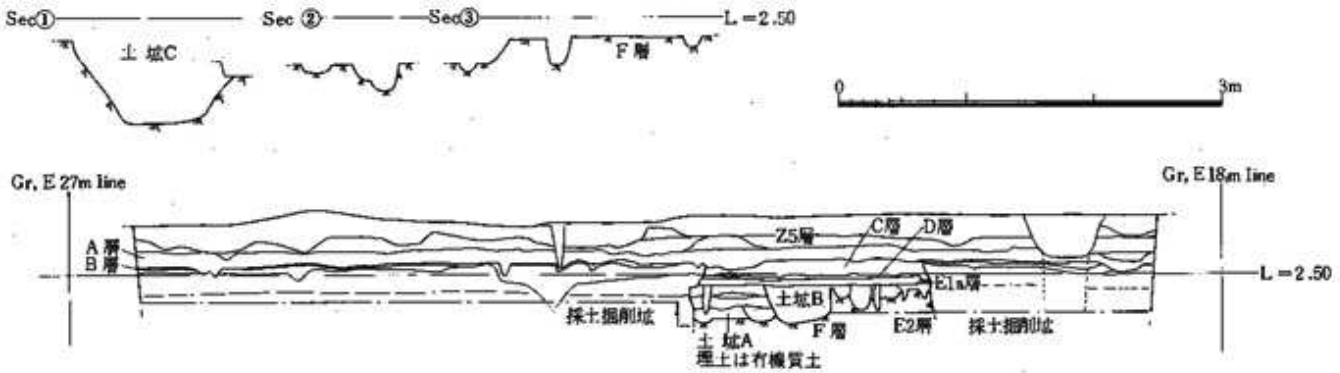
いずれも幅50～60cm・F層上面から深さ10cm強を計り、底面の比較的平らな小判形状のプランであるが、別の土坑で切断されていたり、発掘区内に半分所在する状態であった。全輪郭を検出できたものがなかった。共伴遺物や特徴的な埋土層に欠け、時期・用途の識別が困難であった。

土坑 C

Gr, E22m・S3.6m付近を中心地とする歪つな不整形プランの土坑で、東半を採土掘削坑に切断されて半分だけが遺存している土坑である。この土坑は、径120cm・F層上面からの深さ65cmを計り、底部が擂鉢状を呈し、共伴遺物がなく、特徴的な埋土層に欠け、時期・用途の識別が困難であるが、規模・形状からみて、所謂貯蔵穴の一種の可能性が強いと推測される。



第17図C区遺構平面実測図



第18図 C区遺構及び南壁断面図

凹地　F

この区の中央南寄りで、隅丸方形状の凹地の一辺が検出された。この凹地は、外郭線がシャープで、一辺（推定）2.5mを計り、F層上面からの深さが10cmあり、底面が平坦であって、一見小型住居址の一部に見立てられるが、壁帯溝に欠け、また、底面直上の炭化物や「汚れ」も確認できず、大半が採土掘削坑で切断されており、溝状遺構の一部の可能性もあり、いずれとも識別が困難である。

凹地　G

Gr, E23.2m付近から東に基盤層が10cm程比較的シャープに落ちているが、遺構の段か、基盤層上面の起伏の段か判然としない。

柱穴ピット

28のピットの内、掘り方と柱根痕跡の組み合う柱穴が5、柱穴掘り方状のピットが5、他が柱穴と杭穴に識別されるが、この区の遺構面遺存状態では、各々を住居址の柱間組み合せに検討することが困難であった。またいずれも、時期を示す遺物の共伴に欠け、判定しがたい。

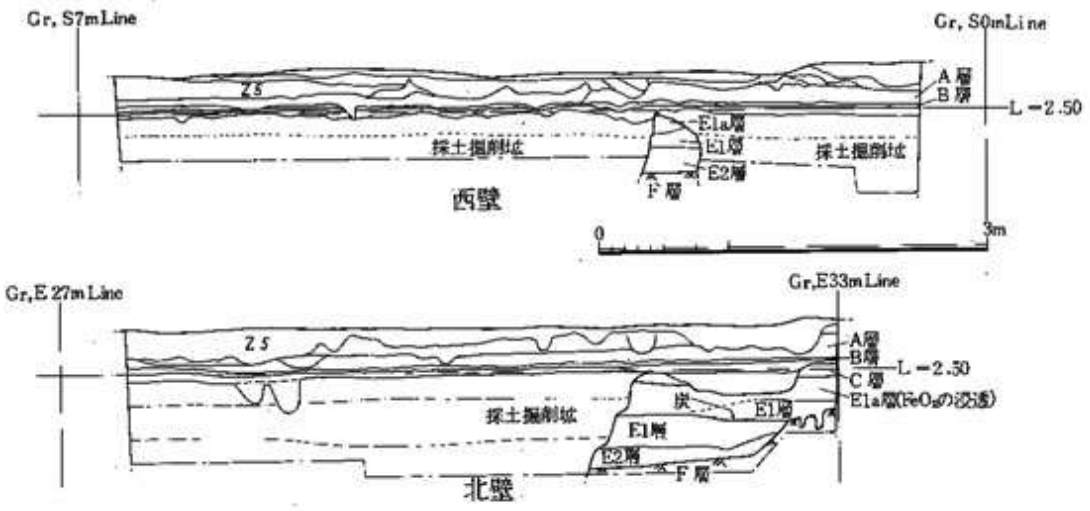
4．D区（Gr,E 27～33m ・ S0.5～6.7m）

D区は、南東部に基礎や配管物の地下埋設物が所在しているため、Gr, E 29.7mライン以東・Gr, S1.5mライン以南の区域の発掘を実施することができず、結果として逆「L」状の不規則な発掘区域となっている。この区は、C層を削除した段階で、採土掘削坑によってほとんど破損されてしまっていることが判明した。包含層は、発掘区内のGr, E31.5mライン以東、Gr, S 2.4～2.6m間がわずかに遺存していたに過ぎず、特に後者は、採土掘削坑間に幅20cmの間隙状に遺存していたもので、遺構の追求のできる状態になかった。この両者遺存部の概要を記述しておきたい。

Gr, S 2.5mライン付近の遺存部分の層序は、E 1層がL＝2.46～2.30mの高度にあり、E 2層がL＝2.52m以上、それ以下が基盤層となり、基盤層上面の低下と各包含層の厚層化を指摘できる。

Gr, E 31.5mライン以東の遺存部は、基盤層がGr, E 32.6m付近から西に斜面をもって約30cm下った窪地をなし、底面直上にE 2層、その上にE 1層が堆積して窪地を埋め、その上にE1a層が厚く重なっている。この窪地が遺構なのか、自然地形の窪地なのかは、遺存部分だけでは判然としない。この区の基盤層上面の高度は、L＝2.20mを示し、発掘区域全体的にみると少し下り、発掘地の基盤層は、ABC区を高位地にして、東に少し下る地形にあったと推測され

第19図 D区平面図



第20図 D区壁断面実測図

る。E1a 層上面は、他のE１層上面と同一高度にあり、一面的削平を蒙っている。またこの付近は酸化鉄の浸透が著しく包含層の色調に他地点と若干差異をもち、Gr,E32.6m以東の基盤層上では、明確にE１・E２層の層序関係を識別しがたかった。

此度の発掘区域における遺構の検出状態は、前述の採土掘削坑による甚だしい破損と、二度にわたる地下げ削平とが相俟って、発掘地点の遺跡の性格・様相・内容等を折出し、再構成をするに足りる遺構・遺物の把握には恵まれなかった。遺構の大半が、上部を削平されて下半部だけの検出であったため、溝や柱穴や住居址は、識別が出来たものの、他のものについては土坑あるいは柱穴状ピットと一括して取扱わざるを得なかった。しかし、発掘地点で、ほぼ普遍性をもって存在していたのが、底面直上に炭・灰・焼土の間層をもつ土坑で、これは炭つまり火を扱う行為にかかわるもので、その頻発性と各々の不統一の形状及び小規模さからみて日常的な「火所」にかかわるものと推定される。この土坑は、層位的には大部分がE２層を切断し、E１層中に上達するものがなく、E１層に上部を切断された状態にあり、形成がE２層でも上部でなされていたと推定される。つまり、E2 層の形成期でも後半、後述のE２層形成期との勘案から中期前葉末以降から中期中葉にかけての形成と考えられる。また、土坑中には、貯蔵穴と判断されるものはあったものの、墓坑の可能性のあるものが含まれていなく、上記の「火所」に伴う以外の土坑も、多分に日常的な土坑であったと推測され、埋葬・祭祀用等特別用途の土坑は、この地区には上記の時期に形成されていなかったと推測される。

さて、包含層の形成時期は、E１層が、この層中及び層中に掘り方肩部の認められたピットや、E1層土壌を埋土とするピットから、王泊６層式甕形土器片や坩等の古式土師器片が多く出土する傾向にあり、一応古墳時代前葉と推定される。E２層は、B区東部の土器溜りを伴う窪地へのE２層の流入の確認から「南方Ⅱ式」の時期 ＝ 中期前葉と判断される。E２層を切り上部をE１層に削られた断面状態のピットが多く確認され、さらにこの層中から「南方Ⅲ式」土器片も比較的多く出土することからみて、現在のE２層の上部にもっと厚く「南方Ⅱ式」から「南方Ⅲ式」にかけての時期の包含層が形成されていたと推定される。

なお、「南方Ⅲ式」の後、特に中期後葉と後期の土器片の出土は著しく減少（数点単位で数える程度）し、E２層上部の上にこれらの時期の包含層がそれまでと同様に形成されていた可能性は非常に低い。E１層の安定した形成状態からみて、この地点は、古墳時代に至って、地下げ削平（整地が日的か？）された後に再び日常生活区域となり、比較的長期に って遺跡が形成されたと推測される。

第 4 章　遺　　物

今回の発掘調査に基づいて検出された遺物は、多量の弥生式土器及び土師器や極く少量の須恵器の土器類と、砥石を含む石器類がほとんどであったが、植物遺体（桃種）や種ケ島銃弾（鉛製）各1点も含まれている。各々の遺物の内で、明確に遺構に共伴して検出されたのは、土師器の一部だけであり、大半が遺構と非共伴状態にあった。土器類と石器類の内、主要なものについて詳述しておきたい。

1．土　器　類

今回の調査によって、前・中・後期の弥生式土器および土師器を検出することができ、総量は整理箱で29箱であった。

前・後期弥生式土器および土師器は少量の出土であったが、中期弥生式土器はB·C区間土器溜から大量に出土している。しかし、これら中期弥生式土器は、共存関係を示す一括資料として把握できる出土状況を示していなかった。というのは、B·C区間土器溜は第3章に詳述しているように層位的に分離困難な堆積状況を示すものではあったが、数時期にわたる土器が混在していると思われるからである。

そこで、まずB·C区間土器溜出土土器のうち明らかに前・後期弥生式土器および土師器と判別できるものを摘出し、残った土器を器種・器形ごとに分類するとともにした。しかるのちに、土器製作技法・調整手法および器形等の比較を行ない、また他遺跡の発掘成果をも考慮に入れ各器種・器形の共存関係の把握に努めるようにした。

今回の発掘は土器に関してみれば、遺構により各種土器の共存関係が把握できなかったこと、層位的に裏付けされた編年が提示できなかったことなど限界性を含みながらも、従来僅少であった岡山平野における中期前半弥生式土器の資料の充実に貢献し得たことは評価されてしかるべきと思われる。

(1) 前期弥生式土器

前期弥生式土器が若干検出されている。ほとんどがB·C区間土器溜から前期～中期の土器と混在して出土した。一部、土器溜遺構の底に貼り付いた状況で出土した土器片もあったが、遺構上部から出土した土器片もあり、必ずしも一定の出土状況を示していない。土器の磨耗度などを考慮するならば、これら前期弥生式土器は二次的堆積状況を示していると思われる。

前期弥生式土器を成形・調整等の差異にもとづき3期に細分した。これは前期弥生式土器を

古・中・新と分ける立鳥[1]によれば、中・新段階の内容と一致する。ここでは新段階を更に2分し、中・新段階を3期に細分したのである。

前期中葉（第21図，1～4）

ヘラミガキ調整のさいに、意識的に凸帯を削り出し、その凸帯部分に2～3条の篦描沈線文を描く手法のみられる土器、および削り出し凸帯はみられなくとも篦描沈線が2～3条に限定される土器をこの段階にあてる。この手法のみられる土器は、壺形土器肩部（1・2）、甕形土器口縁部（3・4）など小片が若干検出されている。

この段階は、甕形土器の篦描沈線が多条化する直前に位置づけられ、また、削り出し凸帯上に篦描沈線を描く手法も同様に位置づけられよう。広島県福山市大宮遺跡では、「SD001下層様式」に上記の特徴が認められ、畿内第1様式中段階に位置づけられるという[2]。以上のことから、この段階を畿内第Ⅰ様式中段階併行期と位置づける。

前期後葉（第21図，5～14）

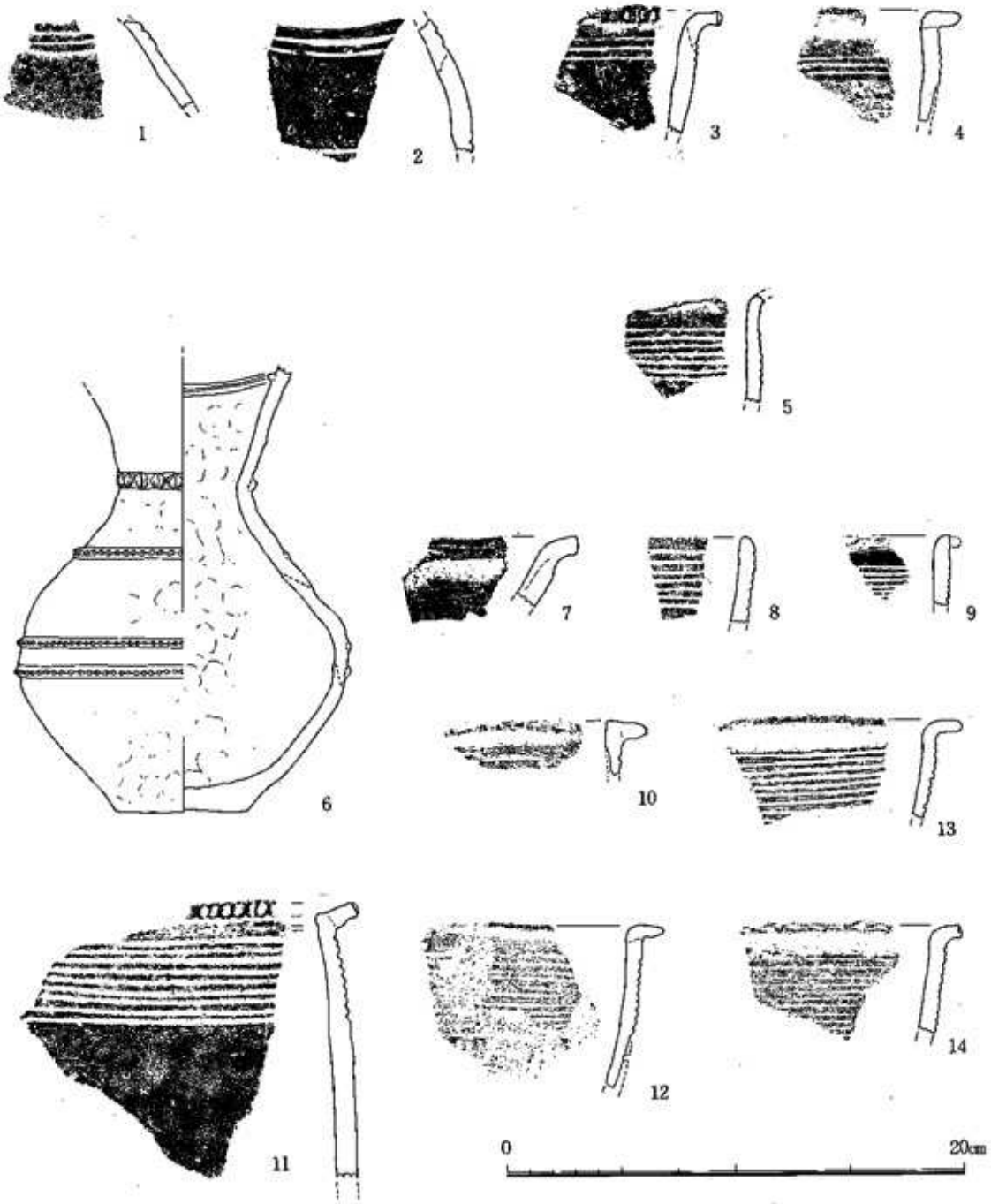
壺形土器における貼り付け凸帯の盛行と甕形土器における篦描沈線文の多条化とが、この時期の特徴である。

壺形土器は、全体形の復原可能な個体（6）が1例ではあるが出土している。それによると、器形はやや張り気味の胴部に、ラッパ状に大きく開く発達した口頸部を示す形態である。また、頸部に押圧痕のある凸帯を1条、肩・胴部に刻目凸帯を計4条めぐらしており、口縁部内面にも一部開口した貼り付け凸帯をめぐらしている。この凸帯は、貼り付け前にあらかじめ篦で沈線を描いて、その上に凸帯を貼り付けている。全般的に貼り付け凸帯盛行期の特徴を良く示している土器といえよう。

甕形土器は、口縁部が[3]「く」字形口縁形態（9・12～14）と「逆L」字形口縁形態[4]（11）および断面三角形口縁形態[5]（10）とがみられ、口縁部下には数条・10数条にわたって篦描沈線が描かれている。篦描沈線文下端には列点文が1～2列施文される例（12）もある。器形は、全体形を推定できる資料に欠けるため不明であるが、口縁部直下に最大径が位置し、それほど胴は張らない形態であるようだ。この時期の甕形土器は、器壁も厚く、胎土も良質でしっかりしたつくりの個体が多いようである。

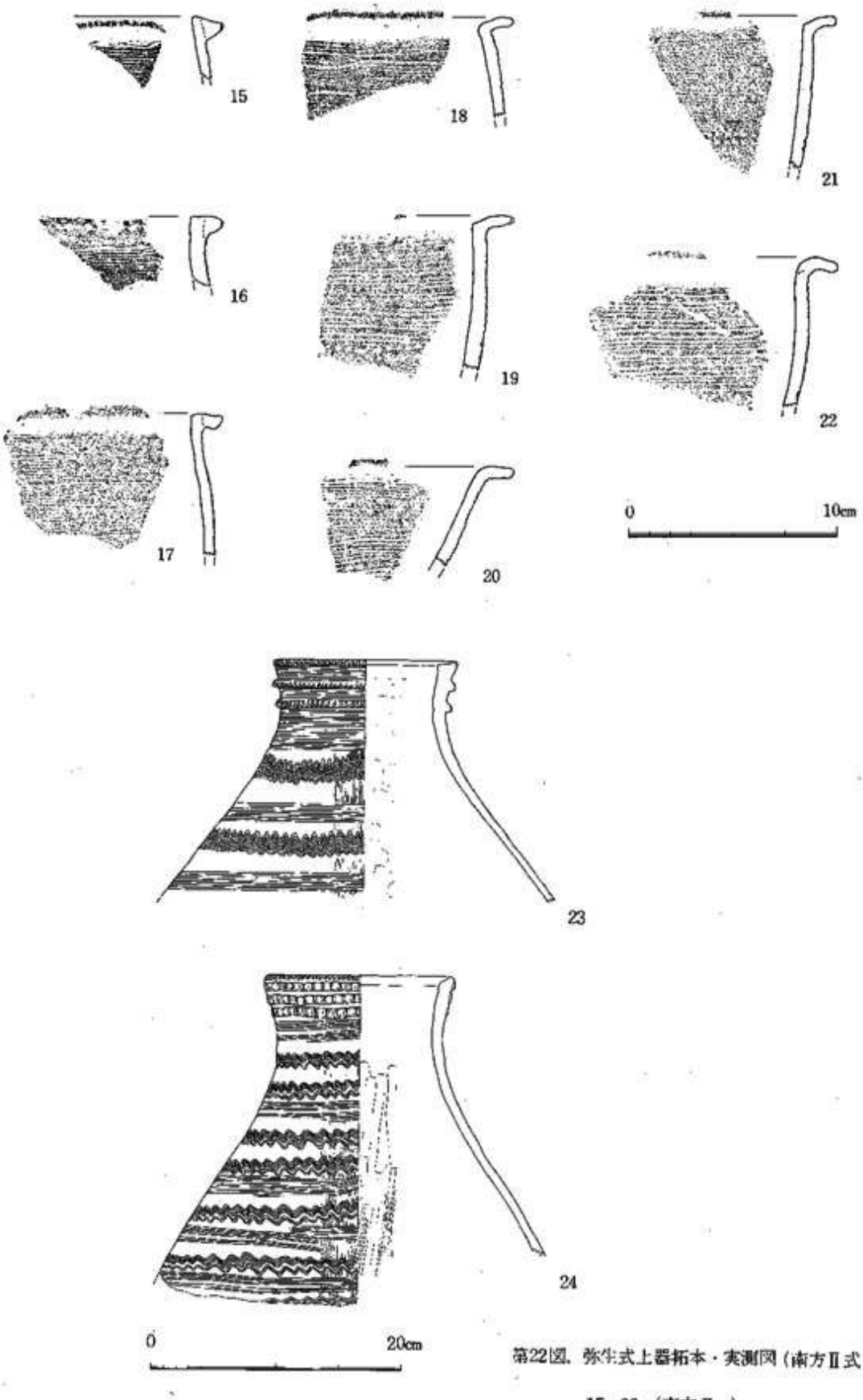
鉢形土器（7）や直口壺形土器[6]（8）と思われる破片も検出されている。これらは、所属時期を確定し難かったが、前期後葉に属さしめておきたい。

この時期は、甕形土器口縁部下の篦描沈線の状況により、更に（古）・（新）に細分可能と思われる。



第21図、弥生式土器拓本・実測図（南方工式）

1～4　（南方Ⅰa）
5　（南方Ⅰb）
6～14　（南方Ⅰc）



第22図．弥生式上器拓本・実測図（南方Ⅱ式）

15～22（南方Ⅱa）

23・24 壺A_1（南方Ⅱc）

（古）とは、篦描沈線が5～8条程度描かれる甕形土器を示し、前期中葉の2～3条の篦描沈線から発達した段階と把握する。

（新）とは、篦描沈線が10条以上にわたって描かれる甕形土器を示し、（古）が更に発達した段階と把握する。

今回の発掘では、（古）段階の土器はほとんど検出されなかったが、1970年の発掘である程度まとまって出土している。この（古）・（新）が時間差を示すとは限らないが、古相・新相として段階設定はしておきたい。⑦

(2) 中期弥生式土器

中期弥生式土器はB・C区間土器溜から大量に出土した。器種も、壺形土器・甕形土器・高坏形土器など数器種が検出され、多様性を示している。以下、各器種の記述を進めよう。

「高田式」土器　（第22図、15～22）

「高田式」と呼称される土器の記述から始める。なぜならば、大量の中期弥生式土器の中にあって、この型式の土器は容易に識別可能であるからである。⑧と同時に、出土量も少なく、磨耗度が著しいなど前期弥生式土器の出土状況と類似点が認められ、また、前期弥生式土器の変遷過程の延長線上に位置づけられるなど中期弥生式土器の中で特異な存在を示しているからでもある。

「高田式」甕形土器の特徴は、口縁部下に施される文様の施文具が、篦から櫛へと変化したことにある。つまり、篦描沈線が櫛描平行文に置き換えられたわけであるが、文様構成などは依然として、前期後葉の特徴を残している。しかし、器壁が薄くなるなど土器製作上の変化が窺われ、前期土器とは隔絶性が認められる。

器形は、最大径が胴部上半にあり、やや胴の張った形態となるようである。また、口縁部には、「く」字形（21・22）・「逆L」字形（18・19）および断面三角形（15～17）の口縁部がみられる。特に断面三角形口縁部は、この期になると出土量が増加する傾向にある。

壺形土器に関しては、未だその実体が明瞭でなく、摘出するに至らなかった。

壺形土器

壺形土器を形態的特徴に基づきA～Kに分類した。中には、どの形態に属するか判断に苦しむ個体もあったが、それらは土器観察一覧表にその旨を記述するようにした。

次に、各形態の土器を型式学的操作により配列し、区分可能なものは1・2・3と表記し細分した。この細分は、原則として編年的配列を表示するように努めたが、必ずしもそのように

なっていない点もある。また、1・2・3を更に区別する必要が生じたときは、1a・1b…として表記した。この場合は、編年的配列を意味しない。したがって各個体は、壺A 1a・壺E 2b などのように表記されることになる。

この表記法は、甕形土器・高坏形土器など他器種においても適用される。

壺A（第22図，23・24　第23・24図）

短頸でわずかに外反する口縁部と、口頸部に2～3条程の凸帯がめぐらされる壺形土器の一群を壺Aとする。

壺Aは、口縁端部の肥厚状況により、次のように細分が可能である。

1．（23～25・27）。口縁部の片側が特に肥厚する形態。主に内側が内方あるいは上方に肥厚する。

2．（26・28～33）。口縁端部が「T」字形に肥厚し、巾広の端面を形成する形態。

3．（34・35）。口縁端部の肥厚が著しく発達する形態。この段階には、口縁端面に刻線・沈線など描かれる例が多いようである。

これらの形態は、口縁部の肥厚を基準とすれば1→2→3と変遷していったと思われるが、1と2とは胴部形態にそれほど差異がみられず、1·2→3と変遷していった可能性もある。

壺Aは器高50～60cm程の大形品が多く、器形は最大径が胴部半ばに位置し、胴高と最大径値がほぼ等しく頸部もそれほど絞られていないため卵形となっている。底部は上げ底の痕跡を残しているが平底である。また、口頸部にめぐらされる凸帯および口唇部には、篦による刻目が施される例が多い。

成形・調整手法の観察によると、ナデにより底部内面を整形し、胴部内面は刷毛目調整を施し、所々ナデ調整を行っている。外面は、刷毛目整形後、胴下半にヘラミガキ調整を行っている。このヘラミガキは、底部近くは縦方向のヘラミガキ、腹部は横方向のヘラミガキ調整を施すなど規則性を持っている。口頸部はナデ・刷毛目が認められるが、口縁端部・凸帯などの細部は、特に丁寧な横ナデにより仕上げ調整を行なっている。

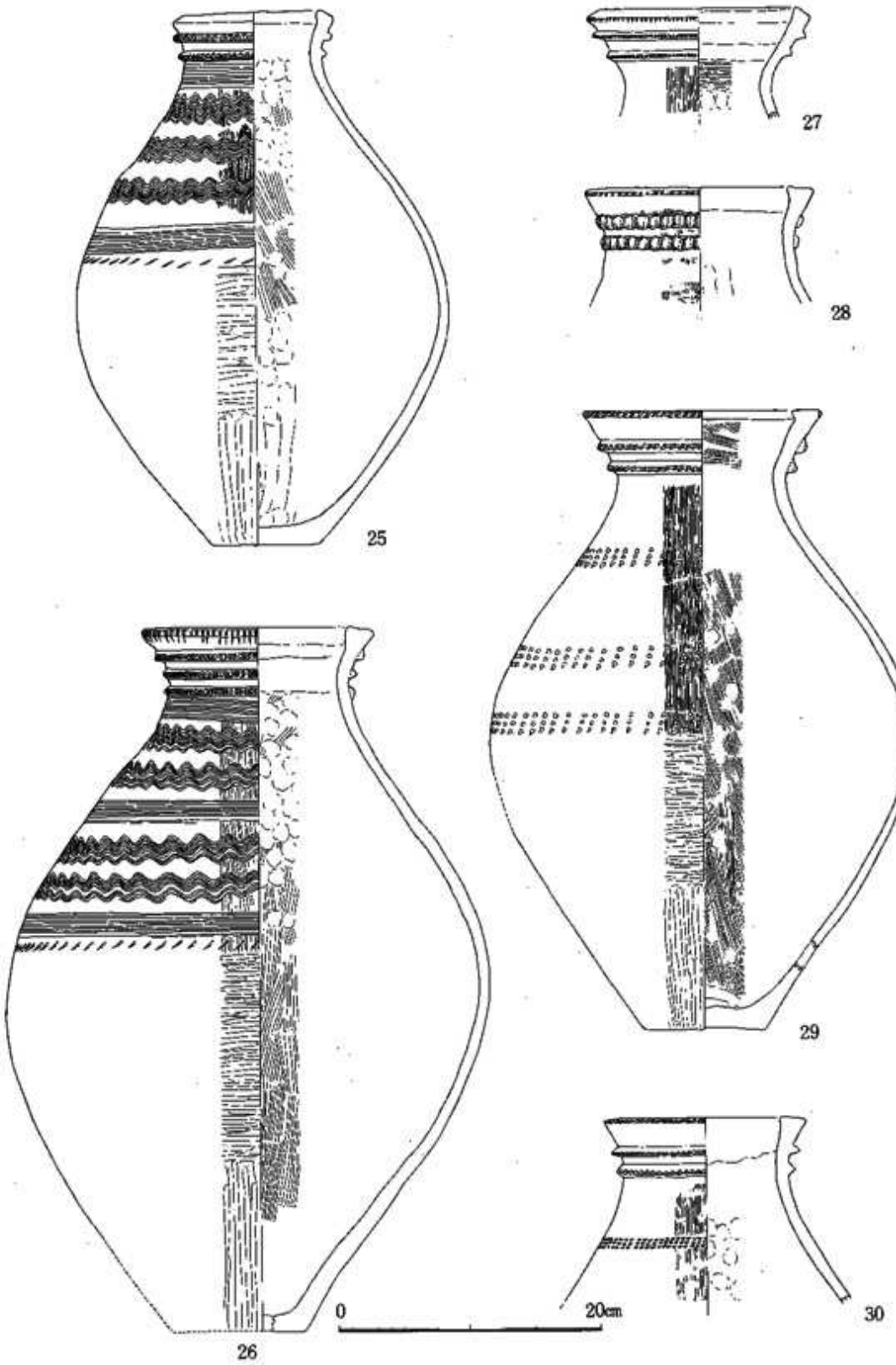
文様は、櫛描文と列点文とで構成された文様および列点文のみのものなどみられる。

壺B（第25図，36～38）

壺Aから口頸部凸帯を除去した形態を壺Bとする。

壺Aは大形品が顕著であったが、壺Bは器高30cm程の中形品が多い。また、口縁端部が摘まみあげられている例もみられるが、壺Aのように細分される程資料に恵まれていない。

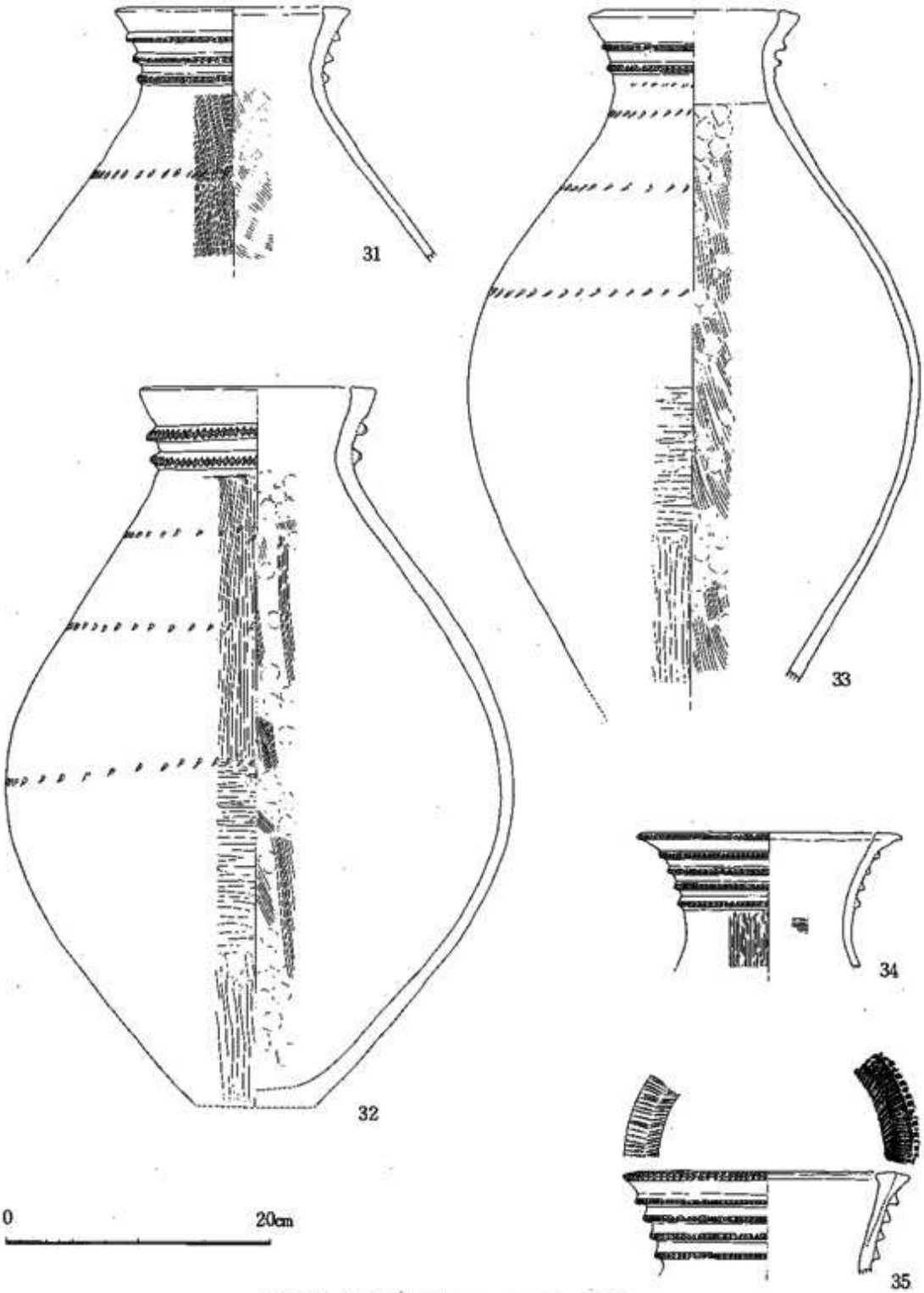
口唇部刻目の施される例（38）も認められるが、施されない例の方が多い。



第23図. 弥生式土器実測図（南方Ⅱ～Ⅲ式）

25・27　壺A_1（南方Ⅱc）

26・28～30　壺A_2（南方Ⅱc～Ⅲa）



第24図. 弥生式土器実測図（南方Ⅱ～Ⅲ式）

31～33 壺A_2（南方Ⅱc～Ⅲa）

34～35 壺A_3（南方Ⅲa）

文様は櫛描文、および列点文のみのものとがみられる。

成形・調整手法は、胴部内面は刷毛目調整後、所々ナデている。底部付近は、ナデの痕が特に顕著に残されている。外面は、刷毛目整形後、胴下半にヘラミガキ調整を行っている。口頸部はナデ仕上げである。基本的に壺Aの調整法とかわるところがない。

壺C（第25図，39～42）

壺Bの頸部を狭く絞り、口頸部に凸帯をめぐらした形態を壺Cとする。

器形は、最大径が胴部半ばあるいはやや下方に位置し、下胴の張った安定感に富む形態を呈している。口頸部は「逆ハ」字形に大きく開き、この口頸部の状況により次のように細分できる。

1．（39～42－2）。口頸部に3条程の凸帯が貼付され、凸帯および口縁端部に、篦により刻目が付されている。また、筒状頸部の形成が顕著な例（40）と顕著でない例（39～41－2）とが認められる。口縁端部は、内側が摘まれ肥厚している例が多い。

2．（42）。凸帯に刻目なく、むしろ棒状浮文を縦に貼付する例（42）がみられる。また、口頸部の開き具合は1よりも大きく、口縁端部が「T」字形に肥厚している。

口縁端部の肥厚程度、口縁部の開き具合、凸帯の調整手法などを比較してみると壺Cは1→2と変遷していったものと思われる。

成形・調整手法の観察によると、肩部中ほどと頸部に粘土継目のみられる例がある。恐らく、底部から順に粘土紐を巻き上げ成形したものと思われる。胴部内面はナデおよび刷毛目がみられ、外面は刷毛目整形後、胴下半には縦および横方向のヘラミガキを行っている。口頸部はナデ、特に細部は丁寧な横ナデ調整を行っており、その横ナデの強弱により凸帯断面や口縁端面などに微妙な形態差が生じている。

文様は、櫛描波状文と平行文で構成されるもの、列点文だけのものもみられる。

底部は、上げ底の痕跡をわずかに残すが、平底である。

壺D（第26図）

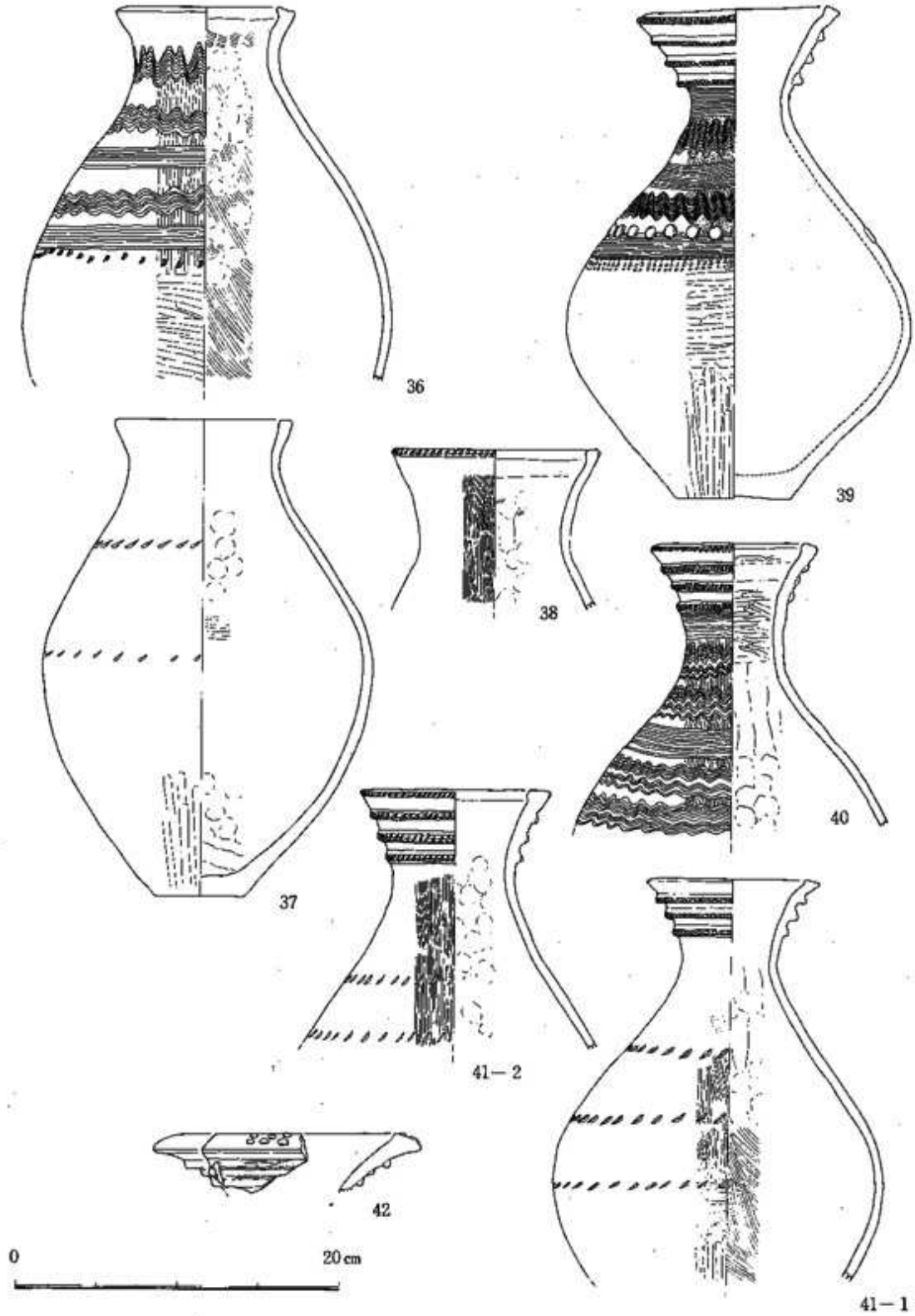
筒状の頸部と水平に屈折する口縁部を有することを特徴とする壺形土器の一群を壺Dとする。

器形は、最大径が胴部中位に位置しているが、胴高が最大径と同値あるいはわずかに大きな値を示す。したがって胴部形態は球形あるいは偏球形を呈する。

壺Dは、口縁部の形状により次のように細分可能である。

1．（43～48）。端部が肥厚せず丸く収められ、未だ明瞭な面を形成していない。

2．（49－1・49－2）。口縁部内外面を強く横ナデしており、端部が肥厚する。同時に明瞭な



第25図．弥生式土器実測図（南方Ⅱ～Ⅲ式）

36～38　壺B（南方Ⅱc）　　39～41-2　壺C_1（南方Ⅱc）　　42　壺C_2（南方Ⅲa）

口縁端面が形成され、そこに篦描沈線の描かれる例もみられるようになる。

3．（50～52）。口縁端部の肥厚が進展し、下方への拡張が顕著になる。ついには、垂下口縁部を形成するに至る。垂下口縁部外面は、篦描沈線により斜格子文・羽状文らで飾られることが通例となる。

口縁部の形状と胴部形態とは対応関係にあるようであり、1→3と口縁部の変遷するにつれ胴部は球形から胴の張り出した偏球形と変化していることが認められる。

胴部は櫛描波状文・平行文で飾られるもの、あるいは列点文のみのものなどがみられる。この文様施文のありかたは、壺A～Dに共通してみられる傾向である。

底部は平底。

成形・調整手法の観察によると頸部に粘土継目が認められる例が多い。底部内面は強いナデで整形され、胴部内面は全体的に刷毛目が施されている。また、所々指頭圧痕やナデが認められる。外面は刷毛目整形後、胴下半は縦および横方向のヘラミガキ調整である。口頸部は刷毛目・ナデがみられるが、口縁端部は横ナデで仕上げ調整を行っている。

壺Dは、口縁端部の肥厚状況から判断して、基本的に1→2→3と変遷していったものと思われる。ただ、（45）・（46）は胴部が長胴気味であるので、古相を示すのかもしれない。また（48）は端面を形成しているが、壺D2とは異質な様相を示しているので、ここでは壺D1に含めている。

壺E（第27図，53～58）

朝顔花形に大きく外反する口頸部を持つ壺形土器の一群を壺Eとする。

壺Eは、口縁部の形状により次のように細分される。

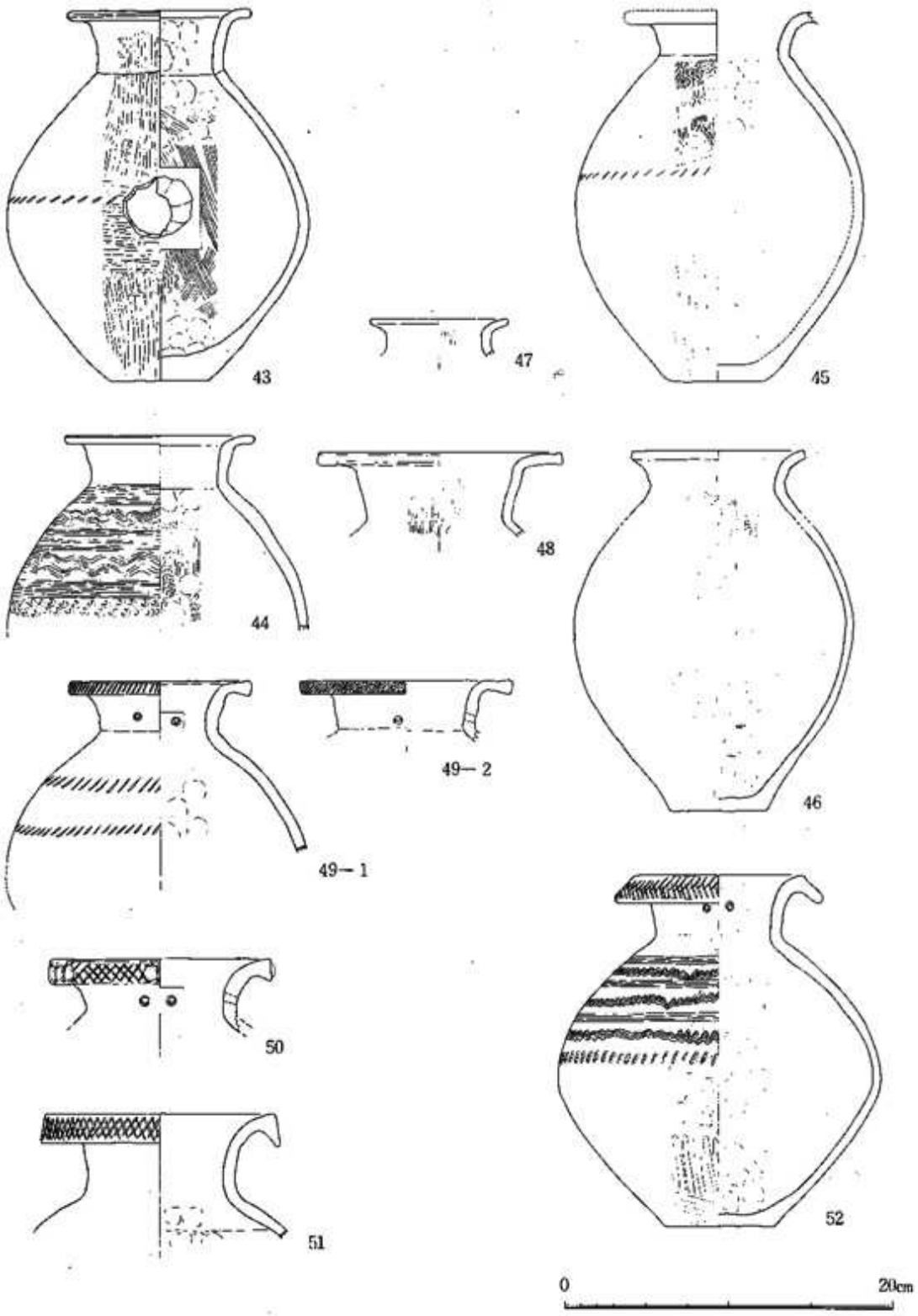
1a．（59～62）。口縁端部の肥厚がみられない。むしろ、頸部に2～3条の凸帯および口縁部内面に凸帯をめぐらしている。口唇部に篦による刻目が付されている。

1b．（53・54・57）。口縁端部が肥厚（特に下方に）し、巾広の端面を形成し始める。端面には篦描斜線文・押圧痕が施されている。円形浮文を貼付する例（53）もみられる。

1c．（55・56・63）。形状は1bと類似する。ただ端面に2～3条の平行沈線を描き、後に篦描斜線文・圧痕文を施している。

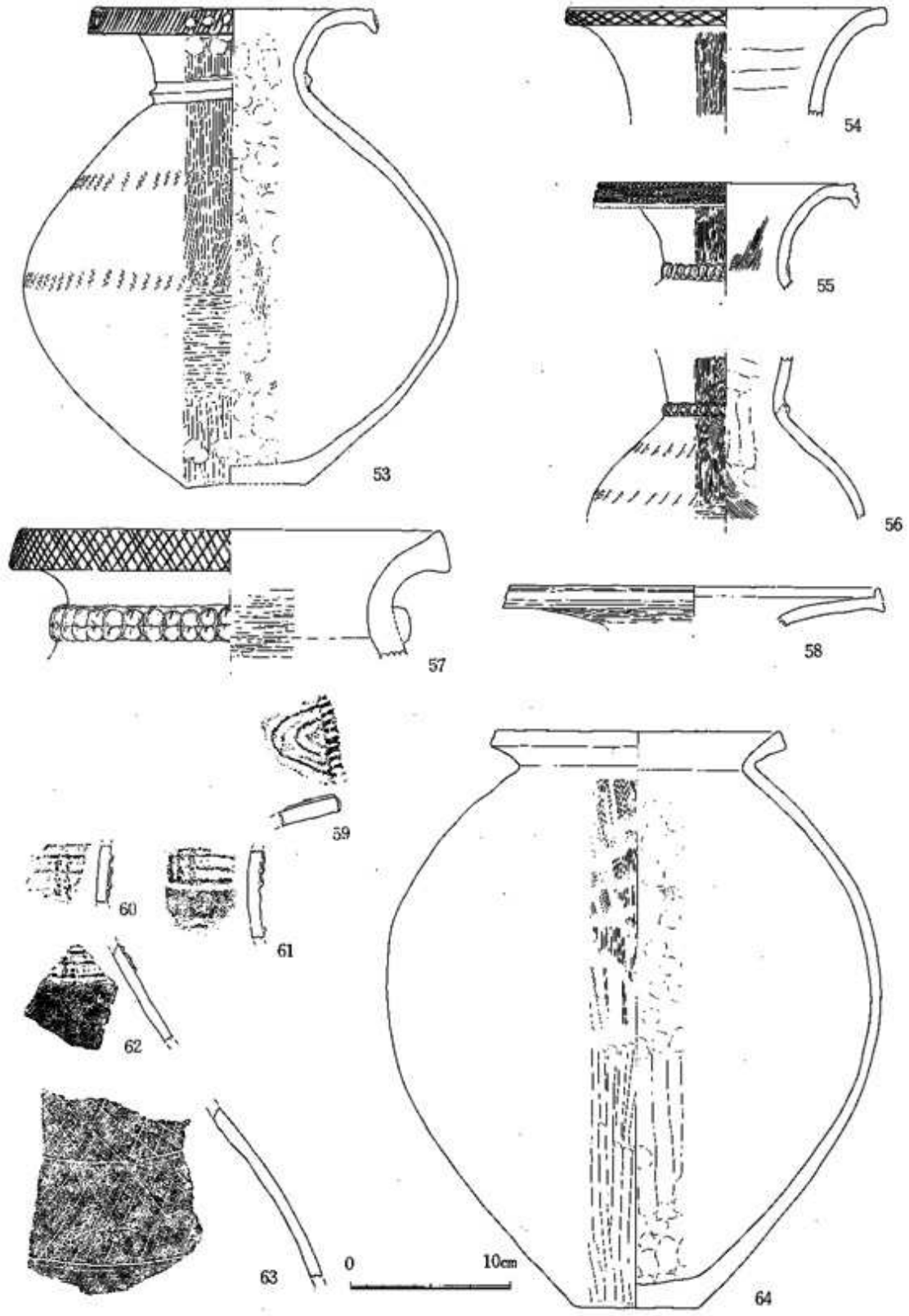
2．（58）。口縁端部が屈折し立ち上り部分を形成しており、そこに2～3条の凹線文が施されている。

これらの形態は $\frac{1a}{1b}$ →1c→2と変遷していったものと思われる。なぜならば、2は凹線文出現期の土器であるから1段階より後出であり、1cの平行沈線は凹線文の先駆形態と理解するからである。1aの位置付けが良くわからないが便宜的に1aと1bを一括して捉えておく。



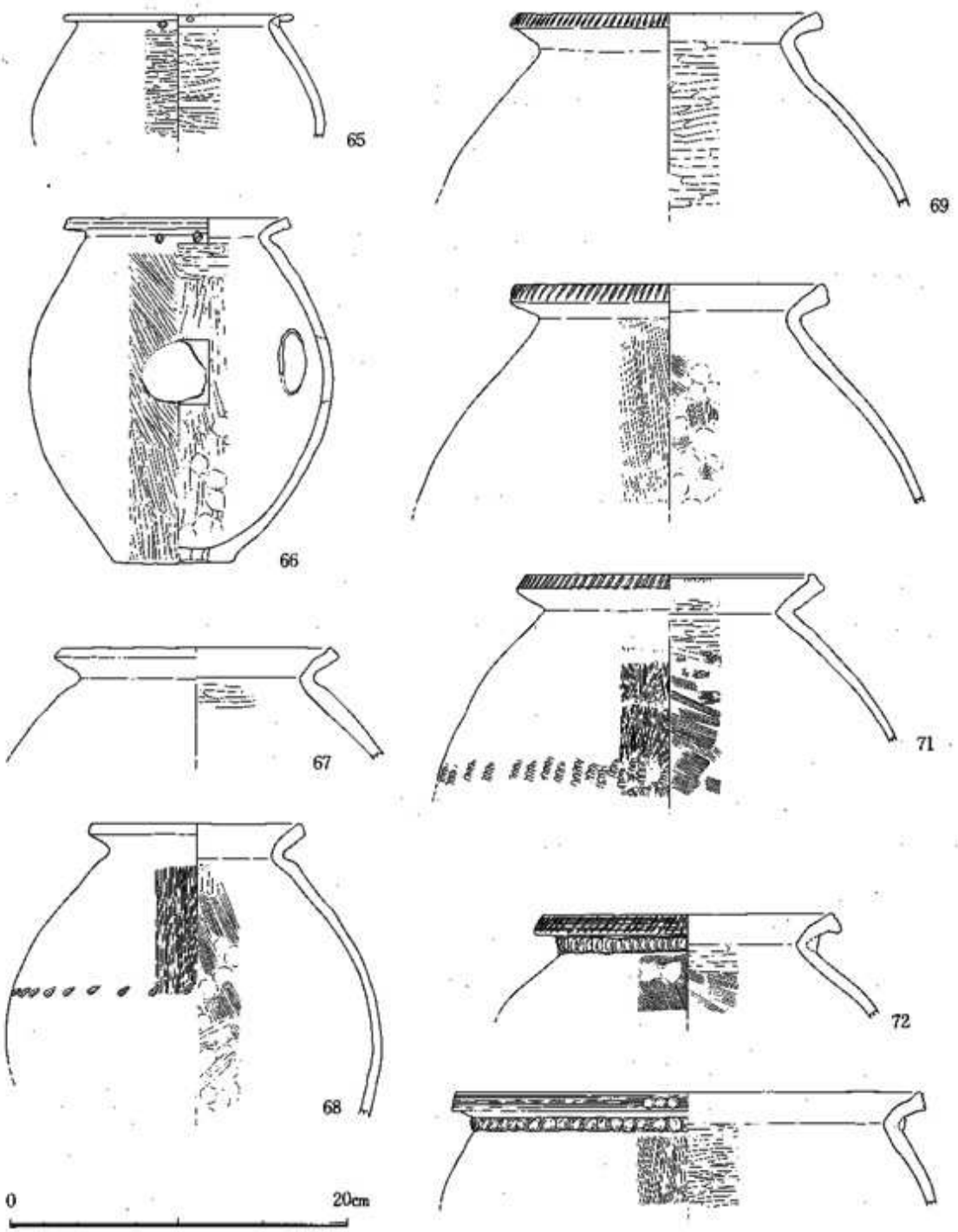
第26図、弥生式土器実測図（南方Ⅱ～Ⅲ式）

43～48 壺D₁（南方Ⅱb～Ⅱc）　49-1・49-2 壺D₂（南方Ⅱc）　50～52 壺D₃（南方Ⅲa）



第27図．弥生式土器実測図（南方Ⅲ式～中期後葉）

53・54・57 壺E_1b（南方Ⅲa）　55・56・63 壺E_1c（南方Ⅲa）　58 壺E_2（中期後葉）
59～62 壺E_1a（南方Ⅲa）　64 壺F_2a（南方Ⅲa）



第28図、弥生式土器実測図（南方Ⅲ式～中期後葉）

65・66 壺F_1（南方ⅡcorⅢa） 67・68 壺F_{2a}（南方Ⅲa） 69～71 壺F_{2b}（南方Ⅲa） 72・73 壺F_3（中期後葉）

胴部形態は、1b段階の例しか検出されていないが、平底底部と最大径が胴部中位に位置し、しかも胴高より最大径の方が大きい値を示すため腹部の張った偏球形を呈す。また、頸部に押圧痕の施された凸帯あるいは断面三角形凸帯をめぐらしている。

成形・調整手法の観察によると、底部・肩部内面に指頭圧痕を残しているが、刷毛目整形後、ナデ調整が行われている。外面は刷毛目整形後、胴下半は縦および横方向のヘラミガキ調整。頸部外面は刷毛目整形であるが、内面および端部はナデ・横ナデ調整が行われている。頸部凸帯は最後に貼付し刻目を付している。

胴部形態・成形・調整手法などは、口縁部の変遷に対応して差異がみられるものと思われるが、今回の資料では明確にし得なかった。

壺F（第27図，64　第28図，65～73）

「く」字形口縁部を有する壺形土器の一群を壺Fとする。

壺Fは、口縁部の形状により次のように細分可能である。

1．（65・66）。口縁端部の肥厚がみられず、丸くあるいは面をもって収められている。（66）は端面が形成されているが、2aとは区別され1段階の例外的存在として扱った。1段階の土器には、2対の円孔が穿孔されている例が多い。

2a．（67・68）。わずかに口縁端部の肥厚がみられ、端面を形成するようになる。

2b．（69～71）。口縁端部の肥厚が顕著になり、端部が摘みあげられ横ナデされる例もみられるようになる。端面は巾広く形成されており、そこに篦による斜行文が刻まれている。

3．（72・73）。口縁端部は2bよりも肥厚が著しくなり、立ち上り部分の形成する例もみられる。口縁端面に2～3条の凹線文を施す例も多く、頸部には押圧痕のある凸帯をめぐらしている。（72）・（73）は、甕形土器の可能性もあるが、壺Fに含めておく。

これら形態は、口縁端部の肥厚程度、凹線文の有無を基準とすれば、$1 \rightarrow \begin{matrix}2a\\2b\end{matrix} \rightarrow 3$と変遷していったと思われる。

胴部形態も、口縁部形態に対応して若干の差異がみられるようである。壺F 1（66）の例によると、胴部最大径が、胴部中ほどかやや高めに位置しており、底部も大きいので、安定感のあるずんどう形となっている。口径と最大径とにはほとんど差がみられない。一方、壺F 2aになると、（64）の例によれば、胴部最大径は胴部中ほどに位置していながらも、器高が大きくなり、逆に口径・底部が相対的に小さくなっているので、器形がスマートになっている。

成形・調整手法は、各個体によって若干差異がみられる。詳細は、土器観察一覧表を参照されたい。

壺G（第29図，74～77）

筒形土器を壺Gとする。この器形は底部のみ検出され、胴上半及び口頸部については不明である。ただ底径と大差ない胴径を持った形態の土器と思われる。この筒形土器には、施文されている例とされていない例とがみられる。施文例をみると、櫛描文様でその文様構成は壺形土器のと同様である。そこで、この筒形土器を壺形土器の範疇に入れておくことにしたい。

この壺Gは、大形品（74・75・76）と小形品（77）とがみられ、それぞれ機能を異にし別器種を構成する可能性があるが、ここでは一括して扱う。小形品は無頸壺B（81）の底部に相当する可能性もある。

底部には、（a）周縁が張り出していない形態（74・75）と（b）張り出した形態（76・77）とが認められる。また、2孔1組の貫通孔が2ケ所あけられている例（76）が認められる。

いずれも、底部粘土板に粘土紐を継ぎ足して成形しており、刷毛目整形している。仕上げは内面がヘラミガキ、更に指ナデ調整を行い、外面はヘラミガキ調整のようである。貫通孔は最後に、胴部外面から底部へ斜めにあけられている。

無頸壺A・B（第29図，78～81）

頸部の不明瞭な器形を無頸壺とする。無頸壺には、A、胴部が湾曲する形態（78～80）と、B、直線的な胴部を持つ形態（81）とが出土している。A[26]は台付無頸壺の一種と思われ、Bは壺Gの小形品の可能性もある。

いずれも、口唇端部に[27]刻目が施され、口縁下には2対の貫通孔が穿孔されている例が多い。調整痕は、内面が刷毛目調整、外面は刷毛目のみの例（78）もみられるが、ほとんどはヘラミガキあるいはナデ調整を行い、口縁部は横ナデで仕上げている。

細頸壺（第29図，82）

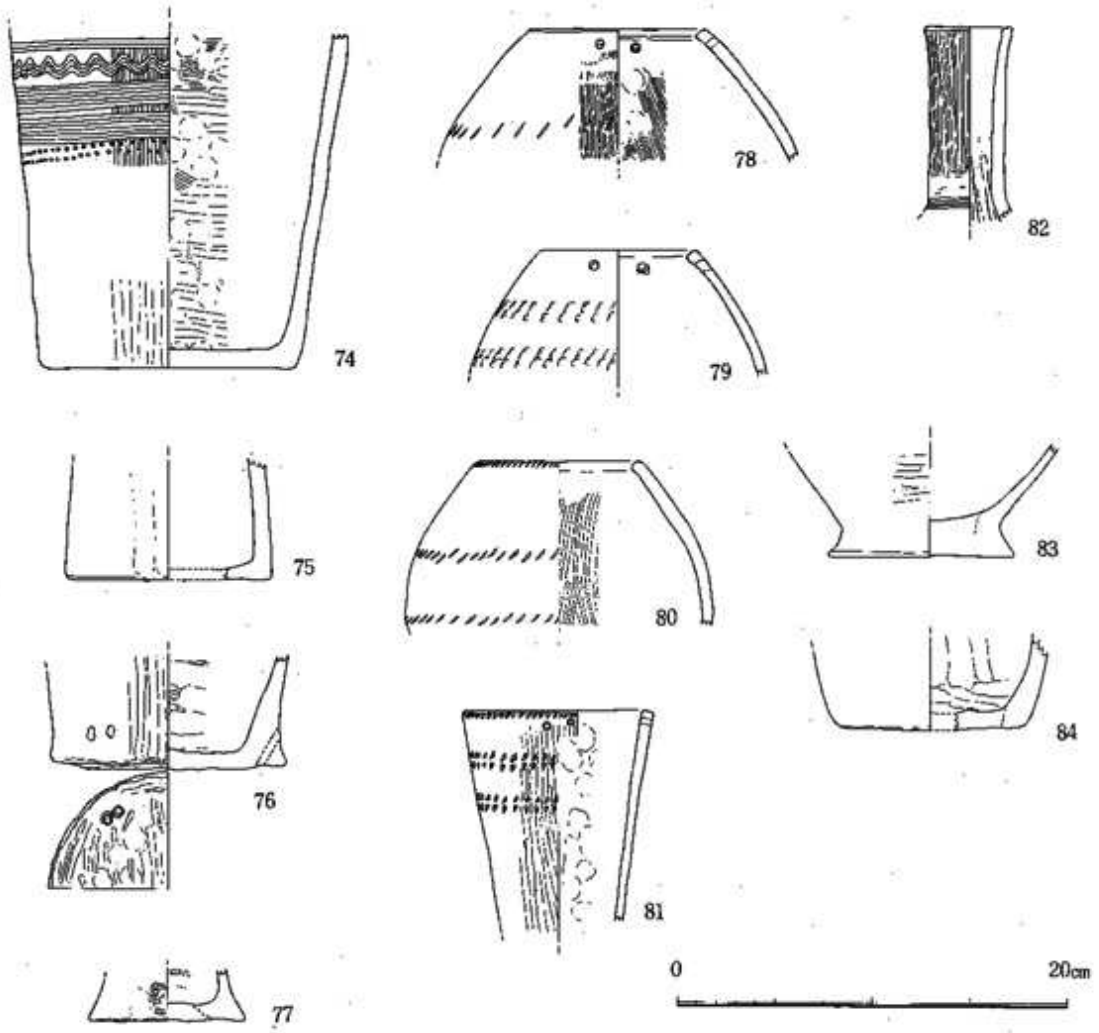
今回の発掘で1点のみ出土した。直口であるが、口縁部近くがやや外反する形態となっている。頸部つけねには、横方向の刷毛目調整がなされ、櫛描文のごとき様相を示している。

『南方遺跡発掘調査概報』（以下『概報』と呼ぶ）で「南方Ⅲ式」と分類した土器の中に、類似した器形がみられる。[28]

また、櫛描文を意識した調整手法から判断して、南方Ⅲa前後の時期と思われるが確証がないので、中期中葉頃と考えておく。

壺形土器底部（第29図，83・84）

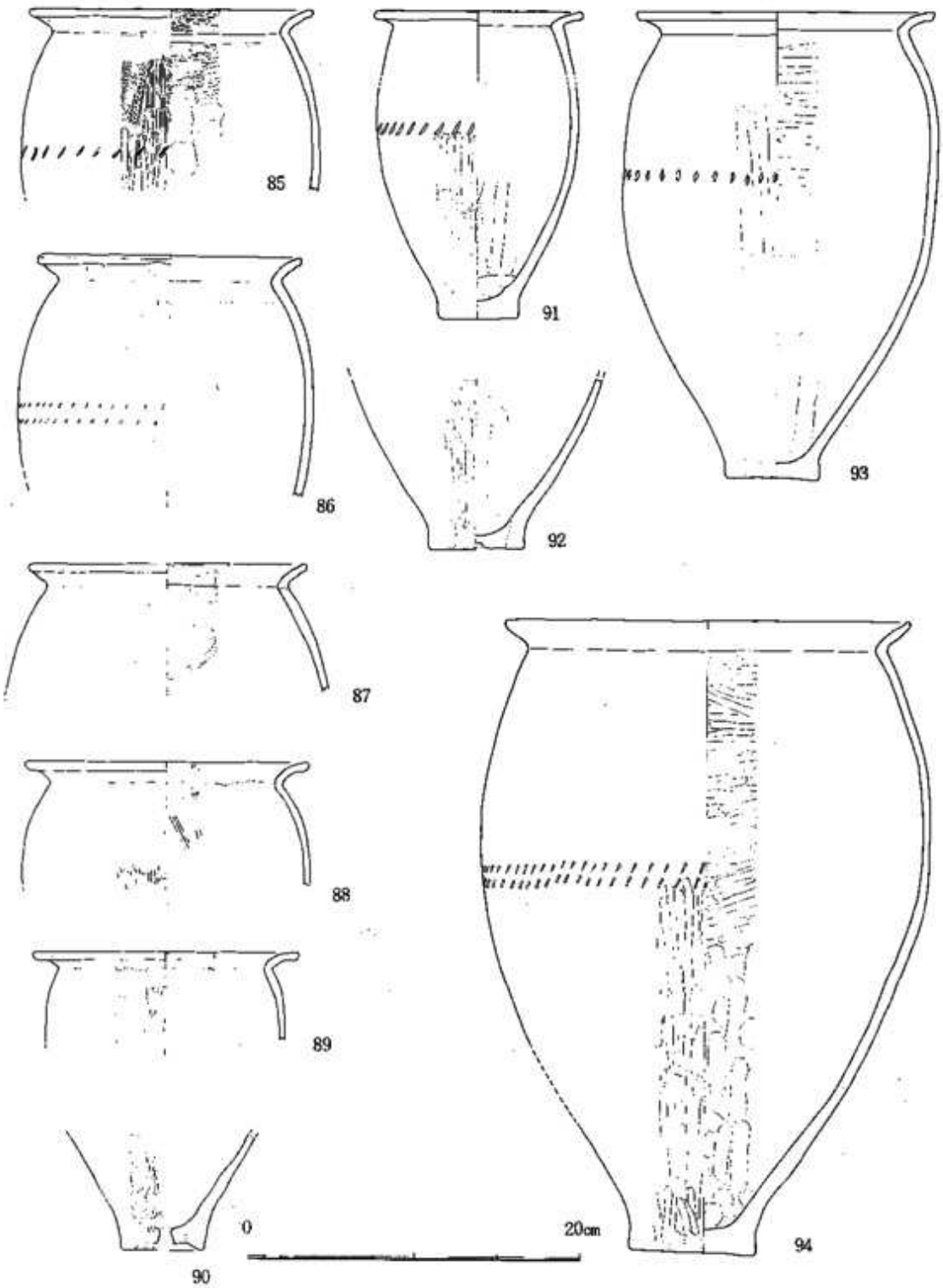
壺形土器の底部と思われるものを図示しておく。



第29図，弥生式土器実測図（南方Ⅱ～Ⅲ式）

74・75　壺Ga（南方Ⅱb or Ⅱc）　76・77　壺Gb（南方Ⅱb or Ⅱc）　78～80　無頸壺A（南方Ⅱc）

81　無頸壺B（南方Ⅱc）　82　細頸壺（中期中葉）　83・84　壺底部



第30図、弥生式土器実測図（南方Ⅱ～Ⅲ式）

85～89　甕$_{1a}$（南方Ⅱb～Ⅲa）　91・93　甕$_{1b}$（南方Ⅱb～Ⅲa）　94　甕$_{2}$（南方Ⅲb）

90・92　甕底部

器形・時期とも判然とせず、参考までに掲げておくに留める。

甕形土器（第30・31・32図）

「高田式」以降の甕形土器について記述する。「高田式」でみられた口縁部3種のうち、「く」字形口縁部以外は衰退の傾向にありみられなくなる。また、「く」字形口縁部の甕形土器にしても、「高田式」に顕著であった櫛描文はこの段階では消失し列点文のみ施文される。この列点文も時期が下るにつれ形骸化の傾向にあり、雑に施文され、中期後葉になると大部分の甕形土器の文様は消失する。

ここで扱う甕形土器は、器形および口縁部の成形・調整法によって次のように細分できる。

1a．（85～89）。口縁部内外面にヘラミガキが施される一群。内面ヘラミガキ調整であるが、外面はナデで仕上げ調整されている例（88・89）もみられる。口縁端部は丸く収められているが上方へやや肥厚する例もみられる（87）。この肥厚はナデのため形成されたのではなく、ヘラミガキの施されなかった部分が残存し隆起したものである。ナデによる肥厚とは容易に識別できる。1a の口縁部が微妙に波打っている例が多いのは、このヘラミガキ調整法のため不規則な力が加わるからであろう。

1b．（91・93・99・100）。口縁端部に軽く横ナデが施されている。そのため、口縁端部に微細な凹面が生じ端部がわずかに肥厚している。端部は丸く収められている例が多い。

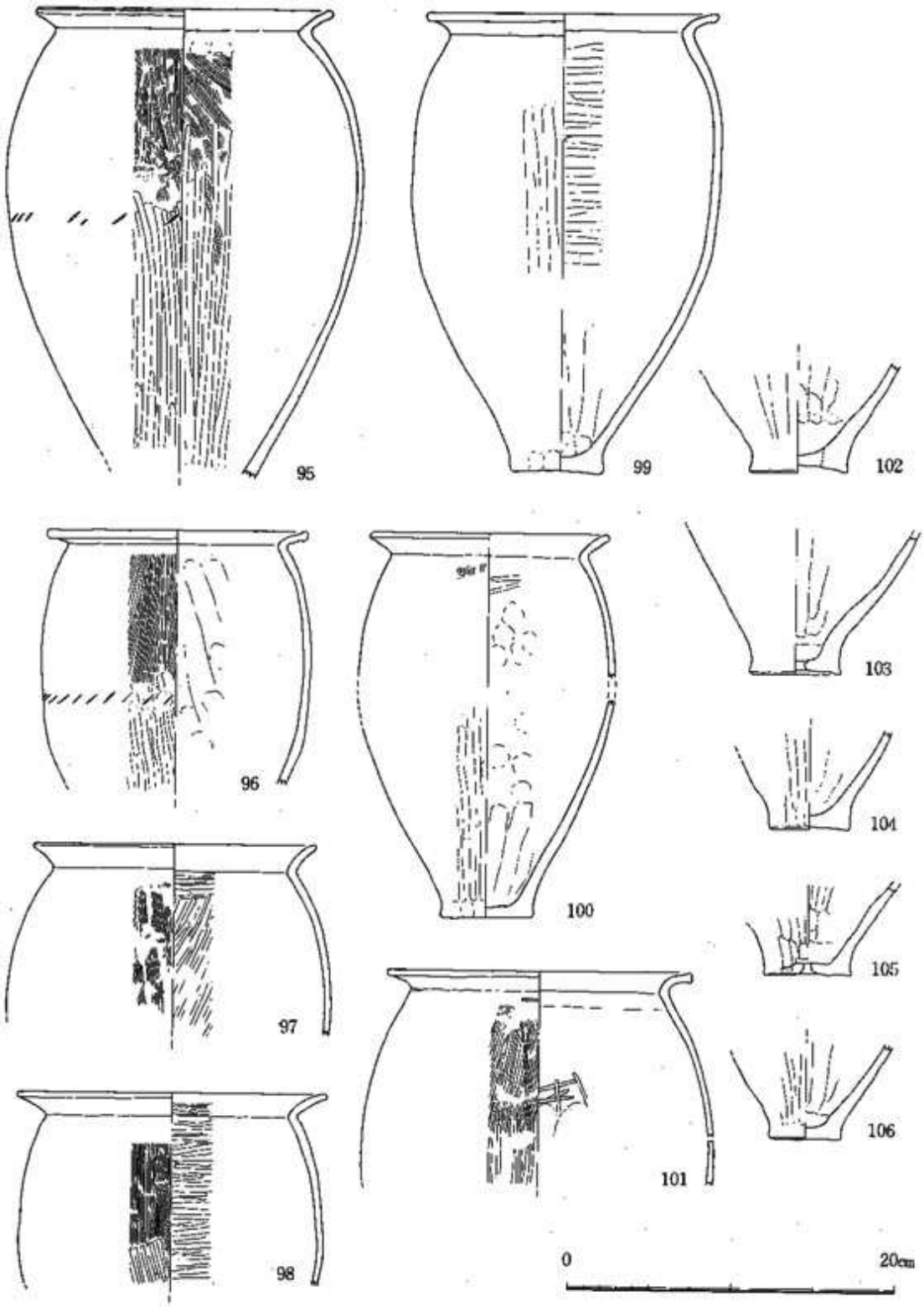
1c．（97・98）。「く」字形口縁部であるが、それほど屈折しておらず、先端は薄く尖り気味に収められている。

2．（94～96・101・107・108）。口縁端部には丁寧な横ナデ調整が行なわれ、明瞭な起伏面がみられる。口縁端部は肥厚しており、中には上方に摘まみあげられた状況を呈する例（94）もみられる。

3．（109・110）。口縁端部の肥厚が顕著になり、もはや横ナデ調整のため端部が肥厚する状態ではなく、端部を屈折させ端面を形成させている。そこに、沈線・凹線文などを施している。3段階になると、口縁部だけでは甕形土器と壺形土器との識別が容易でなくなる。(109)・(110) は壺形土器口縁部の可能性もあるが、甕形土器に分類しておきたい。

これら口縁部形態は、口縁部横ナデ手法の発達を指標にとれば、1a →1b ・1c →2→3と変遷していったと考えられるが、1a と1b の間には、口縁部の形状に共通性がみられるので、むしろ、1a ・1b・1c →2→3と変遷していったと考えるのが適当と思われる。

器形は、口径が最大径になるもの、最大径が胴部上半に位置するものなど種々みられるが、胴部上半に最大径が位置し肩の張った形態が基本形となっている。1→2→3と変遷するにつれこの傾向は顕著になり、底部・器壁も薄くなる傾向がみられるようである。



第31図，弥生式土器実測図（南方Ⅱ～Ⅲ式）

95・96・101　甕$_2$（南方Ⅲa～Ⅲb）　　97・98　甕$_1$c（南方Ⅱb～Ⅲa）

99・100　甕$_1$b（南方Ⅱb～Ⅲa）　　102～106　甕底部

基本的な成形・調整手法は、底部内面がナデ整形、胴部内面は刷毛目調整である。しかし、1a・1cは胴部上半・頸部の内面にまでヘラミガキが施されるが、2になるとこのヘラミガキが雑になり胴下半にしか施されなくなる。すなわち、ヘラミガキ調整から刷毛目調整へと変化する過程が窺われる。外面は刷毛目調整後、胴下半部に縦方向のヘラミガキを施している。

また、(107)・(108)の大型甕形土器は貯蔵用らしく、器壁の調整が他と比べて丁寧に仕上げられている。

底部は上げ底・上げ底の痕跡を残す平底・平底の3形態が認められ、各々成形手法も異なるようである。上げ底は底部を充填して形成しているが、平底は粘土板に粘土紐を積み上げて製作しているようであり、このことが底部形状に微妙な差異を生じさせている。口縁部と底部との関係は、1・2ともに平底と上げ底状のものがみられる。「高田式」は上げ底が顕著であるようなので、上げ底は古相を示すと思われる。

底部の中には、貫孔ある個体もみられる。これらは、全て甕形土器の底部であり、従来、甑と看做されていた土器である。[8]

この底部穿孔土器は、上げ底・平底にかかわりなく一様に認められ、しかも全形を復原できる個体例が稀少である。また、貫孔は、焼成後に内外両側（主として外側）から穿孔されており、煤の付着の認められる例が多い。

ちなみに、今回の発掘で出土した底部の総数は、259点であった。その内訳は、壺形土器の底部が164点、甕形土器の底部は95点であった。この甕形土器底部の約20%強にあたる20点に、貫孔が認められた。

高坏形土器（第33図　第34図，124・125）

高坏形土器の多くは、坏部と脚部が分離した状況で出土している。そこで、坏部と脚部を各々別個に分類した。

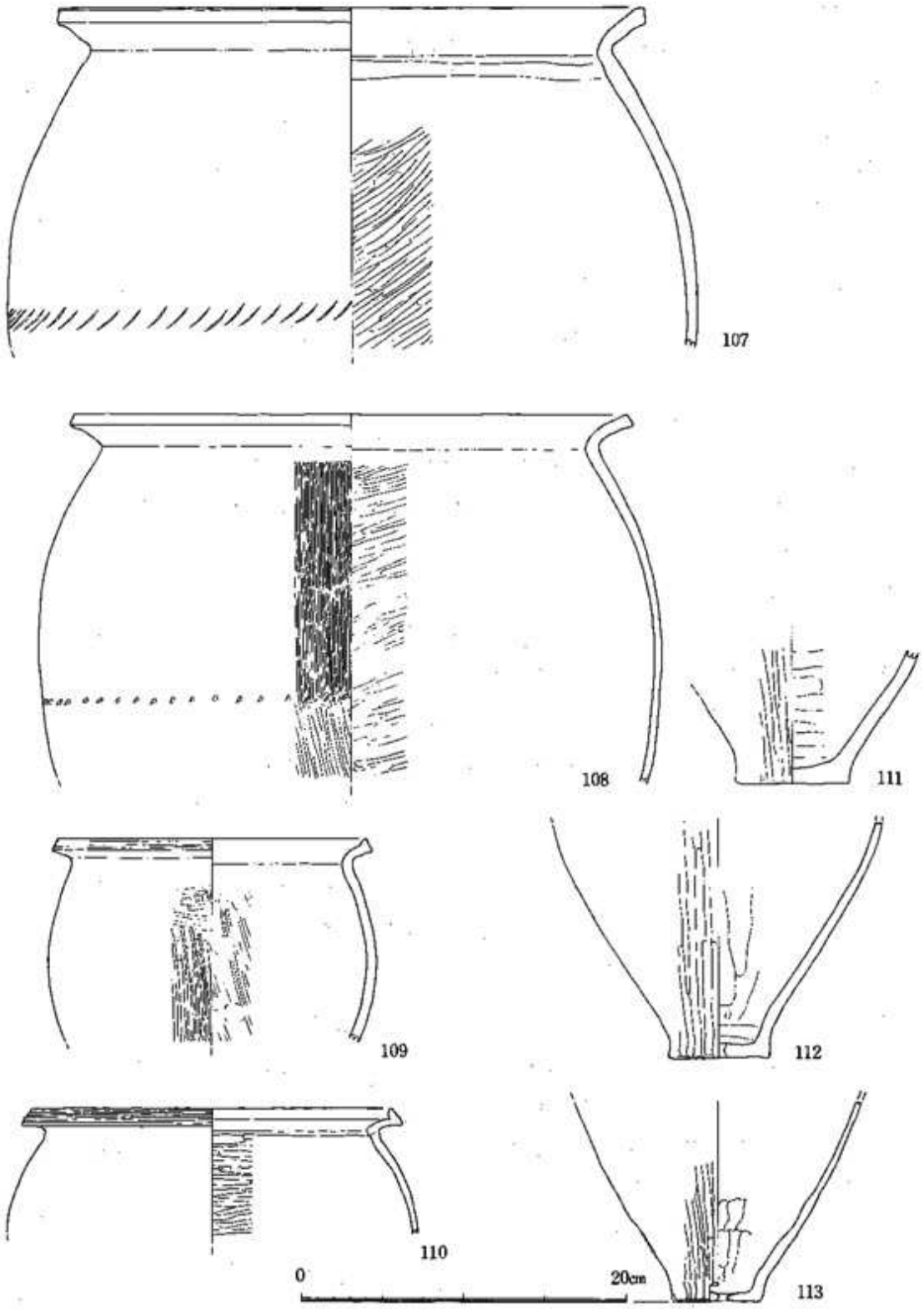
坏はA～Gに、脚部はA～Dに分類し、記載している。

坏部A（第33図，114　第34図、124・125）

半球形の坏部と水平に屈折し鍔を形成している口縁部とを有する形態を坏部Aとする。鍔部分には2対の貫通孔がみられるのが通例である。

坏部は内外面とも、よくヘラミガキが行われ、口縁屈折部および端部は横ナデ調整されている。また、坏部外面上半に刷毛目の観察される例もみられ、刷毛目整形後、ヘラミガキ調整されているのがわかる。

(125)は、(124)と比べて、坏下半部に丸味がみられず、様相を異にしている。別個の形



第32図．弥生式土器実測図（南方Ⅲ～中期後葉）

107・108　甕$_2$（南方Ⅲa～Ⅲb）　　109・110　甕$_3$（中期後葉）　　111～113　甕底部

態として把握されるのかもしれないが、坏部A に含めておく。

坏部B（第33図，120）

坏部A とかわらぬ形態を呈しているが、口縁屈折部に、わずかに隆起する帯がめぐらされている。残念なことに、口縁部が欠損しているため、鍔部分がどのような形態を示すのかわからない。

坏部内外面とも丁寧なヘラミガキが行われている点は、坏部A と同様である。坏部と脚部は「連続成形手法」[49]によって形成され、底部は円板で充填されている。

坏部C（第34図，126）

坏部は浅鉢形を呈する。口縁部付近は、やや外湾気味に立ちあがり、端部は「T」字形に肥厚しており巾広い端面を形成している。この端面に、櫛描きによる斜格子文が施文されている。

脚部A（第33図，114～116）

坏部と脚部との接合部から、「ハ」字状に開く形態を脚部A とする。脚部A は、端部が強く横ナデ調整されているが、そのとき内側から押えながらナデているので、外方へわずかに膨らみ気味になり、裾部外形線が微妙に波打っている。

脚部A は、脚の開き具合い、脚端部の調整手法の差異により細分できる。

1a．（115・116）。脚端部は端面を形成しているが、それほど肥厚していない。しかも、端面は斜め下方を向いている。

外面はヘラミガキ、内面上半は絞り目を残しており、下半は指による成形および調整が行われている。坏部と脚部は「連続成形手法」によって形成されており、坏底部は円板により充填されている。（115）は円板が剝離している。

1b．（114）。「ハ」字状に開く点は1a と同様であるが、1a と比較して、筒状部の形成がみられること、脚裾部が内湾気味に開く傾向にある。更に、端部が内側に肥厚し、あたかも内側の凸帯を貼付しているがごとき様相を呈する。この点が1a と異なるところである。また、この1b は、巾広の端面を形成しているが、真下に向いており接地面となっている。

成形・調整等は1a と同様である。

坏部A はこの脚部1b と組合っている。

2．（117・120）。脚部の形状は、1と類似している。ただ、柱部の形成がみられるようになり、その柱部が施文部として意識されてくる。3条程の沈線が1段（117）あるいは2段（120）めぐらされる例、2対の貫通孔が穿孔される例（120）もみられるようになってくる。

脚部外面はヘラミガキ、内面上半は絞り目、下半はナデ、端部は横ナデ調整が行われている。坏部と脚部は「連続成形手法」によって形成されており、坏底部は、円板により充塡されている。

坏部Bは、この脚部A 2と組合っている。

脚部B（第33図、118・119・122）

脚部Aは、接合部から外方へ膨らみ気味に、「ハ」字状に開く形態であった。脚部Bは、「ハ」字状ではあるが、裾近くが内湾気味に開く形態となっている。また、端部外側を摘まんで横ナデしているため、外方へ張り出し気味となり明瞭な稜を形成するようになる。脚中ほどのところに、2対の貫通孔を配置するのが通例となるが、凸帯をめぐらす例（122)もみられる。

脚部と坏部は「連続成形手法」により形成され、坏底部は円板により充塡されている。

脚部C（第33図、123）

細く長い支柱から、裾部付近になって急に開くラッパ口のような形状を呈する脚部を脚部Cとする。この脚部Cは、脚部A・Bのような「ハ」字状ではなく、外反して大きく開くところに特徴がある。したがって、脚部A・Bでは端面が下方あるいは斜め下方に向いていたが、脚部Cでは横（外方）に向くようになる。この端面には、横ナデによる凹線様の窪みがみられ、文様施文部として意識されている。柱部には沈線の描かれるのが通例となる。

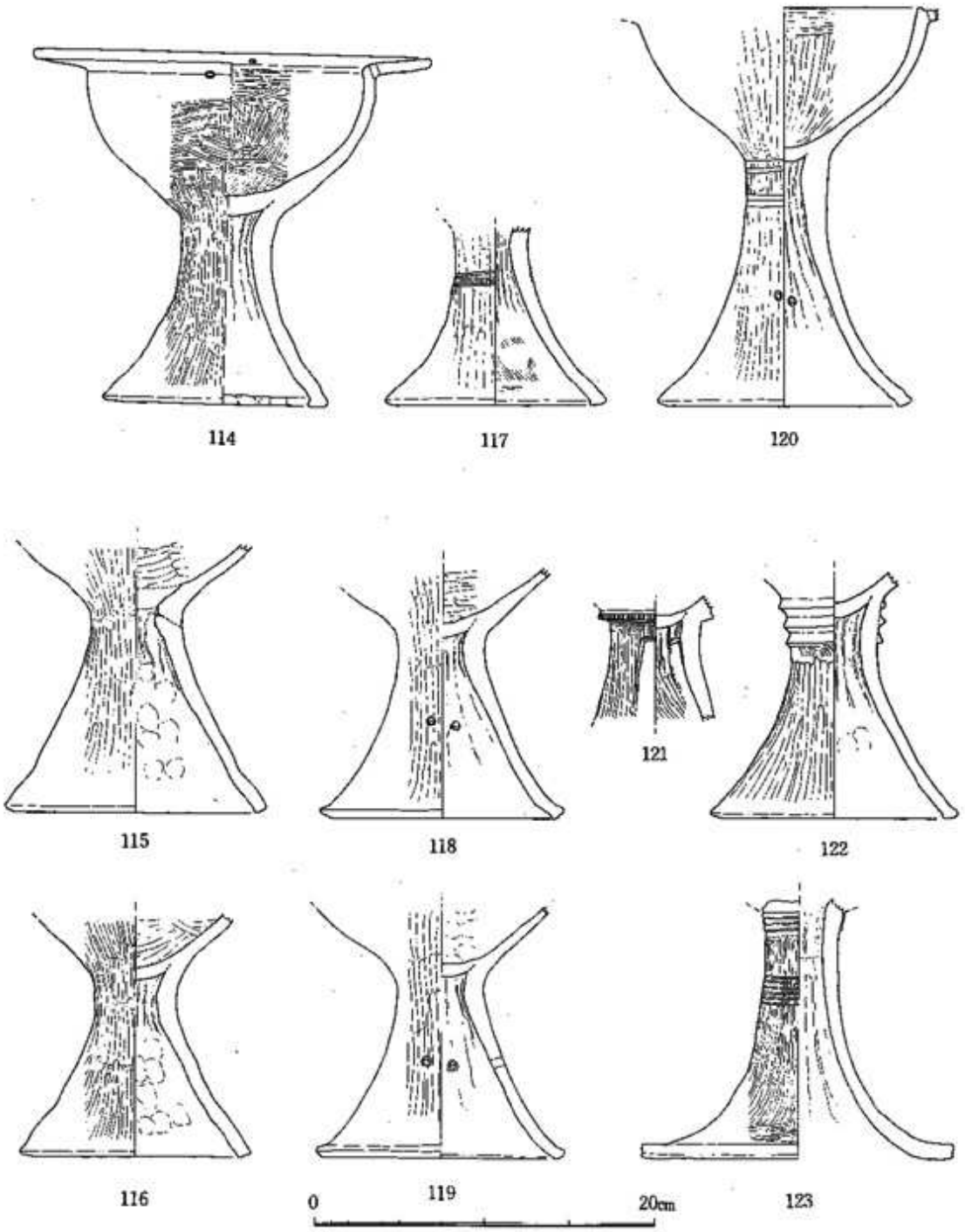
外面はヘラミガキ、特に外反している上面には横方向のヘラミガキを施しており、他所と区別している。内面は絞り目とナデ調整が行われている。

脚部D（第33図、121）

接合部からゆるやかに開く脚部である。接合部に刻目凸帯を貼付し、また、脚部には三方位に方形透孔がみられる。脚部AないしBに類似した形態と思われるが、小片のため断言できない。刻目凸帯と方形透孔が、他例にみられないので脚部Dとして分類しておいた。

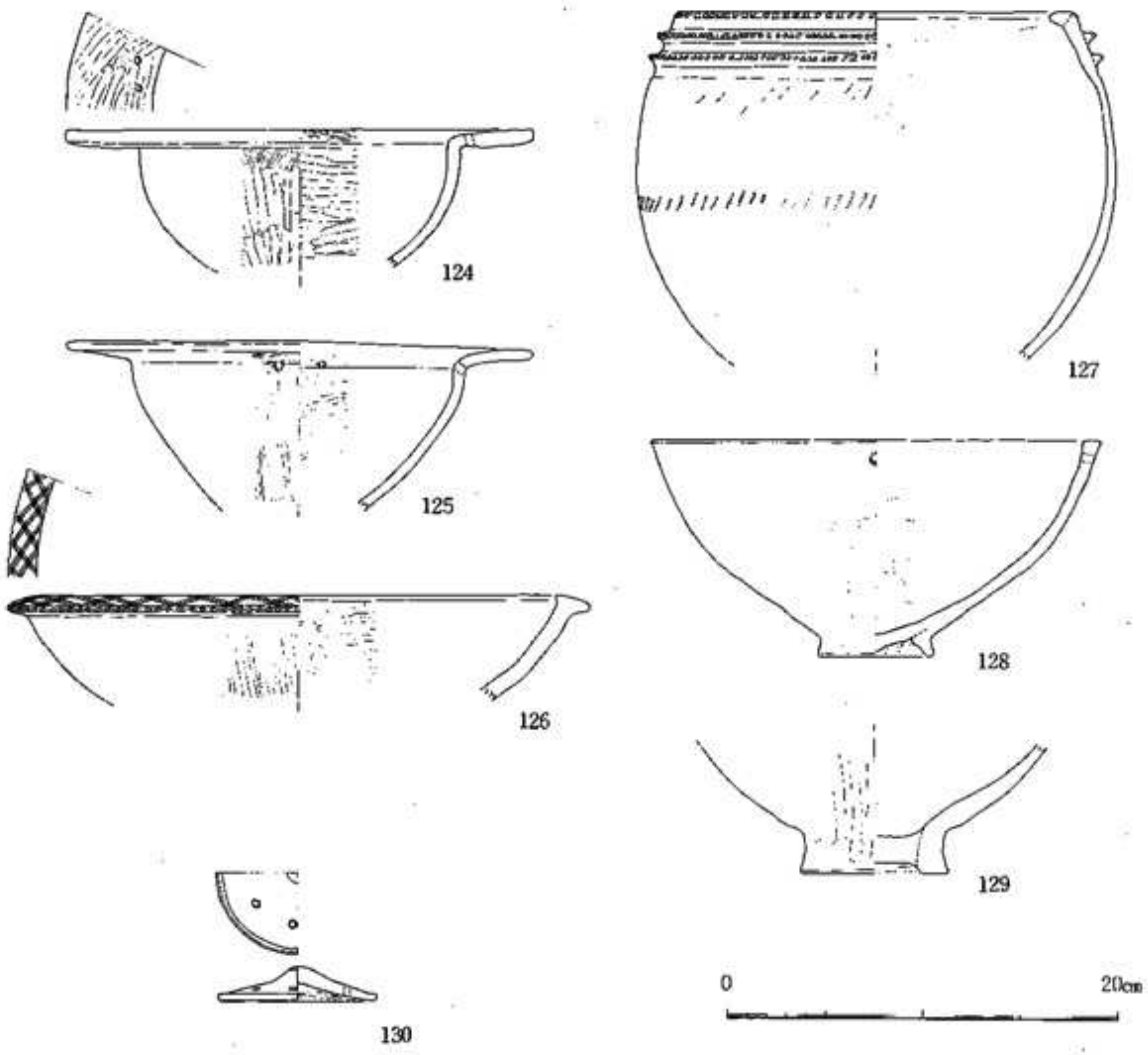
鉢形土器（第34図、127～129）

鉢形土器と識別される個体は少ないが、器形のわかるものが2個体出土している。A（128）は、低平な脚台と半球形の鉢部からなり、形態的に高坏の坏部に類似している。恐らく、南方ⅡC期に属すと思われる。B（127）は、球の上端を截断したような形態を呈し、胴部中位に最大径があり、口唇部分が内傾している。口唇部は、内側がやや肥厚しており端面を形成している。口縁部には刻目凸帯を貼付しており、胴部には櫛状工具による刺突文もみられる。この



第33図、弥生式土器実測図（南方Ⅱ式～中期後葉）

114 高坏脚部A_1b（南方Ⅱc） 115・116 高坏脚部A_1a（南方Ⅱc） 117・120 高坏脚部A_2（南方Ⅲc）
118・119・122 高坏脚部B（南方Ⅲa） 121 高坏脚部D（南方Ⅲa） 123 高坏脚部C（中期中葉～後葉）



第34図，弥生式土器実測図（南方Ⅱ～Ⅲ式）

124・125 高坏坏部A（南方Ⅱc）　126 高坏坏部C（南方Ⅲa）　127～129 台付鉢（南方Ⅱc）

130 釜形土器

鉢Bは、凸帯の状況などが壺C１のそれに類似しているので、南方ⅡC期に含めておきたい。

蓋形土器（第34図，130）

中央部が鈍く突起し、２対の貫孔が周縁に配置されている。貫孔は、外面から内面へと棒状工具により、焼成前に穿孔されている。中央部の突起は、粘土を付加したというよりも、内側から指で押え、盛りあがらせている。煤の付着なども認められず、大きさなどから壺形土器の蓋であったと思われる。時期は不明。

中期後葉（第27図，58　第28図，72・73　第32図，109・110）

発掘資料の中に、「前山Ⅱ式」[15]・「仁吾式」[16]に相当する土器も見受けられた。しかし、1970年の発掘資料および今回の資料を含めても、両者を分離できるだけの資料に恵まれなかった。

（58）は「蔵池式」[17]・「前山Ⅰ式」[18]にまで遡る可能性もあるが、中期後葉に含めて考えておく。（72）・（73）・（109）・（110）は「前山Ⅱ式」に相当するであろうが、（72）・（73）・（109）は口縁端部の肥厚・拡張がそれほど著しくないので、（110）より古相を示すものであろうか。

ともあれ、ここでは口縁端部の肥厚・拡張が顕著で、凹線文の発達した土器を中期後葉として一括した。

(3) 後期弥生式土器（第35図，131・132）

壺形土器（131）と手捏ね土器（132）とを後期の所産とした。いずれも、胎土・焼成とも良好で色調も異なり、他土器片と容易に区別された。

（131）は、肩部に２条沈線が描かれており、これは後期土器にみられる記号的文様の類ではないかと思われる。内面ヘラケズリの範囲から判断すると、後期でも前半に属すであろう。

（132）は、内外とも指ナデ成形・調整で仕上げられており器壁も薄い。時期の比定は困難であったが、手捏ね土器の頻出する後期の所産と考えた。

明らかな後期弥生式土器は、他に検出されていない。

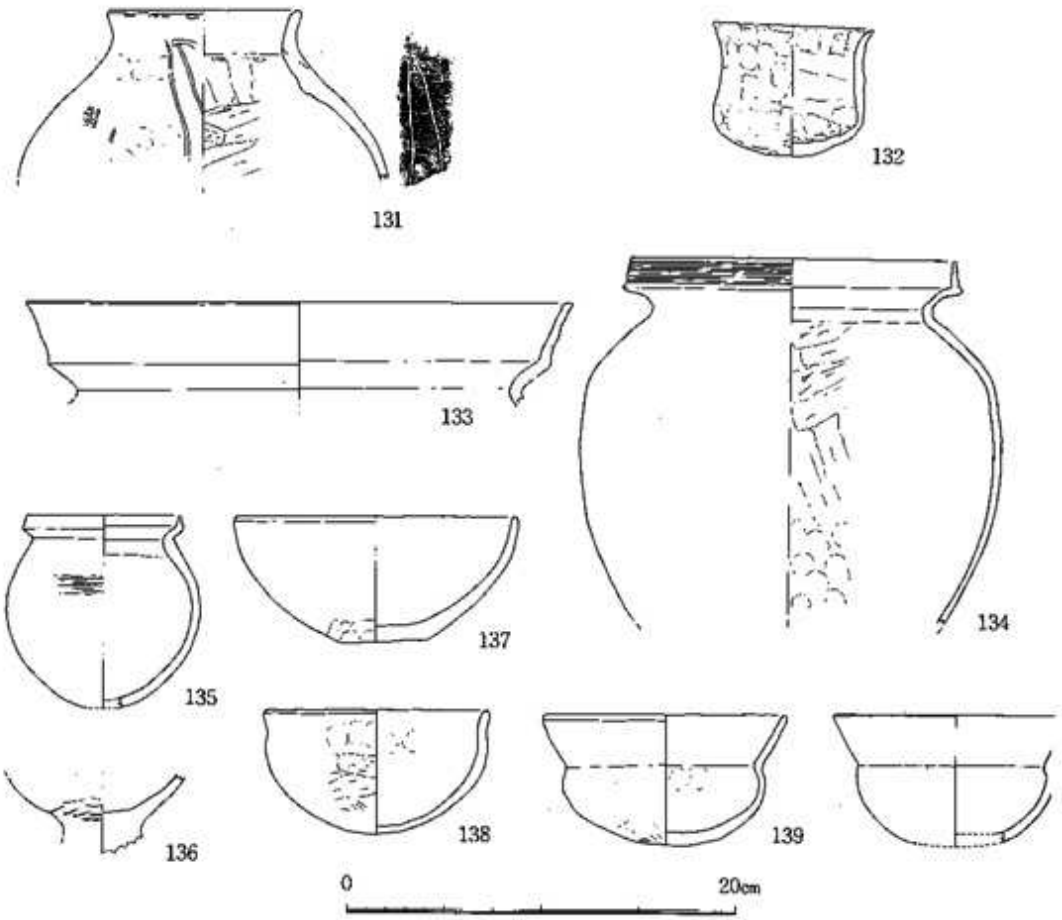
(4) 土師器（第35図，133～140）

壺（133・135）・甕（134）・鉢（137・138）・坩（139・140）・高杯（136）などが出土しているが、量的には多くない。

（134）は、肩の張り具合、胴形態から判断すると丸底のようであり、川入・上東遺跡の編年に基づくと「亀川上層」[19]を中心として、多少前後する時期と思われる。

他器種も、この甕と同時期の所産と考えてよいであろう。ただ、高坏（136）はつくりが粗く、若干時期が降る可能性もある。

個々、多少の時間差は認められようが、「亀川上層」併行期の土師器として一括しておく。



第35図．弥生式土器（後期）・土師器実測図

131・132 弥生式土器（後期）　133～140 土師器

(5) 南方（国立病院）遺跡出土土器編年試案

南方遺跡出土土器について、各器種・器形の変遷を明らかにする目的もあり、時期別または器種・器形別にその特徴を記述してきた。次の課題は、各器種・器形の共存関係を明らかにし、様式を設定することであろう。ただ、今回の発掘資料だけでは充分でない点もみられるので、1970年の発掘資料をも含めて南方（国立病院）遺跡出土土器の弥生時代前期・中期の編年（試案）を提示しておきたい。

ここでは、南方遺跡出土土器のうち、前期後葉から中期中葉までの時期を扱い、その間を南方Ⅰ～Ⅲの3期に区分し、更に各時期を3細分した。各々、南方Ⅰa・Ⅰb・Ⅰc……と表記する。従来公表されている土器型式との対比は、本書の第5章に掲載している「弥生式土器（前期~中期）編年対比表」を参照されたい。また、さきに詳述した中期弥生式土器の各器種・器形の所属については第1表に示しておいた。

以下、各期の内容を概説する。

南　方　Ⅰ　式

弥生前期の土器を南方Ⅰ式と呼称する。

甕形土器の口縁形態及び口縁部直下篦描沈線文の状況により、南方Ⅰ式を更に3期に細分する。南方遺跡では、この時期の壺形土器の資料に恵まれていない。したがって、各期の甕形土器に対応する壺形土器が、一体とのようなものであるのか明確にし得ない現況にある。その点、今後に検討の余地を残している。

南方Ⅰa

甕形土器の口縁部直下に描かれる篦描沈線が、2～3条に限られる土器の一群である。前述の前期中葉がこの段階に相当する。

今回の発掘では内容を充実させる資料に恵まれなかったが、壺形土器片と甕形土器片とが検出されている。

壺形土器は、削り出し凸帯を形成し、その上に篦描沈線が3条程描かれている。

甕形土器は、器壁が厚く重厚な印象を与え、口縁部あるいは口縁部下に最大径が位置しており、ゆるやかにすぼみながら底部に至る形態を示すと思われる。口縁部には「逆L」字形と「く」字形とが認められるようであり、口唇部に刻目の施されている例もみられる。また、削り出し凸帯ではないが、ヘラミガキにより形成されたやや盛りあがった部分に、篦描沈線が2～3条描かれた例もみられる。

篦描沈線が2～3条に限定されていること、削り出し凸帯が形成されていることなどの特徴

は、畿内第Ⅰ様式（中）段階の土器と共通性がみられる。[21]南方Ⅰａを畿内第Ⅰ様式（中）段階併行期と位置づける。

南方Ⅰｂ

甕形土器口縁部直下の篦描沈線が数条描かれることを特徴とする土器の一群である。前述の前期後葉（中）がこの段階に相当する。

1970年の発掘資料の中に、甕形土器口縁部直下の篦描沈線が２～３条程の土器と10条以上描かれている土器との中間的様相として、５～８条程描かれている土器が認められていた。[20]今回の発掘資料の中にも、篦描沈線が数条程の土器片が若干検出されている。

前期甕形土器は、口縁部直下に描かれる篦描沈線に注目すれば、時期が新しくなるにつれ多条化の方向へと変遷することが認められている。その篦描沈線が漸増していったにせよ、数本単位で急増していったにせよ、２～３条に限られていた段階から10条以上描かれる段階との間に、数条描かれていた段階の存在が想定されるのは当然と思われる。

この南方Ⅰｂは、南方Ⅰａと後述する南方Ⅰｃとの中間的段階として概念的に設定するものであり、この段階を設けることによって甕形土器の変遷がスムーズに辿れるのである。しかし、今のところ篦描沈線の条数以外には、Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅰｃの甕形土器を識別する指標はみあたらず、ただⅠｂ以降、口縁部形態に断面三角形口縁形態のものがみられ、また胴張り形態も顕著になってくると指摘できるだけである。

南方Ⅰｃ

甕形土器口縁部直下の篦描沈線が10条以上にわたって描かれることを特徴とする土器の一群であり、篦描沈線が櫛描文に変わる直前の様相を示している。前述の前期後葉（新）がこの段階に相当する。

甕形土器の特徴は、口縁部付近に最大径が位置する形態と胴部上位に位置し胴の張り出しが顕著な形態とがみられ、口縁部は「く」字形・「逆Ｌ」字形・断面三角形口縁形態などがみられる。また、篦描沈線文下に刺突文の施される例も顕著になる。

壺形土器は (6) を代表例とする。この壺形土器は形態上、弥生中期のものに類似する点もみられるが、貼付凸帯の多用されている点に注目して前期後葉に位置づけておきたい。

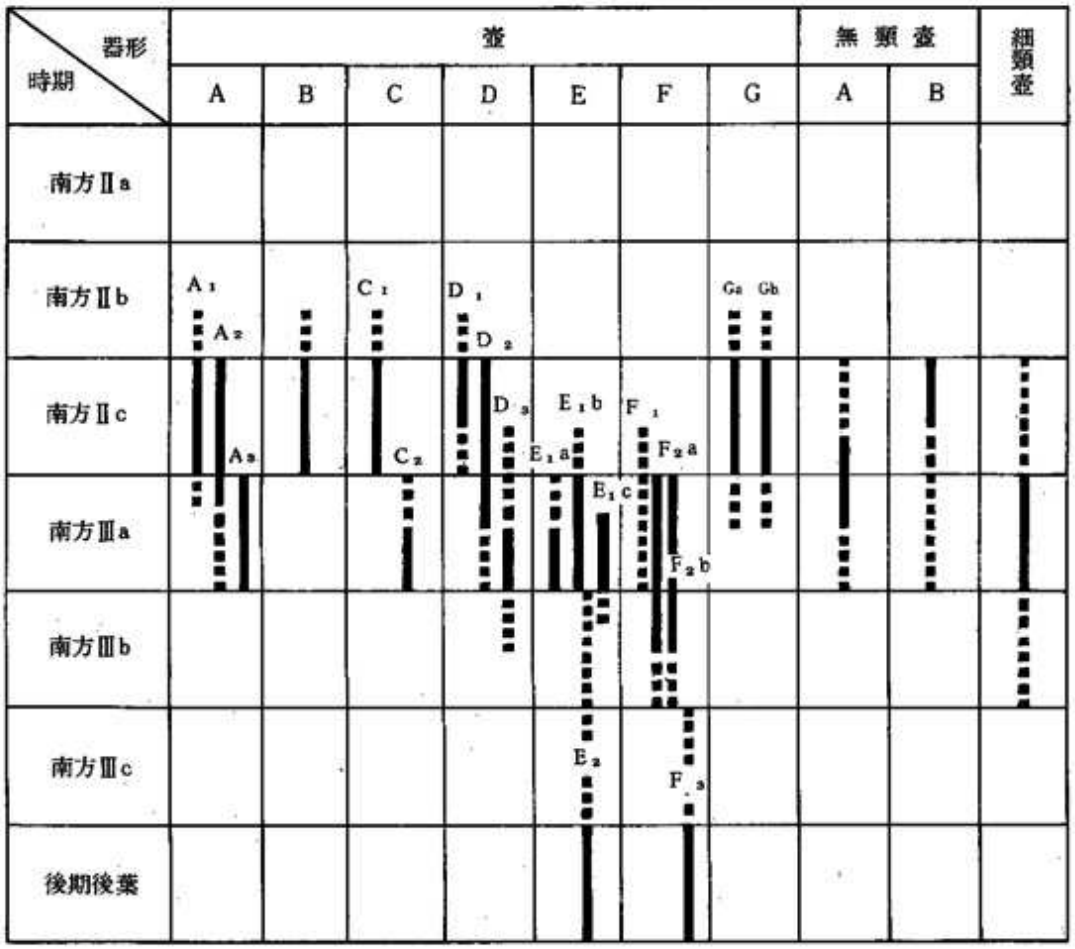
南　方　Ⅱ　式

畿内第Ⅱ様式併行期に相当し、『概報』で「南方Ⅱ式」と呼称した土器の一群である。今回、「南方Ⅱ式」を更に３期に細分した。

南方Ⅱa

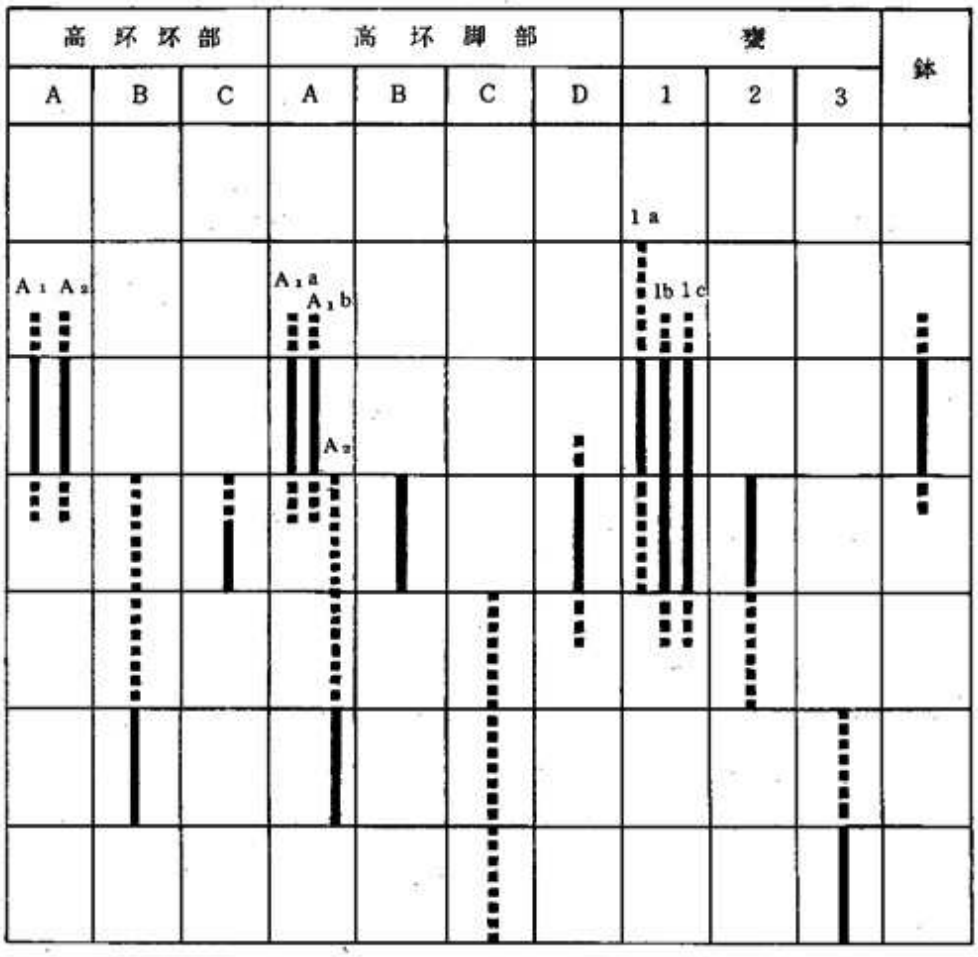
所謂「高田式」と呼称されている一群の土器である。未だ高田遺跡で得られた知見を補足・訂正する資料に恵まれない。今回の発掘においても、甕形土器は検出されているが、壺形土器は未確認である。

最近、南方Ⅱ式壺形土器の一部（付図1の⑦）を「高田式」の範疇に含める見解が提示されている。しかし、高田遺跡の報告における壺形土器は、口頸部の形態および頸部に貼付け凸帯をめぐらしているなど、むしろ前期的様相を示しており、高橋護氏が「高田式」の範疇に含めた壺形土器と高田遺跡出土壺形土器との間には、胴部に櫛描文の施文されていること以外に共通性がみあたらないように思われる。ともあれ、資料の少ない現況においては、高田遺跡で明らかにされた「高田式」の内容に留めておきたい。



第1表

南方Ⅱa の甕形土器は、南方Ⅰc で認められたように「く」字形口縁・「逆L」字形口縁・断面三角形口縁と口縁部形態により3分される。この現象は南方Ⅱb 以降では認められない。このことからも、南方Ⅱa は、南方Ⅰc の影響下に位置づけられるものと思われる。また、「瀬戸内系の甕」と指摘される断面三角形口縁甕形土器の胎土が他形態の胎土と比べ、赤味が強いとの印象を受けているが、資料が少なく断言できない。しかし、土器の移動を考えるうえで参考となるであろうこの問題は、資料の増加を待って、後日改めて言及したい。甕形土器の口縁部下から胴部上半にかけては、口縁形態にかかわらず、数条1単位の櫛描文が数段にわたって施文されるのが通例であり、更に櫛描文の下端に列点文の施される例も みられる。器形は、最大径が口縁部あるいは胴部上半に位置し、底部は南方Ⅰc よりも縮小化されているので、



第1表

見た目には不安定であるが、よりスマートな形態となっている。

南方Ⅰc と南方Ⅱb の過渡的様相を示しているのが、南方Ⅱa の特徴である。

南方Ⅱb

『概報』で報告された「南方Ⅱ式」壺形土器の一部を南方Ⅱb に編入させる。すなわち、卵形胴部に直立ないしやや外開き気味の頸部および水平に屈折する口縁部を有す形態（付図1の⑦）と、卵形胴部に頸部と口縁部とが明瞭に分離できない口頸部を有す形態（截首壺形土器）（付図1の⑥）の土器である。両者とも、胴上半部には櫛描平行文・波状文で飾られ、文様帯下端には列点文が施文されている。

今回の発掘資料中には、この時期の明らかな資料は検出されていない。壺Bの一部（36・37）壺D 1の一部（44）などが南方Ⅱb まで遡る可能性を残すだけである。

甕形土器に関しては、未だ摘出できていない状況であるが、今回の資料中の甕1a などは南方Ⅱb の有力な候補と思われる。

とにかく、南方Ⅱb の設定・評価は流動的であり、今後、資料の補強・検討の必要を残している。このような状況にもかかわらず南方Ⅱb を設定するのは、『概報』の「南方Ⅱ式」の土器のうち、器形・胎土が他と異なる様相を示していたこの一群の土器を分離し、一時期を設定しておく必要を感じたからである。

南方Ⅱc

南方Ⅱc は櫛描文様の盛行期にあたり、壺形土器の大部分は櫛描文様で飾られる傾向にある。また、器形的にも多様性を示すようになる。底部の張り出した筒形土器（壺G）やジョッキ形土器は、この時期の所産であろう。高坏形土器が器種構成の一員を占めるのも、この時期以降からである。

『概報』の「南方Ⅱ式」土器の大部分は、この南方Ⅱc に相当する。ただ、1970年の発掘資料では、やや胴張り気味の胴部に口頸部ラッパ状を呈する壺E（付図2の①・④・⑤）が顕著であったのに対し、今回の資料の中には、この壺E は稀少であった。一方、1970年の発掘資料中には、ほとんど検出されなかったやや胴張り気味の胴部に口頸部が漏斗状を呈する壺C が、今回では主流となっている。このことは、各々時期が異なるのではないかと思われるが、胴部の張り具合など類似するので同時期の所産と考えている。しかし、同時期であるにせよ、地点により出土する器形が異なるという新たな問題が生じてくる。いずれにせよ、今後の課題として検討の余地を残している。

壺A の系統は、1970年の発掘資料の南方Ⅱb に編入されている截首壺形土器（付図1の⑥）

に凸帯を貼付させ、口頸部を発達させたものと考えるので、上限を南方Ⅱb あるいは南方Ⅱc に位置付けるのが適当となろう。とすれば、壺A3 は口縁端面に篦描沈線を描くことが特徴となる南方Ⅲa に属すと思われるので、より古相を示す壺A1・2は南方Ⅱc あるいは、一部南方Ⅱb にまで遡るものと思われる。

無頸壺A・Bは、胴部に施文されている列点文や頸部に2対の貫通孔を配置するという土器製作手法の共通性から南方Ⅱc 、あるいは南方Ⅲa に比定されると思われる。ここでは、南方Ⅱc 期に編入しておくが、南方Ⅲa 期にまで継続していた可能性も残しておく。

壺Gの所属を決めるのは困難である。ただ、(74) の櫛描文から判断して、南方Ⅱb ～Ⅲa 期のいずれかの時期の所産と思われ、南方Ⅱc を中心とした前後の時期と把握しておく。(76)・(77) の底部の張り出した形態は、時期が異なる可能性もあるが、確証がないので同一時期と考えておく。

甕形土器に関しては全く比定できないでいる。ただ、甕2の一部が南方Ⅲb に比定可能であるので、より古相を示す1a ・1b ・1c などはこの時期に含まれるであろう。

高坏形土器は、『概報』で「南方Ⅱ式」と比定されている例[26]を参考にすると、脚部A1a・A1bがこの期に比定される。とすれば、脚部A1aと同個体を成す坏部A も南方Ⅱc となろう。

以上のように、南方Ⅱc 期は、器種・器形的にも前段階を凌駕する時期にあたり、豊富な内容を提示している。

南 方 Ⅲ 式

畿内第Ⅲ様式併行期に位置づけられ、『概報』で「南方Ⅲ式」と報告されている土器の一群である。今回検討を加え、更に3期に細分する見通しをたてた。南方Ⅲa ・Ⅲb ・(Ⅲc) と呼称するが、未だ流動的であることを断っておきたい。

南方Ⅲa

かって、南方遺跡 出土として紹介され、「南方式」の代表例と目された壺形土器[27]と共通性のみられる土器群を南方Ⅲa とする。

壺A_3・壺C_2・壺D_3・壺E1a ・同1b ・同1c ・壺F_1・同2a ・同2b ・細頸壺 ・ 高坏坏部C ・高坏脚部B ・同C などは、南方Ⅲa と比定し得るであろう。

この時期の壺形土器の特徴は、南方ⅡC と比べ、胴張りが強くなり、胴部最大径位置が急に屈折するかのごとく印象づけられる。また、口縁端部が肥厚して巾広の端面を形成している。その端面が文様施文部として意識され、文様の描かれている例が多い。しかし、未だ篦描沈線の段階であり、凹線文はみられない。胴部には南方Ⅱc にみられた櫛描文様の描かれる例がい

まだにみられる。ただ、波状文・平行文に加えて斜格子文が新たにみられるようになる。しかし、この斜格子文様のみられる土器の口縁部には、篦描平行沈線がめぐらされているので、南方Ⅲa の中でも新相を示すものかも知れない。とすれば、同様の櫛描斜格子文で飾られる高坏坏部Cもこの時期に比定し得るであろう。また、篦描きではあるが同じ斜格子文様という共通性から壺D 3も、南方Ⅲa に含まれる可能性があろう。壺D3 が南方Ⅲa と位置付けるならば、より古相を示す壺D2 は、南方Ⅲa でも前半に、あるいは南方ⅡC に相当するものと思われる。

壺Ela は、全体形が不明で時期比定の困難な個体であるが、広島県艮神社遺跡出土土器の一部に器形の類似する土器がみられる。壺Ela と艮神社遺跡出土土器を同形とみなせば、その諸特徴から判断して、壺Elaは、南方Ⅲa に所属させられるであろう。[28]

壺Elaに用いられている縦に棒状浮文を貼付する手法は、壺C2 とも共通性がみられる。また、新邸貝塚出土資料中にも脚部に棒状浮文を貼付した高坏形土器がみられるが、これも南方Ⅲa に比定され、その高杯形土器と形態的に類似性のみられる南方遺跡出土高坏脚部B も、南方Ⅲa に比定し得ると思われる。[29]このことは、新邸貝塚での所見と壺C の変遷観とも矛盾しない。

壺F は、南方Ⅱc にも一部出現していたと考えられるが、南方Ⅲa の段階になって顕著になる器形のようである。確証がないのでとりあえず、ここでは南方Ⅲa を中心とした前後の時期に盛行していた器形と把握しておきたい。

以上述べてきたように南方Ⅲa は、器形・文様等に多様性が窺われ、将来、更に細分される可能性を残していると思われる。

南方Ⅲb

「蔵池式」と呼称される一群の土器である。ここで採用している「蔵池式」とは、高橋護氏の規定に基づいている。[30]すなわち、「蔵池式」は、凹線文の初現段階であり、壺形土器の口唇部を凹線文で装飾することが特徴のようである。この手法は、「新邸式」にみられた口唇部に平行沈線文をめぐらす手法の発達したものと位置づけられ、南方Ⅲa の次段階の様相としても矛盾ないように思われる。

甕形土器は、平底であり、口縁部が強く横ナデ整形され、口縁部末端が丸くふくらんだ形状を呈しているとのことである。[31]

今回の調査では、この時期に比定される明瞭な土器は検出されていない。わずかに、甕形土器（94）に、上記特徴との類似点がみられる程度である。

甕形土器（94）と高橋護氏の図示した甕形土器とを比べてみると肩の張りの弱いことが指摘されるが、[32]口縁端部が上方に引き上げられている程丁寧な横ナデ調整が施されており、甕1 と

比べて、より発達した段階を示していることは明白である。甕2（94）を「蔵池式」に類似する形態として南方Ⅲb に比定したい。

（南方ⅢC）

1970年の発掘資料により「蔵池式」の細分の可能性が示唆されていた。[33]（南方ⅢC）は、そのうちの新段階を指す。

南方Ⅲb を前述のように規定した以上、「前山Ⅱ式」に代表される凹線文の盛行期の前段階として、「凸帯凹線文」の形成段階を想定するのは当然の帰結と思われる。（南方ⅢC）は、「凸帯凹線文」の多用[34]される段階となるであろう。ただ、今回の発掘資料においてもこの段階の存在を確証するに至らなかったので、あくまで展望的に設定しておく。

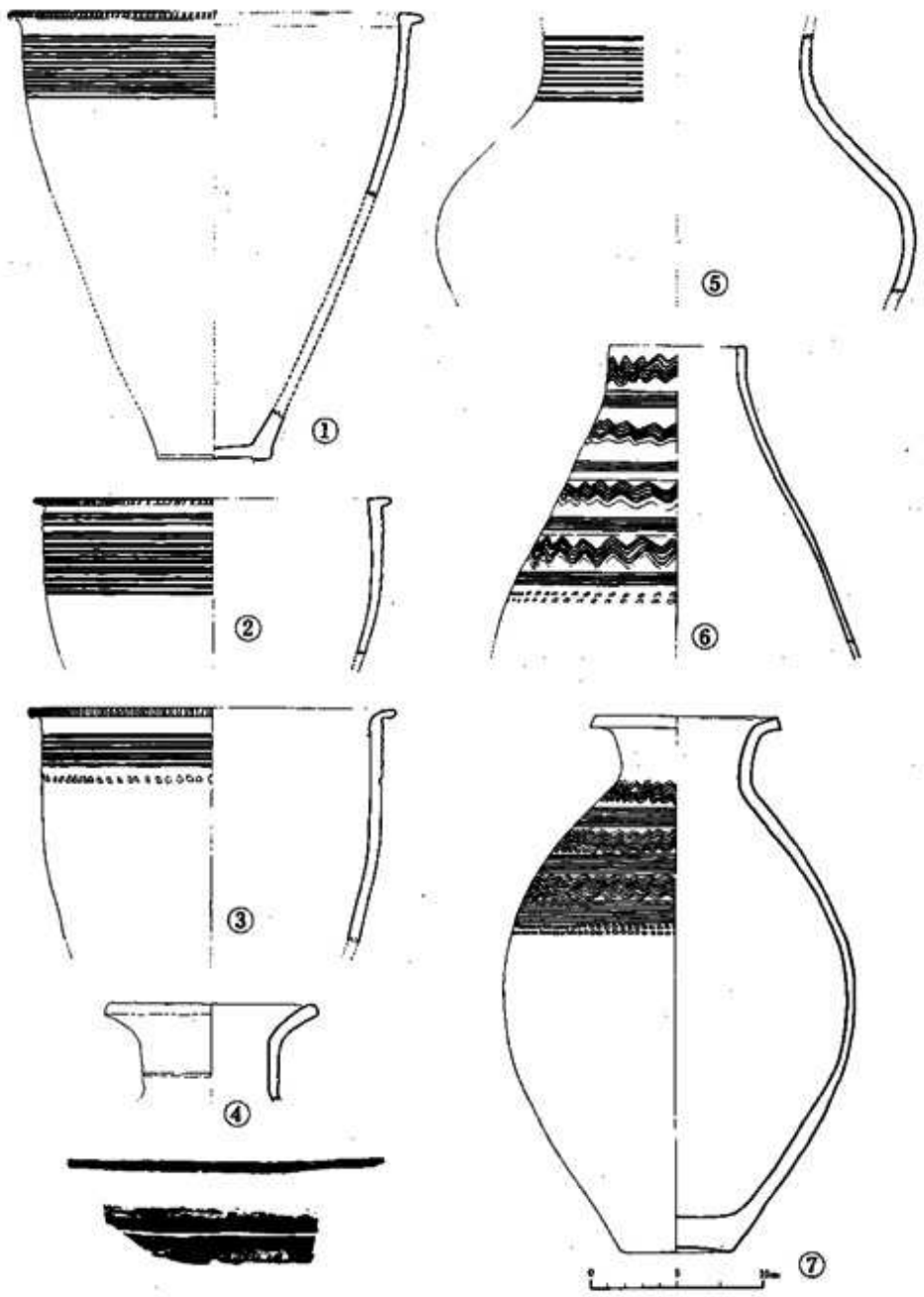
高坏（117）・（120）を(南方ⅢC）に含めているが、これは、高本遺跡[35]出土土器の一部に（120）と共通する器形の土器がみられ、その共存遺物の編年的位置付けがここで述べている（南方ⅢC）に相当する段階と判断したからにすぎない。

いずれにせよ、1970年の発掘資料の整理が完了した時点で、改めて検討を加え言及したい。

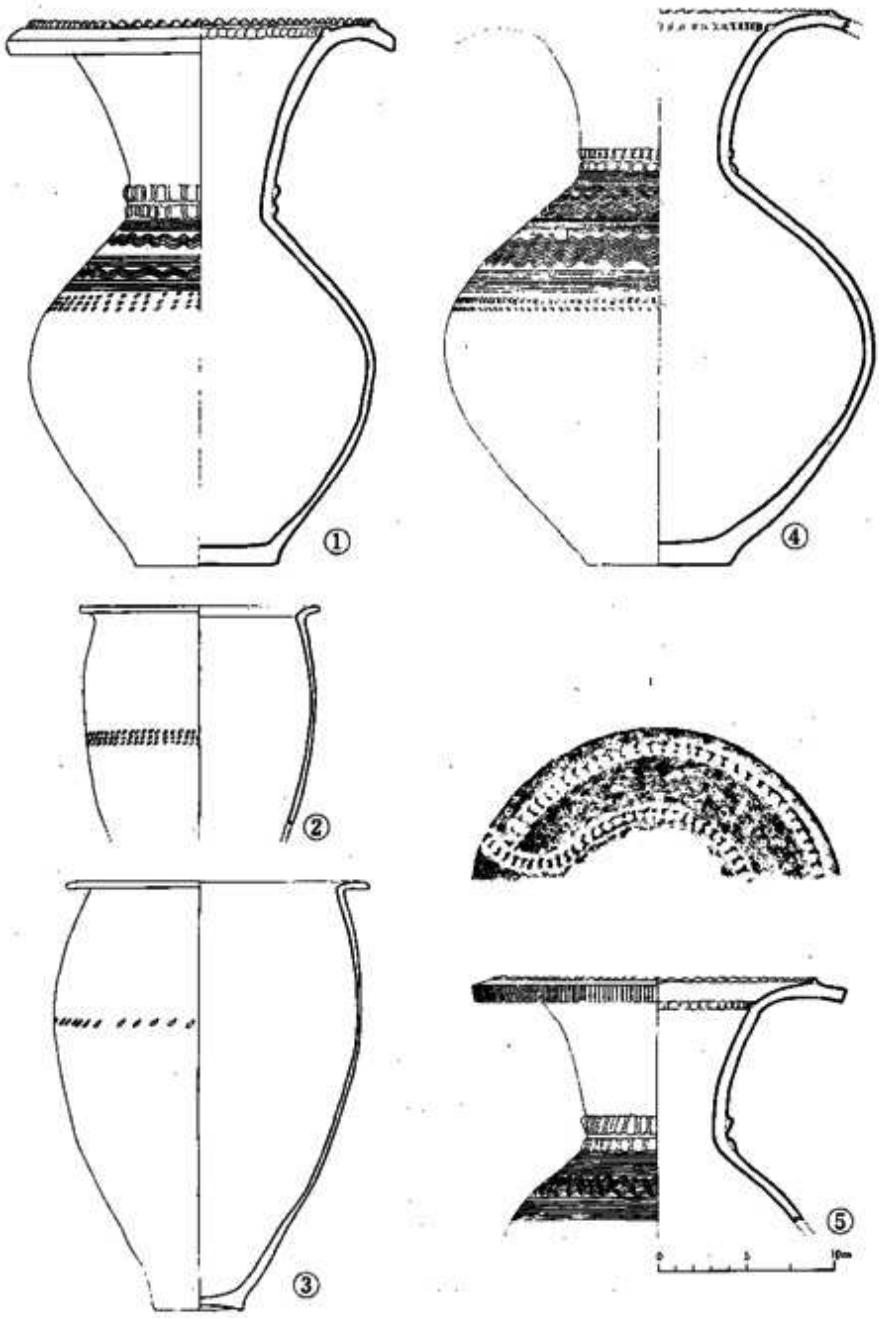
以上、各期を説明してきたが、内容規定や時期設定の曖昧なものなど不備な点も多々含まれていると思われる。その点に関しては、以後、1970年の発掘資料の完全整理および周辺遺跡との対比研究を進め、不備な点を補い、誤りを正していきたい。

そのためにも、忌憚ない叱正、批判を願って已まない。

（神谷正義）



付図1　弥生式土器実測図（『南方遺跡調査概報』による）



付図 2　弥生式土器実測図（『南方遺跡調査概報』による）

出　土　土　器　一　覧　表

弥生式土器（南方Ⅰ式）　〔第21図，図版第23〕

器形	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	1		細片のため全体形は不明であるが、壺形土器の肩部破片と思われる。 器外面には、削り出し凸帯が成形され、その凸帯上に、少なくとも2条以上の箆描き平行沈線が描かれている。	器内外面とも風化のため磨耗著しく、調整痕等の観察は困難である。 器外面は、恐らくヘラミガキであろう。沈線文帯付近は特に丁寧にヘラミガキが施され、凹面をなしている。	胎土、微砂を多量に含有。 色調、明褐色ないし赤褐色。 出土、B区北東土器溜。
壺	2		細片のため全体形は推測困難であるが、壺形土器の肩あるいは頸部破片と思われる。 器外面には、現状によると、箆描き平行沈線文帯が二段形成されている。	器内面は、まず、荒い刷毛目調整を行ない、のち細かい刷毛目で調整している。 器外面は、荒い刷毛目を施した後に、部分的にナデあるいはミガキを行なっている。 沈線の断面観察によると、施文具は、器面に対し下方斜めから当てて描いている。	胎土、1～2㎜大の砂粒（石英、長石etc）を含む緻密で良質の粘土である。 焼成、良好堅緻。 色調、淡黄褐色を呈し、一部に黒斑がみられる。 出土、A区土坑C。
甕	3		口径が最大径となり、ゆるやかな曲線を描いて底部に至る安定した甕形土器の破片と思われる。 口縁部は「く」字形となり、口唇部には刻目が施されている。 頸部下には、浅い箆描沈線が3条めぐらされている。 肉厚の堅固な土器である。	器内外面とも、ヘラミガキであるが、内面は斜方向のヘラミガキが施されている。 口縁部は指成形後、ナデ調整を行ない、口唇部に箆状工具で刻目を施している。	胎土、1～2㎜大の砂粒（石英、長石）を若干含む良質の胎土である。 焼成、良好堅緻。 色調、淡黄褐色を呈している。 出土、A区土坑C。
甕	4		口径が最大径となる甕形土器の破片と思われる。 口縁部は屈折が強く、「逆L」字形となっているが、前期後葉にみられる「逆L」字形とは印象が異なる。 頸部下には箆描沈線が3条めぐらされているが、雑に描かれており、平行とならず不揃いである。	器内面は風化のため調整痕等の観察が困難であるが、器面が平滑化されているのでヘラミガキが施されているのかもしれない。口縁直下の刻目部分に浅い箆描き沈線がめぐらされていると思われる。 器外面はヘラミガキが施され、特に沈線文帯の周縁は丁寧に行なわれているので、沈線文部分が周囲からやや盛りあがった状況を呈している。	胎土、石英・雲母細片および角礫等を含む。 焼成、良好。 色調、淡明褐色。 出土、B区北東土器溜。
甕	5		細片のため全体形は不明であるが、口径が最大径となる甕形土器の破片と思われる。 口縁部は、残存状況から判断すると「く」字形のようである。 頸部下には、箆描き沈線が7条めぐらされている。	調整痕等は、風化および小片のため、観察不能である。	胎土、微砂および1～2㎜大の砂粒（石英、長石etc）を若干含む。 焼成、良好。 色調、黄褐色。 出土、C区土坑C。

器形	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	6	口径、不明 底径、6cm 最大径、14.6cm 底径、5.8cm 現高、13.5cm	やや偏平形の胴部となだらかな肩、頸部から大きく外反する口縁部を有す壺形土器である。 口縁部内側には、1ケ所開口した凸帯が貼付されている。また、頸部に圧痕文ある凸帯が貼付され、胴部には刻目の施された凸帯が1条、更に、胴部最大径付近にも刻目ある凸帯が2条貼付されている。 底部は、わずかに上げ底となっている。	器面の風化著しく、調整痕等の判別困難であるが、口縁部および頸部内面は、指頭圧痕がよく残されている。また、外面は、胴下半にヘラミガキの痕跡が観察される。 胴、肩、頸部付近に粘土紐の継目が観察され、その部分に凸帯がめぐらされている。凸帯は、まず沈線が描かれ、後にその沈線の上に貼付されている。刻目は最後に施される。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を含む。 色調、淡黄褐色、胴中程に2ケ所黒斑が認められる。 出土、B区北東土器溜。 特記、小期土器の器形と類似する点も認められるが、凸帯の盛行期の土器と判断し前期に含めた。
鉢(?)	7		浅鉢形土器の口縁部と思われる。 口縁部は「く」字形をしており、口唇部はヘラミガキが施され、面を形成している。 器壁の厚い、重厚な土器である。	器内外面ともヘラミガキ調整が施されている。ただ、口縁部内外面は、指頭成形による凹凸を残こしている。特に外面は、指で強く押えたかナデたようであり指の単位が凹みとなって認められる。指頭成形後は、ヨコナデが施されているようだ。	胎土、角礫、砂粒、石英を多く含み、雲母細片も若干みられる。 焼成、良好堅緻。 色調、黒褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、細片のため時期認定が困難であったが、胎土および成形・調整手法の特徴などから前期、特に南方ⅠCに含めた。しかし厳密なものではない。
鉢(?)	8		細片のため全体形は不明であるが、「コップ」形の深鉢形土器の口縁部と思われる。 器外面口縁部下には、羽描沈線が7条描かれている。 口縁端部は丸くおさめられている。	調整痕は風化のため観察困難であるが、器内外面ともヘラミガキと思われる。 沈線は粗く引かれている。	胎土、石英、長石、雲母細片など砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、淡褐色、口縁端部に一部黒斑がみられる。 出土、B・C間土器溜。 特記、羽状き沈線が描かれているので前期に含めたが、胎土は他の前期土器とは異質な印象を受ける。
甕	9		口縁部は「く」字形であるが、屈折が強く「逆L」字形に類似した形状となっている。 口径が最大径となる甕形土器であろう。 口縁部下には、羽描き沈線が6条以上描かれている。	器内面は、丁寧な横方向のヘラミガキが施され、器外面も同様である。ただ、器外面の場合は、縦方向のナデ（?）の痕跡が一部みられる。ヘラミガキ以前の調整痕を示すものであろう。 羽描き沈線は、幅は広くないが、深く描かれており、溝肩がしっかりしている。	胎土、微砂、1～2mm大の砂粒を含む良質の胎土である。 焼成、良好堅緻。 色調、明赤褐色。 出土、B区北東土器溜。
甕	10		口縁部に凸帯を貼付し、断面三角形を呈する。その凸帯の先端部には、爪による刻目を付している。また口縁部下には、途中途切れているが、雑な羽描き沈線が描かれている。	口縁部上面は横方向のヘラミガキが施こされている。恐らく他部分もヘラミガキが行なわれていたと思われる。口縁端部には、刻目が付され、口縁部下にも羽状き沈線が、現況で1条描かれている。 凸帯下端には、凸帯圧着時の押圧痕が顕著にみられる。	胎土、長石、石英、雲母片などの砂粒を多量に含有。 焼成、良好。 色調、器外面は暗褐色、内面は明褐色を呈している。 出土、B区包含層上部。

器形	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	11	口径、約34cm	「逆L」字形口縁を持ち、肩上半に最大径を有す壺形土器である。しかし、口径と最大径にはとんど差がない。 口縁部直下に、幅広の荒描き沈線が9条描かれ、口唇部には同一施文具により、縄目が施されている。また、口縁部内面直下にも、横方向の荒描き沈線が粗く、1条引かれている。	器内外面は、ヘラミガキの単位は認められないが、平滑化されているのでヘラミガキが施されていたと思われる。 口縁部上面は、横方向のヘラミガキが行なわれている。 口縁部に縄目が認められる。 器壁が厚く、つくりの丁寧な土器である。	胎土、1~2mm大の角礫、石英、長石、雲母片などを含む良質の胎土。 焼成、良好。 色調、乳灰色ないし乳灰褐色、下半は黒色を呈している。 出土、B・C間上器溜Pit底面上。
壺	12		「く」字形口縁であるが、屈折強く、「逆L」字形に近い形態となり、口径が最大径となっている。 口縁部下には、荒描き沈線が11条程描かれており、沈線文下端に竹による列点文が施されている。	器内外面ともヘラミガキ調整が行なわれているようであるが、風化のため詳細は不明である。 口縁部はヨコナデされ、微妙な凹凸面が生じている。	胎土、砂粒多量含有。長石、石英、雲母細片も若干含む。 焼成、良好堅緻。 色調、淡乳褐色。 出土、B区北東上器溜。
壺	13		「く」字形口縁を持ち、口径が最大径となる壺形土器である。 口縁部直下から荒描き沈線が描かれ、現状で9条認められる。沈線は、深く明瞭に描かれている。	器内外面とも丁寧なヘラミガキ調整であり、口縁部上面には一部刷毛目状の痕も認められる。刷毛目整形→ヘラミガキ調整かと思われる。 口縁部下面はナデが施されている。口縁部が、丸みをもって外反するのはナデのためであろう。	胎土、2~3mm大の角礫を若干含み、砂粒を多量に含んだ胎土。 焼成、良好。 色調、明赤褐色。 出土、B区北東上器溜。
壺	14		「く」字形口縁を持ち、口径が最大径となる壺形土器。 口縁部直下には、浅い荒描き沈線が、現状で12条認められ、口唇部には、斜めの列点文が施されている。	器内外面は、横方向のヘラミガキ調整が行なわれている。 口縁部下には、指頭圧痕が顕著であるが、これは、荒描き沈線を一部消去しているので、沈線の後に施されたものである。恐らく、口唇部列点文を施文した時の跡であろう。	胎土、微砂、2~3mm大の砂粒を若干含む良質の胎土。 焼成、良好堅緻。 色調、暗褐色。 出土、13区包含層上部。

弥生式土器（南方Ⅱ式）　〔第22図，図版第24〕

器形	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕	15		口縁部に凸帯を貼付し、断面三角形の形状を呈している甕形土器である。いずれも、口縁部分の小片のため全体形を復原し得ないが、胴部上半に最大径が位置しているようである。 口唇部には浅い刻目（15）、刺突文（16）などが施されるのが通例であるが、無文（17）の例もみられる。 口縁部直下には、櫛描文が描かれている。 15・17は薄手のつくりである。	口縁部上・下面にナデ状の痕跡がみられる。凸帯を張み、ナデ調整を行なったものであろう。その後、刻目、櫛描施文を行なっている。	胎土、石英・長石・雲母片などが含まれ、良質である。 焼成、良好。 色調、暗褐色ないし明褐色。 出土、B区包含層上部。
甕	16			風化のため調整等の観察は困難であるが、凸帯下面にはナデが施されている。 櫛描文は5条／0.8cmを1単位とし、現状で2単位まで認められるが、この櫛描文はナデにより一部消されている。櫛描文→凸帯調整の順に作業が行なわれた。	胎土、砂粒を多く含有。 焼成、良好。 色調、器外面は赤褐色、内面は淡褐灰色を呈す。 出土、B区北東土器溜。
甕	17	口径、約24cm		口縁部には凸帯が貼付されている。凸帯は断面が台形を呈しており、下方に突起した形態をとる。凸帯上面にはナデ調整が施されていたと思われ、ゆるやかな凹面が形成されている。 口縁部直下には、8条／1.2cmを1単位とする櫛描文が、現況で4～5段にわたって描かれている。	胎土、砂粒・石英・長石・雲母片等を含有。 焼成、普通。 色調、明赤褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、「逆L」字形口縁とも思われるが、断面が台形を呈していること、また凸帯貼付の跡が明瞭なことなどから「断面三角」形口縁の範疇に含めておく。
甕	18	口径、約22cm	18・19は、「逆L」字形口縁形態の甕形土器と思われる。 18は最大径が胴部上半に位置し、19は口径が最大径となっている。 両者とも、口唇部には刻目がみられない。 櫛描文は口縁部直下から施文されており、その下端に列点文、刺突文の施される例（19）もみられる。 18は薄手のつくりである。	風化著しく調整痕等の観察は困難であるが、口縁部下面はヨコナデ調整されており、口縁屈折部には押圧痕が認められる。 口縁部直下から、5～6条1単位の櫛描文が現況で、3段施文されている。	胎土、微砂を多量に含有しており、良質である。 色調、器外面は暗褐（黒）色、内面は暗黄褐色。 出土、B区北東土器溜。
甕	19	口径、約22cm		胴部内面は、横方向のヘラミガキ調整。 口縁部は、横方向のヘラミガキ、後にヨコナデ調整のようである。口縁部下面は明瞭なヨコナデである。 胴部上半は5条／1.1cmを1単位とする櫛描文が、4～5段にわたって施文されており、文様帯下端には棒状施文具により、右斜め上方向から押圧した刺突文が認められる。	胎土、微砂・石英・長石などを含み、良質の胎土である。 焼成、良好。 色調、乳灰白色（褐色をやや帯びる）。 出土、B区北東土器溜。
甕	20		「く」字形口縁形態の甕形土器と思われるが、鉢形土器の可能性もある。	器内面および口縁部の一部は、横方向のヘラミガキ。口縁部はヨコナデ調整である。 口縁部下には、縦方向の刷毛目或形後、1.3cm幅1単位の櫛描文が3～4段にわたって施文されている。	胎土、微砂多量含有、良質。 焼成、良好。 色調、器外面は乳白褐色、内面は乳白色。 出土、B区北東土器溜。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕		21	口径、約20cm	「く」字形口縁の甕形土器である。文様帯部分が、わずかに張っているが口径を超えることはない。 口縁部下には櫛描文が数段にわたって施され、櫛描文帯下端には刺点文の施されるのが通例である。	器内面および口縁部上面は、ナデかヘラミガキか不明であるが平滑化されている。口縁部とくに下面はヨコナデ調整され、ゆるやかな凹面を形成している。 胴部の櫛描文は、軽く施されている。	胎土、微砂および石英・長石・雲母片などを含む。 色調、灰白褐色ないし暗褐色。 出土、B区包含層上部。
甕		22	口径、14.5cm 胴径、13.2cm		口縁部は、ヘラミガキ後、ヨコナデ調整を行なっているようであり、口縁部下面にナデによる凹面が観察される。 口縁部下には、7条/1.7cm1単位の櫛描文が3段程描かれ文様帯を構成している。文様帯下には、棒状施文具により右側から斜めに押圧されたD形の刺点文が施されている。現状では1列の刺点文であるが、2列の可能性もある。	胎土、1～2mm大の角礫・石英・長石を含有。 色調、乳白褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部が下方に屈折しているが、「く」字形口縁の強調された形態と思われる。
壺	A_1	23	口径、14.6cm 胴径、13.2cm	口縁部からわずかに狭まって頸部となり、ゆるやかな曲線を描いて胴部に至る形態である。 口頸部には凸帯が2～3条めぐらされている。 口縁部がほとんど開いていないこと、および凸帯が口縁部直下にめぐらされていることが、23・24の特徴の1つである。 胴部外面には、波状文・平行文を交互に配する櫛描文が施されている。	器内面には指頭圧痕および指ナデが認められ、口縁部・口頸部は横ナデ調整されている。そのため頸部が、内側と上方にそれぞれ摘みあげられている。外面は、縦方向の刷毛目後、櫛描施文を行なっている。 口頸部には凸帯が2条めぐらされており、凸帯、口頸部に爪による刻目が付されている。また、凸帯貼付後に櫛描施文されている。	胎土、微砂含有。 色調、器外面は黄茶褐色、内底は灰褐色。 出土、B区北東土器溜。
壺	A_1	24	口径、14.5cm 胴径、13.2cm		器内面胴部以下は荒い刷毛目が施され、頸部間はナデあるいはヘラミガキが施されている。口縁端部は内側を摘み横ナデしている。外面は刷毛目調整後、櫛描施文されている。 口頸部には3条の凸帯をめぐらしており、口頸部は爪による刻目、凸帯は指圧痕を付している。	胎土、微砂多量含有および1mm大の角礫を若干含む。 色調、淡黄茶褐色。 出土、B区北東土器溜下層。

弥生式土器（南方Ⅱ～Ⅲ式）　〔第23図，図版第25・26・27〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	A_1	25	口径、12.2cm 頸径、10.4cm 最大径、23.3cm 底径、8.2cm 器高、41.8cm	胴部最大径が中位に位置しており、口頸部から胴部、底部へとなだらかな曲線を描く卵形を呈している。 口縁部はやや外反した波口であり、刻目付凸帯が2条めぐらされている。口唇部には刻目が付されていない。 頸部から胴部上半にかけて、櫛描平行文・波状文3段・平行文・羽による圧痕文の順に施文されている。 底部はやや上げ底。	底部内面および胴部内面下半は指ナデ成形され、上半は所々指頭圧痕がみられるが刷毛目調整されている。口頸部は横ナデされており、口縁端部内側が摘みあげられ肥厚している。 外面は胴部$\frac{1}{3}$下半は縦のヘラミガキ、胴中央部までは横のヘラミガキ、頸点文から上半は縦方向の刷毛目調整である。 口頸部は横ナデが施されている。	胎土、1～2mm大の角礫および砂粒を含む。良質。 焼成、良好。 色調、器外面は灰白褐色を呈し、胴下半に黒斑がみられる。内面は灰褐色。 出土、B区北東土器溜。
壺	A_2	26	口径、17.6cm 頸径、14cm 最大径、36.3cm 器高、54.2cm	25とほぼ同形であるが、縦に長い卵形となっている。口縁部も開き具合が増し、端部が肥厚してくる。 胴部上半には、櫛描平行文、2段の波状文が交互に施文され、下端に列点文が施されている。 底部はやや上げ底のようである。	胴内面は荒い刷毛目調整であるが、上半になるにつれ指頭圧痕が顕著にみられるようになる。頸部・口唇部は横ナデが施されている。 外面は刷毛目調整後、胴下半を縦・横方向にヘラミガキを行なっている。上半には櫛描文が描かれているが、凸帯貼付→櫛描→凸帯刻目の順に行なわれているようである。列点文は板状施文具である。	胎土、1～2mm大の角礫および微砂を含む。 焼成、良好。 色調、淡赤茶褐色。 出土、B区北東土器溜。
壺	A_1	27	口径、17cm 頸径、11cm	A_2グループの中では口縁部の開き具合いが大きい。しかし、口縁端部は肥厚していない。 凸帯貼付後、摘み、ナデられており、断面三角形状を呈している。	頸部内面に横方向のヘラミガキが施されている。 口縁部内面は、丁寧な横ナデが3単位行なわれている。 外面は刷毛目調整であるが、口頸部は横ナデが施されている。口縁端部内側が上方へ摘まれ、口唇部を形成している。 凸帯・口唇部には羽による刻目が付けられている。	胎土、1～2mm大の角礫および微砂を含む。 焼成、良好。 色調、淡明白赤褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部のつくりは後出的な様相を示すようでもあるが、端部が肥厚していないことからA_1に含めておく。
壺	A_2	28	口径、17.3cm 頸径、14.4cm	胴部からゆるやかに外反する、それほど開かない口頸部である。口縁端部内側を摘み横ナデしており、鋭く突出、肥厚している。 口頸部には押圧痕ある凸帯が2条めぐらされており、口唇部にも羽による刻目が付されている。	器内面には指頭圧痕を残すが、指ナデ調整されている。口縁部は丁寧に横ナデされており、端部が肥厚している。 外面は刷毛目調整され、所々にナデがみられる。 凸帯は指で押圧しており、爪らしき痕跡が凸帯上端に残存している箇所もみられる。	胎土、1mm前後の角礫および微砂を含有。良質。 焼成、良好。 色調、茶白褐色。 出土、B区北東土器溜。
壺	A_2	29	口径、18cm 頸径、12.8cm 最大径、32.5cm 底径、9.8cm 器高、47.5cm	胴部中位に最大径が位置し、やや縦長の卵形形態となっている。口頸部は大きく外開きとなっている。口縁端部は内側に肥厚し、口唇部がフラットな面をなしている。端部に刻目が施されている。口頸部には2条の刻目凸帯、胴上半には3列1単位の羽圧痕文が3段にわたって施文されている。 底部は上げ底の痕跡を残した平底。	底部内面は指ナデ調整、胴部は刷毛目調整であり、口頸部は指ナデ調整が行なわれている。 外面は、胴下半が縦および横方向のヘラミガキ、上半は刷毛目調整である。口唇部、凸帯は横ナデが行なわれており、刷毛目を消している。	胎土、1mm前後の角礫および砂粒を含有。 焼成、良好。 色調、器外面は暗赤褐色、内面は灰黄褐色。 出土、B区北東土器溜。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	A_2	30	口径、15.4cm 頸径、12.7cm	肩部からゆるやかに外反する口頸部の端部は肥厚している。口頸部には2条の凸帯がめぐらされ、口唇部とともに刻目が付されている。 肩部には3列1単位の列点文が、現況で1段施文されている。	器内面は指頭圧痕を残す指ナデ調整。口縁部は強い横ナデのため凹面を形成。 外面は縦方向の荒い刷毛目、のち口頸部には横ナデ調整が行なわれる。凸帯は積み横ナデされているため断面三角形を呈している。 口唇部、凸帯は施による刻目が付され、肩部列点文は櫛状工具により斜め右から刺突される。	胎土、微砂および石英・長石・雲母片若干含む良質胎土。 焼成、良好。 色調、淡白褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部を欠損。

弥生式土器（南方Ⅱ～Ⅲ式）〔第24図，図版25・27〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	A_2	31	口径、17.8cm 頸径、13.8cm	口縁部はゆるやかに外反する。端部は鈍く「T」字形に肥厚する。頸部内側は横ナデのため起状面を生じており、凸帯も横ナデのため断面三角形を呈している。 肩部には列点文がめぐらされている。	器内面は、斜め方向に荒い刷毛目が頸部まで施され、のちにナデ調整されている。外面は、内面よりは細かい刷毛で調整されている。 口縁部は、横ナデ調整されており、端部は、両側を別々にナデているため「T」字形に肥厚している。 刻目および列点文は扇状工具で施文しており、列点文は右斜め上から刺突している。	胎土、1～2mm大の角礫と微砂を若干含有。 色調、灰色褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部を欠損。
壺	A_2	32	口径、13.8cm 頸径、14.3cm 最大径、38.5cm 器高、55 cm	胴部中位に最大径が位置しており、卵形を呈している。口縁部はゆるやかに外反し開き具合いは弱い。 頸部には刻目凸帯が2条めぐらされ、胴部上半には列点文が間隔をあけて3段施されている。櫛描文様はみられない。 口縁端部はわずかに肥厚している。	器内面は細かい刷毛目が全面に施され、のち指ナデ調整を行なっている。所々、刷毛目が残存している。 外面は荒い刷毛目が縦方向に施され、のち胴下半は縦および横方向のヘラミガキ調整である。 口縁部・凸帯は横ナデ調整されている。 凸帯刻目は扇状工具、列点文は板状施文具により施文されている。	胎土、1mm前後の角礫と砂粒を含む。 色調、淡赤茶褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、底部一部欠損。
壺	A_2	33	口径、16.8cm 頸径、12.2cm 最大径、34.2cm 器高 28cm前後	形態は32と同様であるが、最大径がやや小さいため長胴の印象を与える。口縁部は、なめらかに外反しているが、32よりは開きが大きい。 口縁端部は内側が摘まれ横ナデされているので、鈍い「T」字形を呈している。 頸部に刻目凸帯が2条めぐらされ、肩部には篦刻突文が3段施文されている。凸帯下の刺突文は、凸帯に刻目を付すときに施文具の一部があたり付いたものであろう。	器内面は縦および横方向の荒い刷毛目整形後、指ナデが行なわれている。外面は荒い刷毛目調整後、胴下半は縦およびは横方向のヘラミガキ、上半は丁寧なナデが施されているようだ。 口唇部および凸帯は強い横ナデが行なわれており、ナデの施された部分は明瞭な凹面を形成している。凸帯は断面三角形を呈している。 刻目、列点文は同一施文具で行なわれたようである。	粘土、1～2mm前後の角礫と砂粒を多量含有。 色調、器外面は灰黄褐色、内面は灰黄褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、底部欠損。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	A_3	34	口径、 20.8cm 頸径、 12.4cm	頸部からゆるやかに外反し開く口縁部である。開き具合は大きい。口縁端部は外方へ拡張され、口縁部にフラット面を形成している。頸部に刻目凸帯が4条めぐらされている。	器内面はヘラミガキかナデ調整されており平滑である。頸部に一部横方向の刷毛目がみられる。 外面は縦方向の刷毛目後、口縁部および凸帯を横ナデ調整している。 口縁端部内側に粘土継目がみられる。 刻目施文具は箆状工具である。	胎土、1～2mm大の砂粒および微砂を含む。 色調、灰褐色。 出土、B・C区土器溜。 特記、口縁部等欠損。
壺	A_3	35	口径、 16.6cm	「逆ハ」字形に開く口縁部は、端部の肥厚が顕著である。口外部は幅広の面を形成しており、そこに尾掻羽状文をめぐらしている。 頸部には刻目凸帯が4条めぐらされている。	器内外面とも横ナデ調整が行なわれている。特に口縁端部は、内側・外側と別々にナデを施し、また丁寧なので「T」字形に肥厚している。 凸帯も横ナデが施されているが、上面のみ行なわれており下面は凸帯貼付後の状況で凹凸がみられる。 刻目、羽状文とも箆状工具による施文。	胎土、微砂および1～2mm大の長石、石英、角閃含有。 焼成、良好。 色調、赤黄褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部等欠損。

弥生式土器（南方Ⅱ～Ⅲ式）　〔第25図，図版第27・28〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	B	36	口径、 11.8cm 頸径、 9.8cm 最大径、22.5cm	胴部は球形の形態で、中位に最大径が位置しているようである。口縁部はゆるやかに外反し、頸・肩部にかけた曲線はなめらかである。口縁端部は、内側が斜上方に肥厚しており、凸帯をめぐらしているかのような状況を呈している。 頸・胴部上半には、櫛描波状文と平行文が交互に配され、下端には列点文が施されている。	器内面は刷毛目整形、特に頸部には刷毛目原体を横方向に断続的に移動させた痕跡が明瞭に残されている。その後、指頭圧痕を残す軽い指ナデが行なわれたようである。 外面は全体を縦方向の刷毛目を行ないのち列点文以下は横方向のヘラミガキを行なっている。 口縁部は横ナデ調整である。特に口縁端部内側は摘んで横ナデしているため、斜上方へ肥厚、立ち上り部を形成している。 櫛描文は8本1単位、列点文は板状工具で斜下から押圧し施文している。	胎土、微砂含有、良質。 色調、器外面は淡黄灰褐色、内面は白灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、胴下半および肩部の一部欠損。
壺	B	37	口径、 11.8cm 頸径、 9.2cm 最大径、21.4cm 底径、 5.4cm 器高、 23.5cm	36と同形のようであるが、口縁部の開き具合が小さく、端部の収め方も強い。 肩・頸部に竹による列点文を2列施している。 底部は平底である。	風化のため詳細は不明であるが、底部内面に、同心円状に指ナデした跡がみられる。また荒い刷毛目が一部に観察され、指頭圧痕もみられる。 外面は底部周辺に縦方向のヘラミガキがみられる。 口縁端部内側を摘んで横ナデしており、わずかに肥厚している。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を含む。 色調、淡白茶褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部半欠。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	B	38	口径、12.8cm 頸径、9.2cm	ゆるやかに外反する口縁部。36・37と比べると頸部の立ちあがりが大きいようである。	器内面は刷毛目整形後、指ナデ調整が行なわれている。外面は7～8本1単位の刷毛目調整を縦方向に施している。 口縁部は横ナデであるが、内側は強く押えられており凹面を形成している。そのため、端部が肥厚しているようにみえる。端部には竹による刻目が付されている。	胎土、1～2.5cm大の角礫および微砂を含む。良質。 焼成、良好。 色調、器外面は灰褐色、内面は灰褐色および黒褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部十残存。 36・37と比べると異質なようであるが、壺Bに含めておく。
壺	C_1	39	口径、12.5cm 頸径、8.6cm 最大径、22.3cm 底径、7.8cm 器高、30.5cm	胴部中位に最大径が位置し、肩・頸・口縁部となだらかな曲線を描いている。しかし胴張り形態となっている。 壺Aと比べると頸部は狭く口縁部の開きが大きい。底部はわずかに上げ底の名残りをのこしている。 胴上半部に横結平行文・波状文が交互に配され、下端には3列1単位の列点文が施文されている。また肩部に円形浮文が39個貼付されている。凸帯、口唇部に竹による刻目が付されている。	器外面は縦方向の刷毛目調整を施し、胴下半には横方向のヘラミガキ、のち縦方向のヘラミガキを行なう。内面は底部に指ナデがみられ、頸部に縦目がみられる。 口縁部内面に指ナデと思われる凹状面が3段みられ、端面内側は摘んで横ナデしているため肥厚している。凸帯も横ナデされている。しかし下面は雑に、上面は丁寧に行なっている。 櫛描きは13条/1.8cmの施文具で描いている。	胎土、微砂を多量に含む良質な胎土。 焼成、良好。 色調、灰茶褐色。 出土、B・C間土器溜。 特記、完形。 胴下半に黒斑あり。
壺	C_2	40	口径、10.2cm 頸径、6.0cm	39と同形であるが、口縁端部および凸帯の調整にシャープさを欠いている。頸部も39ほど狭まっておらず、なだらかに抜けている。口唇部もそれほど開いていない。 頸部に刻目凸帯が3条めぐらされ、胴上半には平行文・波状文2段が交互に配されている。	胴部内面は指頭圧痕および指ナデ調整されており、外面は縦方向の刷毛目がみられる。 口縁部内面になると指ナデ整形後、所々ヘラミガキが行なわれている。特に端部は横ナデされているため、内側にわずかに肥厚している。外面も横ナデであるが、凸帯部分は上面を丁寧に行なっている。刻目は尾状工具で施文。櫛描きは約11条/2.0cmの施文具による。	胎土、微砂多量含有。 色調、灰白褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、口縁部完存、胴部下欠。
壺	C_1	41-1	口径、19.6cm 頸径、5.4cm 最大径、15.4cm	39と同形であるが、胴部の張りが小さく卵形に近い形態である。口縁端部はわずかに肥厚している。 頸部に3条の刻目凸帯をめぐらしており、胴上下部には列点文が3段施文されている。口唇部に刻目は施されていない。	胴下半部内面は斜め方向の刷毛目整形がみられ、上半は指頭圧痕を残す指ナデ。口頸部は横ナデ調整である。特に端部は丁寧な横ナデが行なわれているため、凹面を生じている。外面は縦方向の刷毛目調整後、横・縦方向のヘラミガキが施されている。頸部は刷毛目が消去されているのでナデが行なわれているようである。 列点文は刷毛目原体を刺突している。	胎土、微砂および1cm大の角礫を若干含む。 色調、灰褐色。胴部中ほどに黒斑あり。 出土、B区北東上器溜。 特記、底部および胴下半一部欠損。
壺	C_1	41-2	口径、11.8cm 頸径、7.2cm	41-1と同形であるが、口縁部は厚手のつくりで端部の調整がシャープさに欠け、口縁部の開きも鈍い。口唇部は平担面となっており、刻目が付されている。	41-1と同様であるが、口縁部・凸帯部分の横ナデは弱く雑である。凸帯下面にはほとんどナデがおよんでいない。 刷毛目は頸部まで施され、41-1と異なる。	胎土、微砂多量含有し、砂っぽい印象を与える。 色調、赤茶褐色。 出土、B区北東土器溜。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	C_2	42		頸部から外反する口縁部である。 C_1と比べ開き具合いが大きい。 口縁部は肥厚し、端面を形成している。その端面に2段3列が1単位となった円形浮文が貼付されている。また、棒状浮文が縦に貼付されている。	風化のため詳細は不明。 口縁端部・凸帯は横ナデ調整されている。凸帯は断面三角形を呈している。	胎土、微砂を含む。 焼成、良好。 色調、淡灰褐色。 出土、B区包含層上部。 特記、小片のみ。

弥生式土器（南方Ⅱ～Ⅲ式）〔第26図，図版第29・30〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	D_1	43	口径、 11.4cm 頸径、 7.5cm 最大径、18.5cm 底径、 6.8cm 器高、 22.5cm	最大径が胴部中位に位置しており、胴高が最大径とほぼ同値を示しているので球形に近い形態を呈している。しかし胴部は張り気味となっている。 口頸部と胴部境に、粘土継目による段がみられる。口縁端部はナデによる凹凸面が認められるが肥厚しておらず丸く収められている。 底部は平底・厚手のつくりである。	風化著しく詳細は不明。 胴部内面は刷毛目調整、底部付近はナデ整形を施し指頭圧痕を残している。肩部にも指頭圧痕がみられる。外面は列点文を境に、上半は縦のヘラミガキ、下半は横方向、底部付近は縦のヘラミガキが施されている。 口縁部はナデ調整され、頸部上半にまで及んでいる。頸部内面は指頭圧痕がみられ、外面は縦のヘラミガキと思われる。頸部に継目がみられる。 列点文は尾状工具による。	胎土、微砂含有。 焼成、良好。 色調、灰褐色。胴部中位と肩部に黒斑がみられる。 出土、B区北東土器溜。 特記、胴下半欠。 胴部中ほどに4×3.6cmほどの円孔が外部からの力によって穿たれている。孔が1ヶ所だけかどうかは胴部下半が欠損しているため不明。
壺	D_1	44	口径、 11.8cm 頸径、 8.8cm	43と類似した形態と思われるが、肩部に、まだ丸味を残こしている。 口縁部は横ナデにより大きく外反させられているが、端部は発達していない。 胴部上半部には櫛描平行文と波状文とが交互に描かれ文様帯を構成、下端には竹管文を2段にわたってめぐらしている。	風化のため詳細不明。 胴部内面は刷毛目のち指ナデ調整。 櫛描施文具は8条/1.3cm程で1単位。 列点文は半截竹管の背側を斜めドから押圧施文している。 口縁短折部外面と頸部付根部分に横ナデ調整しており、微妙に波打ったカーブを描いている。	胎土、微砂を多量に含有、良質。 焼成、良好。 色調、暗赤褐色、頸部に一部黒斑がみられる。 出土、B区北東上器溜。 特記、口縁部・胴部を欠損。
壺	D_1	45	頸径、 7.8cm 最大径、16.3cm 底径、 5.8cm 器高、 22.4cm	43と類似した形態であるが、胴張りとはならず卵形を呈している。頸部は短かく、また「逆ハ」字形に外反する。底部は平底。 全体的にぼてっとしたつくりである。 胴部中ほどに列点文がめぐらされている。	胴部内面は、中ほどに刷毛目が観察されるが、底部付近は指ナデ整形、頸部付近も指ナデ整形らしく指頭圧痕を残す。外面は、縦方向の刷毛目整形後、胴下半に横・縦方向のヘラミガキ調整を行なっている。頸部内外面は横ナデ調整である。 頸部に、わずかに段がみられるが粘土継目であろう。 列点文は刷毛目原体により施文している。	胎土、1mm大の角礫および微砂多量含有。 色調、明黄褐色、胴部中ほどに黒斑がみられる。 出土、B区東土器溜上層。 特記、口縁端部欠損。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	D_1	46	口径、 10.4cm 頸径、 8.2cm 最大径、17.8cm 底径、 5.8cm 器高、 22.8cm	口縁部・胴部上半部は45と同形のようだが、底部に差異がみられる。45は外湾して胴に至っているが、46は内湾して至る。そのためややスマートな器形となっている。全体的に45よりも薄手仕上げである。 刺点文の有無は風化のため不明である。 底部は平底である。	胴部内面は指頭整形らしく圧痕が残されている。のち細かい刷毛目調整であるが、圧痕を消去するまでに至っていない。外面は胴下半部が縦方向の荒い刷毛目、下半部は縦方向のヘラミガキである。 口頸部は横ナデが行なわれており、端面を形成している。	胎土、微砂含有。 焼成、良好。 色調、暗茶褐色。一部黒斑がみられる。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部一胴上半部手欠損、43・44とは口頸部分の形態に若干差異が認められる。頸部立ち上りが明瞭でないのだが、一応壺D_1に含めておく。
壺	D_1	47	口径、 8.4cm 頸径、 6.4cm	わずかに直立した頸部に、「逆ハ」字形に開く口縁部を持つ。端部はナデ調整のため端面を形成している。	口縁端部は横ナデ調整が行なわれ、上面はナデのため凹面を生じている。 頸部外面は刷毛目調整後、ナデあるいはヘラミガキが施されている。	胎土、微砂・石英など含有、良質。 焼成、良好堅緻。 色調、黒褐色。非常に黒味を帯びた土器であるが、これは煤付着か燻されたためであろう。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部手欠損。 D_1グループに含めることには無理があるかもしれないが、48と胎土、焼成、色調が類似しているので便宜的に分類しておく。
壺	D_1	48	口径、 14.4cm 頸径、 8.8cm	わずかに外開きした直立する頸部と水平に大きく屈折する口縁部を持つ。 口縁端部は意識的に肥厚させており、端面を形成させている。また端面にはナデによる凹面がめぐっている。	外面は胴部および頸部下半に縦方向の荒い刷毛目調整されており、頸部上半は軽い横ナデを行ない刷毛目の一部を消去している。内面は指頭整形のち指ナデ。 口縁部内面も指頭圧痕を残すが、端部は横ナデ調整である。	胎土、石英・長石粒および微砂を含有した良質胎土。 焼成、良好堅緻。 色調、暗および黒褐色、煤付着か燻されて黒味を帯びている。 出土、B区包含層上部。 特記、口縁部$\frac{1}{3}$欠損。
壺	D_2	49-1	口径、 11.2cm 頸径、 7.2cm	球形に近い形態（推定）の胴部からわずかに外反する頸部、水平に屈折した口縁部を呈す。口縁端部は肥厚しており端面を形成、そこに羽状斜線文がめぐらされている。頸部には、2対の円孔が対象的位置に穿たれている。胴上半に刺点文が2段施されている。	口縁端部は内外とも横ナデ調整を行ない、そのためナデ範囲内は凹面が生じ、端部が肥厚したようになっている。 胴内面は指頭圧痕が顕著である。 頸部穿孔は内部から外へ向かって斜め下方に穿っている。刺点文は刷毛目原体を押圧して施文。	胎土、1－2mm大の角礫および微砂を含有。 色調、灰白色、所々黒味を帯びる。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部一部および胴下半部欠損。
壺	D_2	49-2	口径、 13.0cm 頸径、 8.4cm	49-1と同形であるが、口縁部屈折部分に丁寧な横ナデを行なっているので屈折度が強く感じられる。また頸部の外反度も小さい。 口縁端面には羽状斜線文がめぐらされ、頸部には2対（推定）の円孔が対称的位置に穿孔されている。	口縁部上面、屈折部外面は強い横ナデが施され、凹面を生じている。そのため端部は肥厚している。 穿孔は棒状工具で内から外へ斜めにあけている。	胎土、1－2mm大の角礫および微砂を含有。 色調、淡白灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部十個欠損。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	D_3	50	口径、13.4cm 頸径、9.1cm	頸部は「逆ハ」字形に開き、口縁端部が下方に肥厚した形態。幅広の端面が形成されており、荒描沈線の斜格子文が施文されている。その上に、3個1組の円形浮文を5ケ所に貼付されている。 頸部には円孔が対称的位置に2対穿たれている。	頸部外面は横ナデ調整、内面は横方向のヘラミガキが施されている。 口縁部は内外とも横ナデ調整されている。端部は横ナデのため微妙に凹面を生じている。 円孔は棒状施文具で内から外へと斜め下方へ穿孔している。	胎土、微砂含有。 色調、灰白色、所々黒灰色を呈す。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部4欠損。
壺	D_4	51	口径、14.8cm 頸径、9.0cm	直立する頸部とゆるやかに外反する口縁部とを持つ。口縁端部は粘土を継ぎ足して下方に垂下させている。そのため幅広の端面が生じている。端面に荒描沈線で斜格子文が施文されている。 頸部は壺Dとしてはシャープな屈折を示していない。	口頸部は内外面とも横ナデ調整が施されている。しかし頸部内面下半はヘラミガキ調整が施されているようだ。 胴部内面は指頭圧痕がみられ、更にナデ調整されている。肩部に粘土継目がみられる。 頸部付根および口縁端部は横ナデのためゆるやかな起伏面を生じている。特に垂下部は嵌んで、また口縁端部上面も嵌まんで横ナデを行なっている。	胎土、微砂含有。 色調、灰白色、所々黒味を帯びる。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部1欠損。
壺	D_5	52	口径、14.2cm 頸径、7.4cm 最大径、19.6cm 底径、6.2cm 器高、21.5cm	胴部中位に最大径が位置しており、胴張り形態となっている。ほぼ直立する頸部と大きく下方に屈折する口縁部を有する。端部は丸く収められているが屈折部外面は市松の面を形成し、文様施文部となっている。そこに荒描沈線で線刻文が描かれている。肩部に簡描半行文・波状文と交互に配され文様帯を構成する。文様帯下端には梯状施文具によって列点文が施される。 頸部には2対の円孔が対称的位置に穿たれている。 底部は上げ底を依然的に残した平底。	垂下口縁部および頸部は横ナデ調整されており、同部を形成している。 頸部内面は横方向のヘラミガキ、外面は胴部と同様の刷毛目調整であるが、のち所々刷毛目を残こしながらもナデ調整を行なっている。 胴部下半内面は刷毛目調整のちナデられ、上半は指ナデ調整が行なわれている。肩部は指頭圧痕を残こしている。胴部外面は刷毛目調整後、胴下半に横・縦方向のヘラミガキを施している。底部付近はナデられている。 梯状施文具は4条/0.5cmが1単位である。 壺D口縁部および頸部に粘土継目がみられる。	胎土、微砂を含む良質土。 焼成、良好堅緻。 色調、明赤褐色、胴下半部に黒斑がみられる。 出土、B・C間十器溜。底部はB区北東土器溜。 特記、胴部半欠。

弥生式土器（南方Ⅲ式～中期後葉）　〔第27図，図版29·30·31·35〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	E_3a	53	口径、17.4cm 頸径、14.2cm 最大径、27.2cm 底径、7.8cm 器高、30.0cm	胴部中位に最大径が位置している。しかも最大部位の屈折は強く、顕著な膨張り形態となっている。 頸部はゆるやかに外反し、口縁部に至る。口縁端部は肥厚しており、下方に垂れ下がる。口縁端面には、箆描き斜線文が施され、更に3個1組の円形浮文が5ケ所に貼付されている。 肩および胴最大部位に、二枚貝（アナダラ属）の腹縁部を押圧した列点文がめぐらされている。 頸部に断面三角形を呈した凸帯がめぐらされている。 底部は上げ底形態を残した平底である。	口縁部内面は横方向のヘラミガキを施し、のち端部を横ナデ調整している。外面は指ナデ整形後、横ナデ調整である。 頸部内面はナデが施されており、外面は縦方向の刷毛目調整後、凸帯を貼付し強く横ナデ調整を行なっている。そのため凸帯は鋭い稜を形成している。 胴下半部内面はナデ整形が施されている。特に底部には指頭圧痕が顕著にみられる。また全体に、軽く刷毛目調整を行ない、その後ナデられている。外面は縦方向の刷毛目整形後、下半に縦・横方向のヘラミガキ調整を行なっている。 頸部、胴最大部位、底部に粘土継目がみられる。	胎土、石英・長石・微砂を含有。 焼成、良好堅緻。 色調、灰褐色、肩部と反対側の底部付近に黒斑がみられる。 出土、B・C間土器溜。 特記、胴部半欠。
壺	E_3b	54	口径、20.0cm	「逆ハ」字形に開く頸部にゆるやかに外反した口縁部形態を有す。 口縁端部はわずかに肥厚しておるが、切断されたような素直な面を形成している。端面には、箆による斜格子文様が描かれている。	口縁端部は横ナデ調整されており微妙に起伏した個所を生じている。また、肥厚程度も上端より下端の方が大きい。 頸部外面は刷毛目調整のようである。	胎土、1～2mm大の角礫を多量含有。 色調、灰白橙色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部⅔欠損。 この土器は壺Eとしては異色な形態であり、その位置付けが困難な土器である。とりあえず壺E_3として把握しておく。
壺	E_3c	55	口径、16.0cm 頸径、7.8cm	「逆ハ」字形に開く頸部の途中が水平に屈折し口縁部となる。口縁部はやや肥厚しており、端部は下方に拡張されている。 端面には、巾広の沈線が3条めぐらされ、のちに刷毛目原体で斜圧痕文を施文している。 口縁部内側に穿孔途中の跡がみられる。焼成前に穿孔しかけており未貫通のまま放棄されている。 頸部には押圧痕の施された凸帯が貼付されている。	頸部内面下半に縦方向の刷毛目が図示されているが、基本的には横方向の刷毛目調整が施されている。外面は縦の刷毛目調整後、凸帯を貼付し、箆状工具で押圧施文している。更に、凸帯下端に横ナデされているらしく圧痕文が変形している。 口縁部は横ナデ調整が丁寧に行なわれ、3～4ケ所起伏を生じている。 頸部に粘土継目がみられる。また口縁端部下端も粘土を足し、剥離したものと思われる。	胎土、微砂含有、良質。 焼成、良好堅緻。 色調、灰黄褐色。 出土、B区包含層層上部。 特記、口頸部⅓残存。
壺	E_3c	56	頸径、10.0cm	55と同形の頸・胴上半部の破片である。 形態は胴部中位に最大径が位置し、わずかに開く頸部を持っている。頸部には押圧痕ある凸帯が1条めぐらされている。 肩部に刷毛目原体による列点文が施文されている。	胴部内面は斜方向の刷毛目調整を行ない、肩部はナデを施しているが絞り目を残す。 頸部付根と中位に粘土継目を残し、横ナデ調整を行なっている。 外面は全体に縦方向の刷毛目調整、ただし、列点文以下は横方向のヘラミガキとなっている。	胎土、微砂含有良質胎土。 焼成、良好堅緻。 色調、淡灰黄褐色、胴部に一部黒斑がみられる。 出土、B区北東土器溜。 特記、⅓残存。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	E_{1b}	57	口径、25.2cm 頸径、21.8cm	大型壺形土器の口縁部である。 短く外反する頸部に、端部が肥厚し「T」字形を呈している口縁部とからなっている。 端面には筆による斜格子目文が施文され、頸部には指頭圧痕を2段施した凸帯がめぐらされている。	頸部内面は横方向のヘラミガキ調整を行ない。口縁部は内外面とも横ナデ調整である。口縁端部もナデが及んでいるため凹面を形成している。 凸帯上の指頭圧痕は、上一下の順に行なっている。	胎土、微砂、1～2mm大の角礫を多量に含有、良質。 焼成、良好。 色調、淡黄褐色。 出土、B・C間土器溜。 特記、口縁部半残存。 わずかではあるが頸部に立ち上り部がみられるので壺Eに含めた。
壺	E_{2}	58	口径、23.8cm	筒状頸部から大きく外反する口縁部であろう。 口縁端部は立ち上り、拡張する。下端はやや張り出し気味となっている。	口縁端部は明瞭な立ち上りをみせ、巾広の端面を形成している。そこに、3条の凹線を施している。 口縁部内面は中心方向の刷毛目が一部みられるが、ほとんど横方向のヘラミガキが行なわれている。外面も横方向のヘラミガキである。端部は横ナデ調整。	胎土、微砂含有良質粘土。 焼成、良好。 色調、黄褐色、一部に黒斑がみられる。 出土、A区土坑C。 特記、口縁部¼残存。
壺	E_{3a}	59		小片のため全体形を復原することは困難であるが、恐らく、筒状頸部と外反する口縁部、それにやや張り気味の胴部を呈すると思われる。 59は口縁端部、一方の開口した凸帯をめぐらしていると思われる。 60・61は筒状頸部の一部であろう。細隆凸帯が横に3条めぐらされ、縦に棒状浮文が貼付される。 62は頸部から肩部にかけた破片であろう。	端部は指頭整形後、刷毛目調整。端面には刷毛目原体で斜目が付されている。	胎土、1～2mm大の砂粒を含み粗雑な印象を与える。 色調、淡赤褐色。 出土、C区包含層。
壺	E_{3a}	60・61			風化のため詳細不明。 凸帯貼付後、摘んで横ナデ調整されている。そのため凸帯周囲は凹面を生じている。棒状浮文貼付は最後の工程である。	胎土、微砂および1－2mm大の角礫を含み粗雑な印象を与える。 色調、赤褐色。 出土、B区北東土器溜。
壺	E_{3a}	62			器内外面とも半消化している。ミガキかナデが施されたと思われる。 凸帯を貼付後、軽く横ナデ調整を行なっているようだが、明確ではない。	胎土、微砂含有、非常に良質。 焼成、良好堅緻。 色調、淡赤褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、59～62は復原形態に基づいて壺E_{3}に分類したが確かなものではない。便宜的に分類しておく。
壺	E_{3a}	63			風化著しく詳細不明。 平行線描文は約8条/1.2cmの施文具、斜格子文は約5条/0.7cmの施文具で描かれている。	胎土、0.5～1mm大の砂粒多量含有良質。 焼成、良好。 色調、灰黒色、一部白色。 出土、B区北東土器溜。 特記、E_{1b}に含めたのは、「新部式」中に類似文様がみられ、その口縁部がE_{1b}と同形であったからである。もちろんE_{3a}の胴部の可能性も残る。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	F_{3a}	64	口径、 18.8cm 頸径、 14.8cm 最大径、32.8cm 底径、 7.8cm 器高、 36.2cm	最大径が胴部中位に位置し、卵形胴形態を呈す。 口縁部は頸部から急反し、端部がわずかに肥厚している。 底部は平底。 全体にぼてっとしたつくりである。 列点文の有無は風化著しく不明。	口縁部・頸部は横ナデ調整が行なわれている。特に端部は摘みナデているため、凹線状に起伏した端面を形成している。 器内面は胴上半部に一部荒い刷毛目が観察されるが、全体的には指ナデ調整が行なわれている。特に底部付近は指頭圧痕をよく残している。 外面は細かい刷毛目調整後、胴下半に縦方向のヘラミガキを施している。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を若干含有。 色調、淡白茶褐色。胴下半部に大きな煤斑がみられる。 出土、B区北東上器溜。 特記、胴下半部一部欠損。

弥生式土器（南方Ⅲ式～中期後葉）　〔第28図，図版第31・33〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	F_1	65	口径、 13.6cm 頸径、 12.8cm	「く」字形にわずかに屈折した口縁部と強く張る胴部とからなる。 頸部に外→内へ斜め下から穿孔した円孔がみられるが個数は不明。	口縁部は摘んで横ナデ調整を行ない、胴部内外面は横方向のヘラミガキ調整を行なっている。丁寧なつくりである。	胎土、微砂・石英・長石を含み良質である。 焼成、良好。 色調、器外面は暗茶褐色、内面は明褐色。 出土、C区包含層。 特記、口縁部わずかに残存。
壺	F_1	66	口径、 13.8cm 頸径、 11.8cm 最大径、18.8cm 底径、 7.2cm 器高、 29.5cm	頸部から短かく、「く」字形に開く口縁部と胴部中位に最大径が位置しており、卵形の上下端を截断したような器形を呈している。 口縁端部は上下端別個に横ナデされているので肥厚気味になり、端面に起伏を生じ、凹線状となっている。 頸部には内→外へ穿孔された2対の円孔が配置されている。 底部には外から内へ向かって4cm程の円孔が、焼成後穿れている。また胴中位にも3～4個所穿れているようである。 底部は平底である。	口縁端部は、上下端に指をあて横ナデを行なっている。従って、わずかに肥厚気味となっている。 胴部内面は、随所に指頭圧痕を残すが、頸部直下には横方向のヘラミガキ、中位には縦方向のヘラミガキ、下半はよくわからないが、ヘラミガキあるいは指ナデが施されている。 外面はヘラミガキ調整である。のちに底部付近はナデ調整を加えている。そのため底部付近は外反して胴に至る形態となっている。 頸部屈折部も横ナデ調整が行なわれている。	胎土、微砂含有。 焼成、良好。 色調、淡灰白褐色、内面は黒灰色を帯びる。 出土、B区北東上器溜。 特記、ほぼ完形品。
壺	F_{2a}	67	口径、 17.8cm 頸径、 13.8cm	口縁部は「く」字形に外反する。端部はわずかに肥厚している。	口縁部は横ナデ調整。特に端部上・下端、頸部は丁寧に施され、凹面を生じている。また端部はナデのため、上方にわずかに肥厚している。 器内面頸部下は横方向のヘラミガキが行なわれている。外面は、荒い刷毛目調整であろう。	胎土、微砂および1mmの砂礫を含有。 色調、器外面は淡赤褐色、内面は灰茶褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部多残存。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	F 2a	68	口径、12.2cm 頸径、10.3cm 最大径、21.3cm	卵形胴部に「く」字形に外反する口縁部を持つ形態。67と比べると口縁部の横ナデ調整は雑なようであり、シャープさに欠ける。 胴部中位には刷毛目原体と思われる工具で列点文を施文している。	口縁部は横ナデ調整。頸部もナデられており明瞭な凹面を形成している。 胴部は指頭成形後、刷毛目整形されている。その後更に部分的にナデられているようであり、ヘラミガキの施された個所も認められる。 外面は縦方向の細かい刷毛目が列点文までみられる。列点文以下は、恐らくヘラミガキであろう。 頸部直下に粘土継目がみられる。	胎土、1～2mm大の角礫および微砂を含有。 色調、器外面は赤味を帯びた茶白褐色、内面は黄茶白褐色。 出土、B区包含層。 特記、口縁部¼欠損。
壺	F 2b	69	口径、12.5cm 頸径、15.8cm	「く」字形口縁部と頸部直下が「ハ」字形に開き、肩部から外湾し胴に至る形態である。 口縁端部は肥厚しており、端面には篦による刻目が施されている。 頸部内面は、明瞭な稜を形成している。	口頸部内外面は、横ナデ調整されており、端部上・下面、頸部は丁寧な横ナデが施され微妙な凹部が生じている。 胴部内面は横方向のヘラミガキ。外面は縦方向の刷毛目あるいはヘラミガキが施されている。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を含む。 色調、赤灰褐色、橙色の所もみられる。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部¼欠損。
壺	F 2b	70	口径、18.8cm 頸径、15.4cm	69と同形であるが、口縁端部の肥厚が顕著になっている。すなわち、上方に摘みあげられているのである。口縁端面には篦による刻目が付されている。 頸部内面は丸く収められ、稜は明瞭でない。	口縁部内外面は横ナデ調整。端部上面は丁寧なナデが行なわれ、わずかだが上方に隆起している。端面も横ナデのため凹面を形成している。 胴部内面頸部下は非常に細かいナデが施されている。それ以下は、斜めおよび縦方向の刷毛目調整が行なわれ、のち指ナデを加えてある。 外面は縦方向の刷毛目調整である。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を含む。 色調、灰白茶褐色および明橙色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部¼残存。
壺	F 2b	71	口径、17.8cm 頸径、14.5cm	69・70と同形。口縁端部の立ち上りが更に顕著になり、「T」字形を呈してきている。口縁端面には刻目が付されている。 頸部内面は、明瞭な稜を形成している。	口縁部内面は横ナデ調整であるが、一部ヘラミガキがみられる。ヘラミガキのち横ナデと思われる。口縁端部は摘み上げられ、端面には横ナデによる起伏面が失じている。 胴部内面は指頭整形後、刷毛目調整。頸部直下は横方向のヘラミガキが施されている。外面は細かい横ナデ調整。頸部下は横ナデが及んでいる。 胴部中位に、ハイガイと思われる貝の腹縁を押圧施文している文様がめぐらされている。また口縁端面の刻目は、刷毛目原体を押圧したものである。	粘土、微砂および1～2mm大の角礫を含む、良質。 焼成、良好堅緻。 色調、淡茶褐色。 出土、A区南壁面。 特記、口縁部一部欠損。
壺	F 2	72	口径、17.8cm 頸径、15.8cm	「く」字形に屈折する口縁部の端部は肥厚している。端面には、3本の沈線が施かれ、そののち簡略斜線文が施されている。頸部には連続押回りに押圧されている凸帯が貼付されている。	口縁部は横ナデ調整。特に、端部上・下端・頸部内面は丁寧に施されている。そのため、凹面を形成している。 胴部内面は斜め方向の刷毛目、頸部直下は横方向のヘラミガキを行ない、外面は細かい刷毛目調整が施されている。	粘土、微砂含有良質。 色調、灰褐色。 出土、B区五層。 特記、口縁部¼残存。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	Fa	73	口径、 27.6cm 胴径、 25.5cm	「く」字形口縁部を持つ、口縁端部は上方に引き上げられるようにして、肥厚している。端面には3条の五線な沈線が引かれ、その上に3個1組の円形浮文が貼付されている。 頸部には爪押圧痕の施された凸帯がめぐらされている。	口縁部は横ナデ調整である。特に内面上端は強く撫され、上方に引き上げられている。横ナデ調整以前にヘラミガキの施されていた部もある。 胴部内面は横方向のヘラミガキ調整、外面は粗の荒い刷毛目調整である。	胎土、微砂含有、良質。 焼成、良好堅緻。 色調、淡黄赤褐色。 出土、A区土坑C。 特記、口縁部十残存。 72・73は変形土器の可能性もあるが壺に含めておく。

弥生式土器（南方Ⅱ～Ⅲ式）　［第29図，図版28・35］

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	Ga	74	底径、 9.0cm	平底からわずかに外開き気味に胴部に至る。口縁部は不明である。 胴部には丁寧に施された、櫛描平行文と波状文とが交互に描かれ、下端には2列1単位の列点文が施されている。文様構成は壺のそれと共通性がみられる。	器胴内面は指成形。調整は、荒い刷毛目、のちヘラミガキ、所々指ナデの痕跡も認められる。 外面は刷毛目調整後、底部付近は粗のヘラミガキが施され，列点文付近はナデ調整されている。 列点文は棒状施文具を斜めに押している。	胎土、微砂含有。 焼成、良好堅緻。 色調、暗褐色、底部付近は橙色。 出土、B区北東土器溜。 特記、2次的加熱を受けており、内部には煤の付着もみられる。
壺	Ga	75	底径、 10.6cm	74と同形になると思われるが、この個体は底部から内傾して胴に至る点が異なっている。	器内面は、風化著しく詳細不明であるが、荒い刷毛目と指ナデ調整が行なわれている。 外面は指ナデ調整か？	胎土、微砂および石英・長石粒を含有。 色調、灰白褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、底部十残存。
壺	Gb	76	底径、 12.1cm	底部周縁が張り出しており、胴部立ち上りはやや外開き気味である。張り出し部分には2対の円孔が対称的位置に穿孔されている。 底面は中央部がわずかに突出している。	器内面は強い指ナデで成形および調整されている。 外面は縦方向の巾広なヘラミガキ調整であるが、底面は雑にヘラミガキが施されている。また底面には葉の圧痕が顕著にみられる。 穿孔はヘラミガキ以前に、胴部から底部へとあけている。 底部の張り出しは、摘みナデによって形成されている	胎土、微砂多量に含有、良質。 色調、淡黄褐色。底部に一部黒斑がみられる。 出土、B区北東上器溜。
壺	Gb	77	底径、 8.8cm	76と比べて底部張り出しが大きい。	内面は刷毛目整形後、指ナデ調整。このナデは底板と胴部とを付着させるためのものである。 外面は、縦方向の刷毛目調整後、指頭圧で張り出しを形成している。 底部は円板を充填している。	胎土、1～2㎜大の角礫を多量に含有。 色調、淡橙色、一部黒斑がみられる。 出土、B区北東土器溜。 特記、底部十残存。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
無頸壺	A	78	口径、 9.6cm	胴張り気味の球形胴部と思われる。口縁部には2対の円孔があけられている。 胴部中ほどに押圧施文が施文されている。 底部が欠損しているので確かなことは言えないが、台付の可能性もある。	胴部内面は、指頭圧痕がみられるが、刷毛目調整されており、口縁部付近は指でナデられている。 外面は縦方向の刷毛目調整である。口縁部付近はナデが及んでいる。 口縁端部は軽く横ナデ調整され、内側がわずかに肥厚している。 穿孔は外から内へと焼成前に行なわれている。刺点文は竹状工具による。	胎土、微砂含有。 焼成、良好。 色調、暗褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部1/4残存。
無頸壺	A	79	口径、 8.0cm	78と同形。 口縁端部がわずかに肥厚している。 胴上半部には櫛状施文具による刺突文が間隔をおいて2段施されている。 口縁部には2対の円孔が穿孔されていたと思われる。	胴部内面は荒い刷毛目整形後、ナデが施されている。外面はヘラミガキかナデ、のち施文。 穿孔は外から内へ向かって行なわれている。	胎土、微砂含有。 色調、暗黄褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部1/4残存。
無頸壺	A	80	口径、 9.0cm 最大径、8.8cm	78と同形。 口縁端部と胴部中ほどに刺点文を施文している。 口縁部の円孔は、破片中にはみられない。	胴部内面は荒い刷毛目整形。外面は不明、ヘラミガキかナデと思われる。 口縁部は横ナデ調整、端部内側は摘んで横ナデしているため肥厚している。 刻目、刺点文は竹状工具による。	胎土、微砂多量含有、良質。 焼成、良好堅緻。 色調、黒褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部1/4残存。
無頸壺	B	81	口径、 8.8cm	器形は不明だが、コップ形土器かと思われる。 口縁部は凸面を形成しており、端部には篦による刻目を施している。 胴上半部には、2列1単位の刺点文が2段施文されている。口縁部には2対の円孔が穿孔されている。	器内面は指頭圧痕を残す指ナデ調整。外面は刺点文までは縦のヘラミガキ調整、以上はナデ調整である。 口縁部は横ナデ調整。 刺点文は、棒状施文具で、2列のうち上は上側から下は下側から押圧して施文している。	胎土、微砂を多量に含む、良質。 焼成、良好。 色調、暗灰褐色。一部黒斑がみられる。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部1/4欠損。
細頸壺		82	口径、 4.4cm 頸径、 4.0cm	細頸壺の口頸部であろう。 頸部は9cm程の高さで、端部付近になるとわずかに外反気味となる。 頸部に櫛描平行文が描かれている。	内面下半には絞り目が残されているが、上半は縦方向のナデ、端部は横ナデが施されている。 外面は縦方向の細かい刷毛目調整であり、頸部には、横方向の刷毛目調整が施されている。 櫛描平行文は、この刷毛目調整の後時である。	胎土、微砂および1~1.5mm大の角礫を含む。 焼成、良好堅緻。 色調、明橙色。 出土、B区P-1 2
壺底部		83	くびれ部径 8.1cm 底径、 9.2cm	脚台状の底部を呈している。 底部は部厚いつくりで、裾広がりとなっている。	内面は粗かい縦方向の刷毛目調整。 胴部外面は横方向のヘラミガキ。脚部は指頭圧痕がみられ、のち横ナデ調整されている。	胎土、微砂および1mm大の角礫を含む。 色調、器外面は茶褐色、内面は灰褐色。 出土、B区北東土器溜。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺底部		84	底径、 9.2cm	平底である。 ほぼ直立して胴に至る。	内面は円心円状に指ナデ、胴部は縦方向の指ナデ調整である。 外面は丁寧なナデ調整。 胴立ち上り部分に粘土継目あり。	胎土、1～2mm大の砂粒を多量に含有、粗雑な印象。 焼成、良好堅緻。 色調、赤褐色および黒褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、底部十残存。

弥生時代（南方Ⅱ～Ⅲ式）　〔第30図，図版第32〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺	1a	85	口径、 17.8cm 頸径、 14.2cm 最大径、18.0cm	「く」字形口縁形態。 胴最大径が、胴上半部に位置し、わずかに口径を凌駕している。胴部は肩の張らない、ずん胴形を呈している。 口縁端部は丸く収められている。 胴部中程のところに刷毛目原体による列点文が施されている。	胴内面は、指頭成形による凹凸面がみられるが、全体にヘラミガキされ、特に頸部付近は横方行に丁寧にヘラミガキが施されている。 胴外面は細かい縦方向の刷毛目が施され、のち下半に縦のヘラミガキが施される。列点文施文後、ヘラミガキが行なわれている。 口縁部内面は、くもの巣状に細かいヘラミガキ調整、外面および頸部は横ナデ調整である。	胎土、微砂を含有。 焼成、良好。 色調、淡黄灰褐色。胴下半は黒褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部十残存。
壺	1a	86	口径、 15.4cm 頸径、 13.4cm 最大径、17.7cm	85と同形。 口縁端部が丸く肥厚している。 胴部中程のところに施により列点文が施されて いる。	胴内面は縦方向のヘラミガキ、口縁部および頸部直下は横方向のヘラミガキ調整が行なわれている。 胴外面は、縦方向の刷毛目整形後、上半はナデを施し、下半は縦方向のヘラミガキを行なっている。列点文はヘラミガキ後施文している。口縁部外面は、指頭圧痕が所々みられるが横ナデ調整されている。	胎土、微砂および小角礫を含有。 焼成、良好。 色調、胴外面は茶灰褐色、内面は灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部十欠損。
壺	1a	77	口径、 17.8cm 頸径、 14.5cm	85と同形。 口縁端部は丸く収められている。	胴内面は斜め右上りの丁寧なヘラミガキ調整。所々弱い凹凸が認められる。外面は風化のため判然としない。 口縁部上面はくもの巣状のヘラミガキであるが、下面および頸部は横ナデ調整が施されている。	胎土、微砂含有、良質。 焼成、良好堅緻。 色調、暗乳灰色、 一部分に煤付着。 出土、 特記、口縁部十残存。
壺	1a	88	口径、 17.8cm 頸径、 14.6cm 口径、 17.8cm 頸径、 14.8cm 最大径、17.2cm	85と同形であるが、胴部は張らない。口径と最大径とは、ほとんど変わることがない。 口縁部はナデのため、ゆるやかなカーブをもって屈折する。また端部下端がわずかに肥厚している。	胴部内面は荒い刷毛目整形のちヘラミガキ、外面は細かい刷毛目整形、下半は縦のヘラミガキを施している。 口縁部上面は丁寧なヘラミガキ、下面は強い横ナデ調整。ナデの跡が明瞭に残されている。	胎土、微砂を含み良質。 色調、胴外面は淡黄灰色、下半は暗褐色、内面は乳白色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部十残存。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕	1a	89	口径、16.0cm 胴径、13.0cm 最大径14.4cm	肩はほとんど張っていない。頸部から、わずかに開いて筒状の胴部に至っている。そのため、胴部最大径が、口径よりも小さいものとなっている。 口縁部外面は横ナデ調整されている。ため凹面を形成しており、端部はわずかに肥厚し、丸く収まっている。	胴内面は右上りのヘラミガキ。外面は細かい刷毛目調整後、縦方向のヘラミガキ調整を行なっている。ヘラミガキは胴部にまで達っしている。 口縁部は指頭成形後、上面を横方向のヘラミガキ調整、下面を横ナデ調整している。端部は横ナデのため微妙に肥厚している。 胴部は弱い横ナデが施されているが、一部刷毛目が残っている。	粘土、微砂、雲母片を少量含み、良質である。 焼成、良好堅緻。 色調、器外面は暗褐色、内面は乳灰褐色。 出土、B区包含層上部。 特記、口縁部を残存。 胴部下半に煤の付着がみられる。
甕底部		90	底径、5.8cm	底径が小さく、胴部が強くすぼまる形態である。 上げ底になっており、底部に1孔あけられている。 底部内面は、丁寧にナデられ、すり鉢状となっている。	器内外とも指頭圧痕を残こしている。内面はナデ整形され、外面は縦方向のヘラミガキ調整である。底部周縁は、横ナデされているようである。底面は一部に刷毛目がみられる。 底部穿孔は、焼成後に両側からあけられている。 上げ底となっているのは、底部を充填し、強くナデたからと思われる。	粘土、微砂・長石・石英細粒含有、良質。 焼成、良好堅緻。 色調、器外面は明赤褐色。内面は暗褐色。 出土、B・C間土器溜。 特記、底部に1孔穿たれている。 内面に炭化物(?)が付着している。
甕	1b	91	口径、12.5cm 頸径、11.2cm 最大径12.2cm 底径、4.8cm 器高、14.5cm	「く」字形口縁部に、胴最大径が口径を超えない倒鐘形の胴部形態を呈す。底部は部厚くつくられている。平底。 胴部中ほどに列点文がめぐらされている。	口縁部は横ナデ調整。 胴部内面は指頭圧痕を残す指ナデ。特に底部付近は強く施されナデ単位が明瞭である。外面は非常に細かい縦方向の刷毛目調整を行ない、下半は縦のヘラミガキを施す。 底部周縁はナデられ、ヘラミガキが消されている。 列点文は荒状工具で施されている。	粘土、微砂多量含有。 色調、黒灰色。 出土、B区北東土器溜。 特記、胴部一部欠損。
甕	1b	92	口径、18.0cm 頸径、15.0cm 最大径19.8cm 底径、5.5cm 器高、28.0cm	口縁部形態は88と類似している。また、胴部最大径が口径を若干優る点、肩部にまでヘラミガキの施される点など共通点が多い。ただ、口縁部および胴部内面の調整法に差異がみられるだけである。 倒鐘形の腹部を抑え、いびつにさせたような形態となっている。 底部は平底である。	口縁部は横ナデ調整。特に頸部および口縁部下面はナデが強く、屈折部はゆるやかなカーブを描く。また端部が下方へ肥厚気味となる。 胴内面は、底部・下半が指ナデ整形、上半が横方向のヘラミガキ調整である。 外面は、肩部まで縦方向のヘラミガキが施されている。 底部は指で押えて整形しており、指頭圧痕がみられる。	胎土、1～2mm大の角礫および砂粒を含む。 焼成、やや不良。 色調、桃色、所々橙・赤・黒色が混じる。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部、胴下半部½欠損。 二次的火熱痕が顕著。
甕底部		93	底径、5.8cm	ナデのため貝立部を形成し、胴部につらなる形態。 底面には、未貫通の穿孔の施飾と貫通孔とがみられる。	内面は縦方向の指ナデ整形が行なわれている。 外面は縦方向のヘラミガキ、底部周縁は指ナデ調整されている。 底部には焼成後、外から穿孔している円孔がみられる。	粘土、微砂と1mm大の角礫を含有。 色調、器外面は黄灰褐色。内面は茶褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、底部十欠損。 底部外面に黒斑がみられる。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕	2	94	口径、21.4cm 頸径、21.8cm 最大径27.1cm 底部、7.6cm 器高、38.2cm	端部が上方へわずかに肥厚している。「く」字形口縁部と胴中位ややに最大径を有す倒鍵形の胴部を呈す。 底部は平底で厚いつくりである。周縁は指整形を行なっている。 胴部中ほどに列点文がめぐらされている。施文具は刷毛目原体と思われる。	口縁部は横ナデ調整、端部はナデによって摘み上げ上方へわずかに肥厚する。頸部も横ナデ調整されている。 胴部内面下半は指ナデ整形、上半は、刷毛目整形後、横方向のヘラミガキ調整を行なっている。外面は縦方向の細かい刷毛目整形、のち下半に縦方向のヘラミガキ調整を施している。また上半部は更にナデ調整を行なっている。	胎土、微砂および1mm大の角礫を含む。 焼成、良好。 色調、茶褐色。底部付近は赤味を帯びる。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部半欠。

弥生式土器（南方Ⅱ～Ⅲ式）　〔第31図，図版32・33〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕	2	95	口径、18.0cm 頸径、15.8cm 最大径、21.8cm	胴上半部に最大径が位置しており、肩の張った形態となっている。 口縁部は「く」字形に屈折し頸部内側は明瞭な稜を形成する。また口縁端部は上方にわずかに肥厚している。 胴部中ほどに列点文がめぐらされているが、疎に施文されており、間隔は不規則である。	口縁部は横ナデ調整。端部上面、頸部外・内両側は特に丁寧に横ナデされている。そのため端部は上方にわずかに肥厚している。 胴部外面は縦の刷毛目調整後、下半は縦方向のヘラミガキを行なっている。内面もやはり刷毛目整形後、胴下半ないし肩部までヘラミガキが施されている。 列点文は竹状工具による。	胎土、微砂含有。 焼成、良好。 色調、茶褐色。 出土、B・C間土器溜。 特記、胴部の一部を欠損。
甕	2	96	口径、16.0cm 頸径、13.4cm 最大径、16.6cm	胴部形態は92と類似している。 口縁端部はやや肥厚しており、端面を形成している。 胴部最大径の所に列点文を施し、そのためやや膨み、ずん胴形となっている。	口縁部および頸部には横ナデ調整が行なわれ、端部は微妙に上方へ肥厚している。 胴内面は、下半に指頭圧痕を残しているが、上下は縦方向の刷毛目調整、のち指ナデを行なっているようである。 外面は縦方向の刷毛目整形後、下半をヘラミガキ調整を施している。 列点文は竹状工具による。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を含む。 焼成、良好。 色調、赤茶褐色。 出土、B・C間土器溜。 特記、口縁部～残存。 胴外面に煤が付着している。
甕	1c	97	口径、17.4cm 頸径、15.6cm	「く」字形に、ゆるやかに外反する口縁部、先端はえあるいは尖り気味に収められる。 胴部は中ほどに最大径がある形態と思われる。最大径は口径をわずかに超えていると思われる。	口縁部および頸部は横ナデ調整。 胴部内面は、斜め方向のヘラミガキ、頸部直下は横方向のヘラミガキ調整である。外面は細かい縦方向の刷毛目が施されている。	胎土、微砂含有。 色調、茶褐色。一部橙色。 出土、B区北東土器溜。 特記、胴部外面全体に煤付着。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕	1c	98	口径、19.6cm 頸径、17.4cm 最大径.18.8cm	「く」字形口縁部と肩の張らない、ずん胴形の胴部を呈す。 口縁端部は横ナデ調整により、丸り気味に収められている。 97と比べて、口縁部が大きく外反しているので、口径が最大径を超えている。 胴部には列点文は施されていないようである。また指頭圧痕が顕著で、凹凸が著しい。	口縁部および頸部は横ナデ調整されている。ただし、口縁部上面の頸部付近は、横方向のヘラミガキが施されている。 胴部内面は、横方向のヘラミガキ調整。外面は縦方向の刷毛目調整後、縦方向のヘラミガキを施している。 頸部外面下は、ナデのため刷毛目が消されている。	胎土、砂粒および1～2mm大の角礫を含む。 色調、器外面は赤褐色、内面は灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部3残存。 胴部外面には煤付着。
甕	1b	99	口径、18.2cm 頸径、13.8cm 最大径.19.6cm 底径、5.6cm 器高、28.1cm	「く」字形口縁部と胴部最大径が上半にあるが肩の張らない形態を呈す。倒鐘形であるが、最大径部を押しつぶしたようなずん胴形となっている。 肩部下には、区画されていないが、列点文が1列めぐらされている。 底部は上げ底状の平底である。 口縁部は下側のナデが強く急反した状況を呈している。端面を形成している。	口縁部内外面とも横ナデ調整。特に端部上側は摘んでナデているため、下方に肥厚し端面を形成している。頸部外面も横ナデされ凹部を生じている。 胴部内面下半はナデ整形であろう。上半は横方向のヘラミガキ調整である。外面は風化著しく詳細不明だが、中ほどに縦方向のヘラミガキ痕がみられ、肩部には刷毛目状痕跡もみられる。底部は指ナデ整形である。	胎土、微砂含有。 色調、黄褐色および桃色を帯びる。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部3残存。胴部一部欠損。 二次的加熱痕が著しい。
甕	1b	100	口径、14.4cm 頸径、12.8cm 最大径.15.8cm 底径、5.4cm 器高、23.7cm	「く」字形口縁部と倒鐘形胴部を呈している。 最大径は胴部中ほどに位置しており、肩は張らない。 口縁端部は肥厚していないが、端面を形成している。 底部は平底である。	口縁部および頸部は横ナデ調整。 胴部内面は、下半および底部は指ナデ整形を行ない中～上半は指頭圧痕および一部にヘラミガキがみられる。全体に、更に軽くナデが施されているようである。 外面は縦方向の刷毛目調整後、下半に縦のヘラミガキを行なっている。 底部周縁は指整形を行なっている。	胎土、微砂および1～3mm大の角礫を含む、砂っぽい胎土。 色調、灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部4欠損。胴部中ほど欠損。 胴部中ほどに黒斑あり。
甕	2	101	口径、18.8cm 頸径、16.6cm 最大径.20.6cm	ナデのため、微妙なカーブを描き屈折する「く」字形口縁部と最大径が胴部中ほどに位置し、肩の張らない形態を示す。 口縁部は端部を形成している。 列点文はみられない。	口縁部および頸部は横ナデ調整、特に口縁端部、頸部外面は丁寧に施され微妙なカーブを生じ、端面を形成させている。 胴部外面は、縦方向の刷毛目整形後、下半に縦方向のヘラミガキ調整を行なっている。内面は、指頭圧痕を残しつつも、頸部直下まで雑なヘラミガキ調整を行なう。	胎土、微砂多量含有。 色調、淡黄褐色、一部灰色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部4残存。 胴部に黒斑あり。
甕底部		102	底径、6.8cm	上げ底を呈する。 底部は指整形のため、わずかに絞られ「)(」字形となり、胴部にそる。	底部内面は指頭圧痕が著しい。絞り後、指ナデ整形を行なっているのかもしれない。外面は縦方向のヘラミガキ、下端は指ナデ整形後、横ナデ調整のようである。 底面は渦状にナデが施され、上げ底となっている。 底部は円板充填されている。	胎土、微砂および長石、石英粒含有、良質。 焼成、良好。 色調、器外面は赤褐色、内面は暗褐赤色。 出土、B区北東土器溜。 特記、内外に煤あるいは炭化物が付着している。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕底部		103	底径、5.6cm	わずかに上げ底形態を示し、器壁と比べて薄い底部である。 底部から一度内湾し、そり反って胴部に至る。	器内面は丁寧なナデ調整。外面は剥脱のため詳細不明だが、ナデ調整と思われる。 底面もナデ調整である。 底部穿孔は焼成前に、上下面からあけている。	胎土、微砂および小角礫を含む。 焼成、良好。 色調、器外面は灰赤褐色、内面は灰黒褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、底部に1円孔あり。
甕底部		104	底径、4.8cm	重厚な印象の底部のつくりである。 ナデのため、わずかに上げ底状を呈している。 わずかに直立する部分がみられ、胴部に至る。	器内面は指頭圧痕がわずかに観察できる。 外面は縦方向のヘラミガキ調整。 底面は丁寧な指ナデ調整である。	胎土、微砂および1～3mm大の角礫を多量に含む。 色調、器外面は赤褐色、内面は淡赤褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、底端部に黒斑あり。
甕底部		105	底径、5.2cm	ゆるやかに外反して胴部に至る。 底面周縁は横ナデ調整されているため起伏を生じている。 底部貫通孔が1孔みられる。 平底である。	底部内面は指頭圧痕がみられ、丁寧に整形されている。のちナデられていると思われる。 外面は縦方向のヘラミガキ、下半はヘラミガキの単位が異なる。 底部下端は横ナデが施されている。 穿孔は焼成後、下から行なっている。	胎土、微砂・石英・長石・雲母片を含み、きめ細かい良質土。 焼成、良好。 色調、器外面は淡黄白褐色、内面は黒灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、一部に黒斑がみられる。 底部に1円孔あり。
甕底部		106	底径、4.2cm	105と同形。 平底である。	底部内面は指ナデ調整。特に下端は強くナデられているので凹部を呈している。 外面は縦方向のヘラミガキ調整を行なっている。下端は横ナデが施され、直立部を形成している。	胎土、微砂および1mm大の角礫を含む、5mm大の角礫もみられる。 色調、茶褐色および灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、胴下部に煤付着、黒斑もみられる。

弥生式土器（南方Ⅲ～中期後葉）　〔第32図，図版33〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕	2	107	口径、36.0cm 頸径、30.4cm 最大径、42.4cm	「く」字形口縁部に倒卵形胴部を呈する形態。 胴部中位には列点文がめぐらされており、その部分は押圧され歪んでいる。 口縁端部は肥厚し、端面を生じている。	口縁部・頸部は横ナデ調整、特に口縁部上・下端および頸部内側は各々摘んでナデているため端部が肥厚している。また端面は凹線状の起伏が生じている。 胴部内面は斜めのヘラミガキ調整が施されている。外面は風化のため不明。 列点文は刷毛目原体で施されていると思われる。	胎土、砂粒および1～2mm大の角礫を含む。 色調、暗黄褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部半残存。 胴部の一部に煤付着。 壺形土器に含められるかもしれないが、煤の付着もみられるから甕に含めておく。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕	2	108	口径、34.0cm 頸径、30.8cm 最大径、38.4cm	「く」字形口縁部を呈し、端部はわずかに肥厚している。107と比べると口縁部はゆるやかに外反している。 胴部は最大径が上位に位置しているようであり、やや肩の張る形態となっている。 胴部中ほどには列点文がめぐらされている。	口縁部は横ナデ調整。端部は丁寧な横ナデ調整を施している。 胴部内面は斜方向のヘラミガキを行なっている。外面は縦方向の刷毛目整形後、下半は縦方向のヘラミガキを施している。列点文は刷毛目原体で施している。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を含む。 色調、灰褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、胴部に煤が付着している。 口縁部完存。
甕	3	109	口径、15.0cm 頸径、17.4cm 最大径、20.2cm	「く」字形口縁部であるが、端部は肥厚しており、端面には2－3条の凹線がめぐらされている。 胴部は上半に最大径が位置しているようであるが、肩は張らない。	口縁部は横ナデ調整、端部は上方に肥厚させている。頸部内外面も横ナデされている。 胴部内面は斜め方向の刷毛目調整を行なっている。外面は刷毛目整形後、肩部に軽くヘラミガキ、下半には縦方向の丁寧なヘラミガキを行なっている。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を若干含む。 焼成、良好。 色調、黄褐色。 出土、D区包含層上部。 特記、口縁部を残存。
甕	3	110	口径、22.0cm 頸径、20.4cm	緩く屈折する口縁部を持つ。端部は折りまげ上方へ肥厚させ、巾広の端面を形成させている。端面には3条の凹線文がめぐらされている。 胴部上半に最大径が位置しているようである。	口縁部および頸部内外面は横ナデ調整を行なっている。 胴部内面は横方向のヘラミガキ、外面は縦方向の刷毛目整形後、ナデ調整を施し、刷毛目を消去している。	胎土、微砂含有。良質。 焼成、良好。 色調、暗茶褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部を残存。
甕底部		111	底径、7.8cm	ナデによって直立した部分を形成し、そこからゆるやかに外反して胴部に至る形態。	底部内面は指ナデ整形。 外面は縦方向のヘラミガキ調整、最下端は指ナデ調整である。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を若干含む。 色調、茶褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、胴上半煤付着。
甕底部		112	底径、6.2cm	111と同形。 やや薄手となっている。 底部は平底、中央部に1穿孔あり。	底部内面下端は同心円状に丁寧な指ナデ、上半は縦方向の指ナデ整形である。 外面は縦方向のヘラミガキ調整を行ない、最下端は横ナデ調整されている。 底面は刷毛目調整を行なっている。 穿孔は焼成前に上下面から行なわれた可能性がある。	胎土、微砂含有。 色調、茶褐色。 出土、B・C間土器溜。 特記、底部外面に黒斑あり。 底部に1貫通孔があけられている。
甕底部		113	底径、5.8cm	わずかに直立した部分が形成されており、ゆるやかに外反して胴部に至る形態。 底部は平底。中央部は1孔穿孔されている。	底部内面は指頭でよく押圧し成形している。のちナデにより平滑化されている。 外面は、縦方向のヘラミガキ調整、特に下端は、ヘラミガキの施跡も強く単位も異なるようである。 貫通孔は焼成後、外から穿孔している。	胎土、微砂および雲母片を含有。 焼成、良好。 色調、明黄灰褐色ないし明灰黄色。 出土、B区北東土器溜。 特記、底部は火によって変色している。 底部に1貫通孔があけられている。

弥生式土器（南方Ⅱ～中期後葉）　〔第33図・図版第34〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
高坏脚部 坏部	A_1b A	114	口径、21.4cm 接合部径、5.3cm 脚径、13.6cm 器高、29.6cm	坏部は半球形を呈しており、口縁部は水平に屈折する。端部は丸く収まっている。 脚部は筒状の支柱部から「ハ」字形に開き裾部に至る。裾部は内外からの横ナデ調整により、起伏を生じている。端面は下方に向き接地面を形成している。端部は内側に肥厚して鈍い「T」字形を呈している。	坏部内面下半は放射状方向のヘラミガキ、上半は横方向のヘラミガキを行なっている。外面は不規則なヘラミガキ、口縁部は横ナデ調整を行なっている。 脚部内面上半は絞り目を残こしている。下半は風化のため不明。下端は指整形により肥厚部を形成させ、横ナデ調整している。 脚部と坏部は連続成形手法による。	胎土、微砂多量含有。 焼成、良好。 色調、黒褐色、一部赤味を帯びる。 出土、B区北東上器溜。 特記、坏部半欠損。 脚端部に黒斑あり。
高坏脚部	A_1a	115	接合部径、5.6cm 脚径、15.4cm 脚高、11.5cm	接合部から「ハ」字形に開く脚部であり、114のように筒状部を形成していない。 脚裾部は強いナデのため外方へふくらみを生じており、端面は斜め下方に向いている。内側には肥厚していない。	坏部内面は横方向のヘラミガキ、外面は縦方向のヘラミガキ調整である。 脚部内面上半は絞り目を残こしており、中ほどは指頭圧痕がみられる。下半は横ナデ調整が施されており、外方へわずかにふくらみを生じている。 脚部と坏部は連続成形手法による。	胎土、微砂および1～1.5cm大の角礫含有。 焼成、良好。 色調、黄赤褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、脚部半残存。
高坏脚部	A_1a	116	接合部径、4.8cm 脚径、13.6cm 脚高、10.4cm	絞り目の残こされている部分は筒状を呈しているが、以下は「ハ」字形に開く脚部である。 脚部には2ケ所ほど外方へふくらみを生じている。端面は斜め下方に向き内側は肥厚していない。115と比べ、端部の収め方がシャープである。	坏部内面は横方向のヘラミガキ調整を行ない、のちナデている可能性がある。外面は縦方向のヘラミガキ調整である。 脚部内面上部は絞り目を残しており、中ほどには指頭圧痕を残す。この指頭整形により外方へわずかにふくらみを生じている。下端は横ナデ調整である。この部分も外方へふくらみを生じている。外面は縦方向のヘラミガキ調整であるが、端部は丁寧な横ナデ調整され、外方へ引き出されており明瞭な接を形成している。 脚部と坏部は連続成形手法による。	胎土、微砂含有。 焼成、良好。 色調、黒茶褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、脚部ほぼ完存。
高坏脚部	A_2	117	接合部径、4.2cm 脚径、13.8cm	筒状部が長くなり、裾部が「ハ」字形に大きく開く形状となっている。 筒状部に黒褐沈線が3条めぐらされている。 端部は、ナデのため外方へふくらみ気味となり、端面は下方を向いている。	脚部内面上半は絞り目を残こす。下半は荒い刷毛目整形を行なっており、のちにナデ調整を施しているが、刷毛目は一部みられる。下端は横ナデ調整により刷毛目を消去しており、また回面を形成、内方へわずかに肥厚が生じている。 外面は縦方向のヘラミガキ調整を行ない、端部は横ナデ調整されている。	胎土、微砂含有。 焼成、良好堅緻。 色調、暗黄褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、脚部下半1/3欠損。 裾に黒斑あり。
高坏脚部	B	118	接合部径、5.1cm 脚径、14.4cm 脚高、10.6cm	接合部から内湾気味に「ハ」字形に開く脚部である。脚端部は横ナデにより外方へ引き出されているため明瞭な接を形成している。 脚部中ほどに、2対の円孔が外から内へと穿孔されている。	坏部内面は横方向のヘラミガキ調整、外面は縦方向のヘラミガキ調整である。 脚部内面上半は絞り目を残し、中ほどはナデが施されているようだ。端部は両角を別々に横ナデしており、各々肥厚させている。そのため端部は鈍い「T」字形を呈している。 脚部と坏部は連続成形手法による。	胎土、微砂および1～2.5mm大の角礫を含有。 色調、茶味を帯びた灰褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、脚部半欠損。 脚下端に黒斑あり。 脚中ほどに2対の穿孔あり。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
高坏脚部	B	119	接合部径、5.8cm 脚径、14.6cm 脚高、18.6cm	118と同形であるが、脚端部の収め方が119はシャープでない。 脚部中ほどに2対の円孔があけてある。	坏部内面は指ナデ調整、外面は縦方向のヘラミガキ調整を行なっている。 脚部内面上半は絞り目を残こし、下半は横ナデ調整されている。外面は縦方向のヘラミガキが施されている。端部は丁寧な横ナデ調整されており、外方へ引き出され肥厚している。 脚部と坏部は連続成形手法による。 穿孔は外から内へと行なわれている。	胎土、微砂含有、良質。 焼成、良好。 色調、淡橙色。 出土、B区北東土器溜下層。 特記、脚部4欠損。 脚下端に黒斑あり。 脚部中ほどに円孔あり。
高坏脚部	A_2	120	接合部径、4.8cm 脚径、15.8cm 脚高、14.5cm	脚部は筒状部が長く明瞭になり、スマートな形状を呈している。 筒状部には3条の浅い沈線文が、2段にわたって描かれている。脚部中ほどには2対の円孔が外から内へと穿れている。 端部は外方へわずかにふくらみ気味の形状を呈している。 坏部は半球形を呈しており、水平に屈折する口縁部を有すと思われる。また、屈折部には隆帯がめぐらされている。 口縁部には脚部の円孔と対応する位置に円孔が穿孔されていたと思われる。	坏部内面は刷毛目整形後、放射状のヘラミガキを行ない、口縁部下は横方向のヘラミガキを施している。端部は更に横ナデしている。外面は縦方向のヘラミガキ調整である。 脚部内面は上半に絞り目を残こし、下半は横ナデ調整を行なっている。外面は縦方向のヘラミガキ、端部は内外面とも丁寧な横ナデ調整を施し、わずかに肥厚気味となっている。 坏部と脚部は連続成形手法による。	胎土、微砂多量含有。 色調、暗黄褐色。 出土、B・C間土器溜。 特記、口縁部欠損、脚端部を欠損。 坏部内面に黒斑がみられる。 口縁部・脚部に2対の円孔がみられる。
坏部	B					
高坏脚部	D	121	接合部径、5.2cm	接合部からゆるやかに開く脚部。 接合部に凸帯を貼付し、脚部中ほどには三方向に透孔をあけている。	脚部内面上半は絞り目を残し、下半は斜め方向のヘラミガキが施されている。 外面は刷毛目整形後、縦方向のヘラミガキ調整を行なっている。 透孔は、鳥状の鋭利な工具で切り取っている。凸帯の刻目も同一施文具で付されている。 凸帯は横ナデ調整されている。上面は丁寧だが下面は雑目がみられる。 刷毛目→ヘラミガキ→凸帯貼付の順である。 坏部と脚部は連続成形手法による。	胎土、微砂を含有、良質。 焼成、良好。 色調、灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、脚部1残存。 三方に透孔あり。 脚Aと類似した形態と思われるが、透孔と刻目凸帯を重視して脚Dと分類しておく。
高坏脚部	B	122	接合部径、5.1cm 脚径、14.6cm 脚高、13.1cm	形状は119と近似している。ただ、凸帯がめぐらされている部分だけ脚部が広くなり、また筒状部を形成していることになる。 脚部の開き具合いや端部の収め方は119と同様であり、また120とも共通性がみられる。過渡的様相を示すものであろう。	脚部内面上半は絞り目が残され、中ほどのところは縦ナデが施されている。下半は横ナデ調整が行なわれている。 外面は、凸帯直下に縦方向の刷毛目を残し、縦方向のヘラミガキを行なっている。更に凸帯を貼付し、横ナデ調整を行ないヘラミガキ痕を一部消去している。 坏部と脚部は連続成形手法による。	胎土、微砂含有。 焼成、良好。 色調、淡橙色。 出土、B区北東土器溜。 特記、脚部4欠損。 接合部に断面三角形凸帯3条貼付。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
高坏脚部	C	123	接合部径、4.3cm 脚径、13.4cm 脚高、14.5cm	裾状の長い柱部から、ゆるやかに開き、下端になり大きく外反して開く脚部を呈す。端面は外方を向き、端面には凹線がめぐらされている。 脚上端には偏平な凸帯が貼付されており、そこに羽描沈線が4条描かれている。中ほどにも6条の羽描沈線が描かれている。	脚部内面上半は絞り目が残されている。下半にも絞り目は残されているが、縦方向のナデが施されている。下端は粗かい刷毛目調整が行なわれており、端部は内外面とも横ナデ調整が施されている。 外面は縦方向のヘラミガキ、下端は横方向のヘラミガキ調整である。 最後に沈線で施文している。 坏部は欠損しているが、連続成形手法によると思われる。	胎土、微砂含有、良質。 焼成、良好。 色調、明褐色、部分的に白校色。 出土、B区北東七器溜。 特記、脚裾部を欠損。 裾部に黒斑がみられる。

弥生式土器（南方Ⅱ～Ⅲ式）　〔第34図，図版34・35〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
高坏坏部	A	124	口径、21.0cm	114の坏部と同形。ただ、口縁部が厚くつくられており、シャープさに欠ける。 また、坏部も浅い形状を呈している。	坏部内面および口縁部上面は横方向のヘラミガキ調整が施されている。外面は口縁部付け根付近に縦方向の刷毛目を残し、のち縦方向の荒いヘラミガキ調整が行なわれている。 口縁部下面は指頭圧痕を残しているが、のちナデ調整が行なわれていると思われる。 穿孔は内から外へと行なわれている。	胎土、微砂多量含有。 焼成、良好。 色調、乳灰褐色。部分的に淡赤色。 出土、B区北東土器溜。 特記、坏部1/3残存。 口縁部に1対の円孔があけられている。恐らく2対穿孔されていたであろう。
高坏坏部	A	125	口径、21.0cm	124と比べると、丸みをもたず、直線的に脚部に至るようである。 端部は丸く収められている。	坏部内面および口縁部上下面とも横方向のヘラミガキ調整が行なわれ、口縁端部は横ナデ調整されている。 外面は縦方向の刷毛目、そののち縦方向のヘラミガキ調整である。屈折部に一部刷毛目痕を残しているが、更にこの部分は横ナデ調整されている。 穿孔は内から外へ行なわれている。	胎土、微砂含有、良質。 焼成、良好。 色調、暗灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、屈折部に2対の円孔が穿孔されている。
高坏坏部	C	126	口径、30.0cm	ゆるやかに外湾する浅鉢形の坏部。口縁端部は、外側に強く張り出した「T」字形を呈している。 端部には刻目が付され、端面には斜格子文が描かれている。	坏部内面は、荒い放射状方向の刷毛目整形後、横方向のヘラミガキ調整を行ない、端部は軽く横ナデ調整を施している。 外面は縦方向のヘラミガキ調整を行ない、口縁端部直下は強い横ナデ調整のため、凹面を形成している。 端部には貝状工具で刻目を付している。 施文は3本1単位の貝状工具による。	胎土、微砂・雲母片を含み、良質。 焼成、良好。 色調、灰白褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、口縁部を残存。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
台付鉢		127	口径、20.4cm 最大径、21.5cm	胴部中ほどに最大径が位置しており、平球形を呈している鉢形土器である。 口縁端部は内側に肥厚しており、端面を形成している。 口縁部下に刻目凸帯を2条めぐらし、口縁端部にも刻目が付されている。 胴部最大径部位には5本1単位の櫛状施文具で斜突された列点文がめぐらされている。	器内面は口縁部下まで横方向のヘラミガキ調整が行なわれ、口縁端部は横ナデ調整されている。口縁部は粘土を足して、内面へ肥厚させている。 外面は細かい刷毛目整形後、下半に縦方向のヘラミガキを施している。 凸帯は横ナデ調整を行ない、刻目を付している。凸帯下に斜めの傷が、所々みられる。これは刻目を付すときについたものと思われる。	胎土、微砂および雲母片を含み、非常に良質。 焼成、良好堅緻。 色調、黄褐色。 出土、B区北東上器溜。 特記、口縁部を残存。 台付鉢としたが、鉢の可能性もある。
台付鉢		128	口径、23.0cm 底径、6.6cm 器高、11.2cm	低平な脚台とゆるやかに内湾する鉢部とからなる。 口縁端部は面をもって収められている。また、口縁部下には、現況で、1孔みられる。	脚部内面は絞り目のままである。外面は指で押えて調整している。 鉢部内面は荒い刷毛目調整後、指ナデされている。外面は横方向のヘラミガキ調整を施している。 口縁部は横ナデされており、端部がわずかに外方へ引き出されている。 脚台部と鉢部は連続成形手法による。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を含む。 色調、淡赤褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、口縁部を残存。 黒斑がみられる。
台付鉢		129	底径、7.6cm	重厚なつくりの脚台部である。 充填している底板も厚い。	脚台部は指頭により整形されており、そののちナデ調整されている。特に、接合部と端部は丁寧に横ナデされており、各々、内部と外方へ引き出された形状を呈している。しかし中ほどは指頭圧を残している。内面は指整形のままである。 鉢部内面は、平滑化されている。調整法は不明。外面は縦方向のヘラミガキ調整である。 鉢部と脚台部は連続成形法による。	胎土、微砂および1～2mm大の角礫を含む。 色調、赤味を帯びた灰褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、脚台部に黒斑がみられる。全形は不明だが台付鉢とした。
蓋形土器		130	径、8.2cm 高、1.8cm	中央部が鈍く突出し、つまみとなっている。 周縁部付近に2対の円孔が配置されている。	器内面は指頭圧痕を残す指ナデ調整のようである。外面も丁寧な横ナデ調整と思われるが、周縁部はヘラミガキが施されていると思われる。そのため端部は丸く肥厚している。 円孔は、外から内へ、棒状工具で焼成前に穿孔している。 突出部は、内面から指で押圧して盛りあがらせている。	粘土、微砂含有、良質。 焼成、良好。 色調、乳褐色。 出土、B区北東土器溜。 特記、周縁部半欠。 壺形土器の蓋と思われる。

弥生式土器（後期）・土師器　〔第35図，図版第36〕

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺		131	口径、10.8cm 頸径、9.4cm	頸部からわずかに外開き気味に短く立ちあがる口縁部を呈す。 胴部は最大径が上位に位置し、肩の張る形状を呈していると思われる。 肩から胴上半部にかけて、2本の沈線が「ハ」字形に描かれている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整されており、端部は尖り気味に丸く収められている。 頸部内面には継目が認められ、その部分に圧着のための圧痕もみられる。 胴部内面は刷毛目整形後、頸部下までヘラケズリが行なわれている。ヘラケズリの及んでいる範囲は薄く仕上げられている。外面は刷毛目整形後、ナデ調整を行なっている。	胎土、微砂を含み、精選胎土。 焼成、良好堅緻。 色調、淡黄灰褐色。 出土、A区濃。 特記、口縁部¼残存。
手捏ね上器		132	口径、8.2cm 頸径、7.2cm 器高、6.6cm	丸底の底部から、わずかに内傾して胴部を形成し、口縁部を外反させた器形。 口縁端部は尖り気味で収まる。	手捏ね上器である。 底部内面には強い指ナデが行なわれており、ケズリ状状を呈している部分もみられる。 胴部内外面ともナデが施されているようだが、指頭圧痕をよく残している。 口縁部は指で押圧しながら整形している。	胎土、微砂を含有、良質。 色調、淡黄褐色。底部は淡茶褐色。 出土、A区包含層。 特記、完形品。 時期不詳であるが、弥生時代後期に手捏ね土器が顕著になることから132も後期に含めた。
壺		132	口径、28.0cm 頸径、22.3cm	二重口縁を呈する壺形土器と思われる。	二重口縁の立ちあがり部は横ナデ調整が施され、凹線とは言えないが、ゆるやかな起伏が2条ほど残している。 口縁部は端面を形成している。	胎土、微砂と1㎜大の砂粒を含む。 色調、赤橙色。 出土、C区包含層。 特記、口縁部¼残存。 壺形土器と思われるが、鉢形土器の可能性もある。
甕		134	口径、16.8cm 頸径、14.4cm 最大径、21.6cm 最大径、21.6cm	最大径が胴部上位にあるため肩が張った形状となっている。そして胴部はそのまま窄まっていくようであり、肩部および肩部直下に最大径が位置している。 口縁端部は大きく立ち上り、櫛描施文具で5条「凹線」が描かれている。	口頸部は内外面とも横ナデ調整。特に口縁部立ち上り屈折部は丁寧に横ナデされているため、シャープな稜を形成している。 胴部内面にはヘラケズリが施されている。肩部は横方向、下半部は縦方向のヘラケズリである。底部付近は指頭圧痕が残されている。外面は風化のため不明。	胎土、微砂および1～2㎜大の角礫を含有。 焼成、良好。 色調、器外面は淡灰橙色、内面は茶褐色。 出土、A区土坑C。 特記、口縁部¼ほど残存。
壺		135	口径、8.6cm 頸径、7.2cm 器高、9.9cm	胴部中ほどに最大径が位置した、ほとんど球形に近い胴部形態である。底部は欠損しているため不明であるが、丸底と思われる。 口縁端部はナデによって立ち上がり部を形成しているが、これは二重口縁部を意識していると思われる。	口縁部は横ナデ調整。端部は摘み上げしており、直立している。 胴部内面は明瞭でないが、ヘラケズリか指ナデと思われる。外面は胴部中位に丁寧なヘラミガキがみられる。 詳細は風化のため不明。	胎土、微砂を若干含有。精選された良質胎土。 焼成、良好。 色調、赤褐色。 出土、C区包含層。 特記、口縁部、胴部¼残存。 胴部全面に漆付着。

器形		土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
高坏		136	接合部径、4.8cm	柱部と脚部とが明瞭になってくる。柱部は脚部近くになるにつれ径を増し太くなってくる形態のようである。	坏部内面は非常に丁寧なナデが施されている。 支柱接合部に一部斜毛目がみられる。 坏・脚部は挿入方式である。	胎土、微砂含有、精選された胎土。 焼成、良好。 色調、淡黄褐色。 出土、A区 Pit 6 特記、柱部、坏部の一部を残すだけである。
鉢		137	口径、14.4cm 底径、4.0cm 器高、6.5cm	底部は平底であるが、明瞭な底面を形成していない。 端部は丸く収められている。 ゆるやかに湾曲した鉢形土器である。	器外面はナデと思われる。底部付近には押圧痕が認められる。内面も丁寧なナデ調整である。	胎土、非常に精選された胎土。 色調、赤橙色。 出土、A区E1層。 特記、口縁部1/4残存。底部は完形。
坩		138	口径、11.4cm 胴径、11.1cm 器高、6.3cm	わずかに底面を残しているようであるが、丸底と考えてよい形態である。 胴部は肩が張った形状を呈して、底へなだらかに窄まっている。 口縁部はわずかに外開きとなっている。	胴部外面はヘラケズリ後、ヘラミガキかナデ調整を行なっている。内面は下半が、ヘラケズリを行ない、のちナデ調整を行なっている。 口縁部は指頭整形を行ない、わずかに外反させ、軽く横ナデ調整を施している。したがって口頸部は指頭圧痕が残っている。	胎土、微砂・石英などを含有。 焼成、良好。 色調、淡黄褐色。 出土、A区土坑C。 特記、口縁部・胴部半欠。 底部に黒斑がみられる。
坩		139	口径、12.8cm 胴径、10.6cm 器高、6.7cm	口縁部が外方へ大きく拡張されており、胴高と口縁部高とがほぼ同値を示している。 胴部は肩が張った、偏平形を呈している。丸底である。	口縁部内外面とも横ナデ調整を行なっている。特に口縁端部と胴部外面は丁寧に施しており、微妙な起伏を生じている。 胴部内面は丁寧なヘラミガキ、外面は下半がヘラケズリ整形を行なっており、上半はヘラミガキと思われる。	胎土、非常に精選された胎土。 焼成、良好堅緻。 色調、暗褐茶色、一部黒味を帯びる。 出土、C区包含層。 特記、口縁部十残存。底部完存。
坩		140	口径、12.4cm 胴径、10.0cm 器高、6.7cm (推定)	139と同形である。ただ肩が余り張っていないことと、薄手であることが異なる。 底部は欠損しているので不明であるが丸底であろう。	風化のため詳細は不明である。 口縁部外面は横ナデ調整。胴部には荒状工具で押圧して調整しているので凹部を形成している。 胴部外面下半はヘラケズリだが、上半はナデかミガキであろう。	胎土、微砂を含有しているが精選された良質の胎土。 焼成、良好堅緻。 色調、赤褐色。底部付近はやく変色している。 出土、C区包含層。 特記、口縁部十残存。 胴部特に胴部下に煤が顕著に付着。

2.石　　器

発掘区全体から、打製石庖丁、打製石鏃、打製石錐、打製石槍、不定形刃器、太型蛤刃石斧、砥石、不明石器等、総数29点の石器が検出された。打製石器のほとんどはサヌカイト製であり、サヌカイトの石核、剥片、チップ等も約60点強出土した。しかし、残念ながら、遺構に確実に伴う石器の出土はみられなかった。

個々の石器についての細かな観察は後項の表（石器一覧表）に掲載しているが、注意すべき事項を、簡単ではあるが、各器種別に若干述べておきたい。

打製石庖丁（第36図・図版第37）

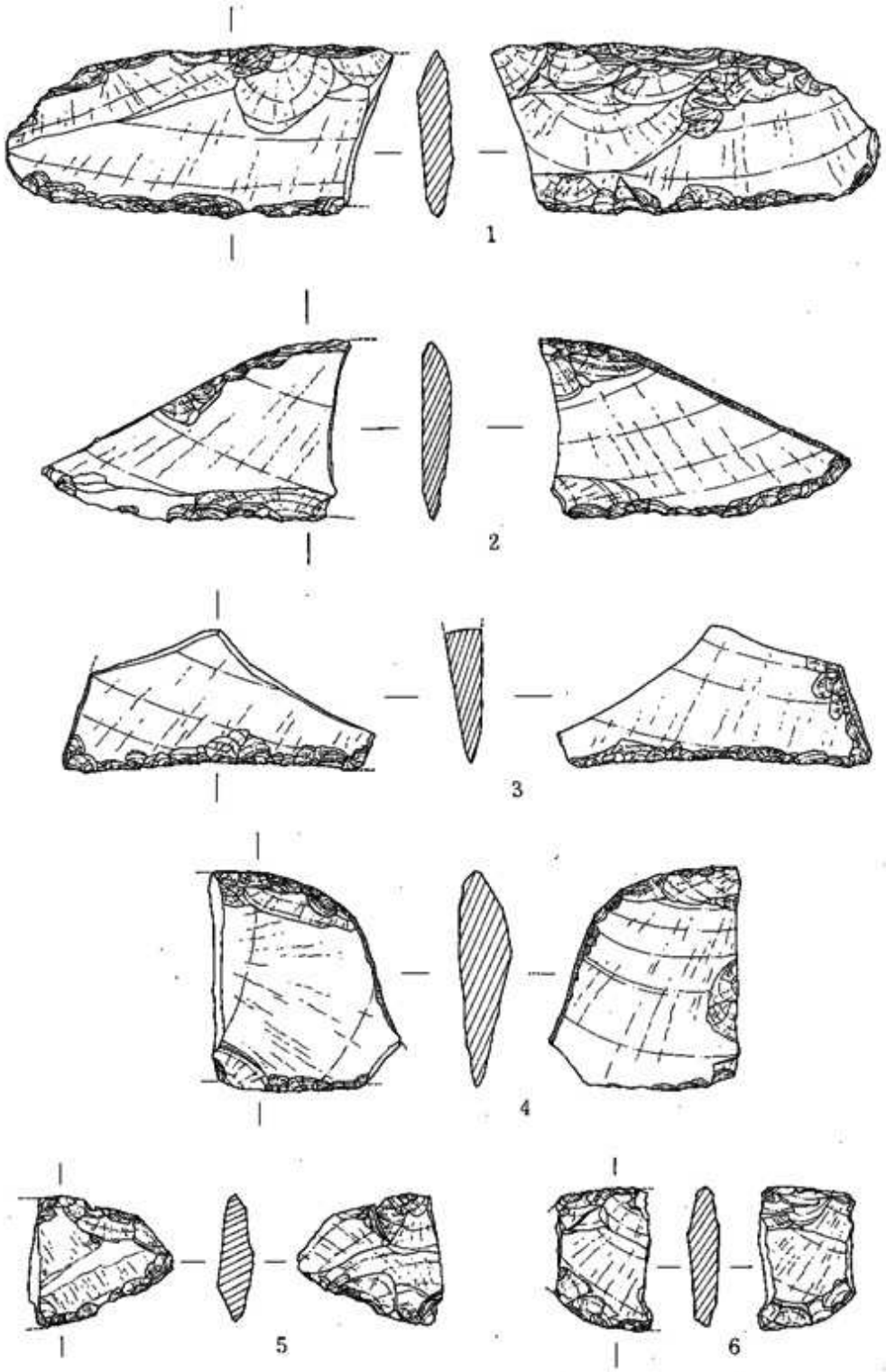
石庖丁はサヌカイト製のものばかり6点出土した。石庖丁の形態については、再生加工により小型化している2点を除くと、(1)がかろうじて半月形に近い形を呈しているだけで、残る3点は短辺部から背部に自然面を残したままの不定形を呈している。このように今回の発掘で出土した石庖丁はいずれも不整形を呈するものがほとんどで、1970年の発掘[3]で出土した石庖丁のほとんどが半月形など比較的整った形態（付図3）であるのとは、やや様相が異なっている。しかし、1970年の調査と今回の調査において出土した土器等に、明確な時期差はみられないこと[4]からも、その形態差を時期差によるとするのは困難であろう。おそらく、本遺跡の時期には、石庖丁は多様な形態を示しており、何らかの理由で偶然的に、形態の様相の違いが生じたのではないかと思われる。しかし、両発掘で出土した石庖丁は、両短辺に抉りをもつ形態が出土していないことと、磨耗後さらに二次加工して再利用している小型のものの多いことが、共通点として指摘できる。前者は、本遺跡の時期、すなわち中期前葉から中葉にかけては、半月形、楕円形、不整形など多様な形態のものが使用されているものの、両小口に抉りをもつ典型的な形態にまで至っていないことを示しているのであろう。後者は、石庖丁の使用の激しさを物語ると共に、できる限り石材を利用し、むだなく活用していたことを示しているといえる。

打製石鏃（第37図・図版第37）

打製石鏃は、平基無茎式石鏃が2点、凹基無茎式石鏃が1点出土したにすぎない。(9)の凹基無茎式石鏃は、中心部に若干磨滅がみられることから、狩猟の際、持ち帰り、重ねて使用していたことが推察できる。

打製石錐（第37図・図版第37）

打製石錐は(10)の1点だけである。この石器は、石錐と断定するにはやや形状に疑問を残すが、先端部分の断面が菱形を呈することから、一応石錐と判断し、とり扱った。



1～6　打製石庖丁

第36図　石器実測図

不定形刃器（第37図・図版第37）

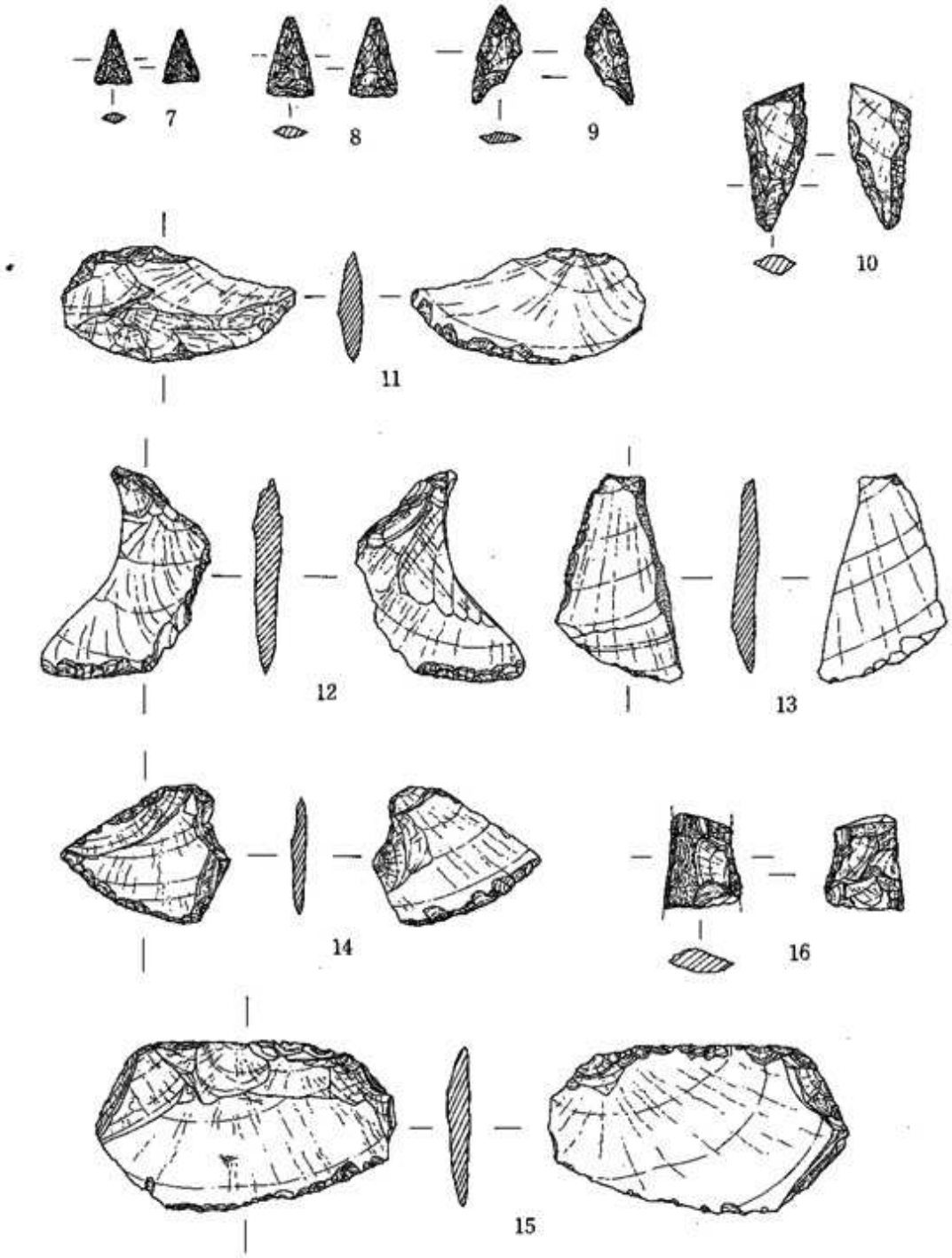
刃器は不定形のものばかり５点出土した。安山岩系の石材を用いた１点を除いて、他はサヌカイト製である。刃部は一辺（下辺のみ）、あるいは二辺（下辺および側辺）にもつものがあるが、いずれも外湾する鋭い刃を有し、器厚は0.4~0.9cmと薄づくりである。これらの刃器には共通する形態はみられず、石核から剝ぎとった薄い剝片の末端部に、片面あるいは両面から加工を簡単に施しただけで、素材の形状をほとんど変えることなく利用してつくりあげている。

打製石槍（第38図・図版第38）

打製石槍は、全く異なるタイプの２点が出土した。(16)は小型であるが、断面凸レンズ状を呈するいわゆる一般的石槍で、一部分に研磨がみられる。(17)は大型でかなりの重量をはかる石槍である。刃部は片側部分を欠損しているため推測にすぎぬが、断面Ｓから考えると、片刃か、あるいは両刃にしても片側の刃を特に意識して製作されている可能性がある。しかし、このような片刃を意識した石器は他にあまり例をみないため、石器製作の際、偶然左右非対称の刃部ができあがったとも考えられる。[38] いずれにせよ、幅広で薄いつくりの刃部は鋭利な刃を有しており、かなりの殺傷力をもつと思われる。故にこの石器は〝つく〟機能だけでなく、〝切る〟あるいは〝なで切る〟機能をもちあわせていると考えられ、石槍というより、むしろ、石矛（?）に近い機能をもつ大形の利器とみるべきかもしれない。[39]

石斧（第39図・図版38・39）

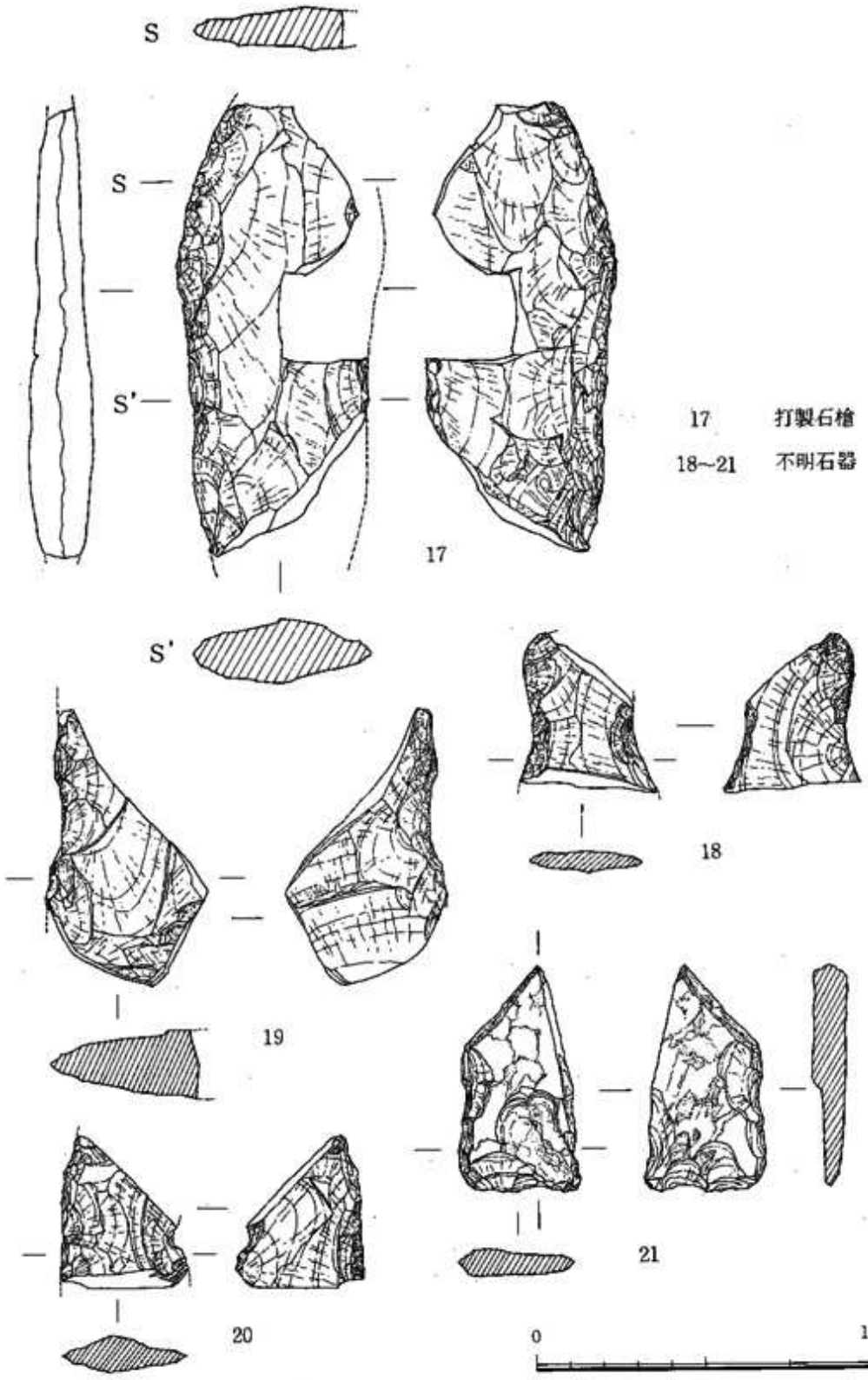
太型蛤刃石斧が２点と、石斧の未製品が２点の計４点出土した。太型蛤刃石斧はどちらも折損しているが、ほぼ同じ大きさである。(22)は全体に丁寧に研磨されているのに比べて、(23)は刃部から体部にかけての研磨調整が頭部付近とあまりかわらぬ粗さであり、また、体部側面が(22)は着柄を意識して平坦面をつくり出しているのに対し、(23)にはそうした配慮がみられぬことなど、製作上の相違が両者には認められる。また(22)の体部にみられる明瞭な色調の相違は、着柄の際、結束部分だけが、いわゆる〝やける〟ことなく、製作当初時の色調のまま残ったためと考えられ、相当長期間使用した結果かと思われる。(22)の刃先にみられる斜方向の擦痕は、他の石斧においてもしばしば観察されるもので、木材伐採時に石斧を斜め上方から振りおろして使用したことを反映しているといえる。[40] このことは、(22)が斜め縦方向の亀裂により折損している状況とも合わせてうなずけよう。未製品はいずれも頭部片であり、共に自然面を残している。粗い敲打が若干みられるだけで、石斧製作上における荒割り段階のものと考えられる。[41]



7～9　打製石鏃　　11～15　不定形刃器
10　打製石錐　　16　打製石槍

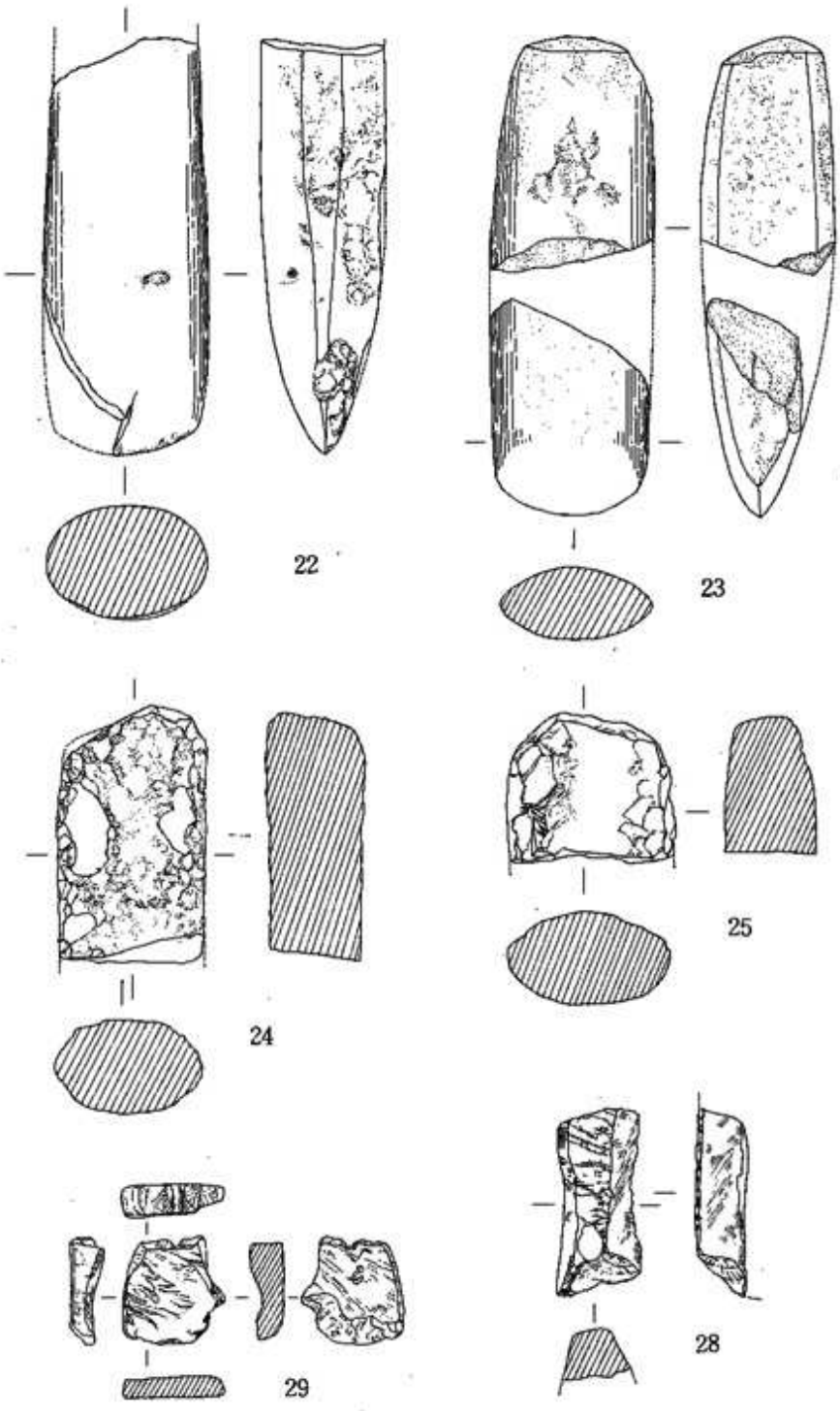
第37図　石器実測図

0　10cm



17　打製石槍
18～21　不明石器

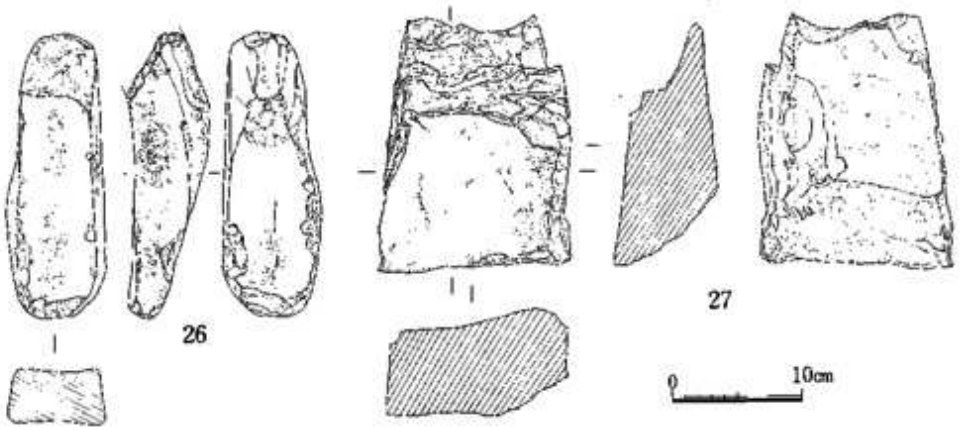
第38図　石器実測図



22, 23　太型蛤刃石斧
24, 25　石斧
28, 29　砥石

0　10cm

第39図　石器実測図



第40図　石器実測図　26·27砥石

砥石（第39・40図・図版第38・39）

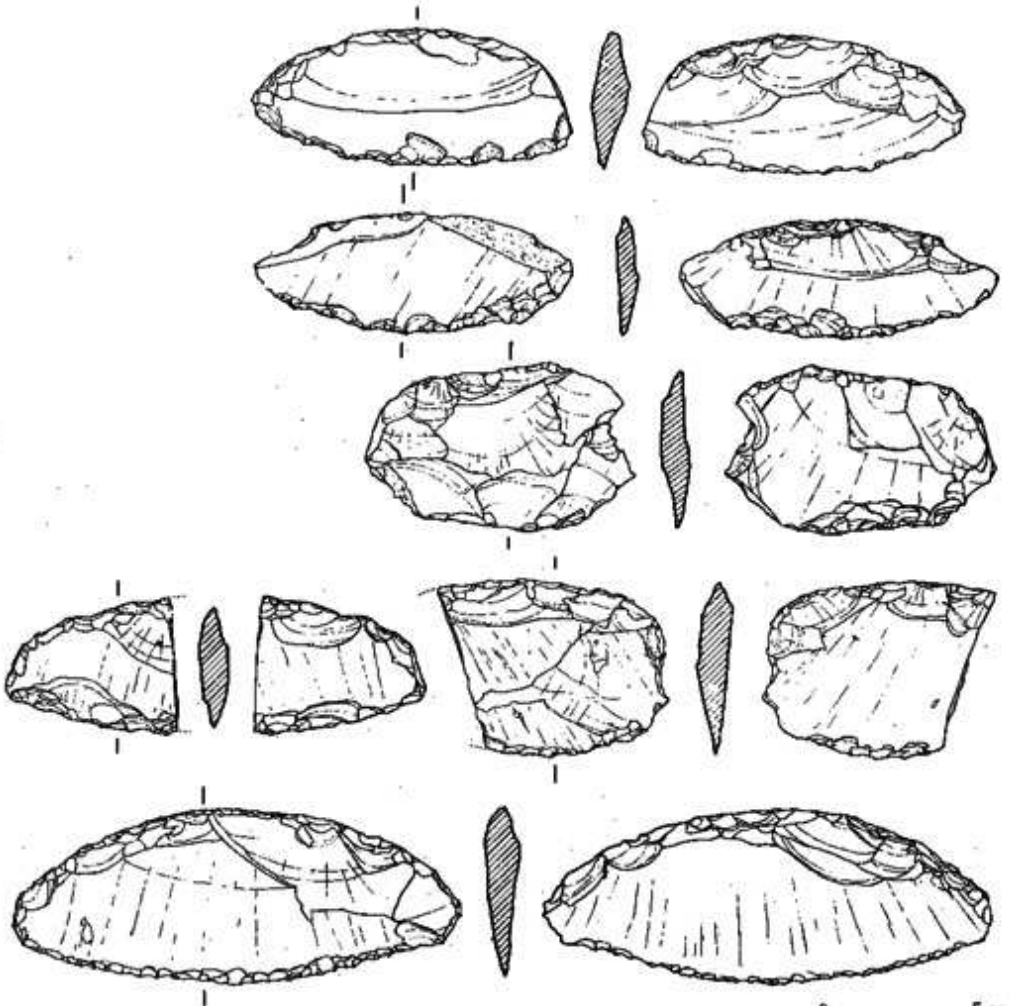
砥石はそれぞれ硬質、軟質の石材を用いた大型のものが2点、小型のものが2点出土した。使用面数は大型硬質砥が2面、大型軟質砥が3面であるのに対し、小型軟質砥が6面、小型硬質砥が少なくとも3面（欠損しているため不明）で、大型に比べると小型の方が石材の質とは関係なく、使用面数が多いようである。これは、大型砥石が砥石自体を固定し、研磨する物体を動かして研ぐのに対し、小型砥石は砥石自体を動かして砥ぐという使用法の違いによるためかと推察される。

以上、出土した石器について、器種別にみてきたが、若干の問題点をとりあげ、まとめとしたい。

まず石器製作にあたり、「専業」あるいは「半専業」集団が存在していたかという問題があげられる。この問題に関して、本遺跡では、サヌカイトの剥片、石核等が60点余りも出土しているものの、一ケ所での集中的出土状況にないこと、また石斧の未製品が個別的に出土していることなどから、石器製作の「専業」もしくは「半専業」集団の存在は認めがたいと考えられる。本遺跡出土のサヌカイト製石器は、入手ルートについては不明であるが、運搬可能な大きさの原石を求め、「単位集団」内で自足的に石器製作を行ったと考えられる。また、自然面をそのまま利用した石器が多くみられること、残存している石核が最大のものでも約7.5cm×約9cm大（厚さ2cm）にすぎず、剥片も一様に小形であることなどから、可能な限り、石材を活用して石器製作を行なったと推定される。

次に石器のあり方について、二つの問題があげられる。一つには本遺跡からの出土石器は、数量は少ないながらも、一応ほとんどの器種をそろえていること、二つにはその多くが日常生活用具であることである。前者は、鉄器普及前の本遺跡の時期においては、未だ石器が生産用具の主体であったことを物語っているとも考えられる。後者にみる石器のあり方は、本遺跡より時期的にやや下り、高地性集落の出現をみる中期中葉から後葉において、戦闘用武器（石鏃、石槍など）が膨大に出土することと明らかに異なっている。しかし、注意すべきことは、本遺跡から他にあまり例をみない大型の打製石槍が1点出土していることである。この石槍は、狩猟用と考えるより、戦闘用として使用した可能性をもつ特異な石器である。これを戦闘用武器であると仮定するならば、戦闘用石器の多量出現をみる時期の前段階に相当する本遺跡においても、集団間の矛盾解決の社会的方法としての〝戦い〟が頻発的でないにせよすでに内在していたと考えることも可能であろう。

（岡崎順子）



付図3　打製石庖丁実測図（『南方遺跡発堀調査概報』による）　0　5cm

石　器　一　覧　表

番号	出土地点	器種		石材	特記事項および所見
	現状	現存部長	最大幅	最大厚	
1	BC区間土器溜	打製石庖丁		サヌカイト	半月形を呈し、わずかに外湾する刃をもつ石庖丁で、右側辺を欠損している。正面は大剥離面を大きく残すが、背面は主要剥離の後、背部方向より打撃を加えた剥離調整を広範囲に行ない、大剥離面の過半をはぎとっている。刃部は大剥離面のなすエッジを使用し、両面から簡単にトリミングを行なうことでつくり出されている。使用痕は正面の稜線部および刃部に特に著しい。背面の刃部の磨滅はあまり顕著ではない。なお、背面刃部に2・3の新しい剥離がみられ、刃部の再加工がなされていることは注意すべきである。また、折損後も継続して使用された可能性をもつ。
	一大残存	11.0cm	4.8cm	0.9cm	
2	B区	打製石庖丁		サヌカイト	左小口部から背部にかけて、自然面をそのまま使用しており、不定形な三角形状を呈する。刃はやや湾曲するが直線的である。両面共大剥離面を大きく残すが、正面はプライマリー・フレーキングによる細長い剥離面を利用し、簡単に調整打を行ない刃部としている。磨滅は正面の刃部付近と背部における自然面との縁辺とにみられ、特に刃部付近が激しい。
	一大残存	8.2cm	5.0cm	0.8cm	
3	C区	打製石庖丁		サヌカイト	左小口部に自然面を利用しており、刃部はやや内湾的である。正面背面共に大剥離面を末端近くまで残し、細かい調整を加えただけで、両者のなすエッジをそのまま刃としている。使用による磨滅は、両面刃部にわずかにみられ、正面には使用の際、握った指の跡の磨耗がみとめられる。折損のため使用期間が短かかったためか、他の石庖丁に比べると磨耗が少ないようである。
	刃部片	8.6cm	3.8cm	1.1cm	
4	B区北東土器溜	打製石庖丁		サヌカイト	他の石庖丁に比べると大型で、厚さも2倍近くある。掌中で使用する石庖丁として考えるならば、かなり大きなサイズであろう。右小口部に自然面を利用し、楕円形を呈する。刃部はやや外湾する。正面の大剥離面
	小口部片	5.3cm	6.1cm	1.5cm	

番号	出土地点 / 現状	器種	石材		特記事項および所見
		現存部長	最大幅	最大厚	
					は横方向からの打撃によるもので、打撃点は折損部分からそう遠くはない位置にあったと考えられる。背面の大剥離面はポジティブな剥離痕を明瞭に残している。刃部は大剥離をいかし、わずかに末端を調整しつくりあげている。使用痕はほとんどみられない。
5	遺離	打製石庖丁	サヌカイト		磨滅の著しい石庖丁に再加工を重ね使用していたと考えられる。加工前の石庖丁は、背面に比べ、正面の穿付近の磨滅が特に著しい。再加工は刃部および背部において数回にわたって行なわれた可能性が強く、再加工を重ねる都度、小型化していったと考えられる。しかし小型化後、石庖丁として使用したかは不明である。
	小口部片	4.1cm	3.5cm	0.9cm	
6	BC区間土器溜	打製石庖丁	サヌカイト		(5)と同様、磨滅した石庖丁に加工を施し、再利用したと考えられる。加工前の石庖丁は両面共、大剥離面を大きく残している。使用による磨滅は(5)ほど激しくない。再加工は1回のみかと考えられ、主として刃部を両面から調整加工している。
	中間部片	2.8cm	4.0cm	0.9cm	
7	B区pit	打製石鏃	サヌカイト		平基無茎式石鏃であり、側辺は直線的だが、やや内湾弧をえがく。正面にのみ大剥離面を残し、全体に細かい仕上げが施してあり精巧なつくりといえる。
	完形	1.5cm	1.1cm	0.25cm	
8	B区溝	打製石鏃	サヌカイト		尖端部分をわずかに欠損する平基無茎式石鏃で、側辺はやや外湾的である。正面背面共に細かい調整が行なわれており、基辺部は多少外湾し丸味をおびている。重心は中央部分基部よりにある。
	ほぼ完形	2.5cm	1.4cm	0.25cm	
9	C区pit	打製石鏃	サヌカイト		深い凹基の無茎式石鏃で、側辺の形状は内湾し弧をえがく。正面背面共に大剥離面を中央に残し、稜部分は若干磨耗がみられる。全体の調整はややあらい。
	基辺部欠損	2.8cm	1.3cm	0.3cm	
10	C区pit	打製石錐	サヌカイト		縦長の剥片を用いた石錐かと思われる。錐部と頭部は境が不明瞭で、錐部に行くに従い、しだいに細くなっている。正面背面共に頭部に大剥離面を残し、頭部断面は六角形であるのに対し、錐部断面は菱形を呈する。
	頭部欠損	3.9cm	1.8cm	0.5cm	

番号	出土地点	器種		石材	特記事項および所見
	現状	現存部長	最大幅	最大厚	
11	BC区間土器溜	不定形刃器		サヌカイト	横長剝片を使用した不定形刃器で、半円形の外湾する刃縁をもつ。正面は大剝離面をわずかに残すのみで、フリー・フレーキングを多く用いて刃部をつくり出しているが、背面はポジティブ・バルブを明瞭に残し、末端側に若干調整を加えただけで、大剝離面をそのまま利用している。
	完形	6.8 cm	3.3 cm	0.7 cm	
12	B区	不定形刃器		サヌカイト	半ば欠損する不定形刃器である。大剝離面を両面共、大きく残し、刃部は剝離末端の周縁部に細かい調整を加えてつくり出されている。刃部は厳密には二辺、すなわち、正面下辺と正面左側辺とに分けられる。正面下辺の刃は、正面背面からの両面加工によるが、正面左側辺の刃は、背面からの片面加工によりつくられている。
	側辺部欠損	6.0 cm	3.5 cm	0.85cm	
13	A区下包含層	不定形刃器		サヌカイト	右側辺に自然面を残す縦長剝片を素材とする不定形刃器である。正面には、プライマリー・フレーキングによる剝離面がみられるが、背面はポジティブな主要剝離面のみで成り立っている。正面下辺と正面左側辺の二辺に、正面からの片面加工による細かい調整を簡単に行ない、刃をつくり出している。主に刃としての利用は外湾的刃部をなす下辺においてかと思われる。
	完形	5.8 cm	3.5 cm	0.6cm	
14	B区北東土器溜	不定形刃器		安山岩？	安山岩系の石材を用いた薄い、不定三角形を呈する刃器である。両面共、大剝離面を大きく残すが、刃は正面下辺と正面上辺の二辺につけられている。上辺の刃は、正面からの片面加工によるもので、直線的だが、下辺の刃は、正面背面からの両面加工によるもので、やや外湾的である。
	完形	4.8cm	4.0cm	0.4cm	
15	遊離	不定形刃器		サヌカイト	不整楕円形を呈し、下辺に外湾的な刃をもつ、かなり大型の刃器である。ほぼ完形であるが、刃部左辺を一部欠損している。両面共、大剝離面を最大限にいかし末端部に細かいトリミングを両面から若干行なっているだけで刃部をつくっている。
	ほぼ完形	8.6cm	4.8cm	0.75cm	

番号	出土地点	器種	石材		特記事項および所見
	現状	現存部長	最大幅	最大厚	
16	B区北東土器溜	打製石槍	サヌカイト		正面の中央稜部左側の風化が激しい石槍基部片である。正面背面共に大剝離を全く残さず、粗い二次剝離調整を行なっている。断面は凸レンズ状を示している。現存部分の右側下端には縦0.6cm×横0.7cmの範囲で磨きがみられることから、局部磨製の石槍である可能性があるが、折損しているため断定はできない。
	中間部片	2.7cm	2.2cm	0.7cm	
17	BC区間土器溜およびC区	打製石槍	サヌカイト		槍先部分は幅広でややふくらみをもち、基部分はわずかであるがくびれ、幅は狭く厚みをもつ、大型の石槍である。両面共、大剝離面をほとんど残さず、整形剝離を全面に行なっている。槍先部分は側縁部両面からあさく剝離調整し、薄く鋭利な刃部に仕上げているが基部分は調整後、刃を潰して面取りしており、着柄を意識していると考えられる。正面の上部稜線部分は多少磨耗している。
	中間部片	13.0cm	5.3cm	1.9cm	
18	B区包含層	不明石器	サヌカイト		両側辺に抉りをもつ器種不明の石器である。小型で薄いつくりであることから刃器としての可能性をもつ。抉り上部分は、欠損しているが、おそらく円形状の刃部をなすと推定される。抉り下部分はやや広がりをもつと思われる。
	中間部片	4.4cm	3.9cm	0.7cm	
19	遊離	不明石器	サヌカイト		2cmの厚さをもつ大形石器の破片で、抉り部分のみ残存している。器種は不明であるが石鏃かとも思われる。両面共に大剝離面は残しておらず、二次的剝離調整が行なわれており、抉り部分及びその上下部分には刃潰しがなされている。
	中間部片	7.3cm	4.8cm	2.0cm	
20	D区包含層	不明石器	サヌカイト		断面菱形を示す石器片で、上下部分はいずれも欠損しているため、断定はできねが、石槍としての可能性をもつ。両面共、大剝離面は全く残さず、調整剝離は側辺方向から主にステップ・フレーキングを用いて行なっており、正面左側辺には刃潰しがみられる。
	中間部片	4.4cm	3.8cm	1.1cm	

番号	出土地点	器種	石材		特記事項および所見
	現状	現存部長	最大幅	最大厚	
21	遊離	不明石器			淡灰緑色を呈する小型の石斧形の石器である。正面左上側辺は自然面を残し、全体に荒い敲打のままで細かい調整は行なわれていない。正面右側辺は欠損しているので原形は不明であるが、石斧状の形態と推定される。しかし、刃部には鋭利さがみられず、未使用と思われる。未製品かもしれない。
	刃部片	6.5cm	3.5cm	0.8cm	
22	BC区間土器溜	太型蛤刃石斧			頭部端と刃部の半分を破損しているが、ほぼ完形をとどめる、水成岩系の石材を用いた太形蛤刃石斧である。断面は丸味をもった楕円形を呈し、刃部は外湾している。体部から刃部にかけては丁寧に研磨され、斜め方向の研磨調整の跡がみられ、また刃先には縦方向の細かい使用痕が観察される。頭部付近は刃部に比べると研磨も鈍く、両側面には着柄を意識して荒い調整のままの平坦面をつくっている。頭部から体部は淡緑灰色、体部から頭部にかけては暗緑灰色を呈し、着柄による結束痕を示す色調の相違がみられる。
	ほぼ完形	16.3cm	6.6cm	4.4cm	
23	B区北東土器溜	太型蛤刃石斧			深緑灰色を呈する水成岩系の石材を用いた太型蛤刃石斧である。体部の一部が欠損しているが、頭部と刃部は完存している。断面は22よりもさらに丸味をもった楕円を示している。刃部は丁寧に研磨されているが、体部から頭部にかけては、正面側に一部研磨がみられるだけで、敲打調整のまま残されている。刃先には、擦痕等は明確にみとめられない。
	体部欠損	19cm（推定）	6.5cm	5.4cm	
24	C区	石斧			頭部から体部にかけて残存している、太型蛤刃石斧の未製品と考えられる。荒割り段階のもので、両側面を粗く敲打しているにすぎず、正面背面共、中央部分には自然面を残している。深緑灰色を呈し、自然面部分には鉄分の付着がみられる。
	頭部片	10.2cm	5.9cm	3.7cm	
25	C区	石斧			24と同様、石斧の未製品と考えられる。淡灰緑色を呈し、頭部のみ残存している。粗く敲打しただけで、自然面を多く残している。
	頭部片	5.7cm	6.6cm	3.7cm	

番号	出土地点	器種	石材		特記事項および所見
	現状	現存部長	最大幅	最大厚	
26	A区包含層	砥石	砂岩		長方形を呈する砂岩製の砥石である。上下両面および片側面の3面を使用しており、断面は凹レンズ状を呈する。特に上下両面は使用が激しく、中央が凹み、明瞭ではないが、条痕も残されている。
	完形	21.9cm	7.6cm	4.2cm	
27	B区	砥石	玄武岩		破損後、礎盤として二次使用されていた、玄武岩系の硬質の石材を用いた大型の砥石である。上面は砥石として主に利用されたらしく、堅くなめらかで、擦痕も多く残されている。上面左方は使用のためか、やや凹んでおり、かつての砥石の中央部分と考えられる。下面は条痕や凹みを残すが、上面に比べると粗い状態を呈しており、あまり使用されなかったようである。
	完形	19.6cm	14.6cm	7.5cm	
28	B区北東土器溜	砥石	粘板岩		粘板岩系の硬質石材を用いた砥石である。破損しているが、原形もさほど大きくはないと考えられる。上面と両側面の3面を使用した痕跡を残す。両側面の表面はなめらかで、細かい擦痕がみられるのに対し、上面は顕著な横方向の条痕を多く残し、凹凸を示している。
	3面欠損	7.0cm	3.4cm	1.9cm	
29	A区P-6	砥石	ろう石		ろう石と思われる白色の軟質石材を用いた薄い下整形を呈する小形の砥石で、ほぼ全面を使用している。全体によく使用されたらしく、擦痕が無数に縦横にはしっている。側面部分には、細い棒状の物体を研磨したためか、凹状にすりへっている箇所がみられる。
	完形	4.2cm	4.0cm	1.3cm	

石器一覧表に関する註

表で使用している、正面・背面、および、プマイマリー・フレーキング、フリー・フレーキング、ステップ・フレーキング等、石器製作上の9用語は、『紫雲出』（詫間町文化財保護委員会1964年）において、佐原真氏が石器の記述で使用した用語を参考とした。

註① 甲辺昭三・佐原真 「3・近畿」『日本の考古学 弥生時代』109頁 河出書房 1966年

② 小都隆他「V遺物」『大宮遺跡第1次発掘調査概報』12頁 広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1978年

③ 佐原真 「畿内地方」『弥生式土器集成 本編2』56頁 東京堂出版 1968年

④ 「く字」形口縁形態と「逆L」字形口縁形態との差異は、屈折部外面にナデ調製等が施されているか否かで区別している。ナデが施されている場合は、屈折部がゆるやかに外反する形状を呈することになり、施されていない場合は、直角に近く急折する形状となる。当然、大きく屈折する口縁部でも、ゆるやかに外反しているのであれば「く」字形口縁と看做している。したがって、従来の「く」字形口縁と「逆L」字形口縁の内容と一致していないことをお断りしておく。また、「逆L」字形口縁の場合、屈折部に粘土継目の観察される例が多い。このことは、この二者が成形手法の差異としても区別可能であることを示しているのかもしれない。

⑤ 断面三角形口縁形態とは、断面が三角形状を呈する凸帯を貼付している口縁部の形態を示す。この口縁形態は、「逆L」字形口縁部の一部を折り曲げ、ナデ調整を行なった形状と類似し、「逆L」字形の発達した形態とも考えられる。上記の見解は、註②文献12頁で「三角口縁のものは中期になると多く見られ、新しい要素を持つ」と指摘されていることとも整合するように思われる。いずれにせよ、前期後葉および中期前葉の甕形土器に特徴的な口縁形態である。

⑥ 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成 本編1』(P1.35の⑭) 東京堂出版 1964年 と同様の器形を想定している。

⑦ 出宮徳尚他『南方遺跡発掘調査概報』22~23頁 岡山市教育委員会 1971年

⑧ 鎌木義昌・近藤義郎「岡山県高田遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961年

⑨ 板材による整形・調整およびその痕跡を、刷毛目整形・調整および刷毛目と記載している。

⑩ 註⑥ (P1. 35の㉜)

⑪ 山本清 「山陰地方Ⅱ」『弥生式土器集成 本編1』(P1. 31の⑱) 東京堂出版 1964年 と同様の器形を想定している。

⑫ 註⑦(第28図の⑤)

⑬ この底部穿孔土器は甑と考えられていたが、最近では疑問視されている。その理由として、①下半部に煤が付着している。②組み合う外容器が認められない、などが挙げられているが、ここでは、生活(調理)必需品であったならば、甕形土器の転用ではなく器種として分離され、独自の形態をつくり出してもよかったはずではないかという指摘(間壁葭子「2食生活」『日本考古学を学ぶ2』242頁 有斐閣 1979年)に従い、甑としての用途は考えない立場をとっている。南方遺跡からは、1970年の発掘資料の中にも底部穿孔土器が多く検出されているので、この資料の整理と詳細な検討を経て、底部穿孔土器の性格について後日論及したい。

⑭ 小林行雄・佐原真『紫雲出』123~124頁 詫間町文化財保護委員会 1964年

⑮ 鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編』 弥生式土器集成刊行会 1968年

⑯ 「仁吾式」の内容の共通認識は、未だ確立していないように思われるが、ここでは、口縁端折り返し拡張のみられる土器を指している。

「仁吾式」の概念規定に関しては、次の文献を参照した。

高橋護　「郷内小学校裏貝塚出土弥生式土器の編年的位置について」『遺跡』23号　1955年

高橋護　「弥生土器・山陽2」『考古学ジャーナル』№175　ニューサイエンス社　1980年

⑰ ここでは、口縁部に2～3条の回線文がみられる代表的型式として掲げている。

厳密な意味での内容規定は、高橋護　「弥生土器・山陽1」『考古学ジャーナル』№173　ニューサイエンス社　1980年　に示されているのに従う。

⑱ 註⑮

⑲ 柳瀬昭彦他『川入・上東（岡山県埋蔵文化財調査報告16）』岡山県教育委員会　1977年

⑳ 註⑦に資料の一部が報告されている。

㉑ 註③56・58頁

㉒ 註⑦22～23頁

㉓ 註⑧

㉔ 高橋護　「弥生土器・山陽1」『考古学ジャーナル』№173　24・25頁　ニューサイエンス社　1980年

㉕ 註③58頁

㉖ 註⑦（第28図の②）

㉗ 森本六爾・小林行雄　『弥生式土器聚成図録　正編』（P1．18のB8）　東京考古学会　1938年

註⑥（P1．35の⑰）

㉘ 潮見浩「山陽地方1」『弥生式土器集成　本編1』（P1．33の⑱）東京堂出版　1964年

㉙ 近藤義郎　「備中新邸貝塚」『古考学研究』8号（第2図の㊳）　古代学研究会　1953年

㉚ 註㉔25頁

㉛ 註㉔25頁

㉜ 註㉔（図3の④）

㉝ 註⑦では明言されていないが、当報告第5章3において、1970年発掘担当者の一人であった出宮徳尚氏が、細分の可能性を示唆している。

㉞ 註㉔26頁

㉟ 山磨康平他　「高木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』　岡山県教育委員会　1975年

㊱ 註⑦

㊲ 1970年の調査と今回の調査における遺物の時期は、土器において見る限り、微妙な時期差はあるかもしれないが、同時期に比定されるものも多く、両者に明確な時期差があるとするのはやや困難であるといえる。

㊳ 片側の刃を意識したかのような刃部をもつ大型の打製石槍（現存部長17.2㎝）が岡山県山陽町用木山遺跡からも出土しており、本遺跡出土のものと類似した形態といえよう。

神原英朗　「用木山遺跡　第5章出土遺物　第3節石器類」『用木山遺跡』410頁　岡山県山陽町教育委員会　1977年

㊴ この石槍に関しては、その「器種」の出現にあたって、縄文時代以来の系譜（すなわち狩猟用利器）とは異なり、その形状からみて、すでに完成していた対人的戦闘用利器＝武器を祖形として、容易に入手しえた材料である〝石〟を用いつくり出されたのではないかと考えられる。また、その祖形たる武器は、当然先進社会である大陸において使用されていた武器を模倣したと考えられ、その利器としての機能からみて「矛」ではないかと推測される。

㊵ 福井英治 「Ⅱ 器種別の石器 —総括—」『田能遺跡発掘調査報告Ⅰ』 62頁 尼崎市教育委員会 1972年

㊶ 石野博信 「第5章 遺物 (2)石器・玉類・その他」『摂津加茂』 139頁 関西大学 1967年

第 5 章 結　　語

此度の発掘調査は、狭義の岡山平野における弥生時代中期の中核的な遺跡である南方遺跡の主要部分の一郭を占め、戦前からこの地方の代表的な遺跡とされていた「南方宝崎遺跡」の東部の一画を、国立岡山病院看護婦宿舎建築に伴う事前調査として所謂記録保存を図ったものである。発掘によって検出された遺構と遺物を下に、発掘地点の遺跡の性格・内容・様相の再構成及び考古学的問題点の析出を試みてみたい。しかし、第2章・第3章で詳述しているように、採土掘削址と2回に及ぶ地下げ削平のため、遺跡の遺存状態は、必ずしも良好なものではなく、的確な再構成と析出に欠ける嫌いにある。とはいえ、例え微少な成果しか提言できなかったとはいえ、「南方宝崎遺跡」ひいては「南方遺跡」の再構成と検討に欠くことのできない一定の事実と歴史的内容を示したことには変わりないであろう。

1．遺跡形成の時期

今回の発掘で出土した土器類は、弥生式土器と土師器に大別される。弥生式土器は、前期から中期にかけてのものであり、その中心が中期前葉にあった。第4章に詳述している様に、前期の土器は、出土状態が極めて断片的且散在的であって全体量からみれば小量であり、時期も前期後半の「弥生式土器集成の山陽地方Ⅱ第Ⅱ様式A」①のものである。比較的資料にめぐまれた甕形土器について見ると、施文の篦描沈線の条数によって、3条前後のものと、10条前後のもの2様式に細分でき、前者が「弥生式土器集成の畿内地方第Ⅰ様式中段階」に、後者が「同新段階」②の特徴に一致している。しかし、今回の発掘で検出された前期の土器片の大多数は、遠距離からではないにせよ転落・流入の出土状態にあり、明確に遺構に共伴するものを全く認めることができなかった。

このことからみて、発掘地点における遺跡の形成は、弥生時代前期中葉から始まったと判断されるが、土器片の出土状態と少なさからみて小規模な「出村的」状況にあり、むしろ中期に至って飛躍的拡大をなすプロローグの段階にあったと推定される。今回の発掘で検出した遺構の内、明確に前期の形成と判断できるものは、全くなかった。

さて、出土土器片からみて、発掘地点の遺跡が本格的に形成されだすのは、弥生時代中期前葉からであるが、中期前葉の前半にあたる高田式（＝「弥生式土器集成の山陽地方Ⅱ第Ⅱ様式B」）③の土器片は、出土状態が前期の土器片と同様に断片的且散在的であり、遺跡の形成も前期の延長線④上にあったと推定される。従って、本格的な形成は、中期前葉といっても後半の段階、南方Ⅱ式⑤の時期に至ってからであり、飛躍的な拡大性と以後の恒常的な定住性を示している。第3

章で詳述している様に、基盤層直上の安定した包含層であるＥ２層は、土器片の共伴状態からみて、原則的にはこの時期からの形成と判断でき、Ｅ２層に伴う遺構の大部分がこの時期以降のものに比定される。無論、Ｅ２層下に所在したピットの内には、Ｅ２層以前つまり、前期後半から中期前葉前半のものも幾つか含まれている可能性もあるが、共伴遺物の欠如と、この時期の包含層の未検出から比定が困難である。

各様式の出土量からみて、発掘地点における遺跡形成は、ピークが、南方Ⅱ式から南方Ⅲ式にかけての継続した時期にあるが、Ⅲ式後半の「弥生式土器集成の山陽地方Ⅱ第Ⅲ様式」以降の時期には衰退的であったと判断される。Ｅ２層は、上部が削平されていて判然としないが、この層の上部に南方Ⅲ式の時期の分離できる包含層が所在していた可能性もあるが、継続的形成のため漸移層として南方Ⅲ式をも包含していた可能性の方が強いと推察される。従って、上記で、Ｅ２層に伴う遺構の時期を南方Ⅱ式以降としたが、南方Ⅲ式の時期のものも同一条件下の検出であったため、遺構の一部を占めていることになるが、その識別は実際問題としては可能な状況にはなかった。また、幾つかの遺構は、「弥生式土器集成の山陽地方Ⅱ第Ⅲ様式」の時期のものであろうが、その識別も困難であった。

弥生時代中期後葉（＝「弥生式土器集成の山陽地方Ⅱ第Ⅳ様式」）から後期全般（＝「同第Ⅴ様式・第Ⅵ様式」）にかけての時期の土器片は、今回の発掘では明確に様式比定できるものに欠け、ほとんど無い状態にある。Ｅ２層の上部が削平されているとはいえ、この時期に本格的な遺跡の形成がなされていたのであれば、ピットの所在とそれへの破片の混入が認められるはずであるが、そうでない実状からみて、この地点は、中期中葉後半からの衰退化の現象がより進んで、ほとんど遺跡形成地にされなかったと判断できる。この中期後葉から後期全般にわたる遺跡形成の断絶は、今回の発掘地点付近の偶然の現象なのか、少なくとも「南方宝崎遺跡」については普遍的な現象なのか目下の所判断できる発掘調査の成果に欠けている。しかし、管見の限りでは、中期後葉から後期全般の土器は、戦前からの「南方宝崎遺跡」の出土物の内に見当らず、また、完全な遺物整理が済まず正式報告を刊行しえていない現状で見通しを述べることには問題があるが、1970年の山陽新幹線付帯工事の発掘調査でもこの時期の土器が希少であった。このことからみて、南方遺跡の「宝崎地区」一帯では、中期後葉から後期全般にわたって、遺跡の形成されなかった可能性が極めて強い。また、この時期の土器は、「南方蓮田遺跡」を含めた「南方遺跡」からの出土土器にもほとんど見当らず、断絶の現象は、南方遺跡の普遍的現象であったと推定される。

南方Ⅱ式と南方Ⅲ式の土器量に比べると著しく量的に劣るが、「王泊６層」式や「同５層」式あるいは最近の成果では「才の町Ⅱ式」・「下出所式」・「亀川上層式」に比定できる甕形土器・小型坩形土器・高坏等の破片は、ピット埋土中やＥ１層中から普遍的な出土状態で検出

されている。これらの土器を伴う包含層のE１層やピット・溝等の遺構の形成からみて、古墳時代初期に至って「南方宝崎遺跡」は、日常生活地区となり、以後大々的ではなかったにせよ安定した継続的な遺跡の形成がなされたと判断される。しかし、この地点の遺跡形成の下限は、E１層の上部が著しく削平されており、判然としない。今回の発掘で、数点の須恵器細片をも検出しているので、あるいは古墳時代後半から奈良時代頃までは、生活地区とされていたとも考えられるが、そうであったとしても小規模化したものであったであろう。

2．遺跡の性格

今回の発掘で検出した遺構は、時期が層位的に弥生時代中期と古墳時代初期とに識別された。古墳時代の遺構は、竪穴式住居址・柱穴・溝・不整形土坑等であったが、完全に遺存したものに欠けており、住居址・柱穴以外については用途も判定しがたかった。住居址・柱穴・小溝等の検出状態からみて、古墳時代初期における発掘地点付近の遺跡は、多分に日常的な生活に基づいて残されたものと推定される。

一方、弥生時代中期の南方Ⅱ式を中心期にして同Ⅲ式にまで及ぶ時期の遺構は、貯蔵穴状土坑にしても、柱穴にしても、本来それらが組合って構成する一つの完結した遺構の「部分」の下半部が検出できたに過ぎず、発掘地点の具体的な遺構の構成状態を再現するのが困難な実状にあった。しかし、検出できた遺構から幾つかの状況証拠の抽出が可能であるので、それらを基にして発掘地点における遺跡の内容・様相・性格の概念的一側面の析出を試みておきたい。

柱穴の内、この時期における通常の住居址の柱穴配置である方形４穴の組合せに纏めることのできうるものは全くなかったが、その一部と判断できるものが２例所在していた。現状では組合せによる住居址の柱間に纏めることのできなかった大多数の柱穴も、第３章で詳述している様に検出状態から柱穴と判断できたものであるから、住居址の柱穴に見立てて大過ないであろう。そうすると、普遍的な柱穴の検出状態からみて発掘地点一帯は、一般的な住居設置地区＝普通的居住区の色合いの強い状況にあると見ることができよう。

また、埋土中（底面近くに多い）に炭・焼土・灰等の平面的散布（間層）を伴う小型の不整形土坑は、遺跡の面的遺存に恵まれていたA・B区で、点々と散在的に検出され、一応日常的な「火所」にかかわる遺構と判断された。この土坑の示す散在性・各々の不統一性・小規模等の特徴は、その「火」を扱った内容的特徴と相俟って日常普遍的な生活に伴う行為に基づいて残されたものと推定でき、その意味では、上記のこの地点の「普遍的居住区性」とも相関するものと評価できるものである。

さらに、遺物の出土状況では、B区東部の土器溜りは、不用土器片を自然地形の窪地に、焼けクズ共々に投棄した状態にあり、この時代の遺構として応々に見られる土器片を敷き詰めた様

な「人為的な土器溜り」とは趣を異にし、あくまで日常生活に伴う投棄的な、結果としての土器溜りと判断される。土器溜り中に、比較的多くの所謂甕形土器の底部破片や、甕形土器の半個体分などの比較的まとまった破片、さらには壺形土器の大型片が無造作に放置されている等の形成状態の特徴は、やはり日常普通的生活の域を出ないものである。また、E2層中からの石器石材（サヌカイト）片の出土は、大型剥片が点々と散布的な状態で検出されたもので、大型剥片の集中や多量の細剥片一括等の「集中的」あるいは「半専業的」な石器製作を示す状況にはなかった。あくまで、石材の2次的分配のもとに日常生活の「単位集団」が、日常の必要に応じて個別的・偶発的に石器を製作し、その製作過程で生じた不用大型剥片を放置（投棄）した状況にある。従って、土器溜り及び大型剥片の個別流入的所在に示される遺物の出土状況も、日常普通的な生活の域を出るものでないと判断される。

さらにまた、発掘地域からは墓坑や祭祀用ピット等の非日常普通的な特別用途を示す遺構は、全く検出されていない。ただし、発掘地点から北西に約20m離れた岡山県教育委員会の発掘した「循環器病センター建設用地」で埋葬遺体（人骨）2体を含む土坑墓が約10基検出されているが、時期が「弥生式土器集成の山陽地方Ⅱ第Ⅲ様式」の中頃以降とされ、看護婦宿舎建築用地の地点で問題にしている時期より後出的である。また、後述する1970年の[11]山陽新幹線設置付帯工事に伴う発掘地点で検出された土坑墓の集中した墓域の形成に比べると極めて散漫であり、当時の南方遺跡全体からみれば、普遍的な墓域（埋葬）とするには疑問が残る出土状況とも考えられる。いずれにせよ、今回検討対象にしている南方Ⅱ式から南方Ⅲ式の時期には、発掘区一帯で埋葬・祭祀等の非日常の特別的な遺構は、ほとんど形成されていないと見立てることができよう。

以上の遺構・遺物の検出状況に示された状況証拠の析出点は、発掘地帯一帯が日常の普遍的な生活区域ー居住区であったことを物語っていると判断される。一方、1970年の発掘区域の北部では、中期前葉から同中葉にかけての土坑墓群による集団墓地・灰穴遺構等の非日常普通的な特別の遺構が累々と検出されている。その発掘結果の整理・分析に基づく成果の出来ていない状況で、これらの遺構の内容に立入ることは控えるべきであるが、少なくとも、今回の発掘地点から西南西に約200m離れた1970年の発掘地点一帯に、此度検討対象としている時期を含んでより長期に亘って、非日常生活的な特別の遺構が区画として形成されていたことの検出は事実である。この両者間だけの対比をもって、南方遺跡の東半近くを占める「南方宝崎遺跡」の構成状況を推測することは、即断の誤りを犯す嫌いが非常に大きいが、弥生時代中期前葉から中葉前半にかけての「南方宝崎遺跡」内において、一般日常的な生活用空間と、非生活的な特別行事用空間（言い代えれば共同体的行事・機能の場）が分離していた蓋然性を提起するものである。それは、集団空間における観念的機能に基づく構造的分離なのではなかろうか。

3．「南方式」の編年的検討

今回の発掘に伴って出土した土器の分量は、南方Ⅱ式の土器溜りに当ったこともあって、南方Ⅱ式の土器が圧倒的多数を占め、残りの少量の内では南方Ⅲ式が大半を占めており、次いで古式土師器、前期弥生式土器・高田式土器が少量ながら続いている。このため、発掘地点における遺跡形成の中心期と考えられる南方Ⅱ式と南方Ⅲ式の時期、つまり中期前葉から中葉に視点を置いてその土器型式の編年的検討を試みておきたい。

1970年の発掘前における南方遺跡の編年的位置付けは、第1章の南方遺跡の項で略述している様に、南方あるいは（南方）蓮田遺跡出土として「弥生式土器聚成図録・正編・解説」に掲載されて資料化された土器実測図が踏襲されて、弥生時代中期中葉の「弥生式土器集成の山陽地方Ⅱ第Ⅲ様式」に比定されており[12]、この編年が継承されていた。1970年の岡山市教育委員会による山陽新幹線設置付帯工事に伴う[13]発掘調査の結果、弥生時代前期後半から中期後葉にかけての各時期の土器が多く検出された。この成果を基に、その概報において前期の土器を「南方Ⅰ式」に、中期前葉の土器を（畿内第Ⅱ様式併行）を「南方Ⅱ式」に、中期中葉の土器を（これまで一般的に南方遺跡の代表的型式とされていたもので、畿内第Ⅲ様式併行）「南方Ⅲ式」とする型式分類を行なった。この型式設定にあたって「既存の型式名を細分する場合には、その型式を基調にする」とする[14]考古学的常識に基づかず、相対的編年観に依拠して、当時の弥生時代の一貫的編年観である畿内の各様式を掩用、準拠して「南方Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式」としたものであった。このため、一部にそれまでの「南方式」つまり中期中葉（畿内第Ⅲ様式併行）を3期に細分したかの様な誤解を与えた嫌いもあるので、南方遺跡の土器型式の分類を行った当事者として、設定した型式について再度説明しておきたい。

「南方Ⅰ式」は、南方遺跡出土の弥生時代前期全般の土器を包括的に分離して、畿内第Ⅰ様式を掩用して「Ⅰ」式と呼称したものである。

「南方Ⅱ式」は、弥生時代中期初頭にされている「高田式」に続き、畿内第Ⅲ様式（古）併行とされる「新郡式」の先行型式であり、当時まだ未確定であった櫛描文の型式つまり、畿内第Ⅱ様式後半併行型式[15]を比定したもので、第Ⅱ様式の「Ⅱ」を掩用して「Ⅱ」式としたものである。

「南方Ⅲ式」は、それまで一般的に周知されていた弥生時代中期中葉の「南方式」の土器で、当時のこの地方の編年観でいえば、前掲の「新郡式」とそれに続く「蓮池式」の両者に及ぶ土器、つまり畿内第Ⅲ様式併行型式の南方遺跡出土土器を包括的に、第Ⅲ様式[16]を掩用して「Ⅲ」式としたものである。

従って1970年の発掘及び今回の発掘で検出できた弥生時代中期中葉以前の土器の編年を、第4章に詳述している様に細分すると次の様になる。

前期の土器は、3型式に分けられ、古式の様相から「南方Ⅰa式」「同Ⅰb式」「同Ⅰc式」とできる。Ⅰa期は前期中葉に、Ⅰb期は前期後葉初めに、Ⅰc期は前期後葉の段階に比定される。

中期前葉の土器は、3型式に細分でき、高田式に相当する型式を南方Ⅱa式に、これまで「南方Ⅱ式」としたものを2型式に細分し、前半を「同Ⅱb式」・後半を「同Ⅱc式」に比定した。

中期中葉の「南方Ⅲ式」の土器は、従来いわれて来た新郎式に相当する「南方Ⅲa式」と「蓮池式」に相当する「同Ⅲb式」に分けられ、さらに細分できる可能性が強いが、1970年の発掘資料の大半が未整理にあり、今回の発掘資料だけでは確証に欠ける。

さて、上記の編年観で、最も問題になるのは、南方Ⅱ式の細分である。高橋護氏が行なった山陽地方の最新の編年では、従来の高田式（甕が主体）と、南方Ⅱ式（今回の南方Ⅱb・Ⅱcに対応）とした土器群の内から甕形土器の一部を抽出して、高田式に共伴する壺形土器に比定し、Ⅲa期（中期前葉＝畿内第Ⅱ様式前半併行）とした。そして、南方Ⅱ式としたものの残りをⅢb期（中期前葉＝畿内第Ⅱ様式後半併行）とした。1970年の発掘と今回の発掘資料を総合すると、南方遺跡発掘調査概報（以下概報とする）[37]で南方Ⅱ式としたものは、壺形土器のバリエーションとその型式的変化から2分できるが、その一部を高田式まで遡らせることは逡巡を覚える。概報でⅡ式としたものの内、高橋氏が高田式まで遡らせた壺形土器（付図1の⑦）は、同様な整形・調整・施文の頸首壺形土器（付図1の⑥）と型式的共伴関係にあると考えられ、⑥⑦ともに高田式の次型式に比定されている「雄町3類」との共通性があり、また端面をもった口縁端部の形式において、高田式の壺形土器の口縁端部の丸味状に収めた形状と著しく異なっている。また、南方における2回の発掘の知見では、高田式の甕形土器片と壺（付図1の⑦）あるいは壺（付図1の⑥）の破片との共伴関係を検出できておらず、むしろ、高田式の甕形土器片が断片且流入散在的であるのに対し、壺（付図1の⑦・⑥）の系譜の土器片は、応々にして½～⅓個体分程の一括的で生きた出土状態にあり、南方Ⅱb・Ⅱc式と共通する出土状況にあった。

以上の観点から、南方Ⅱ式を2分することは首肯できるが、その一部を高田式に遡らせることには疑問が残り、今回の報告では南方Ⅱ式を2分し、1970年と今回の発掘で南方遺跡から検出できた中期前葉（畿内第Ⅱ様式併行）の各型式の土器を「南方Ⅱ」の内に包括的に把握し、高田式のものを「Ⅱa」に、概報の南方Ⅱ式の内で古相の型式を「Ⅱb」に、新しい様相の型式のものを「Ⅱc」にする、畿内第Ⅱ様式併行期を3区分する観点を提起しておきたい。

編年対照表は、下記のとおりである。

弥生式土器（前期～中期）編年対比表

	当報告	弥生式土器集成(山陽Ⅱ)⑱	日本の考古学中国・四国⑲	山陽新幹調査雄町 ㉑	考古学ジャーナル山陽Ⅰ㉒		学史的型式	弥生式土器集成(畿内)㉓
前期		第Ⅰ様式	第Ⅰ様式		Ⅰ	a	高尾式㉔	古 …… 第Ⅰ様式 中 …… 新
						b		
						c		
	南方Ⅰa	第Ⅱ様式A	第Ⅱ様式	a 雄町1	Ⅱ	a	門田式㉕	
	南方Ⅰb			b 雄町2		b		
	南方Ⅰc			c 船山2		c		
中期	南方Ⅱa	第Ⅱ様式B	第Ⅲ様式	a 高田	Ⅲ	a	高田式㉖	第Ⅱ様式
	南方Ⅱb			b 雄町3		b		
	南方Ⅱc							
	南方Ⅲa	第Ⅲ様式	第Ⅳ様式	a 船山5	Ⅳ	a	前山Ⅰ式 新郡式㉗㉘	古 第Ⅲ様式 新
	南方Ⅲb			b 蔵池		b	蔵池式㉙	
	(南方Ⅲc)			c 雄町4		c		
		第Ⅳ様式	第Ⅴ様式	a 前山東	Ⅴ	a	前山Ⅱ式㉚	第Ⅳ様式
				b 雄町5		b		
				雄町6	Ⅵ	a	仁伍式㉛	
						b		

此度の国立岡山病院看護婦宿舎建築の発掘調査は、病院の敷地が南方遺跡の大部分と競合している現状では、病院の建築工事には宿命的な文化財保護行政上の課題であった。所謂記録保存を含めた文化財保存行政の社会的要求と、1975年の文化財保護法の改正に基づく周知の遺跡地における公共事業に対する文化財主管行政機関の対応義務の強化により、この課題は、早晩発掘調査の能力ある何れかの組織か個人によって、行政的措置を講じられなければならないものである。結局、第2章の経緯のもとに、岡山市教育委員会文化課の主管する「調査団方式」で今日的妥協措置の記録保存が図られたが、この発掘体制は、あくまで国・県・市の各行政段階の妥協的・便宜的な対処でしかなかった。

社会的要求と行政的対応義務の強化及び経済政策とが相俟って、公共事業・民間事業を問わず埋蔵文化財行政の「窓口」を課せられている市町村段階の主管課は、この数年来多忙な仕事量を強いられることとなっている。法の改正は、埋蔵文化財に対する法的措置の強化を図った

が、実際の対応者である市町村の担当者の「法（行政）的措置」が意図的に省いてある。埋蔵文化財への行政的対応の現状は、本来事務処理をすればよい市町村の担当「事務」職員が、研究機関・研究者あるいは専門職制に処遇されている国家及び上級地方公務員を差し置いて、特に後者の行政指導と監督の下に、行政的措置に奔走し、究極には所謂記録保存の発掘を実施し、その評価や判断まで行ない、制度上、組織上何らの「専門的行政機能」に置かれていない内で、発掘から報告書作成までの専門的見識と能力を課せられているのが大方の実状である。

此度の発掘は、国段階の事業に伴うもので、これまでの岡山県内における行政的対応の慣例からすれば、法の権限委任を受け、専門職制を備えた県段階での対応が順当な行政措置のあり方といえる。あるいは、国の専門職制による対応があれば、窓口事務を課せられた末端市町村段階にとっては、より望ましいあり方であろう。

いずれにせよ、今後ますます増大して行くであろう埋蔵文化財への行政的対応において、実質的にその先兵にされる市町村の担当職員に対し、法に基づく指導監督権を有する上級の行政段階からの、職制上の汎全国的なアフターケアーのなされない限り、対応の増大と専門的内容・質の向上が担当者の個人的キャラクターの問題に置き替えられて現状の矛盾が解消させられ、「泥縄式」と揶揄される埋蔵文化財保存行政の「近代化」への転換が甚だ困難であるように思われる。報告書作成に際し、末端市町村の埋蔵文化財担当事務職員としての現在的な課題への所感を、発掘の感想までに記しておきたい。

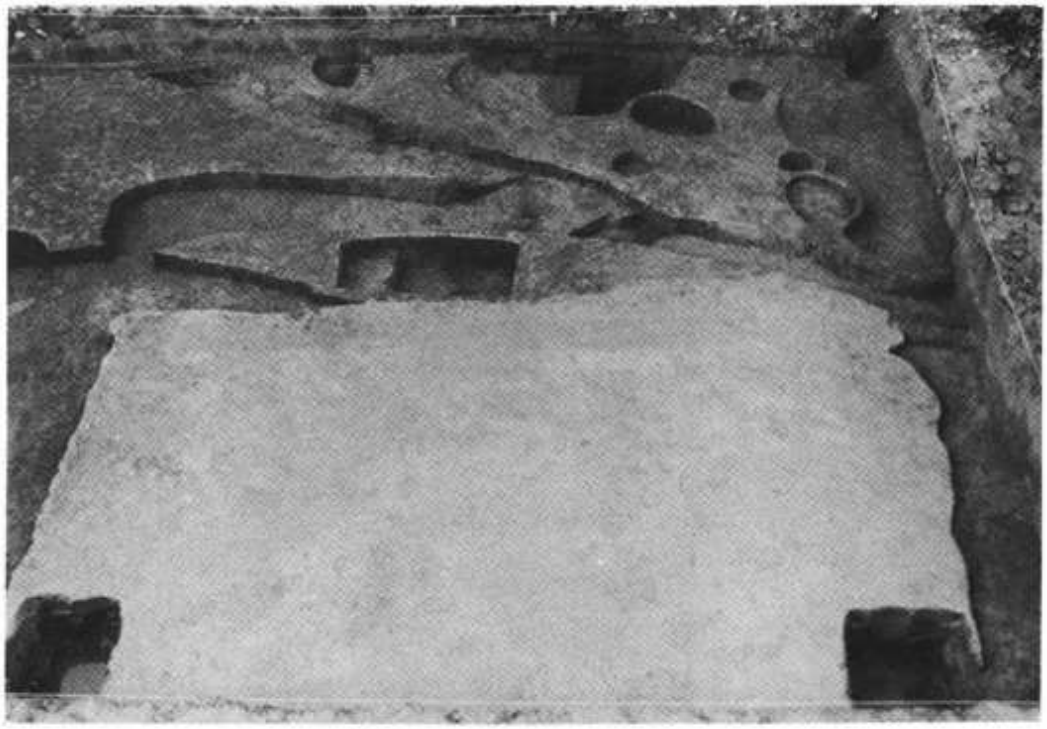
最後にあたり、発掘から報告書作成に至るまで、多大のご指導・ご支援を頂いた水内昌康先生、及び原稿の校正等にご助勢下さった方々に、心から謝意を表する次第である。

（出宮徳尚）

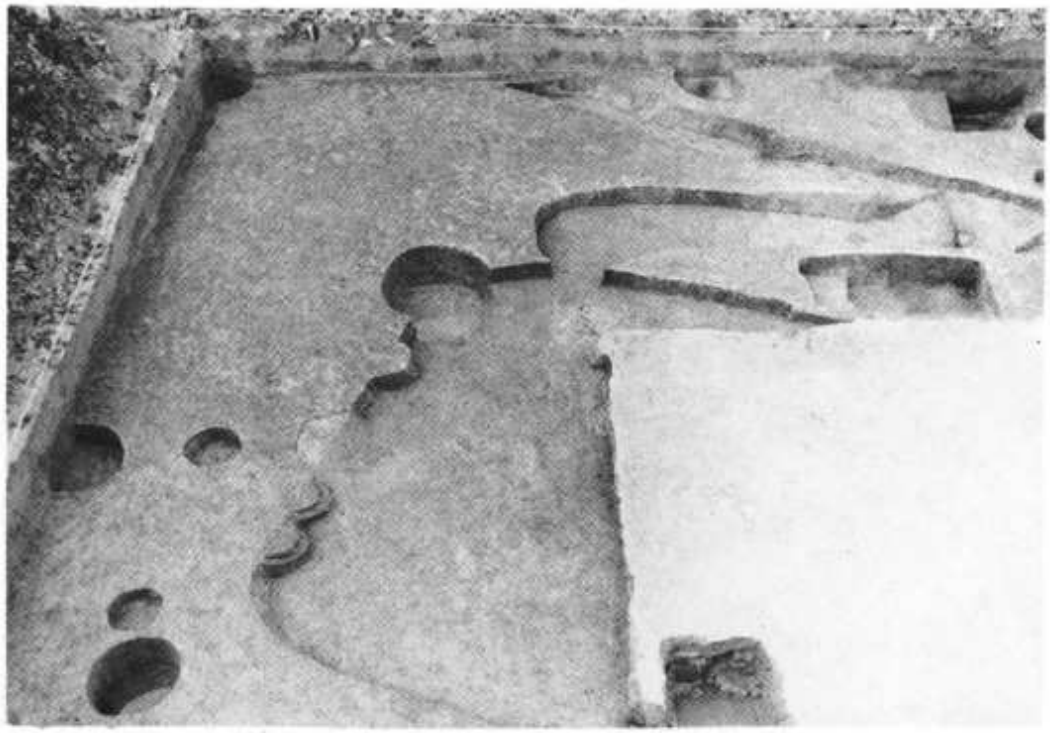
註① 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成　本編1』　東京堂出版　1964年
② 佐原　真「畿内地方」『弥生式土器集成　本編2』58頁　東京堂出版　1968年
③ 鎌木義昌・近藤義郎「岡山県高田遺跡」『日本農耕文化の生成』　東京堂出版　1961年
④ 註①
⑤ 出宮徳尚他『南方遺跡発掘調査概報』　岡山市教育委員会　1971年
⑥ 註①
⑦ 註①
⑧ 註①
⑨ 坪井清足『岡山縣笠岡市高島遺蹟調査報告』岡山縣高島遺蹟調査委員会　1956年
⑩ 柳瀬昭彦他『川入・上東（岡山県埋蔵文化財調査報告16）』　岡山県教育委員会　1977年
⑪ 柳瀬昭彦氏（発掘担当者ー岡山県教育委員会文化課文化財保護主事）の教示による。

⑫ 森本六爾・小林行雄『弥生式土器聚成図録・正編』 東京考古学会 1938年及び 小林行雄『弥生式土器聚成図録 解説』 東京考古学会 1939年
⑬ 註①のPI 35・36
⑭ 註⑤
⑮ 近藤義郎「備中新郎貝塚」『古代学研究』8号 古代学研究会 1953年
⑯ 註①の49・50頁
⑰ 高橋 護「弥生土器・山陽1」『考古ジャーナル』No.173 24・25頁 ニューサイエンス社 1980年
⑱ 註①
⑲ 潮見浩・藤田等「2・中国・四国」『日本の考古学 弥生時代』 河出書房 1966年
⑳ 正岡睦夫「雄町遺跡・遺物（弥生式土器・土師器）」『埋蔵文化財調査報告』 岡山県教育委員会 1972年
㉑ 註⑰
㉒ 鎌木義昌・高橋護「岡山県高尾遺跡」『日本農耕文化の生成』 東京堂出版 1961年
㉓ 鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』84号 吉備考古会 1952年
㉔ 註③
㉕ 鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編』 弥生式土器集成刊行会 1968年
㉖ 註⑮
㉗ 註①
㉘ 註㉕
㉙ 鎌木義昌「中国」『日本考古学講座・弥生文化』 河出書房 1955年
㉚ 註②

図　　版

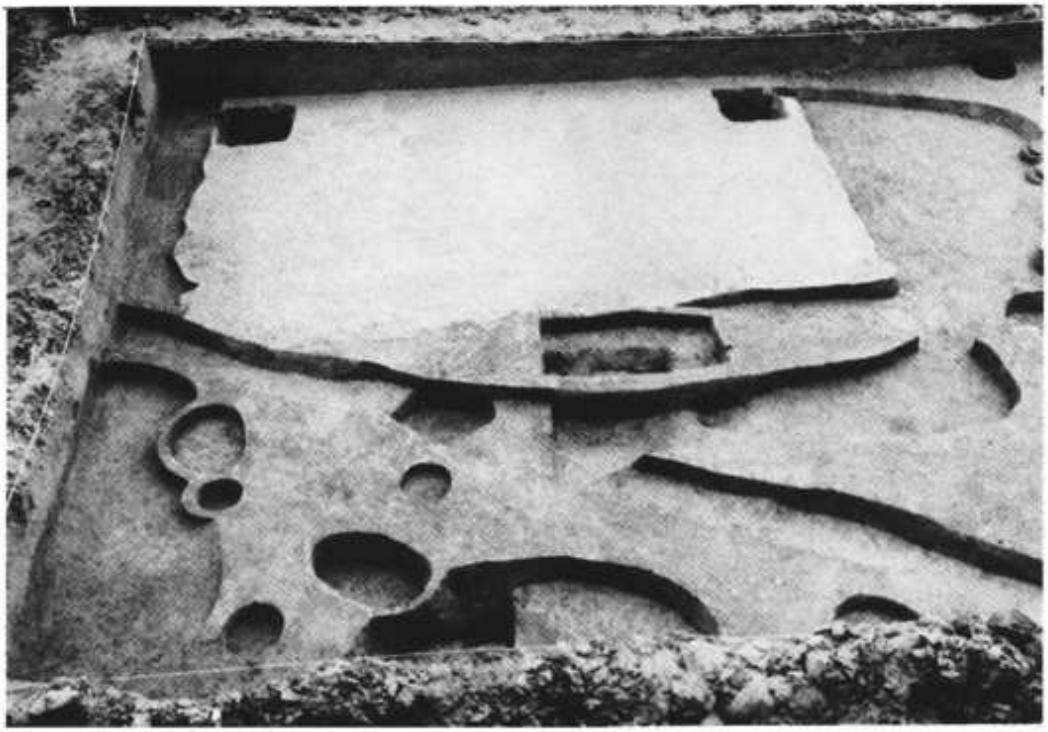


遺構検出状態（東半・南から）

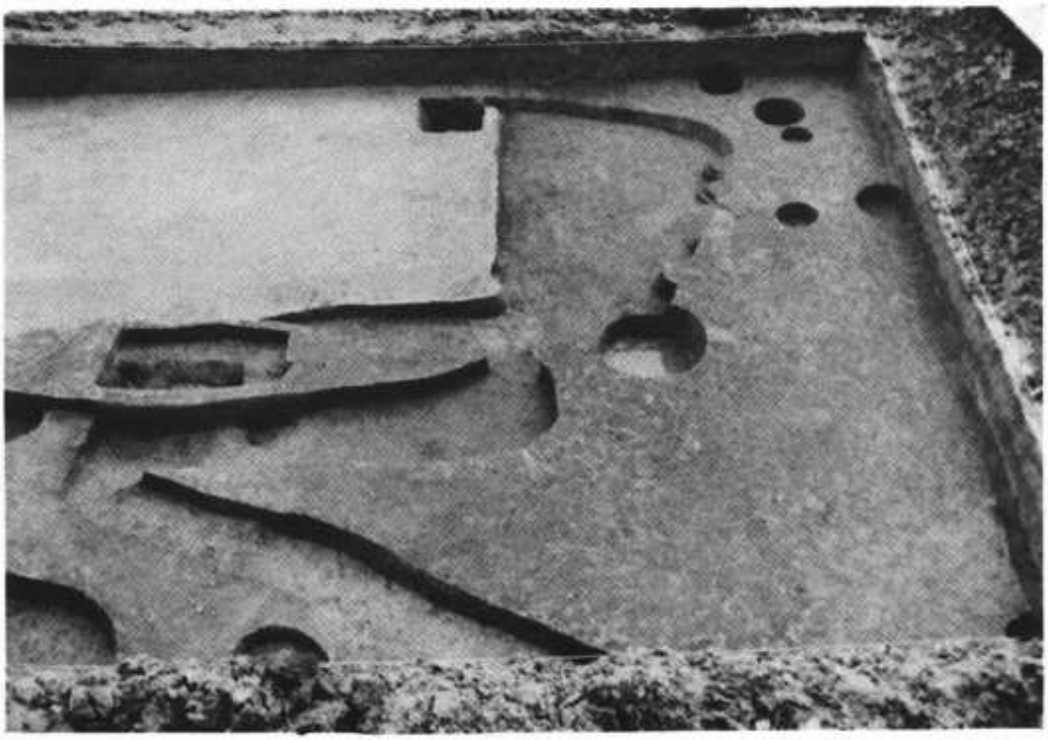


遺構検出状態（西半）（住居址は未掘）

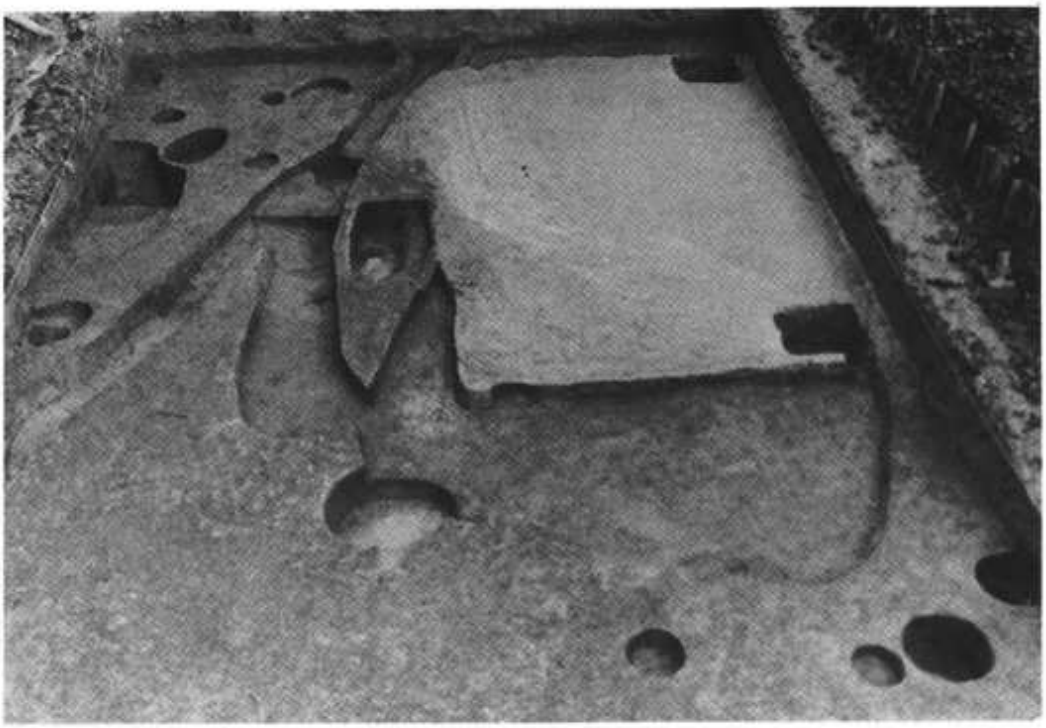
図版第２．Ａ区Ｅ１層遺構



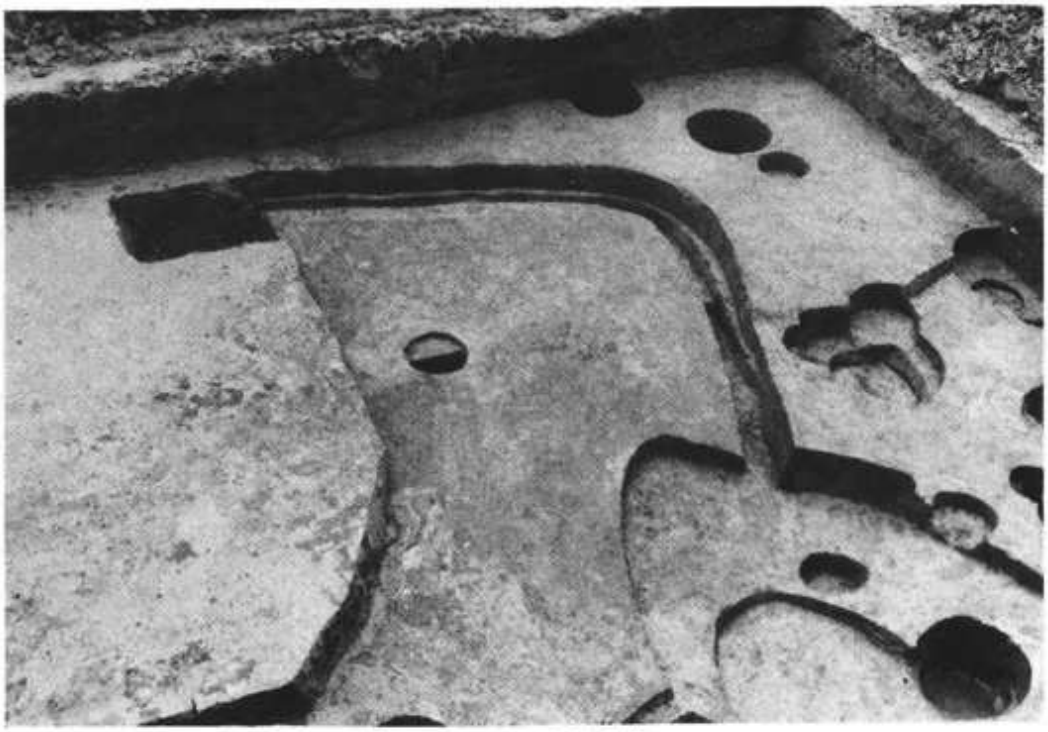
遺構検出状態（東半・北から）



遺構検出状態（西半・北から）

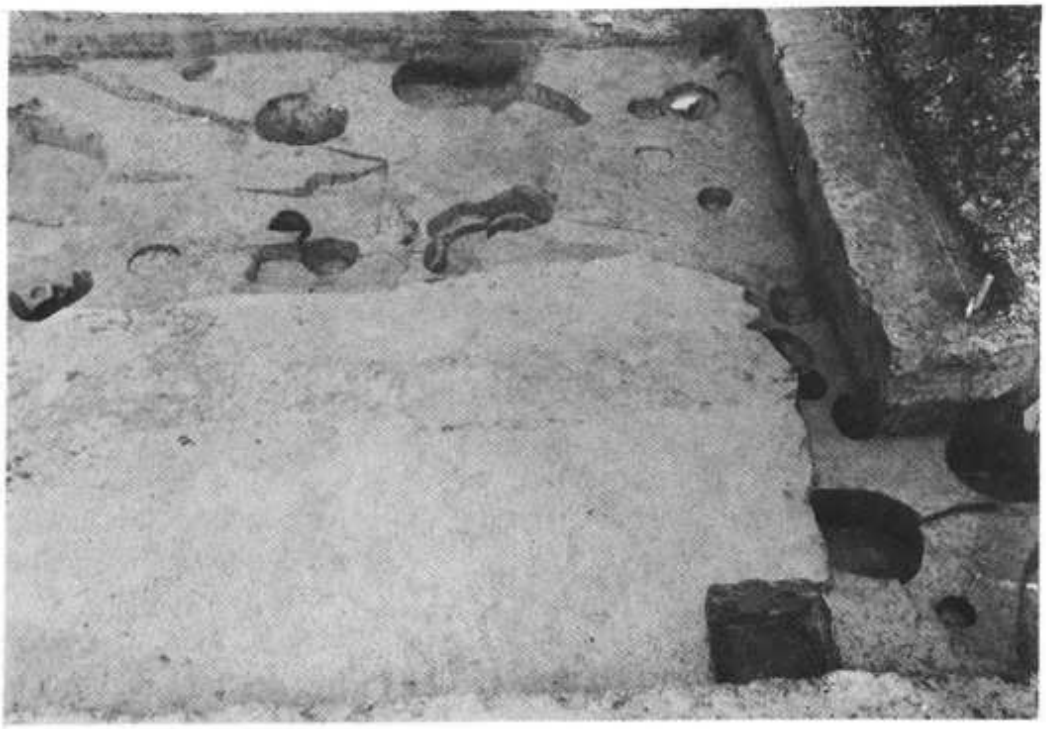


遺構検出状態（西から）

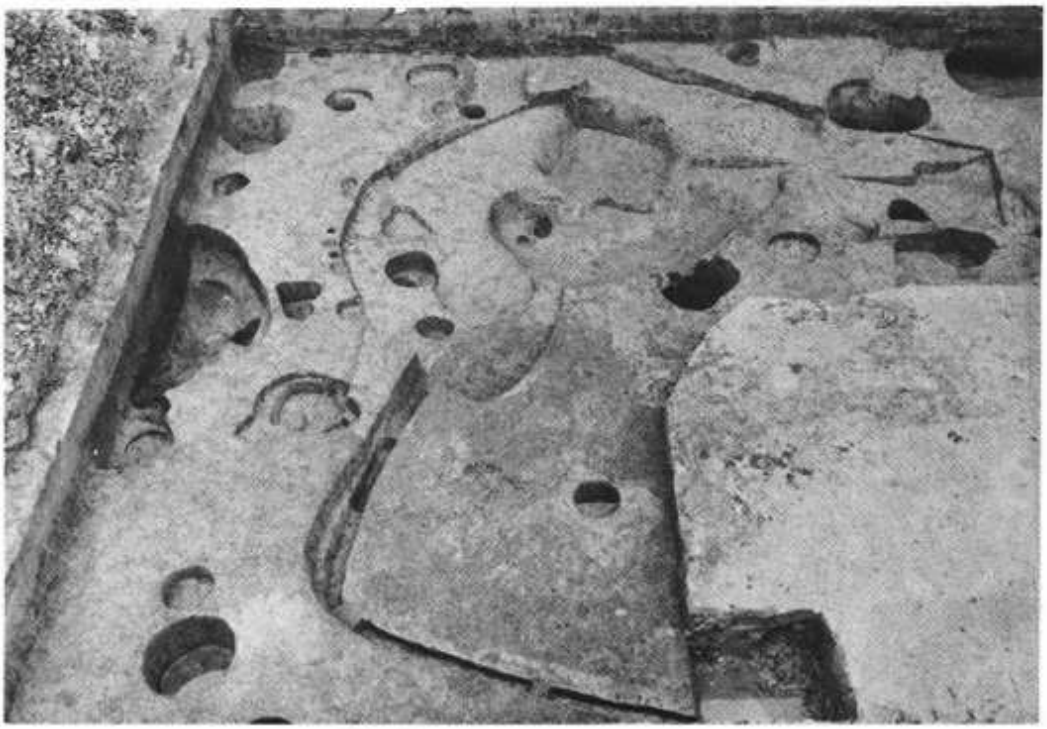


住居址（周囲はE2層共伴遺構）

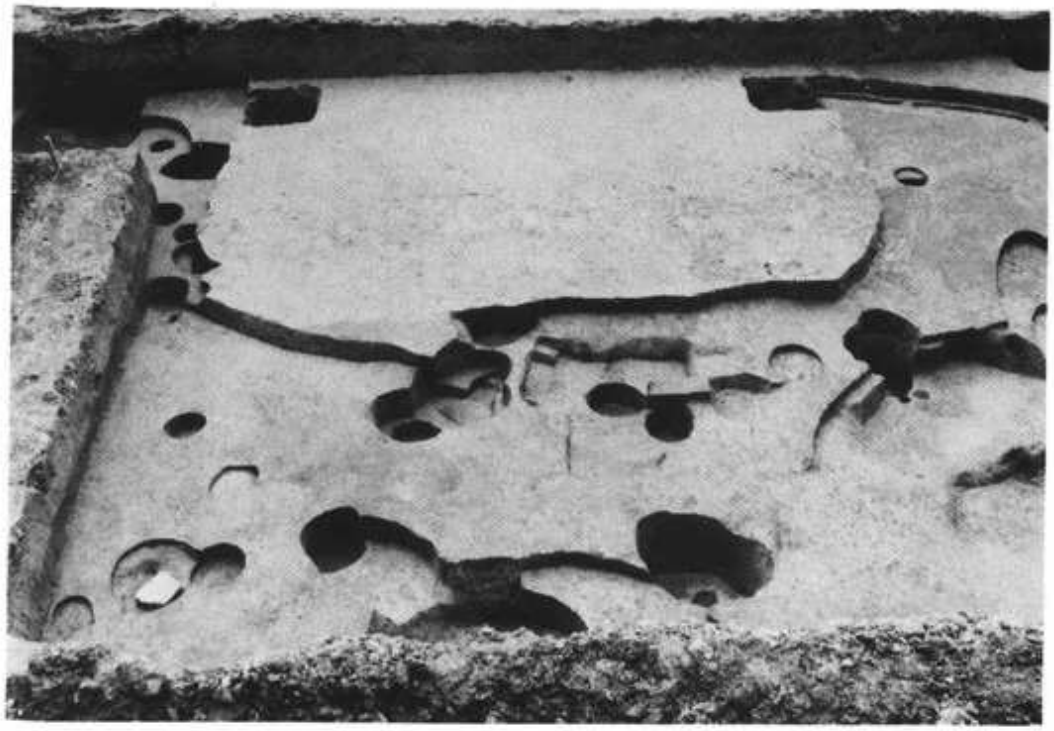
図版第4．A区E2層遺構



遺構検出状態（東半・南から）



遺構検出状態（西半・南から）



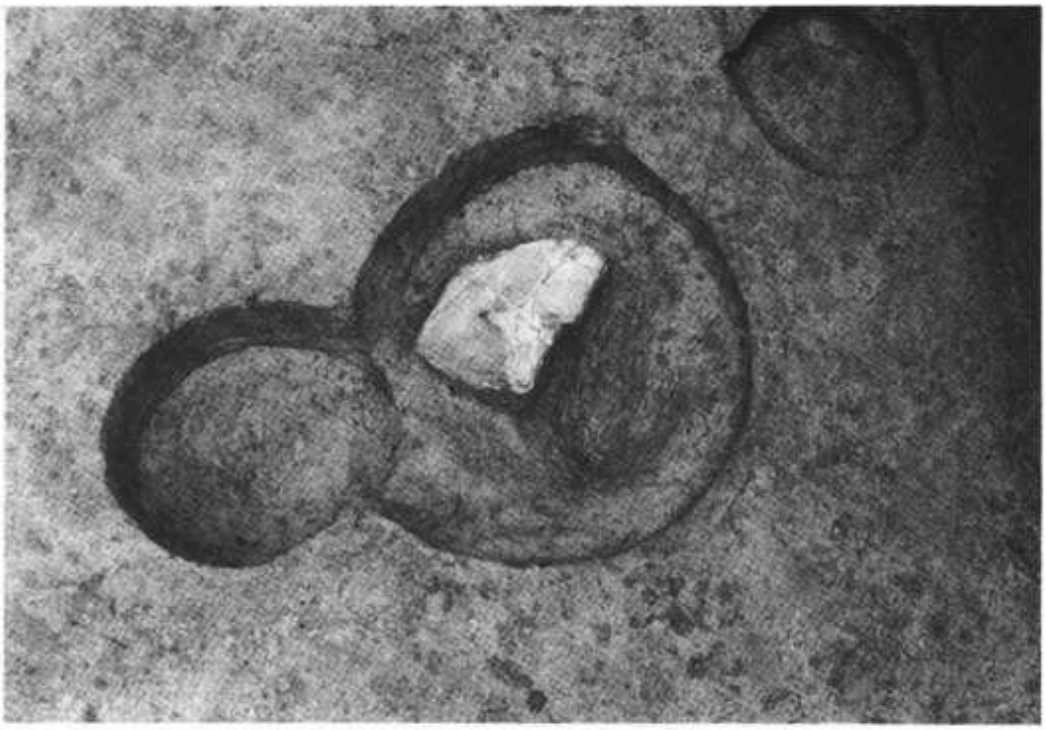
遺構検出状態（東半・北から）

遺構検出状態（西半・北から）

図版第6．A区E２層遺構

遺構検出状態（東から）

遺構検出状態（西から）



礎盤柱穴

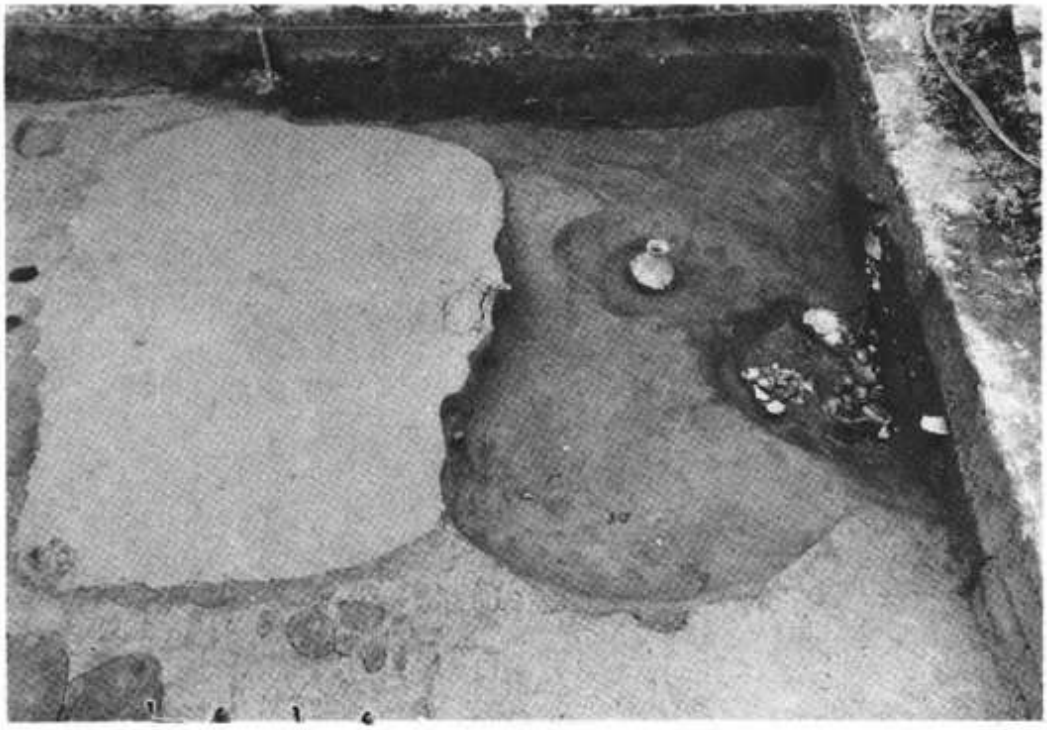
土坑E

図版第8．B区E1層遺構

遺構検出状態（南から）

土器溜り（E2層共伴）検出状態

土器溜り上部



土器溜り下部及び窪地

図版第10. B区E２層遺構

土器溜り下部

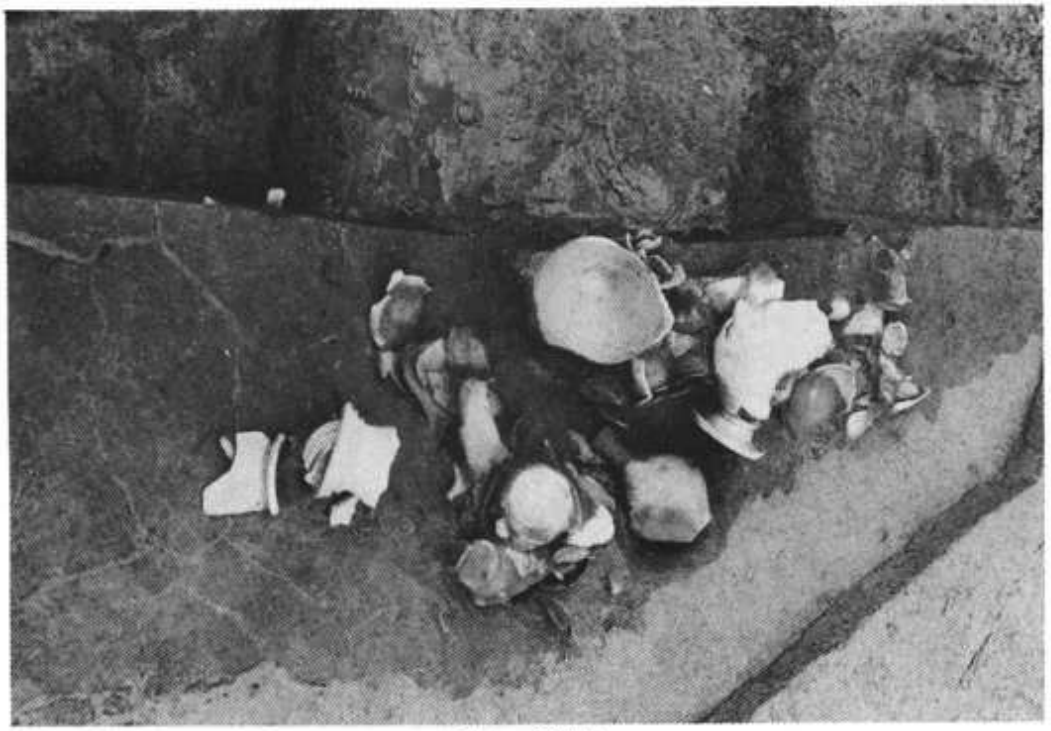
土器溜り下部

土器溜り下部

土器溜り下部

図版第12. B·C区間遺構

土器溜り上部



土器溜り下部

土器溜り下部

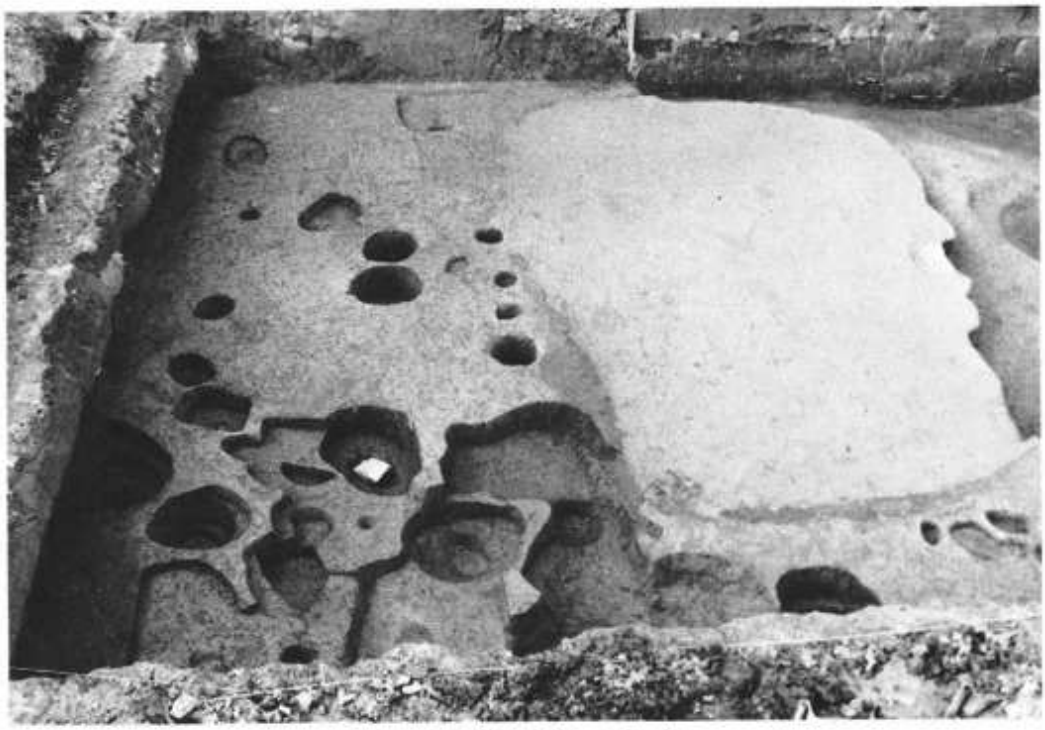
土器溜り下部

図版第14. B·C区間遺構

土器溜りの窯地底

土器溜りの窯地底

遺構検出状態（東半・南から）



遺構検出状態（西半・南から）

図版第16. B区E 2層遺構

遺構検出状態（東半・北から）

遺構検出状態（西半・北から）